

語り継ぐ7

2歳で体験した阪神・淡路大震災を

高校3年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科3年

題 名	名 前	項
幼き日の震災体験	赤田 夕姫	1
自分の震災体験記	浅野 圭祐	5
家族の震災体験記	安達 海	9
震災体験	井川 佳揮	1 3
波瀾万丈	井手口理沙	1 7
震災体験記	井上 晃希	2 1
震災体験	井上 夏喜	2 5
震災体験	岩上 亜希	2 9
残していきたい記憶	馬田 麻未	3 3
環境防災科がつないだ記憶	大山 将史	3 6
震災体験	香山 愛	4 0
私と家族の震災体験	木村 莉沙	4 4
いつかは	休場 洋介	4 7
語り継ぐ	小谷 潤史	5 1
「かすかな震災体験記」	小林 大斗	5 5
忘れてはいけない記憶...	柴田 重輝	5 9
ワタシノ震災体験	高岸 冴佳	6 3
「忘れてはいけない。」	高瀬 美草	6 8
震災の記憶	高田 悠生	7 2
生活を支えてもらった	竹内 梓	7 6
災害への思いと、これから	田中 裕士	7 8
私と震災	戸田 明花	8 2
1. 1 7の悲劇	中谷 貴文	8 6
二人の震災体験談	中山 一実	8 9
震災と記憶	西森沙織里	9 3
震災体験記	仁田 敦至	9 7
語り継ぐ	羽白 奏里	1 0 1
阪神・淡路大震災で	濱本 大	1 0 5
震災体験	春尾 勲平	1 0 9
震災が気づかせてくれたこと	久谷 篤史	1 1 3
昔・今・これから	平木 達也	1 1 7
語り継ぐということ	福元裕貴子	1 2 1
震災体験	藤原 麗生	1 2 4
4つの命	松岡 毅	1 2 8
震災体験	三木 陽奈	1 3 2
感謝の気持ち忘れずに	三好 萌	1 3 7
震災体験	森西 杏菜	1 4 1
震災の記憶	山田 詩織	1 4 5
それぞれの被災体験	山田 夕貴	1 4 8
1. 1 7	吉田 莉那	1 5 2

幼き日の震災体験

赤田 夕姫

震災直後

震災当時の私の家族構成は、父と母と私の3人である。震災後は弟が2人生まれたので現在は5人家族であるが震災当時は3人家族であった。また住居の方も今は引っ越しして西区の西神南に住んでいるが震災当時は須磨区の白川台の団地に住んでいた。

私たち家族は地震直後3人とも一緒に布団で寝ていた。父は家族の中で一番早く起きるが、早いと言っても6時半頃に起きてそれから用意をして仕事に向かうので、地震が起きた5時46分にはまだ寝ていたそうだ。母もいつもは父が起きた後に一緒に起きるので、地震直後はまだ寝ていた。しかし母と父が言うには地震直前、外からたくさんの犬の吠える声我突然聞こえたそうだ。一体どうしたのだろう・・・と思っていた矢先に地震が起こったのである。地震が起きた時間は秒数で表すと、たったの10秒ほどだったそうだが今までに体験したことのない激しい揺れを感じたというのを父と母から聞いて、私は地震の揺れの激しさや威力の凄さが想像以上であることに驚いた。また揺れがおさまったと思ったら、次に左右の激しい揺れを感じ、左右に揺れを感じた後は上下に揺れるような感覚におそわれたと言っていた。地震が起きている間は立ち上がることはもちろん不可能で布団の中にうずくまることが精一杯だったと聞いた。私はというと地震が起きているにも関わらず、ぐっすり熟睡していたそうだ。父がすぐに私を抱きかかえて布団の中に一緒にうずくまっていたということを知り、私は父によって必死に守られていたことを知った。また、地震が起きている間、食器棚からはたくさんの食器が落ちていく音が聞こえた。地震がおさまってから食器棚を見ると、食器は全部下に落ち粉々に割れていたそうだ。これを聞いただけでも当時の地震の激しさが思い浮かぶ。しかし地震による家具の被害や、建物自体の被害の影響は小さかったそうである。家の被害で特に大きかったのは食器が割れたことと、タンスが倒れたことによってコタツの板が壊れたことぐらいだった。団地自体の建物も倒壊することはなかった。この話の中で母が「もし、当時タンスが置いてある部屋で家族が寝ていたとしたらどうなっていたのだろうと想像すると今でも怖い。」と重い口調で話してくれたのを聞き、私は地震の恐怖を強く実感した。

震災後

地震がおさまると、辺りの様子をうかがってから私達家族は外に出た。外に出てみると私たち家族以外にも近所の人や団地に住んでいる人々がたくさん外に出ていたそうだ。近所の人達と地震の話や安否の確認をし合った後、駐車場に停めてある車に向かい暖房をかけ、ラジオで情報を聞きながら明るくなるまで車の中で待機していた。ラジオを聞いていると地震による被害の影響で阪神高速が倒れたことや、生田神社が潰れてしまった話など被害の大きさが想像以上に大きいというニュースがたくさん流れた。そして父や母にとって一番衝撃的だったのが、地震によって多くの人が亡くなったことを報道しているニュースだったそうだ。父も母もラジオで情報を聞くまでは、これほどまで人がたくさん死んでしまう程の大きい規模の地震だとは思いませんでしたと言っていた。ラジオで衝撃的なニュースをたくさん聞いたことによってショックの強さは変わらず大きいままだったが、その反面ラジオを聞くことで少しずつ落ち着きを取り戻し、冷静に物事を考えることが出来るようになった。車の中で待機している間は地震のことを話したり、友が丘に住んでいる従兄の家族は大丈夫なのかということや、これからどうするかということと話したりしたそうだ。

しばらくしてから辺りが明るくなると私たち家族は家に戻り、散乱している部屋の中を片

づけ始めた。割れた食器の処理や倒れているタンスなどを戻し、時間はかかったが丁寧に片づけをしたそうである。片付けが一段落してからは、親戚や父が勤めている会社、また神戸に住んでいる父や母の友達の安否確認や自分たちが安全であることを知らせる為に家の電話から電話をかけようとしたが家の電話は繋がらなかった。当時たくさんの人が電話を使用していたことが原因である。父は家の電話が使えないので母と私を家に残し、家の近くにある公衆電話に向かった。しかし皆考えることは同じで公衆電話は大渋滞になっており、父は何時間も順番を待ったそうだ。やっと自分の順番が回って来た時には、すでに辺りは夕方であっけくになっていた。父は自分の順番が回ってきた時に後ろを振り返ってみると、自分の後ろにはまだたくさんの人の渋滞が出来ていたのびびりしたのを良く覚えていると、笑いながら私に教えてくれた。

それから父がまず電話をしたのは岡山に住んでいる祖母だった。祖母はいつものように何気なく朝起きてテレビをつけた時、神戸で大きな地震が起こったニュースが大きく報道されていたので、腰が抜ける程びびりしたそうである。私たち家族の安否が心配になってすぐに電話をかけたが、電話が繋がらなかったのも私たちの方から連絡が来ることを待つことにしたそうだ。後から祖母に震災のことを聞いてみると、テレビで長田の方が火事になっていることや家がたくさん倒壊しているのを見て、まるで戦争後の焼け野原の風景を見ているようだったと祖母は言っていた。また昼になっても私たち家族から連絡が無かったので、心配でたまらなかったそうである。ようやく夕方になって連絡が来たのでとても安心したと言っていた。次に父が連絡したのは、友が丘に住んでいる従兄の家だったそうだ。従兄の家族も皆無事で、一緒に住んでいる祖母と祖父も無事だということを聞いて、父は私たち家族も皆無事であることを伝えお互い無事であることを喜び合ったそうである。その後父の会社や友達に連絡をし、家に戻った。家に戻ってから父と母はベランダから外を見てみると、長田と須磨の方から火事による煙がたくさんあがっているのを見てその風景が強く印象に残ったそうだ。

一晩の避難所生活

地震が起きたその日の夜、私たち家族は避難所となっている家の近くの小学校に避難した。避難所である小学校の体育館にはたくさんの人たちが避難して来ており、避難所の中は人が密集していてすぐ横には他の家族が寝ているというぎゅうぎゅう詰めの状態だったそうだ。私たちは家から毛布を一枚持って来ており母は私が風邪をひかないように毛布で私をくるみながらずっと暖めてくれていたそうである。体育館のドアは、地震が来たらすぐに避難出来るように一日中開いたままだったので、寒い風が一晩中体育館の中に入ってきたそうだ。私は母のおかげで風邪をひかなかったが、両親はこの一晩で二人とも風邪をひいてしまった。避難所には一晩だけ避難しただけで次の日の朝には家に戻った。母が当時の一日避難所生活のことで私に話してくれたことは、避難所では一家族ごとにしきりになる壁がなかったため他の家族が着替えをしている所が見えたり、逆に自分たちが着替えている所が見えてしまったり、また水が流れないのでトイレがとても汚いなどと衛生的な面で落ち着いて避難所で過ごすことが出来なかったことなどだった。また人が密集しているために体育館の中は空気も悪く、咳き込んでいる人もたくさんいたことや、避難所から配られた食事は一人一個のおにぎりだけでそれに対して文句を言う人やお腹がすいて泣く子供の声で避難所内は混乱していたことを聞いた。母と父が配給されたおにぎりのことで感じたことは、時間が過ぎて完全に冷えきっているおにぎりであったとしても、人間はお腹がすいている時には何でも美味しく感じてしまうものなのだなということだそうだ。幼い私も美味しそうなおにぎりをほおばっていたそうである。そして何より母や父が嬉しかったことは配給されたおにぎりが誰かの手作りだったことだ。おにぎり自体は冷え切っていても私達被災者の為に作ってくれた人の心の温かさを感じたと言っていた。

私はこの話を聞いて、被災者の不安や恐怖を少しでも少なくするには人の温かさが必要で

あることを改めて感じた。母や父が嬉しかったように、人の些細な行動や優しさが被災者の気持ちを和らげることを実感したし、きっと母や父以外にも同じように嬉しく感じた人は他にもたくさんいたと思う。

母は避難所での生活で忘れてはいけないことがもう一つあると私に教えてくれた。それは、避難所を運営していた小学校の校長先生や教頭先生、教師の人たちのことだ。校長先生たちは私たち被災者のために早い段階から避難所を開放し、被災者の避難所生活が出来るように精一杯の力を出してくれた。校長先生たちも私たちと同じ一人の被災者であるから家の片付けや震災による被害を受けて精神的なストレスなどもたくさんあったはずだ。しかしそんな姿を私たちには見せず、私たちが寝ている間も地震が起こった時はすぐに避難所に避難している人たちに知らせることが出来るように一晩中私たちの為に起きてくれていたそう。また避難所には色々な人が避難してくるので、先ほども書いたように食事のことで文句を言う人や母が心の中で思っていた衛生的な面での文句を言う人なども実際にたくさんいたそうである。そのような人たちに理解してもらう為に必死で訳を説明しなくてはいけないなどで教師たちはゆっくり休憩出来る暇もなかったと思うし、避難所でのトラブルを処理するのも全て小学校の教師たちだったので避難所の運営をすることは教師たちにとっても精神的に本当に大変なことだったに違いないと母は実感したそう。避難所を運営してくれた当時の小学校の教師たちに感謝の気持ちを持たなければならないと母は私に教えてくれた。

父が聞いた同僚の人たちの震災体験記

夜が明けて家に戻ると、ライフラインは電気のみ繋がっており水道とガスはまだ復旧していなかったので、母も父もこれから復旧するまでどうやって生活していこうか悩んでいた時に、友が丘に住んでいる祖父から電話がかかってきた。友が丘の方では被害も少なくライフラインもすでに復旧しているので、私の家のライフラインが復旧するまでしばらく家に来ないかと誘ってくれたので、私達家族はしばらく祖父の家で生活することになったそう。私と母は先に友が丘の祖父の家に行くことになったが、父は三宮にある父が勤めている会社の状態が心配だった為、私と母を祖父の家まで車で送った後会社に向かった。三宮まで行く道は、震災当時地震の影響で山麓バイパスしか利用出来なかった為に、その道路を通して三宮の会社まで行った。この時父の印象に残っていることは、山麓バイパスしか通れないので道路が大渋滞だったことだそう。渋滞しているせいで少しずつしか進まず、いつもは30分ぐらいで三宮に着くのが当時は2時間程かかった。

その後何とか三宮に到着した父は真っ先に会社に向かうと、会社は建物自体には被害がなかったが、会社の中は父の予想通り印刷用の紙や書類などが散乱していたそう。そして会社に着いてしばらくは、散乱している会社内を会社に来ていた社員の人たちと一緒に一つ一つ丁寧に片づけをしたそうである。その後会社の同僚たちと自分たちが地震によってどのような体験したのか、お互いの話をしたそう。父は同僚の人たちと話をした中で15年経った今でもはっきりと印象に残っている4つのエピソードがあると私に教えてくれた。

一つ目のエピソードは、家が長田の方でたまたま同僚の人の家は倒壊することもなく家族全員の命も助かることが出来たが、同僚の人の家から少し歩いた所にある木造建ての一軒家が多く並ぶ地域があり、そこは火事によってほとんどの家が全焼し父の同僚の知り合いの人がたくさん被害を受けてしまったそうである。その火事によって同僚の知り合いが亡くなってしまったらしく、「今回は家族全員何とか助かることが出来たがもし運が悪く火事が自分たちの家の所まで来ていたとしたら自分や家族は今ここにはいなかったかもしれない・・・。」と同僚が言っていた言葉を父は今でも忘れることが出来ない。

二つ目のエピソードは、同僚が住んでいるマンションが震災によって半壊し近くの避難所に家族で避難した話である。父の会社は震災が起きた後すぐに社員全員の安否確認を行った

そうだ。ほぼ社員全員の安否確認が震災当日の日に出来たが、しかしマンションが半壊してしまった同僚からは震災当日夜になっても会社に連絡がこなかった。心配した会社の上司たちは、同僚が住んでいるマンションまで行き安否を確認しようと思ったが、マンションが半壊しておりそこには誰もいなかった。そこでマンションの近くにある中学校が避難所となっている情報を知りそこに駆けつけると、同僚は家族と一緒に避難していたので安否を確認することが出来た。公衆電話で会社に連絡をしようと思ったが、夜になっても渋滞が引かず連絡をすることが出来なかったそうだ。父はこの話を聞いた時、自分の家は倒壊することもなく被害も少なかったのに少し離れた場所ではこんなに大きな被害になっていることに驚き改めて地震の恐怖を実感したと話してくれた。

三つめのエピソードは、震災当日まで大阪から阪神高速を通って会社まで出勤していた人の話を私に話してくれた。大阪から来ていた同僚の方は、震災当日もいつものように阪神高速を通って会社まで出勤するつもりで朝起き用意をしていたそうだ。そして会社に行く用意をしている時に地震が起こった。しばらくしてからテレビをつけてみると、淡路島を震源地とする大きな地震が神戸で起こったことを知ったそうだ。三宮にある会社のことが心配になり連絡をした後、テレビを見ていると阪神高速が倒壊したニュースが目飛び込んで来た。そのニュースを見た瞬間、その人は自分の体がニュースを見て震えていることを実感したそうだ。もし30分早く家を出発し、いつものように阪神高速を通って会社まで向かっていたとしたら自分も阪神高速が倒壊した時の被害に巻き込まれていたかもしれない・・・と直感で思ったそうだ。自分が毎日のように通っていた高速道路が倒壊したことは大阪に住んでいるその人にとってはとても衝撃的なことだったそうである。

四つめのエピソードは、父の大学からの友達で同じ会社に勤めていた同僚の子供の話である。震災後は尼崎のほうに引っ越ししたそうだが、震災が起きた当時は垂水区に住んでいた。そして父の同僚は4人家族で、妻と五歳の女の子と一歳になる男の子がいる。エピソードというのは、一歳になったばかりの赤ちゃんの話だ。地震が起きた直後この家族は4人で一つの部屋に寝ていたそうだが、地震が起きた時赤ちゃんが寝ていた付近にタンスが倒れたので赤ちゃんだけタンスで隠れて見えなくなってしまったそうだ。地震が起きた時も、タンスが倒れた時も赤ちゃんの泣き声が全く聞こえないのでタンスの下敷きになってそのまま死んでしまったのではないかと思い急いでタンスを持ち上げると、赤ちゃんは怪我もなく無事でスヤスヤと眠っていたそうである。この時同僚の人は、赤ちゃんが少しでも頭を上にして寝ていたとしたら、赤ちゃんの頭の上にタンスが落ち大けがを負っていたらと思うと全身が恐怖でいっぱいになったそうだ。この赤ちゃんはこの先も大きな怪我をすることもなく、すくすくと元気に成長し高校に通っている。

私たち家族のその後

私たち家族は、友が丘に住んでいる祖父から電話があった後祖父の家でライフラインが復旧するまでの間生活させてもらうことになった。二週間経つ頃には私たちの家はライフラインも全て復旧していたので、自宅に戻り日常的な生活に戻ったそうである。祖父の家は、震災当日から水道もガスも電気も全て復旧していた為、生活に困ることもなく私たちはご飯も普通に食べられたし、お風呂も毎日入ることが出来たので日常生活に困ることはなかったそうだ。当時の私は祖父と毎日一緒にお風呂に入ることが嬉しくてたまらなかったみたいと母が笑いながら私に教えてくれた。私の震災の記憶で祖父が毎日退屈しないようにと私を近所の公園に連れて行ってくれた思い出だけは、今でもはっきりと覚えている。

自分の震災体験記

浅野 圭祐

震災直後

私の父親は朝が早い。いつも朝5時半までには起床する。1995年1月17日にもいつものように5時に起きた。このとき浅野家で起きていたのは父だけだ。母は父とは違って朝は遅い。そして、5時46分に大きな揺れがあった。すでに起床していた父はたいそうびっくりしたそうだ。そして、まだ寝ていた母は大きな揺れにびっくりして飛び起きたそうだ。自分には年の離れた兄が二人いる。兄たちは詳しくは覚えてはいないが、とても大きな音がうるさかったのは覚えていると語ってくれた。母と父は共通して言ったのが、とても長い時間揺れていたと言っていた。実際に揺れた時間は十数秒だが、1分以上揺れていた気がしたと言っていた。それだけ揺れがすごかったのかと自分は思った。母は、揺れがおさまったと思ったら、次は上下に揺れを感じたと言っていた。最初は左右に揺れるような感覚だったそうだが、朝が早かったのであたりはうす暗く、しかも寝起きであった為に感覚が少し鈍っていたので、なにかに吊り上げられた感覚を感じたそうだ。本当に恐ろしかったと母は真剣な顔で言っていた。

震災から少しして

ある程度落ち着いてから父と母は家の中の様子を確かめたそうだ。まずは自分の子供の安否。私たち兄弟は全員無事で嬉しかったと母は言っていた。そのあと食器棚を見たそうだが、食器棚の扉が全部は開いていて、食器はほぼ全滅だったそうだ。その光景を見て改めて地震の大きさを再認識したそうだ。あと、食器代がもったいなかったと母は笑いながら言っていた。

その後、父は水道が止まるかもしれないと言って、急いで風呂に水をためた。案の定、水道はその後すぐに止まってしまったそうだ。間一髪だったと父は言っていた。しかし、なぜ水道が出たのか不思議に思った。普通は大きな揺れで、水道管が破裂して水が出ないはずなのに、なぜ自分の家は少しの間だけだが水が出たのか。かなり疑問に思った。父に聞いたならそれで済む話だが、聞くのもなんか癪であったし、こういうまったく見当もつかない問題を考えることは好きだから5分ほど考えた。しかしまったく答えが出なかった。考えた結論は、自分の家は特殊であったと結論付けた。しかしなぜ水道が出たのか尋ねてみると、答えはいたって簡単なものだった。震災が起きた当時、僕はマンションに住んでおり、マンションの屋上には大きなタンクありそこから水を得たそうだ。水道管もたまたま無事だったそうだ。こんな簡単な答えだったので拍子抜けをした。しかし父は、こういった偶然のおかげで助かったと言っていた。水道が止まると、残りのライフラインもすべて止まってしまったそうだ。とても不便であり日常に感謝しないといけないと言っていた。

私の家は特に大したダメージを受けていなくて、避難所に行かなければならないということにはならなかったそうだ。

電気は1日で復旧し、助かったと言っていた。電気が復旧するまでは蝋燭を使っていたそうだ。とても原始的だなと思った。

何をしたらいいかわからないので、しばらくは家にとじこもってラジオを聴いていたそうだ。どのチャンネルをえらんでも、ほとんど阪神・淡路大震災についてのものが多かったそうだ。そのなかには役に立つ情報も結構多かったらしく、助かったと母は言っていた。電気が復旧したのが早かったらいいのでテレビを見ればよかったのではないかと尋ねたら、テレビはどちらかというと被災地外向けのような情報ばかりであり役に立たなかったと言っていた。例えば、上空から見た被災地の様子など、そんなこと被災地にいる自分たちは嫌ほ

ど知っている情報ばかりしかなかったのでテレビは使えなかったと言っていた。

逆に、ラジオは映像がない分情報が多く、とても為になったそう。しかもラジオは電池で動くタイプだったのすぐに使えて、持ち運びが非常に便利だったと大絶賛していた。自分の家は電池を大量に買い置きする家だから電池切れにはならなかったそう。父はこういうときのための買い置きだと言っていた。自分の家はしっかり備えというものができているなと思った。

震災からある程度時間が経って

震災直後に風呂に水をためたが、やはり足りなくなっただけ。仕方がないから、知り合いの家に行き、井戸を借りたそう。しかし飲むのは少し良くないかもしれない井戸水だったので洗濯などの生活用水にした。それだけでも十分助かったそう。母は結構おしゃべりが好きな人だから井戸水を汲みに行き、その井戸の持ち主と長い時間おしゃべりをしていて父は笑いながら言っていた。母はそういう息抜きも大切だと言っていた。

母は長田にある実家が気になったそうで、自転車で一人、片道1時間半かけて行っただけ。「今思えば、あの時は30代だったからできたけど、今は無理だな」と笑いながら言っていた。自転車で長田に行くほど実家が心配だったことがわかる。長田に行く道中、車道は混雑していたらしく車で行ったら大変かもしれないくらい混んでいたらしい。だが、歩道は車道とは打って変わって、あまり混んでいなかったそう。しかし母の心配とは裏腹に長田の実家は無事だったそう。長田の実家は偶然、震災の2年ほど前に改修工事をしていたので無事だったそう。しかしそれでも壁に亀裂が入ったそう。今でも長田の家には亀裂の跡が見られる。だが、周りの家は亀裂だけでは済まなかったそう。長田のほとんどの家が古い木造住宅であったため、近所の家は全部全壊したそう。母は、改修工事をしていなかったら今頃、長田に住んでいる祖母は墓の下にいたかもしれないと恐ろしいことを言った。

長田では火災が多かったらしく、母の実家も他人事ではなかったそう。震災から2日後に長田に火災が起こり、消火活動をしようにも水がなく、火を消すことができなかったそう。何もできることがなくただ火が消えるのを待っていて、中には泣きながら火を見つめている人も居たそう。母の実家は奇跡的にもうすぐ火が燃え移る直前に自然鎮火したそう。手前の家で火が止まったらしく、とにかく運がよかったと母は言っていた。しかし震災が起こるまで、母の実家は米屋をやっていたそうで、震災をきっかけにやめたという。

震災が起きる数年ほど前に父は病気で目が見えなくなったそう。今は、日常生活に支障はないほど視力が回復している。しかし車の運転などの目を酷使することはできなくなった。震災が起きた時にはほぼ視力が回復していたそうだが、定期的に病院に行かなければならなかった。しかし病院が中央区のポートアイランドにあり、行くだけでも苦労したらしい。液化化がひどく、ポートライナーが運行していなかったので母が車を運転して嫌々、父と病院に行ったそう。ポートアイランドに入ると、地面が水浸しになっており気持ち悪かったと言っていた。薬だけをもらうときは母の弟が原動付自転車で病院に行き、薬をもたらってきたそう。母の弟も地面が水浸しで気持ち悪かったと言っていたそう。

震災からある程度時間が経っても電気以外のライフラインはなかなか復旧しなかったらしく、震災直後は気にする暇はなかったが、1週間ほど経つと気になってきたらしい。一番気になったことは風呂だったらしい。ガスは長いこと復旧しなかったもので、しばらくは銭湯にお世話になったそう。自分が震災当時に住んでいた地域は、他の地域に比べてライフラインの復旧が早く、復旧するのが遅かった地域に住んでいた親戚が風呂に入りに来たそう。

母の知り合いは神戸市外に住む人が多く、あまり被害の大きくなかった地域に住む知り合いにたくさん助けてもらったそう。例えば、風呂を借りたり、水道水を分けてもらったり、食料をもらったりなど、たくさんの知り合いに助けられ、本当に助かったと母は言っていた。

なんとなく外を歩いていると、コンビニにたくさんの人が集まっているのを見たそう。どこも家も食べ物に困っているなと母は思ったそう。

自分は三人兄弟の末っ子である。兄が二人いる。兄二人とは年が離れており、特にケンカもしない。次男の兄とは5つ年が離れており、長男の兄とは7つ年が離れている。震災当時、自分は2歳。次男の兄は7歳で小学1年生である。長男の兄は9歳で小学3年生である。兄二人は、震災当時のことを少し覚えているそうだ。次男の兄に震災について聞いてみると、とりあえずうるさかったと言っていた。長男の兄に聞いてみると、しばらく学校がなかった気がすると言っていた。兄二人の言っていることは正しいようだ。母曰く、地震の音は確かにうるさく、兄二人はしばらく学校に行かなかったそうだ。長男の兄が面白いことを言っていた。給食についての話だが、給食の内容が非常に素朴であったと言っていた。詳しく聞いてみると、給食の献立はパンとチーズだけだったらしい。確かに、パンとチーズだけなら皿を洗う必要がない。震災の被害は思ったより深刻だなと思った。しかし牛乳がないのはつらい話だと思う。あと兄は学校に知らない大人がいたと言っていた。兄の通っていた小学校は避難所として長い間使われていたらしい。授業が再開しても、その形跡は残っていたそうだ。

父の動き

私の父親はエンジニアである。電気関係の技術者である。営業の仕事とは違い、すぐに会社に行かなければならなかったそうだ。しかし父の会社は神戸からかなりの距離があり、震災が起きてから容易に行けるわけではなかったが会社に行く術がなかった。私が自転車で行ったらよかったのにと冗談っぽく言ったら、父は会社に行くだけで勤務時間を過ぎるかもしれないと笑いながら言っていた。

父は震災から1週間程経ってから会社に行った。しかし電車はまだ復興していなく、バスなどといった数種類の交通機関を利用して気合いで行ったそうだ。

父の会社は神戸から離れた場所にあるので、一度行くと帰ってくるのが大変だったらしく、震災の被害が落ち着くまで1週間程大阪のホテルに滞在して家に帰ってこなかったそうだ。

父の主な仕事は電気の復旧だったそうだ。震災で電気が駄目になった場所が多く、いつもの数倍は働いたそうだ。早く復旧しないといけないという使命感があり、そのせいでとても疲れたと言っていた。1週間ほどホテルに滞在していたらしいが実際はホテルをほとんど利用していないと言っていた。ずっと現場に居なくてはいけないような雰囲気非常に忙しく、ホテルで過ごした時間は短かったそうだ。

母曰く、父が仕事を終え帰ってきた姿を見てびっくりしたそうだ。父の姿はとても汚く、表情もかなりしんどそうであり仕事に行く前とは全くの別人であったと当時のことが懐かしいという表情をしながら言っていた。父は、別にこれくらいの仕事は慣れていると言っていた。

自分の父は技術者であるために若いころは休日という概念がなかったそうだ。月曜日から土曜日までの平日はもちろん、日曜日でも会社の機械になにか異常が発生したら出勤しなければならなかった。そしてほぼ毎日、残業しており家に帰るのは深夜1時頃であり、次の日は朝5時半に起き、会社に行っていたそうだ。その生活がほぼ毎日続いていたそうだ。そのため父は過労で目が見えなくなり、入院した。それぐらい父は仕事をしていた。そのおかげで、震災当時の仕事はそんなにしんどくなかったそうだ。

震災から時間が経ち

震災から1年近くが経ち、私は3歳になった。なぜか3歳の記憶はかなりある。その中で鮮明に残っているものは長田の街並みである。ひどく汚かったのは覚えている。商店街のアスファルトにはたくさんの亀裂が入っていた。そして地面が凸凹していた。とても歩きにくかった気がする。商店街の中には壊れてもう住めないだろうと思える家がいくつかあった。祖母の家は特に問題はなかったが、その近所の家はほとんど壊れていて、瓦礫の山があったことはよく覚えている。今でもその瓦礫の山は残っている。なぜかこの頃の記憶は長田のこ

とばかりである。そういえばこの頃はよく母と長田に行った記憶がある。1週間に1回は長田に行っていた気がする。今思えば、1年ぐらいでは震災の傷を回復するのは難しいということがわかる。今、長田の町は特に震災の大きな傷跡はないが、まだすこしだけいろんな傷跡が残っている。これは長田が復興できていないのか、それとも傷跡が大きすぎて完璧に傷を癒せていないのかどっちかわからない。しかし震災の被害は大きかったということだけはよくわかる。

17歳の今、私はよく三ノ宮に買い物に行くが、今でも古いビルには亀裂が入っているのがよく目に入る。未だに震災の傷跡が完璧に癒えていないのかと、いつも思う。自分が高校1年生の時に母と神戸に行った時、震災で営業が停止し、未だに解体作業をしていないホテルを見せてくれた。そのホテルは母の思い出の場所だったそうで母は悲しそうにそのホテルについて教えてくれた。昔は結婚式場としてよく使われており、母も友人の結婚式でよく行ったそう。しかし震災によりそのホテルは少し傾いたそう。しかし震災によって不況になり、立て直すことなく現在に至るそう。しかしそのホテルは震災から十数年経った今、解体作業が行われるかもしれないらしい。

この前、テレビのニュースで震災によって営業が中止していた神戸の有名な高級ホテルが営業を再開したニュースを見た。このニュースを見て、神戸はまだまだ復興中であると思った。

家族の震災体験記

安達 海

震災が起きた直後

阪神・淡路大震災が起こった5時46分、被害がかなり深刻だった神戸市東灘区に住んでいた私たちの家族は、まだ当然のように寝室で寝ていた。その時はまだ当時の家に引っ越してきたばかりだった。

部屋の中に家具がかなり少なく、倒れてくるものといえばタンスくらいしかなかった。しかし、そのタンスを置いていた位置が悪く、僕と父、母が寝ていたベッドの前にあっても危険だったが、揺れはじめのときに偶然タンスの上に置いていた箱に入っていたスニーカーが父の頭の上に落ちてきて、激しいゆれに気づき、すぐ父が母を起こして僕を安全な場所に連れて、危険なタンスの下から避難させた。

ゆれはわずか数秒のことだったのに、とても長く感じたようで、身動きが全然とれなかったらしいが、寝室は物すらも全くと言っていいほどなかったのもタンスの下以外はとても安全で、家族全員は全くけがをしなかった。

当時まだ2歳だった僕はまだ何が起こったか全然理解をしていなくて、朝早く起こされて機嫌が悪く、おなかがすいたと泣きわめいていたので、父が勤務しているホテルで、たまにもらってくる前の日の残りもののケーキを食べていたそうだ。

リビングにいてみると、当時まだ液晶テレビが普及していなかったころの、とても分厚いブラウン管のテレビは倒れ、台所にあるたくさんの食器がすべて床にたたきつけられて、原型は何なのか分からないくらい粉々になっていた。

そして、外に出てみるといつもと変わらない景色が全くの別世界になっていて、戦争なんて体験したことはないが、なんだかあのテレビなどで見るような荒れ果てた戦場にいた気分になってしまうような光景だったそうだ。

2歳の当時の僕は、阪神高速道路が倒れている状況を見て、ずっとそれを見てさげんでいたらしい。

そして外を見てみると、近くのほぼ全壊に近いコンビニや、スーパーからどさくさに紛れて食べ物や飲み物を持っていった人や自動販売機を必死に蹴って壊したりして、飲みものを持っていく中年の方を目の当たりにし、人間の本能はこういうときにあらわれるのだな、と感じ、悲しい気持ちになったそうだ。

しかし、同じことをしようとは一瞬たりとも思わなかったらしい。

少し時間が経過して

僕たち家族は避難所へ向かわずに、車が二階建て駐車場に駐車していて、すべての駐車していた車が地震の揺れによって配置が横にずれていたが、わが家の車はなぜか無事だったので、父の実家である、大阪の高槻へ8時間かけて、西宮までは地盤が陥没していた道路を、無理に車を走らせて向かった。

その時、自宅の前の阪神高速道路が崩壊していたこともあって、そこに来る途中にもっと大きな被害を目の当たりにしたので、そんなに驚きはなかったらしい。

むしろ、伊丹市を過ぎたあたりから住宅道路がいつもと変わらない様な普通の状態だったので、なぜこの地域の道路がこんな普通な状況だったのかという方の驚きが大きかったそうだ。

しかし、渋滞はいつもなら、ありえないくらいすごく、普段なら車ですぐに行ける距離にある大阪なのにかかなりの時間がかかったらしい。そして、その車に乗っている時間は果てしなく長く感じて、その時に「自分の住んでいる地域が被災してしまった」と実感が、急にわ

いてきたそうだ。

同時に仲の良い近所の人は大丈夫だったのか、ちゃんと避難できているのかなど、たくさんの心配が出てきたが、そのときは、自分のことで精いっぱいだったので他の人のことを考えている余裕は、申し訳ないが、なかったらしい。

あとから、仲の良い人の安否を確認したが、全員無事だったので心の底から良かったという気持ちが表れたそうだ。

避難所が近くにあったのになぜ向かわなかったのか、それは避難所となっていた東灘小学校は、避難している人であふれていたし、遺体安置所となっていたので、自分達より被害がすごい人はいれなくなってしまうたら罪悪感が強いし、地震で亡くなった方と同じ場所にいるというのは、気持ち的に行く気になれなかったそうだ。

実際に避難している人は、ほとんどの人が悲しみにくれているか、パニックになっており、避難所全体の雰囲気は、今までに味わったことのないようななんとも言えない雰囲気です、ここにいることはできないと、心の底から感じたそうだ。

震災の情報を父の実家でテレビや新聞で見て、ラジオで耳にしたとき、関西地区に地震は来ないという漠然とした確信もあり、母は大地震がまさか自分の住んでいる地域を襲うなんて予測していなかったし、ましては自分の住んでいる地域の被害が一番ひどく、命を落とされた方がたくさんいたなんて信じられなかったらしい。自然を前にしたら普段創りあげてきた何気のない日常は、たった数分ですべて一瞬にして破壊され、人間の力なんてはかないものだったと思ったそうだ。

実家の祖母と祖父は、激震地だった東灘区にすんでいた僕たち家族のことをかなり心配していて、とにかく無事で生きていることを願っていたらしい。

だから、僕たち家族から連絡が入った時は、本当によかった。という気持ちがにじみでたそうだ。

ほかの県外に住んでいる親戚も僕たちが無事なのかとても心配してくれて、無事と聞いた時、同じようにかなりよろこんでくれたらしい。その時、母と父は、いろいろな方から心配されているのを聞いて、ああ、自分たちはこんなにも多くの人に心配してくれているのだから、感謝しないといけないという気持ちになったらしい。

実家に避難していた期間は3カ月だが、父はホテルで働いているので、ホテルに宿泊していた客のケア、たとえばこれからどうすべきかを説明することや、建物の業者はすぐには建物を直しにはこないで床全体が埋め尽くされた、床に落ちて割れた皿などの食器類の片付けなどの復旧作業を行わないといけなかったもので、しかたなく一週間は自宅のひびが無数にはいつているマンションに避難して、その後は3月ぐらいまでは会社のホテルで泊まった。

電気はすぐに震災が起きた次の日から復旧したが、ガスは4月くらいまで復旧しなかったもので、父はガスがまだ復活していない自宅のマンションで生活をしていて、毎日自宅から原付バイクで勤務先のホテルに通っていた。

被災地に戻って

そのときのうわさで、JRか阪神電車のどちらかが自宅付近の駅まで通るようになったという噂を耳にしたので、父と母は僕を実家に預けて、その電車に乗り、地震で物が散乱した自宅の片付けをするために、1回、東灘にある自宅に戻った。

建物全体にひびのいった自宅に戻ってみると、避難所の状況が、人があまりにもたくさんいて混乱していたので避難できなかった人たちが、多くはないが何組かいた。

その人たちに、神戸では売り切れて買えないようになった、髪を洗い流さないでも使える、洗い流さないシャンプーや、被災した時期が1月でまだ身が凍るようなとても寒い時期だったので、少しでも暖まってもらうために、使い捨てカイロなど神戸ではすでに売り切れて買えないものを大量に購入して持って行き、自宅のマンションに残っていた家族などに配ったらしい。

その時に、一緒におにぎりやたまご焼きをたくさん作って、持って行って配ったら、後日に「あの時のおにぎりやたまご焼きがすごくおいしかった。本当に感謝しています。」と感謝の言葉を自宅のマンションにいた人に言っていたそう。

そのおにぎりを配って渡した人の中には、買い物になかなか行けず、とても空腹でしかたなかった時にそのおにぎりをもらったのでふつうのおにぎりだったのに、かなりおいしく感じた方もいたそう。

そのとき母は震災のような非常事態が起きた時こそ、その時行ったような、買い物が行ける状況でない人に日用品を買ってあげたり、作ったおにぎりや卵焼きなどを配るなどのような、お互いできないことは、カバーし合うなどの、お互い支えあうことが大切だと思ったそう。

実際、こっちのほうから、物を配るばかりではなく、僕はまだ当時小さかったのも、母と父が家具や日用品がめちゃくちゃになっている自宅を片付けるときにどうしても邪魔になったので近所の方に、預かってもらい、お世話してもらうこともあったらしい。

その僕を預かってもらった方は、子供がもう青年となって、家をでていて、2人暮らしなので、ちょうどよいと、お互いとても大変だった状況なのに、心よく僕を預かってくれたそう。

このような異常な状況だったので、たくさんの被災した人が、母と同じようにお互い支えあうことが大切と思ったのか、助け合うことが普通であつたらしい。

しかし、非常事態だったから全員仕方がなく助け合ったという感じでは全然なくて、もともとのこのマンションに住んでいた人の人柄の良さや、住民同士の仲の良さが、こういう状況でも発揮されたのではないのかな、と感じたらしい。

同時にこの雰囲気の中であったら、今後の復旧活動のときに絶対確信があつたし、これからも、マンションの住民の方とは仲良くしていけるだろう、と思ったそう。

自宅に残っていた人たちは神戸の店がまだ復旧していなかったのも、大阪まで向かうのに、東灘の自宅からかなりの距離があるが西宮まで歩いていき、そこから電車は普段通り動いていたので電車に乗り、必要な物資を買うために買い出しに行っていたらしい。

まだ1月の凍えるような時期で、歩いて西ノ宮まで行く事はとても大変なことだったそう。

実際にその経路で買い物に出かけた人は、地震から避難する時に足を捻挫してしまって、歩くのに多少痛みが出るという状態だったのに、自分が買い物に出かけるしかないといって、無理をして歩いていったそう。

その捻挫をしていたのに歩いて、買い物に行った人は、歩く距離が長くなるにつれて、足の痛みが増していき、西宮についたときには、体の芯から凍るような寒さだったのに、汗をかいてしまうような暑くなったらしい。そして大阪に電車に乗って着いたころには、自然に涙がでてきたそう。

その涙は阪神・淡路大震災で悲しい気持ちや、大阪について嬉しいという気持ちから、こぼれおちたものではなく、本当に無の感情から自然とでたものだそう。

マンションには家族がなくなった方もいて、その方は泣き叫ぶことも、床に崩れおちることもせずに、茫然とたちつくして、なんともいえないような顔をしていたそう。その人は、家族の命を奪ったのは他でもない自然災害であるし、誰を恨んだらいいかなんて分からない。ほんとうに一瞬の出来事だったので、頭の中で何が起こったか状況が整理できていなかったのではないのか、と思ったらしい。

だから、父と母は、家族全員がこんな大きな地震が起きた地域に住んでいたのに、無事に全員生きていた運命にとっても感謝して、より一層、命を大切に扱っていかないとけないと思ったそう。

もしこの阪神・淡路大震災のような大きな災害が今後起きても、しっかり災害に備える、たとえば、災害が起きた瞬間はしっかり机の下に隠れる、しかもその机はものが上から落ちてきても大丈夫なくらい頑丈であることや、ガスの元栓はしっかりしめる、倒れやすくて、

危険である大きな家具、たとえば、タンスやテレビ、食器棚などの家具をしっかり固定しておくなど、日頃から、災害に対してできる備えはしておこうと強く思ったらしい。

震災体験

井川 佳揮

震災直後

震災当時は、神戸市須磨区の白川台にある小さなアパートに住んでいた。1つの部屋で、父、母、2歳の僕と、まだ0歳の妹の4人で寝ていた。

地震が起こる前の夜、月の色がいつもと違って、オレンジ色で気味が悪かったと母が言っていた。他にも、水族園のイルカが言うことを全く聞かず、イルカショーが中止になったというニュースをやっていた。

家族全員が眠りについて、地震が起こる30分ほど前に父がたまたま目を覚ました。大きなテレビの前まで寝返りで移動していた僕をもとの寝ていたところへ移動した。そして、しばらくしてから大きな揺れが始まって、その大きなテレビは、僕が寝返りで移動していたところへ落ちたようだ。もし、父が目覚まさなくて僕を移動させていなかったら、確実に死んでいたと言っていた。死んでいなかったとしても、すごい大けがをしていたと聞いた。

地震が起こった瞬間、僕は目が覚めて泣いていて、妹は気付かず寝ていた。あんな地震の揺れは初めてで、最初の下から突き上げられたような揺れがしたと言っていた。最初寝ていたの何が起こったのか分からなくて、大型のダンプカーが家に突っ込んできたのかと思ったようだ。

揺れがとても長く感じて、1分間ぐらい揺れていたような感覚だったと言っていた。家中の家具がひっくり返っていた。

上から落ちてきたものが当たって、台所の水道の水がずっと出ていて、あふれ出して床が水浸しになっていた。急いで水を止めて、再び水を出そうとしたけど、もう水は出ず、それから2週間ほど水が出なかった。使えなかったのは水と電気と電話で、ガスは使える状態だった。とにかく電話ができないし、携帯電話がその時持っている人がほとんどいなかったのでもって連絡をとることができなくてとても困った。

家にダメージはそんなになく、住めない状態ではなかったのでもって避難所へは行かなかった。おばあちゃんの家が長田と須磨にあつて、父が安否確認をするために車で見に行った。須磨区のほうのおばあちゃんの家は、家は全壊だったけど、おじいちゃん、おばあちゃん両方ともケガなく無事だった。次に、長田のほうのおばあちゃんの家に見に行った。

行く前に、妹のミルクを作るための水がなかったのでもって、近くのコンビニへ水を買に行つた。ふつうなら30分ぐらいで行けるところを、道路がめちゃくちゃになっていたり、火事で通れない道ばかりだったので、須磨から長田まで2時間もかかった。長田区に近づいていくにつれて、火事で燃えている家が多くなっていて、煙で空が真っ黒になっていて、昼なのに夜みたいだったと言っていた。周りが燃えていて、車の中にいたのに熱くて、火の中を車で走っているみたいだったと言っていた。

長田のおばあちゃんの家に着いた時、おじいちゃんは建築関係の会社に勤めていて、その時はすでに出勤して、それが心配になったおばあちゃんも一人で会社に見に行つていたので、家には誰もいなかった。

おばあちゃんの家は全壊で、地震の揺れで家自体が50センチほど移動していた。家の近くの3階建てのアパートも崩壊して、父はそこで救助活動を行つた。がれきの奥から手が見えたので急いで引っ張りだしたけど、その人はすでに死んでいた。その人に外傷はなくて、圧迫死だった。もう一人がれきの中から声がするのが聞こえて、その人は、他の地域住民と協力して助けることができた。その死んでしまった人は、道にたたみを広げてその上に寝かせていた。

おじいちゃんが勤めている会社に行くと、会社も全壊して、おじいちゃんもおばあちゃんもいなかった。近くの避難所になっている小学校を探しまわつて、家の一番近くにある、

神楽小学校に避難していて、そこで初めて会うことができた。身内は全員無事で、ケガをした人は、誰もいなかった。

ガスが使えなくてご飯がつけられなかったので、いとこの家でご飯を作って、食べて帰ってくるといいう日が1週間ほど続いた。いとこの家は、丈夫なマンションだったので、建物にダメージはなかった。マンションというのもあったので、救援物資がたくさん届いた。須磨のおばあちゃんの家はなぜか断水せず、普通に水が使えたので、そこでお米を洗わせてもらっていて、家に帰っておにぎりにしていた。母は地震初日の夜、1日中おにぎりをにぎったり、煮物をつくったりしていて、全く寝なかった。そして、次の日の朝に父がおばあちゃんの家や、いとこの家に届けたりしていた。

長田のおばあちゃんの被災体験

おじいちゃんが出勤するのが早かったので、おばあちゃんも5時に起きて、ストーブをつけていた。おじいちゃんが家を出て、もう一度寝ようと奥の部屋へ戻ったとたん激しい揺れが襲ってきた。その時、近くのアパートの瓦が落ちる音が聞こえた。

長い揺れがやっとおさまり、暗かったけど、蛍光灯がまだついていたので、それを持って障子の扉を開けて、部屋を出た。廊下に出ると、天井が落ちてきていて、家の外からは、近くに住んでいる人たちに名前を呼ばれているのが聞こえた。

家の外に出ると、近くにあった3階建ての教会がまるごと庭に倒れてきていたが、家には当たらずに済んだ。

壁はすべて落ちていて、家が全壊だったので、修理に3、4カ月かかり、費用は1000万円がかかると言われていた。けど、おばあちゃんは、地震が起こる前の年にたまたま地震保険に入っていたので、1000万円のお金はすべて保険会社に出してもらって、ほとんどお金を払わずにすんだ。

玄関とお風呂は完全につぶれていたけど、家の真ん中の方は、あまりダメージはなかった。電子レンジ、冷蔵庫、洗濯機などの家電製品が全部壊れてしまっていて、全部買い換えることになった。

地震の前の夜につくっておいていたぜんざいが全部こぼれて、台所がぜんざいでべとべとになっていた。

3か月ほどの家の修理の間、おじいちゃんの事務所で生活をしていた。その時は、公園にお弁当をもらいに行ったり、他の家に水をもらいに行ったり、近くの中学校に自衛隊が来ていたので、お風呂に入ったりしていた。でも、お風呂に入れなかった日もあったと言っていた。

早い時間に出勤していたおじいちゃんは、事務所でストーブにあたっているところに被災した。机で顔をうち、軽いケガをした。

家の近くに住んでいる人が7人亡くなり、そのうち3人は、おばあちゃんの知り合いだった。

家の修理が終わるまでは、田舎の知り合いからたくさん食べものなど、いろんなものを送ってきてくれた。

おじいちゃんは、建築関係の仕事をしていたので、地震から2年間ほどは、とても仕事が忙しかった。家の修理が終わる前も、ずっと事務所で寝泊まりし、仕事をしていた。3年後の1998年、仕事が急になくなってしまったのと、体調が悪かったというのもあったので、会社をやめた。

被災してから1週間ほど

1週間ほどたつと、テレビがつくようになって、テレビを見ていると、どのチャンネルを見ても阪神・淡路大震災のことばかりやっていて、CMをやっていなかった。

父は、建築士の仕事をしていたので、神戸市内にある、今まで設計した建物が気になったので、すべて見に言った。バイクで行って、途中でパンクしてしまった。知らない人に、「もしよかったらこれ使ってください」といわれ、バイクを貸してくれた。バイクを返した後も、その人と水が出るところへ一緒にくみに行ったりして、普段あまり関わっていない人や、全く関係ない人とかはその時関係なかったと言っていた。こういうところで普段できないような人間関係を築くことができた。設計した建物は、なんとかすべて無事だった。この頃になってやっとガスが使えるようになったので、まだガスが使えなくてお風呂に入ることができないおばあちゃんや、いここがお風呂を入りに家へ来るというのが1カ月ほど続いた。

被災してから約1か月

父は、ボランティアでお年寄りが仮設住宅へ引っ越さないといけないので、その引っ越しの手伝いをしていた。

テレビでは、前までは阪神・淡路大震災のことばかりで、CMとかはやっていなかったけど、このころになって、CMが始まりだして、カップラーメンや、乾パンなどの保存できる食品のCMが多かったと言っていた。

だいたい生活が落ち着いてきて、救援物資も被害が多かったところだけではなく、均等に配られるようになった。

被災してから約3か月

父は建築士の仕事をしていて、家やビルの設計をする時に、市役所に確認申請というものを出不さいといけない。それが確認されなかったら、家を建てることができないので、市役所へ出しに行ったら、他の建築関係の人たちもたくさん来ていて、とても長い列ができていた。確認申請を出すだけなのに2時間ほどかかってしまって、市役所は混乱していたと言っていた。

環境防災科

中学校3年生の時に、進路に迷っている時、舞子高校に環境防災科という特別な学科があるということを知った。

環境防災科では、阪神・淡路大震災での被災の教訓を中心に、さまざまな災害のことや、そのメカニズムを学んだり、消防学校の体験入校、フィールドワークなど、普通科ではできないような貴重な経験がたくさんできるとその時の担任の先生に教えてもらい、環境防災科に興味をわいた。

将来の夢である消防官になるために、防災の知識を身につけておきたいと思い、環境防災科を受験し、合格して入学した。でも、学校の勉強や、校外学習などで防災を少しずつ理解していくうちに、自分が消防官になるためだけに勉強をするのではなく、自分の防災の知識を、防災を知らない人たちに広めるために勉強をしたいと思えるようになった。防災を広げていき、災害に強いまちをつくりあげていきたいと思った。

もし、自分が消防官になることができなかったとしても、環境防災科で3年間学んできたことは、決してむだにはならず、何かあった時には必ず役に立つと思っている。

災害に強いまちをつくるということは、決して一人だけではできないことなので、一人一人の意識の持ち方がとても大切だと思う。

災害が起こった時、一人だけが防災のリーダーになるのではなく、一人一人がリーダーになるという意識をもってもらうために、防災の知識を広めていきたいと思った。そのために、もっと防災を勉強し、知識を身につけていきたいと思った。

感想

実際に話を聞く前、環境防災科で勉強していたので、阪神・淡路大震災のことは知っているつもりでいたけど、今回、父、母、おばあちゃんに震災体験を聞いて、学校の授業では聞くことができない貴重な話を聞くことができ、自分は、阪神・淡路大震災について何も知らなかったと、改めて気付いた。震災当時、僕はまだ2歳だったので、記憶は何も残っていないけど、今回聞いた震災体験は、絶対に忘れたくないと思ったし、震災の恐ろしさを、震災を知らない人たちや、次の世代に伝えていかなければいけないと思った。

僕たちが今住んでいる日本は、地震がとても多く、いつ起きてもおかしくないと言われている大きな地震がいくつかある。

地震の規模を人間の力で変えることは出来ない。そんな環境のなかでうまく生活していくには、地域の防災力を上げることだと思う。そのためには、震災の怖さを知らない人がいては絶対にいけないと思う。

波瀾万丈

井手口 理沙

現在

今、私たち家族は垂水区の家に住んでいるが、地震が起こったときは長田区の家に住んでいた。現在、昔住んでいた長田区の家は新しい軒家になっている。

今の垂水区の家に住むことになったのは、震災で長田の家が全壊になってしまい、住めなくなってしまったからだ。

震災生活をするにつれて、私たち家族は周りの人に助けてもらった。今、私たちが生活することができるのは、周りの人たちのおかげだ。感謝の気持ちでいっぱいだ。

震災が発生したその日1 ～ 発生直後 / 朝 ～

母は看護師なので仕事で家にはいなかった。祖母と叔父は1階、私は父と1歳の弟と2階の部屋で寝ていた。地震の揺れが発生すると、家具が飛び散ったので父は私と弟の上に布団で覆いかぶさってくれていたのだが、私は揺れていたのも気づかずに寝ていた。

揺れが収まり、家の中を見回すと、タンス・食器棚は倒れ、ガス管と水道管がひび割れ、瓦も全部滑り落ちている状態で、家は全壊だった。父は裸足で家の中を歩いたために割れたガラスなどを踏んでしまい、足に怪我をしてしまっていた。

家の外に出ると、隣の家は1人暮らしで扉が開かなく閉じ込められた状態だったので、救出するために扉を開けるのを手伝った。

母は、地震直後は病院（仕事場）にいたので、地震発生後すぐに車で私たちが住んでいる家を見に行った。その帰る途中の道は、信号が壊れて使えず、道路が陥没していた。急いでいたので、一方通行を逆走して家に帰った。家に着き、家族みんなが無事だということを確認して、すぐに病院に戻った。

震災が発生したその日2 ～ 昼・夕方 ～

お昼頃になると、母は病院で仕事をし、父は働いていた料理店を見に行ったり、飲み水を探したりしていた。私と弟は、祖母と一緒に家にいた。そして、昼食は冷蔵庫にある食べ物を食べて暮らしていた。母は、夕方頃まで仕事をして、車ではなく歩いて自宅まで帰ってきた。

私は、地震が起きる前（正月過ぎ頃）から肺炎を起こし、病院に通院していた。しかし、震災が発生し、熱が下がっていたこともあって、その後通院していた病院にも行くことができず、放置していた。

全壊になった長田区の家

家は全壊の状態なので赤紙が貼られ、立ち入り禁止だと判断された。しかし、避難所には大勢の人は避難しており、避難所で生活をするとなると避難所のお手伝いをしないと行けない。私の家族は、障害を持っている叔父と病気の祖母と幼い私と弟がいて、母は看護師なので避難所のお手伝いをすることは難しい。父一人では避難所のお手伝いをするのは大変なので、避難所には行けず、ライフラインのない全壊の家で石油ストーブを使って暖をとりながら1日を過ごした。

岡山県へ避難生活

翌日、まだ余震が続いており、母が家族の心配をせず、仕事に集中できるようにするため、祖母と叔父と私と弟は、岡山県に住んでいる単身赴任の祖父の家に避難した。

車を使って移動したので、神戸を出るのに平常時の移動時間は1時間ぐらいで岡山県に行けるのだが、震災時（その当時）の移動時間は3時間～4時間かかった。

岡山県には約14日間避難暮らしをしていたのだが、病気の祖母が岡山県内で入院するので、叔父・私・弟の3人は神戸に帰っていった。

祖母について

祖母は、広島市で4歳の頃、原爆に遭ったために、悪性貧血で常に病院に入退院を繰り返していた。阪神・淡路大震災が起きなければ、本当は1月17日に病院に受診に行っていたのだが、震災が発生したので受診には行けず、岡山県に避難することになった。

避難してから10日後、神戸の病院から岡山県の病院に移るため、紹介状をもらいに一度神戸に戻って、岡山県の病院に移動し、すぐに入院をした。白血病と診断されて、その後は入退院を繰り返した。

神戸の生活が落ち着いたので、12月の中旬に垂水区の家に家族と一緒に住むようになったが、12月末に再度、神戸の病院へ入院し、翌年の1月12日に亡くなった。

叔父について

母の弟の叔父は身体障害者で、避難していた岡山県から帰ってきてからは、叔父の世話をしながら震災生活をするのが困難だった。なので、周りの人たちが、叔父が垂水養護学校での避難生活ができるようにしてくれた。

叔父は垂水養護学校の中で障害者の人と、ボランティアのひと、養護学校の先生とで2月から10月頃まで、避難生活をするようになった。叔父は養護学校に避難中、近所の銭湯へ行っていた。

時々、家族で様子を見に行き、食事を作ったりした。そして、家が落ち着いたので、垂水区の家で一緒に暮らすことになった。

母の震災生活 1 ～ 震災発生直後 ～

震災の朝、病院に一番に電話をしてきたのは外科の先生だった。「今から自転車で病院に向かう。薬が大丈夫な分だけは、使えるように（安全なところに）のけるように。屋上の貯水タンクの水を確保するように。」との指示があった。その先生は、（その頃）ちょうど1年前のロサンゼルス地震のことを調べていた。

病院は、御蔵・管原地区のそばに建っていた。周囲の建物から火が発生し、最初は煙が所々出ているくらいだったが、だんだん燃え広がっていった。しかし、病院は火事にはならず済んだ。

母は、角のガソリンスタンドに消防士の方が水をかけていたのが今も強く印象に残っている。

母の震災生活 2 ～ 被災患者 ～

日が明けてくると、怪我をした人・圧死で既に亡くなっている人などをふすまや戸の上に乗せて、近所の人たちが病院に運んできた。怪我の人は応急手当を行い、亡くなっている人にも心肺蘇生を行っていた。

病院の中でも電気が使えない状態だったので、病院の前にある歩道の明かりを使って気道

確保をおこない、病院内に運び、心臓マッサージと人工呼吸をおこなった。怪我が重症な人は一応入院してもらい、処置ができないので翌日、三木市や小野市の病院を探して病院の職員の車で転院をしてもらった。

人がだんだん増え、ベッドやイスが足りなくなってしまったので、床に亡くなった人を名前が分かるように腕にマジックで名前を書いて寝かせていた。

震災後2ヵ月～3ヵ月は、通常の診察や仕事はできなかった。昼も夜も関係なく患者さんが来て、肺炎の方が多く入院をしていた。ベッドもないためマットを並べて、1人でも多くの患者さんを対応できるように患者の入院依頼を受けた。

母の震災生活3 ～ 看護師仲間・ボランティア ～

ボランティアのナースも来てもくダサって、病院の詰所などを使い交替で仮眠を取りながら、仕事にきた人は2日～3日働いて、1日～2日休むというシフトで働いていた。食事も職員の分は自分たちで米を炊いて、レトルトや缶詰などで済ませていた。

遠くから通勤している人は、自転車を使うや代行バスを使うなどをして、時間をかけて通勤していた。学校に避難している人は、ボランティアや避難所の手伝いをする日は休んでいた。

看護師仲間、自分の息子を病院に連れて行っている人もいた。その息子はまだ小学生だったので、ずっと母親のそばにいた。母親と一緒にいたので何人もの亡くなった方の遺体を見て、PTSDになってしまった。

情報は新聞などで、仕事仲間が亡くなったのを知った。

父の震災生活1 ～ 仕事 ～

父の働いていた料理店は倒壊していた。仕事がなくなってしまったので、仕事探しもおこなっていた。知り合いの人が以前左官の経験があったので、その左官の仕事を見つけてくれ、3月から働くことになった。仕事を始めて1ヵ月ぐらい経った頃、作事中に3mの高さから転落し、左足を骨折した。骨折をして働けない間は、家探しをしていた。そして、家が見つかり、骨折が治ると、再度左官として働いた。

父の震災生活2 ～ 日常 ～

父の家族は3人兄弟で、震災が起こるまで兄弟3人は近所で住んでいたが、震災後は離れてしまい、今は遠くに住んでいる。

父は、近くの小学校・中学校に行き、自衛隊の炊き出しをもらいに行くことや、全壊の家で生活しないといけないので、雨漏りがないようにブルーシートを屋根に被せて防ぐなど、仕事でいない母の代わりに家事のことをしていた。震災から3日後、電気が復旧した。そのおかげで家に暮らすことができた。

岡山県から神戸へ

震災から約14日後、叔父と祖母と私と弟は岡山県から兵庫県の長田区に帰ってきた。祖母は病気のため岡山県内の病院に入院し、叔父は垂水養護学校へ避難生活をするようになった。私と弟は、母の勤めている病院の近くの保育所で母の仕事が終わるまで待っているという生活が続いた。

入浴などは、三木に住んでいる父の友達の家まで車で行って、お風呂を借りている状態が続いた。その後、自衛隊のお風呂が長田区に来るようになり、二日おきに利用するようになった。自衛隊のお風呂は、裸電球の明かりだけだったので薄暗い状態だった。

仮設住宅

家が全壊なので仮設住宅の申し込みをしたのだが、当たらない状態だった。家を取り壊される順番が回ってきたのだが、まだ仮設住宅に移動することができず、その家に住んでいたのも取り壊すのは先送りにしてもらった。周りの人も一緒に引っ越す家を探してくれた。家族は、毎日の生活が必死だった。

次男の誕生

3月頃から、母は4月に次男を生むので仕事は休み、産休に入った。家も必要なので、垂水区の不動産屋に毎日通っていた。そして、次男が生まれる少し前に今の垂水区の家を知り合いが見つけてくれた。その垂水区の家を下見した後、次男が生まれた1ヶ月後の5月に引っ越しをした。

次男は、本当は長田区のある病院で産む予定だったのだが、その病院が倒壊してなくなったので、他の病院で出産した。

長田区の家から垂水区の家へ

垂水区の家引っ越しまで、長田区の家はガスと水道がつかえない状態だった。なので、お湯を使うときは、水を汲みに行き、ストーブで沸かしていた。垂水区内でも所々被害があった。引っ越した家でも、窓の形が変形していて開くことができず、扉も変形していたので両方とも取り替えた。忙しい生活は続いていたが、新しい家に住むことができたので、家族は精神的には落ち着くことができた。

今の（垂水区の）家を賃貸で借りたが、売家だったので期限が2年と言われ、入居半年で購入することにした。

感想

改めて震災の生活のことを聞くと、知らなかったことがたくさんあった。震災生活の話を聞いて、今の自分がいるのは、家族やその周りの人の助けがあって生きているのだということがよくわかった。周りの人たちにとても感謝したい。人は助け合いながら目の前にある困難を乗り越えていくことを改めて気付いた。

私は、震災の頃の記憶は全くないけれども知ることはできるので、これからも震災生活のことや、その当時の看護師の仕事などについてなど、さまざまな話を家族や周りの人に聞いてきたい。

そして、聞くだけでなくその話を聞いて、これからはどう生活をしていきたいかや、自分の気持ちをしっかり考えて、持ち続けていきたい。そして、その気持ちを震災を知らない人たちに伝えていきたい。

震災体験記

井上 晃希

当時

1995年1月17日午前5時46分。

高齢化の進む大都市をM7.2の巨大地震が襲った。想像をこえる揺れ、被害に人々は混乱した。

阪神・淡路大震災が起こったとき、僕たち家族は神戸市北区に住んでいた。北区は被害が少なかったみたいである。北区とゆっても長田区の境目のあたりに住んでいた。震災当時は、まだ2歳だった僕は地震のゆれにも気付かずに寝ていた。だから震災についての記憶はない。僕には2つ歳の離れた兄がいる。兄もまだ小さかったのであまり記憶はないそうだがすごい揺れで停電して暗かったことぐらいの記憶はあるそうだ。

当時、公団住宅の1階に住んでいたのだが、ものすごい揺れだったそうである。母は経験したこともないようなものすごい揺れで、すぐに目を覚ましたそうだ。最初は何が起きたのかわからず、地震だとは気づかなかったそうだ。すぐにぼくたち子供に服を着させて荷造りをし、いつでも避難できるようにしていたそうである。余震が続いている間は、とても怖かったそうだ。

地震で直接大きな被害はなかったが家のなかには、食器棚から食器が落ちたり家の中のものが落ちたりしたそうだ。地震発生後すぐ電気、ガス、水道などのライフラインはストップしたのである。でも、公団には屋上に貯水タンクがあるので地震発生後少しは水がでたそうだ。しかし、その貯水タンクの水もすぐになくなり、大変困ったそうだ。その時は気付かなかったが、水の出る間に水を確保しておけばよかったと思ったそうである。食べ物は母がいっぱい買いだめをしていたのでほとんど困らなかったそうである。

やはりライフラインが途切れたことがとても不自由だったそうだ。僕の父はアウトドアが好きなのでアウトドア用品の「ランタン」や「コンロ」が家にはあって、ライフラインの途切れた生活の中では、大変役にたったそうだ。

でも水がでないのは、どうしてもなく水がなければ料理も作れない、水を飲むこともできない、お風呂にも入れない、トイレも流せない、汚れたものを洗えない。水の大切さをほんと痛いぐらい感じたそうだ。

父

父は地震発生時にはすでに仕事に行っていたのである。当時の父の仕事はクレーン車の運転手だった。その日は今のHAT神戸のあたりの工場仕事だったらしく、到着したぐらいに地震が起きたそうだ。数十秒の揺れで工場は潰れ、全く何が起きたのか理解できなかったそうだ。

工場は潰れてしまい、そんな非常事態ではもちろん仕事も中止で、その場にいた人たちはみんな家族や親せきの安否を確認するために、帰っていったそうだ。

当時は、携帯電話はあったものの珍しい物で、もっている人はとても少なく直接会いに行く以外に安否確認をする方法はなかった。

父も急いで家に戻ろうとしたのだ。三宮、生田川付近に住む近親戚の安否が気になったので、そっちに先によって安否確認をしたそうだ。車で仕事に行っていたので親戚の家に寄れたらしい。

親戚の家は地震の揺れで傾いてしまい、ドアがあかなかったそう。父はその家に住む親戚のおじいちゃんを、窓から助けて安全な外に連れ出した。

早朝だったのと、地震発生直後とゆうことで家に戻るまでの道はそんなに込んでなかったそうである。車で帰宅途中に見た光景は今でも忘れられないそう。家やビルは倒壊し、いたるところで火や煙がたちこめて、消防士の人たちも水がでなければ火災には立ち向かえず、どうしようもできない状況だったそう。消火活動ができないから消防士がガソリンスタンドの前などで待機している姿を見たそう。

父は助けを求められたそうだが、全くなにもしてやれなかったそう。それに、そんな状況の中では自分のことや家族のことで精いっぱいだったそう。非常事態のなかでは、誰もが人のことを気にかける余裕なんてなくなってしまふのだ。

帰り道、料金所を通るときに日常のように料金所の人は仕事をしていた。何が起きているのか全くわかってなかったんだろうと思う。父は、そこで長田などの下のほうが、ものすごい被害でどういう状況なのかを教えた。同じ神戸市でも少し離れば、被害の差が激しいことを改めて思った。

帰り道みた光景で、コンビニなどに人が群がっていたそう。みんな今後の食糧や日常必需品を求めて殺到したのだと思う。そのあとコンビニに入っても何も残ってなかった。父はその時は、帰ることで頭がいっぱいで、食糧や水を確保することまで頭が回らなかったそうである。なんとか家に帰ることができ家族の無事を確認できたときには、こころの底から安心したそう。

そこからは、近所の知り合いや自分の友人などの安否が気になったので安否確認をした。幸にも大きな被害にあった人のいなかったという。

その後

被災後の生活はとても不便で大変だったそう。ライフラインは直後に止まってしまい、今後の生活がとても心配だった。比較的被害は少なくてすんだので、避難所にいたりするようなことはなかった。

水がとまっていたので給水車がくるころまで、ポリタンクをもって並びにいったそう。列は長く1月ということもあって、手はかじかみ、息は白くなるほどの寒さは、とても辛かった。

水は節水しないといけないので、ご飯を食べる時は食器にラップをまいてたべた。そうすることで、食べ終わればラップをとってしまえば、お皿は汚れず洗わなくてすむ。

ライフラインの復旧には、時間はそんなにかからなかったので日常生活をとりもどすのにそんなに長い時間はかからなかった。

親戚の住んでいたところは、水道がつながるまで時間がかかったので、家に呼んでお風呂に入らせてあげたそう。当時住んでいたところが被害も少なくて幸いだと思った。父はクレーン車の運転手だったので地震後は瓦礫の除去や壊れた家、ビルの修理など仕事に追われた。仕事は毎日毎日とても忙しく寝るひまもなかったそう。

こんな時は、家族と一緒にいたかったがどうしても仕事にいけないといけなかったのが、申し訳なく思ったそう。

家に帰れないぐらい忙しい時期は震災後1ヶ月間ぐらいだったそう。

復旧には10年かかるだろう！とみんな言っていたそう。それだけすさまじい被害の災害だったのである。

クレーン運転手という職業柄、まちの復旧にはとても携わってきているのだ。

区画整理などがあって町並みは震災前とは大きく変わってしまった。だから何年で震災前の町並みまで戻ったかは、はっきり分らないそうだ。しかし被害がとても大きかったので何年も何年もかかったのは間違いない。

避難生活

祖父は中央区の一軒家に住んでいた。家が半壊してしまったため避難所に避難したそうだ。避難所は被災者で溢れかえり、とても混乱したような状態だったそうだ。真冬ということもあって、とても屋外で生活できるような時期ではなかった。

避難所には、子供から老人までいろんな人たちが集まり生活をしている。自分の空間なんてものではないし、まわりの人たちにも気を使うのでとても疲れる生活だそうだ。そのうえ今後のことも考えていけないといけないし、当時は心身ともに疲れてそうだ。

避難所にはたくさんのボランティアが来ていてとても助かったそうだ。そのとき本当にボランティアの暖かさを感じたそうだ。

やっぱりトイレの問題が一番おおきかったみたいだ。水が流れずトイレが日常通りできないのがとても辛かったそうだ。避難所には、たくさんの被災者がいてトイレが追いつかない状態だった。

そんな誰もしたくないトイレ掃除などをやってくれたのもボランティアだった。感謝したらしい。

避難所はあくまでも一時的の生活場所と割り切って我慢したそうだ。そうしないとしんどかったらしい。

環境防災科

この震災体験記を書いて思ったことは、今まで授業でたくさんの外部講師に来ていたただいて、いろんな方の阪神・淡路大震災の話をきいたが、しかし自分の家族にこんなに詳しく震災のことを聞いたのは初めてだった。3年間この環境防災科で震災のことを学んできたのに自分の家族の震災についての話をしなかったことに気づいた。

僕が環境防災科に入ったのは、普通の学校では、体験できない授業をやってみたかったからだ。実際入ってみて特殊な授業が多くとても充実している。

震災を体験した外部講師の方の話(消防、警察、自衛隊、電気、ガス、水道関係の人たち)、小学生に防災教育を行ったり、一緒にハザードマップ作りをしたりする。

災害に立ち向かう消防の仕事を経験するために泊り込みで消防学校にいった訓練したりもする。

その他には学校で心肺蘇生法、AEDの使い方やケガの手当て方法を学んで自分たち一人ひとりが、地域の防災リーダー、生き残るためのサバイバーとしての知識、技術を学んでいる。

自分たちが学んできた防災をいかにして、身近な知人やまわりの人に広げていくかが、今後やっていけないといけないことだと思う。

3年間防災教育を学んできて自分たち防災リーダーになっていけないといけないのだ。

備え

阪神・淡路大震災を経験し多種多様の被害がでた。考え方を変えれば多種多様の種類の対策がみえてきたのだ。震災の経験をいかして備えていく必要がある。身近にできることもあれば、すぐにはできないこともあるだろう。すぐにはできない家などの建物の耐震工事やすぐにできる家具の固定や避難経路の設定、持ち出し袋の確保、いろんなことがある。

多面的に物事をみて、阪神・淡路大震災の経験を最大に生かしていく必要があるのだ。

語り継ぐ

この『語り継ぐ』を書いて震災の被害、どんな経験をしたのかということを絶対に風化させていってはならないと思った。この震災は世界で始めて高齢化の進む大都市を大地震がおそった。その経験が無駄にするのか、しないのかは僕たちにかかっていると思う。

この震災はたくさんの被害をだし、たくさんの人たちの命を奪い、生活を奪った。この経験をこれからの生活、社会にいかしていかないと本当に無駄になっていくと思う。

絶対に無駄にしないためにも、『語り継ぐ』ことが大切だと思った。親から子へ、そしてその子が親になったときにまた親から子へこれも震災を風化させないりっぱな『語り継ぎ』だと僕は思う。これから自分たちが学んできた防災を広めていきたいし、震災のことも伝えていきたいと思う。とくに震災から15年たった今では、震災を経験していない子供たちも増えてきている。そんな子供たちには、特に伝えていって、知ってもらいたいと思う。

自分たちですら経験したといえ記憶の中にはほとんど残っていないので経験したとは言えないぐらいなのだ。環境防災科がなぜ発足されたのかを考え原点に戻ってもう一度震災について考えていきたいとおもう。

そしてこれからのために、防災、減災を広めていきたいと思う。

震災体験

井上 夏喜

1) 自分の震災体験

阪神・淡路大震災が起こった時、僕は大阪府の梅田に住んでいた。

場所が大阪であるため被害がほとんどなく、当時の年は2歳ほど、そのため記憶もほとんど残っていない。わずかに残っている記憶も実際に見たものではなく、震災時に見ていた夢であり、現実のものではない。でもなぜか、その夢が「地震の夢」であることに気付いていた。幼かったための刷り込みかもしれないが、どこことなく不思議な感覚だった。

その後、一度東京へ引っ越したため、1月になっても神戸の震災のことに触れる機会はなくなったので阪神・淡路大震災のことをすっかり忘れてしまった。「地震の夢」のことも覚えていたのかはわからない。

2, 3年の月日が流れ、小学校1年生の夏休み。親の都合により神戸に引っ越すことになった。その翌年の1月頃。震災学習という授業で初めて阪神・淡路大震災のことを知った。

最初は何のことかわからなかったが、その授業の宿題として、両親に当時の話を聞いてくれるものがあつた。両親の話を聞きながら、なぜか自分は「地震の夢」のことを思い出した。「地震の夢」と大層なことを言っているが、地震には何の関係もない夢である。だが自分は「地震の夢」は震災当時に見たものだ と確信した。

2) 両親との記憶

両親から聞いた阪神・淡路大震災当時の記憶。当時は大阪の祖父と祖母の家に家族7人で暮らしていた。祖父・祖母・父・母・姉・兄・自分といった構成だ。

家は3階建てで、1階は当時、建築関係の仕事をしていた祖父の仕事スペースにもなっているガレージで、基本的に家族全員2階にすることが多かった。

自分はおじいちゃん子であつたそうで、当時はよくガレージに行つては、仕事をしている祖父を邪魔しないようにじっと見ていたようだ。

だが、自分はその記憶すら残っていない。

地震当日。大阪にまで地震の揺れは到着した。揺れの程度は寝ている人の目を覚ますくらいはあつたそうで、自分以外の家族は全員目を覚ましたようだ。

自分だけがぐっすり寝ていた。このときに「地震の夢」を見ていた。夢の中ではちゃんと目を覚ましていたのに、両親は寝ていたと言っている。やはり寝ていたのだろう。

揺れは大阪まで来たものの、寝ている人の目を覚ます止まりで、被害はほとんどでなかったらしい。家が崩れたとか、物が壊れたとか、ライフラインが一切使えなくなったとかはなにひとつ聞いていない。

ただ1つあつた被害といえば被害と言えるもの。それはテレビが少し前にずれていたことだつた。

書くほどでもないことだがなぜ書いたのかというと、もしもあと5cm手前にずれていたら祖母の顔にちょうど箱型のテレビが落ちていたらしい。それを聞いた時おもわずゾツとした。地震は恐ろしいものなのだとちょっとは思ったかもしれない。

当時の話はここまでしか聞いていない。今聞いてもこれ以上膨らむことはなかった。被害がほぼ0といつていいほどのため、他に言うことがなかっただけなのだろうか。

それ以外にこれといった話は聞いていない。親戚はだれも神戸にはおらず、神戸に一番近くて、自分たちのいた場所だ。両親も神戸にボランティアをしに行つたなどとも言っていないし、支援物資を送つたとも言っていない。支援物資を集めた覚えもない。

おそらく、震災の記憶はそれだけだつたのだろう。

3) 友達の記事

自分に残っている震災の記事は先ほど書いたものだけで、それ以外に思い出せることも書けることもない。

だから、知り合い何人かに当時のことを覚えているかどうかのメールを送った。

全員、震災当時は2歳か1歳であり、覚えていないのだろうか、それとも単に面倒くさかっただけなのだろうか、10人ほどに送った結果、その当時の記事を覚えていたのは2人だけだった。

他人の記事に深入りするのにも良くないし、思い出したくない可能性も0ではないため、必要以上に聞くことはなかった。いや、聞けなかった。

返事の来た2人にはいろいろと震災当時の話を聞くことにして、その聞いた話を次に書いた。

3-1) Aさんの話

Aさんは震災当時のことを結構覚えていた。すべて書くと長くなるので震災時の当日のことだけを聞くことにした。

Aさんは、震災当時、神戸の長田に住んでいた。長田は震災時、もっとも火災がひどかったといわれる地域だ。

実際に見たことはないが、震災の過去を振り返る授業で何度も長田から火の手が上がっている映像を見たため、火災の酷さはだいたい思い浮かべることができる。

長田の火事は火の手だけではなく、周りの家や道路が見えなくなるほど煙のひどかったそう。

Aさんの家は2階建てで、当時Aさんは母親や兄と一緒に2階で寝ていたそう。

地震はいきなり襲ってきた。Aさんは突然の揺れに飛び上るように起きた記憶があり、考える間もなくすぐさま隣で寝ていた母親にしがみついたそう。そのあとに兄も母親にしがみついて、母親の動きを奪った。

「落ち着いて」母親はそう言ってAさんと兄を覆うように守った。肩や背中をやさしくなでてひとまず落ち着かせたようだ。Aさんと兄は母親の力で落ち着いた。

その後、1階へ降りて父親と合流した。3人を見るや「大丈夫か」などと叫んだ。家族全員で体を寄せ部屋の隅にて揺れが収まるのを待っていた。

しばらくして揺れる感覚がなくなると家は酷く荒らされていた。至る所にガラスの破片がありAさんと兄は両親に「じっとしていなさい」と言われたので、そのまま隅にじっとしていた。母親と父親はそれぞれ別々に何かをし始め、姿を消した。

しばらくして、母親が2人の靴を持ってきたので、その靴を履いてはまたじっとして待っていた。家の中で靴を履くのは不思議な感覚だったそう。

Aさんが言うには今では考えられないそう。

両親が何をしていたのかはあまり定かではないが、おそらく避難する準備をしていたのだろう。母親からかばんを預かった記憶がある。中に何が入っていたかも定かではないが、おそらく衣類が入っていたのだと思う。

じっと待っていると、だんだん外のほうが騒がしくなってきた。

ラジオの音なのか、サイレンの音なのか、悲鳴なのか今では分からないがとにかくざわついていたらしい。

父親がAさんたちを見つけると「準備できたか？」と問いかけてきた。どう返事をしたか分からないが、すぐに車に連れられていつも通りの席に座らされた。いつもより乱暴な気もしたけどいつもどおりのような気がした。

車に乗るとすぐに車が発進したように感じた。いつもとは違っていた。

兄が「何があったの」と尋ねた。

どんな返事が返ってきたのかは正確に覚えてないが「地震」というフレーズはあったそう
で、おそらく「地震が起きた。大変だ」と返ってきたと思う。

Aさんが住んでいた場所は、長田の中でもまわりにものはあまりないところだったらしく、
被害がすぐに大きくなることはなかった。それに煙もすぐには届いてなかったため、道路も
車が十分走れるくらい見え、人も騒がしかったのにもかかわらずあまりいなかったため、な
んとか車で祖父と祖母の住む明石まで逃げる選択ができたそう。

Aさんは、車の中でずっと兄と一緒にうずくまっていたため町は見えていない。そのため先
ほど書いたことは親から聞いたことらしい。だけど街の様子を覚えているような感覚も記憶
には残っているそう。

車で走り抜けている間も全く動かずうずくまっていた。余震というものも何度かあった覚
えがある。だがそれは本当に余震なのかそれとも地震によってボロボロに崩れた道を通っ
ているために揺れていたのか分からなかった。本当に余震だったとしたら余震の数は多かっ
ただろう。そのたびにAさんは車の中にあったものをグッと握っていたそう。おそらく兄の
腕だった気がするが親はドアの手すりを握っていたと言っているそう。

最初は順調に車を走らせていたが、長田から明石までの距離はいつもより長く感じた。A
さんだけでなく兄も両親もそう感じていたそう。長田から明石までの道のりは思っていた
よりも簡単ではなかった。

震災の影響で高速道路が横転して道はふさがっている。当然ながら通ることができなかつ
た。また信号も機能を停止していた。我先に行く人たちで混乱状態の交差点。クラクション
の音が響いていた。

おそらくAさんはこの辺であの有名なバスをみたそう。高速道路から半分はみ出したバ
ス。本人ももしかしたら刷り込みかもしれないと言っていたから本当かどうか分からない
が、その光景を見てAさんは今にもバスが落ちそうで怖かったらしい。

「この道は無理だ。」

そんな言葉を父親が言ったかもしれない。先ほどの交差点の近くで止まっていたAさんの
車が動き出した。方向感覚は車が動き出した時の揺れでバラバラになった。

町はボロボロだった。違う世界に迷い込んだかのような感覚だった。それに子供のころの記憶で
あるため、いろんな記憶が入り混じって、実際見ていたものより被害が大きく感じていただ
ろう。

本人も実際の映像と記憶の映像を比べるとどこか違う点があるそう。

いつもの道は通ることはできない。ならどうすれば良いか、父親が出した結果は山側の道
から遠回りして行くことだった。

父親はなるべく被害の少ない道を選んでいたのであるだろうか、何度も左折や右折を繰り返して
いた記憶がある。

人の声もたくさん聞いた。「助けて」とか「だれか」とか。その声が怖くてAさんは泣い
てしまったようだ。母親もAさんをなだめたが、無理だったらしくついにはAさんの兄もつ
られて泣きだしてしまっただろう。車の中は外の音を掻き消すくらいうるさくなった。

ずっと泣いていた。でも、親が言うにはいつの間にか兄と一緒に泣き疲れていたそう。
目を覚ました頃にはすでに祖父と祖母のいる明石に到着していて、布団の中で眠っていた
そう。

祖父と祖母の家は地震の影響をあまり受けていなかった。家具が多少荒れていた程度で外
見に損傷は見えなかったそう。生活していく上での損傷はなかったそうで、食事もちゃん
ととった記憶があるそう。

そのおかげもあるがAさんは避難所へは行かず、祖父と祖母の家で災害時は過ごしたとい
う。

水道やガス、電気の損傷は分からないがおそらくなかったのだろう。さっきまでのいつも
と違うことが嘘のようだった。

祖父と祖母はなんども心配してくれた。そのたびに「大丈夫だよ」と返事をしていた。いつも以上に心配されることと家が祖父と祖母の家であること以外はいつも通りの生活を送った。

テレビのニュースは震災のことばかり流れていたのを覚えている。同じ場所にいるはずなのに被害の差が激しく驚いた覚えもある。違う場所のことだろうと思ったりもした。最終的にはそんなことは気にもせず、兄や祖母と遊んでいたそう。

父親はよくどこかへ行っていた。家の様子や町の様子を見に行っていたそう。

震災が発生してからどれくらい間かは分からないが、長い間、祖父と祖母の家に泊まった。あれほど長く留まったのはあの時が初めてだったという。

ここから先の話は聞かなかった。

Aさんは今も元気である。

3-2) B くんの話

B くんは震災時、神戸に住んでいたことは確かだが、神戸のどこに住んでいたかは分からない。神戸のどこかに住んでいたが、やはり当時は 2 歳であったため、B くんは震災に強い印象はなく、震災体験のことは覚えていないそうで、ほとんど母親から聞いたことしか頭に残っていないそう。

避難所生活の様子や自分の住んでいた場所の状況、当時自分は何をしていたのかなどの一切の情報は親からも聞いていない。その上自分の目にも映っていないので、かすかにも思い出せない。

先ほども書いたように、地震の経験はほとんどもしくは全部が母親から聞いたものである。その母親が言うには「あれほど大きな揺れは初めてだったので最初は地震ではなくもっと別のものだと思った。たとえば、近くに爆弾が落ちてきたとか、謎の飛行物体が墜落したとか、とにかく地震という発想は思いつかなかった」そう。

震災時、神戸に住んでいた B くん。母親の頭が混乱するほど非常に大きな揺れがあったとき何をしていたのかというと、自分と同じでずっと寝ていたようだ。

地震があったことにすら当時は気づいてなかったらしく、いきなり避難所生活に移った時は驚いていたようだ。

でも、避難所には友達が何人かいたらしく、生活空間が変わったことなどはあまり気にならず、避難所生活を過ごしたそう。

話を戻して、B くんはどう助かったのか。

B くんは自分と同じく震災時寝ていたようだが場所が大きく違う。自分は被害のほぼない大阪、B くんは被害の大きい神戸だ。当然ながら家に被害があった。

その被害とは、B くんの布団の上にタンスが倒れてきたことだ。それも当時は B くんの 2 倍以上はあるタンスだ。

布団はタンスに押しつぶされた。その時、タンスに何が入っていたのか分からないが相当な重量があっただろう。だが、不思議なことに B くんは一切の怪我はない。怪我どころかその後も B くんはぐっすり寝ていたそう。

この不思議な現象の答えは簡単で、B くんは違う場所で寝ていたからだ。

当時、B くんは相当寝相が悪かったらしく、寝ぼけて別の場所で寝ていたそう。

親は子の姿を見て、2 度驚いたことだろう。

B 君は今も元気である。

震災体験

岩上 亜希

私の家族の震災体験

阪神・淡路大震災が発生したとき、私は二歳で、神戸市の垂水区内に住んでいた。家は二階建ての一軒家で、父、母、兄、犬、猫、そして私という家族構成だった。私たち家族4人は全員同じ部屋で寝ていて、兄と私が二段ベッド、その横のベッドで父と母が寝ていた。かすかな記憶がいくつかあるがこれはおそらく、後から誰かに聞いた話を自分の記憶だと思っているだけであって、実際には何も覚えていないであろう。

地震が起きる直前、ドーンと言う地鳴りで父は目が覚めたようだ。家のすぐ近くに工事に使用するトラックなどが止まっている倉庫があり、そこに大きなダンプカーが向かっているのだろうと思ったらしい。すると突然家が大きく下から突き上げられた。母もこの揺れに驚いて起き、慌てて二段ベッドで寝ていた私と兄を自分たちの布団に連れ込んだ。父と母が寝ていた場所の枕もとには大きな箆箆があったが幸運にも倒れることはなかった。それどころか、一階の台所にあったお皿一枚すら割れずに小さな棚が少し動いただけであった。家の外で飼っていた犬、猫も無事だった。我が家自体には、ガスが止まってしまったこと以外特にめだった被害はなかったようだ。

揺れがおさまり少し落ち着いたところで私は父に無理やり起こされた。私は一度寝るとなかなか起きないタイプで、父に起こされるまで地震にも全く気付かずに寝続けていたようだ。

朝の9時頃になると、焦げくさい臭いととも空から真っ黒な灰が落ちてきた。臭いがすごかったため近隣の家かと思ひ心配になり外に出てみたりした。電気は使えたため、テレビのニュースで現状を確認してみた。すると、長田の町で大火災が起こっていること、三宮・灘・東灘の方の被害がすごいことを知った。

当時、母方の祖父母が灘に住んでいたためとても心配になった。安否が気になり連絡をとろうとしたが、やはり電話はつながらぬ。祖父母が住んでいた家が倒壊し、二人とも下敷きになっているのではと思ひすぐに行くことを決めたようだ。

道が陥没したり、高速が倒れていたり、信号が止まっていたりするため車では時間がかかり行けぬだろうという考えと、もし、本当に大きなけがをしている場合、小さな私たちを連れていけると余計に手間がかかってしまうだろうという考えの結果、父が一人でバイクで行くことになった。高速が倒壊しており、ほかに道がなかったため山麓バイパスを通っていった。街灯は全部消え、ほかに通る車は一台もなく、料金所にすら人がいない状態でとにかく真っ暗だった。新神戸駅でバイパスからおりると、いたる所でアスファルトが捲れ、地面が陥没し、電線が切れていた。また、あちらこちらで火災が発生し、何箇所か赤黒く染まっていた。

バイパスを降りてから祖父母の家に向かう間にも、たくさんの倒壊した家と火災現場を目撃したらしい。父は無事に祖父母の家があった場所に着いたが、祖父母はおらず、家が全壊していた。近隣の人から避難所に行ったことを聞いたため、父は会うことをあきらめて旧神明道路を通り帰宅した。その途中、西代の体育館の前の道路が大きく陥没しており、また多くの火災現場をみながら帰ってきたようだ。家に着くと渡すことのできなかったおにぎりがとても冷たくなっていた。

父方の祖父は私の家から歩いて10分くらいの場所に住んでおり、すぐに行くことができ

た。祖父自身には怪我などはなかったが、家の屋根瓦が落ちて何枚かおさらが割れた。祖父も父と同様、地震の前の地鳴りで目が覚めたらしい。大きな揺れに驚きながらも、祖母とともに揺れがおさまるのをまった。余震がある中、二人でお皿などを片付け、後日、屋根瓦を直したらしい。

加古川に住んでいた叔父の家では、飼っていた熱帯魚の水槽がひっくり返し、床が水浸しになりそこら中で魚がぴちぴちしていたそうだ。そのほかには特に大きな被害はなかった。

私たちの家族は震災のせいでガスが止まっているため、二、三日はカセットコンロを使ってご飯を作った。近所のいつも行っているスーパーマーケットは震災による被害で当分店を閉めていた。そのため、父が仕事帰りに明石から即席で食べられるものを買ってきてくれてみんなでそれを食べた。また、ガスが止まって一番困ったのはお風呂だそうだ。少し離れた所に住む知り合いのプロパンガスのお風呂の家や姫路の銭湯にかよってお風呂に入りに行った。また、自宅のお風呂を電気サーモンで沸かしたりしてお風呂に入っていたこともあるそうだ。

地震がおきてから三日たつ二十日になると、父は仕事に行くようになった。水道設備の仕事をしているため同業者は壊れた水道管を直すためにあちらこちらへ走り回っていた。しかし、父は当時作業していた現場が明石だったため、あまり復旧には携わらなかったようだ。また、同じ職場の仕事仲間のほとんどが大阪側から来る人だったが、震災により道路が通れる状態でなかったため、なかなか人数が集まらず作業が中止になることがたびたびあった。

祖母の被災生活

私の祖母はお米屋さんを営んでいたわけではないのだが、1階がお米屋さんの店舗、2階が住まいという店舗併用型の木造家に祖父と二人で暮らしていた。祖母は普段から早起きのため、震災が発生した時はすでに起きており、祖父の朝食を作るため台所にいた。すると突然大きなごーっという音とともに家が大きく揺れた。祖父もその揺れで目がさめ祖母に向かって「大丈夫かー！」と叫んだそうだ。そして祖母は気がつくや食器棚や屋根がわらの下敷きになっていた。一瞬の出来事だった為、何が起きたのか全く理解できなかったらしい。とにかく今までに聞いたことのないような大きな音が自分の周りで鳴っていることだけが分かり、すごい恐怖感を感じたそうだ。そして、体中が痛くて重たかった。祖父のことが気になったが身動きができない。真っ暗で苦しくて、実際には20分ほどしかたっていないが何時間もそこにいたような気がして、このまま死ぬかもしれないと思ったそうだ。しばらくすると祖父と隣に住んでいたおじさんの祖母の名前を呼ぶ声が聞こえ、返事をするや祖母の上に乗っかっていた大きな食器棚がゴロンとどけられた。真っ暗なところから出られたことや顔馴染みの人に会えたことによる安心感と、家がつぶれてしまったことやこれからどうすればいいのかわからないことによる不安感で自然と涙があふれてきたそうだ。祖父は隣の家のおじさんに助けられたそうだ。

祖母たちが暮らしていた家は全壊した。もし、店舗併用型ではない家に住んでおり、朝食を作りかけていた祖母がいた台所が一階にあったなら、確実に祖母は助からなかっただろうと話してくれた。また、家が全壊した割に二人共が切り傷や打撲などの軽傷で済んだことも本当に奇跡だと言っていた。実際に、灘は被害が大きかった地域の一つであり、祖母の友達や家が近かった顔なじみの人などの多くの知り合いの方が地震によって亡くなってしまったそうだ。

祖父母は被災してがれきの山となった我が家から見えそうな服や雑貨をできるだけ多く

取り近所の小学校に避難しにいった。できるだけといってもほとんどなにもなかったそうだ。避難所になっている小学校までの道のりは普段なら片道15分で行くのだが、このときは倍以上かかったそうだ。行く途中に何人かの友人に会い、お互い無事だと分かればそのたび泣いて喜んだ。また、生き埋めになり家族を失ってしまった人を見かけたら一緒に泣いた。祖母は避難所につくまでの間ほとんど泣き続けていたそうだ。

避難所になっている小学校につくとすでに多くの人が避難してきていて、ごったがえしの状態だった。だれがどこにいるのかも、何人いるのかも、どうすればいいのかわからなかった。ただ何十人分もの鳴き声とおそらく学校の職員であろう人に対して避難民がどなっている声が聞こえたらしい。

小学校の体育館もグラウンドも人がいっぱいだったため、祖父母は近隣の公園へと移動した。公園にもすでにたくさんの人がいた。たまたまその公園には祖父の友人の奥さんが一人でいたそうだ。薄手の上着を着ていた祖母でさえとても寒かったのに、その人はパジャマ1枚で公園に泣き崩れていた。祖父が友人の安否を尋ねると、家の下敷きになってしまい、近所の人で助け出したが助からなかったということだった。

一日目の食料は何もなかった。避難所ではない公園にいたこともそうってしまった原因だろうねと祖母は笑いながら話してくれた。実際には本当に寒くて、おなかがすいて、街灯がないため真っ暗で、今後どうなるのかという恐怖と不安でいっぱいだった。でも、祖母は祖父が生きていてくれるし、家を失っただけ。もっと辛い人がいると思い明るくふるまっていたそうだ。

地震が起きて一日たつと祖母は私たちに安全だと連絡していないことに気が付いた。それまでは気が張っていてそんなところまで頭が回らなかったそうだ。公衆電話があるところに行くと何十人もの人が並んでいた。お金を持っていないがとりあえず並んでみた。すると、一緒に並んでいた全く知らないおじさんに大変ですと話しかけられたそうだ。何時間か待っている間に親しくなりお金を持っていないことに気がつくやうに快く小銭を渡してくれた。普段は人に借りを作るのがあまり好きでない祖母だがこのときはこの好意に甘えるしかなかったそうだ。そして、人の温かさ、優しさを改めて感じたと言っていた。

祖母は私たちと祖父の姉に電話をかけた。すると姉に私の家に来なさいと言われたそうだ。このまま公園にいても仕方がないし、悲しみに浸るよりなにより今後のことを考えなくてはと思った祖母はすぐに姉の家に行くことを決めた。姉の旦那さんが何時間もかけて車で迎えに来てくれた。壊れてしまった家の跡地に姉の家の電話番号を書いた紙をおいて祖父とともに姉の家に行ったそうだ。家に行くと姉は暖かいご飯を作ってくれていたらしく、すごく感謝しながらいただいたと言っていた。震災が起きてから二日たつて祖母は初めて寝れたそうだ。

いつまでもこのままではいけないと、祖父母は震災前に営んでいた自電車屋さんを再開することを決めた。ほとんどが全壊していた灘に久しぶりに行くと少しずつではあるが家に戻ってきていた。そして、また灘に住むことを決めたそうだ。

現在は祖父は亡くなってしまいその経営していた自電車屋さんもなくなってしまったが、震災後、お店に以前からの友人がたくさん訪ねてきてくれてすごく励まされたそうだ。

叔父の体験

母方の叔父も災害が起きた時灘区に住んでいた。1歳になる前の子供と奥さんと一緒に寝ている時に突然大きく揺れたそうだ。マンションの8階に住んでいたため他よりも揺れが強かったのではないかと述べていた。リビングに置いてあった棚が丸ごと倒れ、飾ってあった写真がおちてガラスが割れて、電気もものすごく揺れていたそうだが、寝室には特に大きな家具がなかったため大丈夫だったようだ。

しかし、もともと怖がりな性格だった叔父の奥さんはこの震災体験のあと少しの間母乳が出なくなってしまったらしい。幸い粉ミルクがあったため子供にはそれをあげていたそうだが、しばらくの間まったくと言っていいほど出なかったそうだ。

家の中もかたづけ、しばらくして町が片付いてくると、だんだんなおってきたらしい。恐怖体験のあとにストレスなどで出なくなってしまうという話は聞いたことがあったが、本当に自分がそうなると思っていなかったためすごく驚いたと話していた。

震災に対する思い

私が環境防災科に入ったのはボランティア活動に興味があったからで、ほかの人のように防災や減災に興味があったわけではなかった。しかし、環境防災科に入ってから防災、減災の大切さに気付かされた。特にそう感じたのは1.17の追悼式に行かせていただいた時だった。それまではどこかで他人事、過去のことと思ってしまっていた震災に対して、実際に被災されたたくさんの方を目の前にすることで一気に他人事ではないという思いがした。また、今回の震災体験を書くにあたって父や祖母や叔父に話を聞くと、私が知らないだけで私の身内も震災によって辛く大変な思いをしていたことを改めて感じ、やはり他人事ではないなと思った。

おそらくこの学科に入っていなければ震災に対して何も知らないままただだろうし、親戚に震災体験を聞くきっかけもなかったと思う。これから、私が生きていく上で地震は必ず体験するだろう。だからこそ、これから生きていく阪神・淡路大震災を知らない子たちにはしっかり伝えないといけないと思うし、それが私たちの役目だと思う。

他人事ではない、過去のことではないということを心に置き、将来的な私の子供やその子供など次世代に語り継いでいきたいと思った。

残していきたい記憶

馬田 麻未

父はマレーシアへ出張に行っていたため、家には母と当時 8 歳だった姉と私の 3 人だった。私は 2 歳。震災の記憶は何も残っていない。そのため、主に母から聞いた。

1 父がいなかった 1 月 17 日

この日もいつもと変わらず、私は寝室にあるタンスの方向に頭を向け母と姉に挟まれて眠っていた。

地震が起こる前、それまで普通に寝ていた私が急に起き上がったと母は話す。まだ朝早いからと私を寝るように促そうとした瞬間、突然激しい揺れが始まった。母は私に布団を被せ抱きしめた。姉も守ろうと思い、私の隣で寝ている姉に近付こうとした。しかし、激しい揺れだったため動けず、姉のところまで行けなかったと言う。姉は強い揺れにも感じずに「もうやめて」という寝言を言っていたそうだ。きっと、誰かに強く揺さぶられている夢を見ていたのだろう。揺れがおさまってから外を見ると、住んでいる団地も周りの団地も崩れていなかった。母はそこで安心したと話す。

家の被害は玄関の靴箱が倒れただけで、食器が散乱したり食器棚やタンスが倒れたりすることなかった。もし、タンスやその上に置いてあった衣装ケースが落ちてきたら、きっと私は下敷きになっていてここにいなかっただろう。

ライフラインはすべて止まっていたため、とりあえず倒れた靴箱を片付け夜が明けるのをただ待ったと言う。そうしているうちに、地震から約 2 時間で早くも電気が復旧した。復旧してから暖をとるためにこたつをつけ、状況を知るためにテレビを見ていた。テレビでは、阪神高速が倒れている映像や長田の街が燃えている映像がしか流れなかったそうだ。

その日の昼ごはんは家にあった冷凍食品で済ませ、姉と私は家で留守番し、母は近くのスーパーに食べ物を買いに行った。しかし、地震後だったため何もなかった。買い物の帰りに公衆電話で母の実家に電話をして、お互いの無事を確認した。その日の晩ごはんはまた、冷凍食品で済ませた。

2 違う家で過ごした 4 日間

姉が余震で怖がるため、17 日の夜 7 時半頃に同じ団地に住んでいた伯父の所へ、姉と私の着替え・食べ物・飲み物・お金など最低限の物を持って避難しに行った。しかし、余震がおさまらずすごかったため、伯父の家族 3 人と私の家族 3 人で大阪府茨木市にある伯母の所へ避難しに行った。普段は高速で 40 分で行けるはずが約 3 時間もかかって、日付は変わり 18 日の夜中の 3 時頃に伯母の所に到着した。

茨木も揺れはあったが、神戸や西宮みたいに被害は大きくなかったため、食べ物・飲み物などはあった。18 日の朝、伯母の家の近くにスーパーがあったため、開くのと同時に買い物へ行き、カセットコンロ・ガスボンベ・日持ちする食べ物など大量に買った。大量に買う母を見て周りの人たちはびっくりしていたと言う。18 日の夜まで伯母の家で過ごし、18 日の夜の 10 時頃に伯母の家を出て、夜中の 1 時頃に西宮へ帰ってきた。そして、そのまま伯父の家に泊まり、19 日の朝に自宅へ帰った。

19 日の昼から父が帰ってくるまでの 21 日の夕方まで、同じ団地に住んでいた姉の友達の家で一緒に過ごした。姉は、友達の家泊まることができ喜んでいたのである。食べ物・飲み物などは姉の友達の父が会社でもらってきてくれていたため、困ることなく過ごすことができた。

3 父の話

地震が起こった17日、父はというと、1月12日～21日までマレーシアへ出張に行っていた。

17日、出張先の会社でミーティングをしている時に「日本で大きな地震が起こった」と知らされた。詳しく聞いてみると「神戸で起こった」と言われたため、一気に頭が真っ白になったと話す。その日は昼からホテルに帰り、自宅へ連絡を取ろうとしたが国際電話が繋がらず、連絡が取れなかった。自宅にはなかなか繋がらず夕方にやっと母の実家に繋がり、そこで私たち家族の無事を知った。

日本に帰りたくてもまだ仕事が残っていたため帰れず、21日にやっとマレーシアから帰国した。空港に着いたのはよかったのだが、交通がマヒしていた。そのため、関西国際空港から大阪まで出て、梅田から阪神電車に乗って帰ってきた。西へ向かうごとに家などを覆うブルーシートが増えてきて、驚いたそう。それとは半面、家族の無事は知っていたものの、やはりとても心配になったそう。家に着いてみると、家の周りの道路で液状化が起こっていたのを見て、そこで震災のすごさを思い知ったと話す。

4 完全に復旧するまで

21日に父がマレーシアから帰国した。姉の友達の家から帰り、それからは自宅で過ごした。震災を体験していない父は、ちょっとした余震でもびっくりしていたらしい。

どこのスーパーよりも、食料品がそろっている大型スーパーへ週に一回買い物に行った。いくら神戸よりも被害が少なかった西宮でも電気しか復旧しておらず、水道もガスも復旧していなかった。そのため、小学校や中学校に毎日給水車が来ていた。父と母は毎日、午後から小学校や中学校に水を汲みに行った。汲んだ水は、お風呂の浴槽とポリタンクの2つに分けて溜め、いつも水がいっぱい状况を作っていた。浴槽に溜めていた水はトイレや洗濯に使い、ポリタンクに溜めていた水は食器を洗うのに使った。お風呂は水曜と土曜の週に二回、尼崎の杭瀬にある銭湯に行っていた。そんな生活が2月まで続いた。

そして、2月末。やっと水道もガスも復旧した。西宮は復旧が早かった。全てのライフラインが復旧してからの生活は、震災が起こる前とあまり変わらず過ごせるようになった。

5 環境防災科に入って

私が環境防災科を選んだ理由は、消防士になりたいからというのが第一の理由だった。また、被害がすごかった震災が起こった兵庫県に住んでいるのに、震災のことについてあまり知らないというのは嫌だと思ったからだ。そのため、この環境防災科を選んで受験した。

1月17日が近付くと、自然と母と震災の話になる。そのとき母は必ず「あんた、地震起こる前、急にムクッと起きだしてんで。ほんまびっくりしたんやから。」と話す。嘘かと思うが、何の前触れもなく本当に急に起き上がったそう。あの時、私は何か察知したのだろうか。しかし、環境防災科に入るまでは、母がこういう震災の話をしてくれても、自分は震災なんか覚えてないし聞いても関係ないと軽く流していた。でも、環境防災科に入って、震災の勉強などしたときに、『母から震災の話をもっと聞くべきだ。知らないから関係ないと逃げていてはダメなんだ。』と思った。そのため、1月17日が近付いてきたら、母とよく震災の話をするようになった。

環境防災科に入って、消防学校に行ったり普段できないボランティア活動などいろんな体験をしてきた。しかし、たくさんあるボランティア活動の中でも、私は必ず地域の防災訓練に参加するようにしている。なぜかという、防災訓練はその地域のお年寄りや子供、消防士などいろんな人と話をする機会ができるからだ。

2年生のときに行った、多聞東地区の防災訓練が今まで行った中で一番印象的だった。こ

の防災訓練の時、最初から最後まで私と一緒にいて、震災体験を話してくれた人がいた。その人と話をするきっかけとなったのが、「防災訓練に来るのは初めてやから、何をするかわからへんし不安やから教えてくれへん？」と私に話かけてきてくれたのが始まりだった。私が防災訓練であることを詳しく話したあと、「聞いてもやっぱり不安やから一緒におるわ。」と言ってくれ私とそれから最後まで一緒にいた。

一緒にいるとき、自然と会話の流れで震災の話になった。私が「西宮で被災したんですよ。」と話したら、「西宮も大変だったんでしょ？あたしの友達も西宮にいたんだけど大変だったみたいでね…」とそこから震災体験を私に話してくれた。地域の人に震災体験を聞くのは滅多にないと思ったため、話してもらいすごく嬉しかった。

防災訓練が終わって最後に私の所まで来てくださって「高校生の子と震災の話をするってなんてないから、すごく楽しかった。ありがとうね。また見かけたら声掛けてね。」と言ってくれた。震災体験を聞かせてもらった私のほうがお礼を言わなければならないのに、話してくれていた人からお礼を言われて『聞くだけでもちょっとは役に立ったのかな？』と思って嬉しかった。

防災訓練の他にも、募金活動などのボランティアにも参加した。私は、2回だけと少ないが募金活動に参加した。その2回とも体験をさせてもらったと思う。募金活動を始める前は、きっと募金してくれる人は少ないだろうと思っていた。しかし実際募金活動をすると、募金してくれる人が多く千円も入れてくれる人がいたりして、正直驚いた。でも、「募金してくれるのが当たり前じゃなくて、募金しないのが当たり前」と先生に言われてから、すごく人の温かさを知った。

7. 最後に

この震災体験を母から聞いているとき「もうあんな体験したくないわ。」と母は何回か言った。西宮は神戸よりも被害が少なかったとはいえ、父が出張で海外にいたため余計怖かったんだろうなと私はこの話を聞いて思った。私は震災のことは記憶に残っていない。そのため、母が語ってくれたことの怖さやすごさなどあまりわからない。

私は将来、救急救命士になりたいと思っている。救急救命士は防災と深く関わっていると思う。人の命を助けるだけでなく、防災を広めていったり震災について伝えていったりする役でもあるのかとも思う。そこで、環境防災科3年間で学んだことを活かして伝えていきたい。震災当時2歳だった私が、自分の震災体験を語り継ぐことはとても難しいと思うが、せっかく環境防災科に入って震災やいろんな防災のことについて勉強してきたのだから、この母から聞いた震災体験も大切にし、何かちょっとでも語り継いでいき、震災を知らない世代の子供たちやいろんな人に震災を伝えて残していきたいと思っている。

環境防災科がつないだ記憶

大山 将史

僕は当時三重県に住んでいたのですが、記憶がない。しかし父が神戸に住んでいたのです、当時のことを語ってくれた。

1. 突然・・・

父は当時、神戸で大工をしていた。1月16日の夜は仕事から帰ってきて、「疲れていたし、次の日の仕事が朝早くにあったからすぐに寝た。」と言っていた。

17日、朝の5時に起きて用意をしていたときに地震にあった。ドドドドドという地響きのあと、強い揺れが父を襲った。父はとっさに、座布団をとって頭を守ろうとした。しかし揺れが強いため近くにあった小さなテーブルにつまずき、CDトラックの入っている棚で頭を打ち意識がなくなった。

しばらくして、隣の人の声で目を覚ました。家具のほとんどは、窓を突き割り、ベランダに壊れた姿で山になっていたようだ。

父は靴を履き外に出ようとした。玄関のドアは靴箱が邪魔をして開けられなかった。隣の人にこのことを話しドアを壊してもらいやっと外に出られた。

父は仕事のことを思い出し、車で現場に向かった。車はフロント部分に傷があった程度でいたってこれといった損傷はなかった。

道は多くの車で混んでいたもので、現場に着くまでに2時間かかった。現場自体はあまり被害が大きくなかったのほっとしたようだ。

2. 復旧と仲間の存在

父は、大工仲間の人たちと壊れた箇所の現場修理を行った。半日かかり復旧させた。そのあと、夕飯を買いにコンビニにいったけれど多くの人でいっぱいだった。なので、事務所にもどった。ここは幸いにもまだガスと水道が使えたので、みんなでカップラーメンを食べて1日を過ごした。

18日からの1ヵ月間は壊れた家屋の木材の撤去や、住宅の建てなおしを行った。木材はすぐには片付けられなかった。作業は順調だったが、小さくした木材を運んでくれる大型トラックが車の渋滞などで到着するのに時間がかかった。その間住宅の建てなおしを行っていたので、休む時間が少なかった。

しかし唯一の楽しみが、他府県から仕事に来た人が食べ物を送って来てくれたことなので、炊き出しをしてみんなで食べた。温かい食べ物は心まで温かくすると語ってくれた。

3. 僕と母

父がこうして過ごしている間、母は何度も電話をした。しかし、電気やガスなどのライフラインが止まっていたので繋がることはなかった。

祖父から聞いた話では、テレビのニュースをずっと見ながら、いつかかってもいいように電話の受話器を握りしめていたという。僕は母が、受話器を握りしめている姿をかすかに覚えていた。

それから、4日後に父から電話がかかってきた。公衆電話からかけてきたらしい。父は怪我をしていないことを伝えて、仕事が増えたからと言って電話をきった。母は泣きながら電話に出ていたと祖母から聞いた。

4. 父の生活とライフラインの復旧

父は、毎日寝る暇がないくらい働いたそうだ。それは仕事が多かったこともあるけれど、「余震がくるたびにあの日のことを思い出したくないから、寝ないで昼夜働いた。」と語ってくれた。「こんな生活をしていたらいつか倒れるぞ。」と同僚の人から心配されていたが、父は倒れることなく仕事を続けた。

それから5ヵ月後に僕と母は神戸の町にきた。ガスや水道、電気などのライフラインは僕たちが来る2ヶ月ほど前に復旧していたらしい。

神戸にきて2日目の夜、父は熱を出して倒れた。医者からは過労だと言われ、家に帰って2日間寝込んだらしい。今まで睡眠時間が3時間ぐらいで、良くても5時間寝られるかという状態の中で、よく一度も倒れずに生活していたと思った。

幸いライフラインが復旧していたので生活に支障をきたすことはなかった。

僕たちは1週間ほど滞在して三重に帰った。その時の父は笑顔で送ってくれたので、安心したのと同時に不安を抱いたと母から聞いた。

5. 三重県にいる僕と神戸にいる父

僕は神戸にいる父に手紙を何通も書いて送った。父からの手紙は僕が読めるようにとほとんど平仮名で書いてくれた。でもちょっとした漢字が読めなくて、祖父から漢字と字の書き方を教えてもらった。祖父は厳しくて書き順が違うだけで怒られた。字が汚いときれいな字がかかるまで書かして、とにかくスパルタだった。

しかし僕は感謝をしている。手紙を書き続けることが出来たのは祖父のおかげだからだ。

父は最近その手紙を見せてくれた。僕は手紙を見せてくれたことよりも今までそれを持っていたくれた父に「ありがとう。」と感謝の気持ちでいっぱいだった。

6. 環境防災科に入った理由

僕が環境防災科に入ったのは小学校4年の時に神戸に引っ越してきて、最初神戸の街は高層ビルや明石海峡大橋があって、大都会だと車の中から見て思っていた。家についてテレビをつけた時、阪神・淡路大震災の報道特集みたいなものをしていて。父や母が何日も連絡の取れない状況が続いて、家が壊れるほど大きな地震だったと思っていた。けれど、死者数や全壊・半壊家屋数を見て衝撃を受けたというか、怖くなった。

この体験から地震のことをもっと調べてみようと思い、図書館やインターネットを使って調べたのがきっかけで、高校2年の夏に環境防災科があることを知り、この学科を受けようと思った。

7. 環境防災科の特色

この学科に入って感じたことは専門的な学習内容で、地震のメカニズムや心のケアなどハードな部分とソフトな部分が学べる特色を持っていると思った。地震のメカニズムなど覚えることが多くて、テスト前など「どういう勉強をしよう・・・。」と悩まされた。けっこう暗記するものも多くて、何日もかけて覚えたりしていた。

学校で勉強をするだけでなく、校外学習が多いことがこの学科特有のものだと思う。六甲山に行って地質の調査をしたり、外部講師の先生を呼んで話を聴かせてもらったり、体験することがある。

休日に参加できる人はボランティア活動に参加して、地域の人とコミュニケーションをとる機会があり、そこでも防災の知識を取り入れることが出来る。

8. 環境防災科で学んできたこと

1年時は、講義の時間に外部講師の先生が来てくださって話を聴かせてもらった。水道局の人や関西電力の人など、普段話しが聴けない人から、話を聴くことが出来た。消防士は救助者を救出するための器具を持ってきてくださって、実際に使わせてくれたのでいい経験になった。

2年時は校外学習する機会が1年時に比べると増え、より学習の内容が濃いものになり、授業で習ったことを肌で感じるができる。ここで学んだことは、1年経った今も覚えているし、過去の災害を振り返り勉強するだけでなく、今後数十年の間に発生するかもしれない東海・東南海・南海地震のことも勉強することが出来て、もし津波が来たらどこに逃げるかなど将来発生する災害の避難場所や経路も学ぶことが出来たので、こういった知識は役に立つと思うし、自分の身を守ることに繋がるので大切だと思った。

9. 校外学習～長田の町歩き～

長田の町歩きは復旧・復興していく中でのメリットとデメリットが、被災者に対してどのような影響を与えていたのかを勉強させてもらった。

今、長田の町に神戸の大きなシンボルになるだろうと推測される鉄人28号が建った。これは、震災で被害が大きかったこの町に震災を知ってもらうことや粉ものの料理を広めるといった活動からそのシンボルになるように鉄人28号が建てられたようだ。ちなみに鉄人28号の作者である横山光輝先生の出身地でもあり、その偉業をたたえて神戸にモニュメントを建てるといった活動をされていて、僕たちはいろいろな店を回って、当時の震災状況や今の神戸の町の様子など語っていただいた。

電気屋さんから聴いた話は、震災当時は空襲が起きたのではないかと思うほど空が黒く、1キロ先の民家やお店が燃えていた。すぐに避難をしようと思ったが店が心配で、戸締りをして近くの小学校に避難をした。翌朝になってもまだ火が消えていないところがあったが店を見に行っただけで帰ってきた。幸いなことに電気屋の周辺の民家などは、地割れが走った程度だった。しかし店の中にあったエアコンなどの商品は使えなくなった。

当時働いていた従業員に電話で安否を確認して無事だったことにほっとした。その後すぐ電話は使えなくなった。

避難所に帰る途中黒い雲がだんだん太陽を隠し、あたりは夜ではないかと思うほど暗くなり黒い雨降った。先が見えないほど暗かったので、対向者が来るのは足音でわかる程度で相手の顔が見えないことに恐怖を感じたと語っていただいた。

この話を聴いて、暗い世界というのは不安を抱かせ恐怖を与えるものと環境防災科の授業で聞いたので解っていたつもりだったけど、被災者の人々の言葉の一つ一つが、重く心から怖かったということがひしひしと伝わってきた。

どのお店に行っても最後に「見えるところは早急に復興して、見えないところは当時のままだ。」と言っていた。確かに町歩きをしていても建物自体の新しさとか、古さの違いが著しい。こういった意味ではまだ神戸の町というのは復興できていないと改めて感じた。

10. これから・・・

これから僕はこの学科で学んだことを将来の夢とつないで出来ることをしようと思う。僕の将来の夢は美容師になること。美容師ってどういう活動をして防災を広めることが出来るのだろうかと考えて、最初に思いついたのは被災地でのヘアー・カットだ。

これは地震が起きた地域にボランティアとして現地に入り、そこで被災者の髪を切りつつお話をし、少しでも相手の気持ちが落ち着くような活動をしていきたいと思った。

しかし衛生面などの問題が出てくると思うので、そこは美容師になってから決めて実現出

来るように試行錯誤していきたいと思う。

次に、イベントを通じて防災を知ってもらおう。これは自分で店を出したら耐震補強をするということも立派な防災だと思うけれど、働かせてもらっている美容院やサロンでは、客寄せを兼ねて防災のイベントをし、知識を伝えていけたらと思っている。

最後に発展途上国の人に防災と技術を伝えたい。これはアフリカや東南アジアなどハサミを使わず、火の熱で髪を整えることが日本という散髪にあたる国があると知って、その国の文化や技術に触れつつ、ハサミというかシザーを使った、技術に防災を絡めたものを伝えていきたいと思った。

この学科に入って、いろいろな職業の人や地域の人から話を聞いたり、防災を勉強したりしたので、少しでも伝えていくことが僕たちの義務だと感じた。

震災体験

香山 愛

この震災体験はわたしの両親に聞いたものである。

1. 父の震災体験

父は揺れを感じて目を覚まし家族が無事であることを確認して、揺れがおさまるのを待った。実際は、30秒ほどの揺れがすごく長く感じられた。揺れがおさまるとまず窓から外を見た。当時住んでいたところは地震で家屋が倒壊していることはほとんどなかった。ただ、空の色が不気味なオレンジ色をしていて、鳥などの気配もなく何かとても怖い感じがした。少しして、何かしなければと思うのだが何からすればよいのかが分からず、気が動転していた。そんな状態で身の周りにしか気がまわらず、近所の人がどうなっているのかなど他のことは、自分たちのことが精一杯で気をつかう余裕がなかった。

家の中は食器棚の中がでて食器が割れ散乱していて足の踏み場がなかった。玄関に行くまでに手や足を切らないようにするのが大変だった。このことがあって、今では各寝室にスリッパや軍手を置くようにした。

2. 教師である父の被災時の仕事と思い

少しして、勤務先のM中学校に行った。行く途中で余震が頻繁に起きた。

ライフラインの切断で電気が切れていて、信号が付いておらず普段信号がついている事ごく当り前のことでその時、信号の重要性に気づいた。

学校につき職員室にはいると、机の引き出しが全部ひきだされ、まるで泥棒がはいったようだった。

しばらくして、M中学校は避難所になったものの幸い避難者はいなかった。ただ、自宅付近は水が出ていたが中学校付近では水がでなくて困った住民の方が近くに貯水タンクがあり水がでていたM中学校に水をもらいにきていた。給水をしている人たちの中には、お年寄りもいらっしゃったからその方たちのお手伝いをしていた。嬉しそうに感謝の言葉をかけてくださる方の表情を見ているとなんだかとてもうれしくなった。

須磨区のO中学校に応援に行ったとき、行く途中で垂水付近ではあまり景色に変わりはないのだが旧S校辺りから景色が一遍した。悲惨な光景が嫌でも目にはいつてくる。車が崩れかけたマンションの下敷きになって、かろうじてそのマンションは建っている状態、あるところでは家屋がドミノ倒しのように倒れている、2階建てであろう建物が1階建てのように潰れている。

また、何も壊れていないし被害がまったくといって良いほどないところがあるのに道を1本挟んでその反対側では路地が瓦礫で埋まって道がないといった異様な光景も見られた。

道1本、それだけで被害が大きく変わっている。被害があった場所、なかった場所、いったい何が違っていったのか、いろんなことを考えた。そして自分たちはすごく小さな被害で済んだのだということが分かった。

やはり、避難者もM中学校とは違ってたくさんいらっしゃった。そこでは主に荷物の運搬の仕事をした。空いた時間で避難していたお年寄りと話をしていると、避難者にとっても高い値段でイモを売りつけに来ている人の話を聞いた。もちろんそんな高額なイモを買う人はいないが、子供は何も分からず「欲しい、欲しい」と泣くので酷いことをすると大変怒っていらっしゃった。助け合っていかなければならない時にどうしてそんな卑劣なことができるのだろうと、とても悲しくなった。

また違う方は、「年寄りには力を合わせてよく働いている。若者も捨てたもんじゃない！」

よく働いてくれる人がたくさんいる。でも、逆にそうじゃない若者もいてははっきりわかれている。そういう人がいなくなればもっと生活しやすい避難所になるのに。」とおっしゃっていた。

父は当時、喫煙者だったが現場はすごい殺気を感じて、休憩中もたばこは吸えなかった。兵庫区のS中学校には2回応援に行った。

この頃になると避難者が一人一人役割をもち、組織をつくって秩序のある生活ができていた。応援にいったボランティアにも弁当をわけてくれたが、今までの活動経験から弁当を持参していたのでそれは受け取らなかったが、ボランティアにまで食糧が十分いきわたるほどになり、少し余裕が出てきたかなとほっとした。

しかし、学校の近くの墓苑ではほとんどの墓が倒れていてまだまだ回復には時間がかかりそうだった。

夜になって落ち着いてからS中学校の校長先生とお話をした。聞くとS中学校に避難してきたある夫婦が離婚してしまったのだと言う。内容はすごく辛いものであった。震災が原因で離婚してしまったケースは少なくなかったそう。この他にも震災で大切な人を亡くした人も大勢いて、たくさんの人が辛い別れを経験したのだと思う。

被害が大きかった地域の学校は必ず避難所になっていたため、校舎や教室はもちろんグラウンドもテントを張っていて使えなかったので授業、特に体育の授業ができなかった。

生徒は不安をもつし、学校がはじまらないとなかなか友達と会う機会もなく精神的にとても辛かったと思う。地域の小さな子供たちも“遊べない”“遊ぶ場所がない”“遊ぶものが無い”といった状態でストレスは大きかったと思う。

教師になって最初の勤務先であったT中学校に連絡をとった。教え子は全員無事でとても安心した。たくさんの学校に応援に行ったが、被害も大きかったし、長い間勤務していたこともあって本当は一番にでもボランティアに行きたかった。

教え子も避難所の手伝いに来ていて話をすることができた。とても懐かしく、再開できたことがうれしかった。震災はたくさんの辛い別れもあったが、再開、新しい出会いのきっかけでもあったと思う。

T中学校では、ベッドの端の部分が支えになって、助かった人などの話を聞くことができた。普段の生活では何も気にしていないようなこと、小さなことで命が助かったという話もよく聞き、何が幸運をもたらすかわからなかった。

T中学校ではスプリンクラーが激しく揺れたことによって誤作動を起こして、水びたしになったという。火災がなかった時の対策が非日常的な被災時には逆に仕事を増やす原因になってしまった。

3. ボランティアをしてみて感じたこと

避難所のボランティアをしていて最初は避難者の目がひきつっていて怖かったし、指示を聞いてとにかく働いた。作業をしていたら何時間かたってようやく受け入れてくれたのか避難者の方が声をかけてくれた。ボランティア活動をしていく中で一番大切だと思ったことは、人と人との信頼関係を築くことだと思う。信頼関係があるから話せることもあるし、一生懸命仕事をするのでだんだんと心をひらいてくれる。ボランティアはまず地域の人たちに受け入れてもらうことが必要だと感じた。

4. 父が思う教訓

ライフラインはとても大切だ。普段はあって当たり前で大切さがなかなか分らないが、生きていくためには無くてはならないものだ改めて感じた。

大切なものをたくさん失くしたけれど、本来人間がもっている“やさしさ”“助け合い”の気持ちを思いおこさせてくれた。しかし、15年が経って震災の記憶と共に風化しつつあ

るのではないだろうかと思う。“人を助けるのは人”。“人は人によって人になる”。自分のことばかりではなくもっと思いやりをもってほしい。

最近では近所の人たちと話す機会もなかなかなく、物にばかり走っている時代だが、人とのつながりを大切にしてほしいと思う。

5. 母と母の両親

地震があった直後は、家族が全員無事だったことにほっとした。4人一緒だったからかまだ心に安心感があった。もしこれが一人でいる時に起きていたらもっと辛かったと思った。それから真っ先に心配になったのは被災時、入院していた母親と家に一人でいた父親のことだった。すぐに電話をかけたがなかなかつながらず、とても不安だった。だから安否がわかった時、生きていてよかったと本当に嬉しかった。

母のいた病院は2階部分が潰れてたくさんの方が亡くなったそう。母は4階にいたため無事だった。

父は板宿の実家にいた時に被災したのだが、家は半壊状態だった。2階で寝ていた父は1階に降りようとするも階段が潰れていて、飛び移るにも床には物が散乱していてとても大変だったそう。やっとのことで1階に降り、鍵を閉めて病院に歩いて向かった。

話を聞いているととても家に鍵をすることまで気が回らないように思えるのに泥棒に入られたら困ると鍵だけはちゃんとかけたところが父らしいと思って可笑しかった。

父は、2つの駅の距離を2時間歩いて病院に行ったと聞いたときは、普段よく喧嘩しているけれどやはり夫婦なんだなあと思った。

歩いていると、道はひびがはいっているし、コンクリートが焼けて飛んでくるのでとても大変だったそう。

父からの連絡でテレビをつけてみるとそこには実家が映っていた。その時にはもうほぼ全壊状態で火の手がすぐそこまでせまっていた。その状態をただ茫然とみていることしかできなかった。子供のころの思い出がたくさん詰まった家が壊れていくのを見るのはとても辛かった。

でも、命をなくされた方もたくさんいるのだから自分も両親も命が助かっただけで十分だと思った。

6. 母の苦労

手軽に食べられるものがなかったし、子供が小さかったのでオムツや粉ミルクの調達がなかなかできず大変だった。私と弟の2人をベビーカーに乗せて薬局をたくさん回った。しかし、お店の開店まで手がまわらないのかどの店も閉まっているし、開けてはくれなかった。そんな中1軒のお店がオムツと粉ミルクをととても安く売ってくれた。

ずっと歩きまわって探していたし、お店の人も大変忙しいのは分かっているのに本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

どこに行くにしても小さい子供をおいてはいけなからベビーカーに乗せて一緒に行動しなければいけなかった。道は瓦礫が落ちていたりひびがあったり普通の人でも通りにくいのにベビーカーが通るには障害が多すぎた。転んでしまいそうになってとても怖かった。1度、車輪が瓦礫にひっかかりベビーカーが倒れそうになったことがあった。なんとしても、子供に怪我をさせてはいけなからベビーカーが倒れるのを防ごうとして自分が転んでしまった。手をつくことができず顔から転んだためにメガネの跡がくっきり残るぐらいの怪我をしてしまった。子供が無事でよかったと思ったがやっぱり痛かった。

父はその傷をみて、心配してくれたものの眼のまわりにあざができていたので“パンダ”みたいだと笑われたのには少し腹が立ったが、自分で鏡をみていると本当にパンダのようでした。

今思えば、道がぐちゃぐちゃだったことも原因だが、あの時は急ぐ必要はないのに慌てて自分の注意が疎かになっていたことも転んでしまった原因のひとつだと思う。

非常時に冷静でいることはとても難しいが、落ち着いて行動することは大切だと思った。

被災してガスがなかなか使えなかったので、お風呂に入ることができなかったのが辛かった。遠い明石の親戚のところまでお風呂を借りに通っていた。お風呂には入れることがこんなに嬉しいと思ったことはなかった。

ライフラインも復旧してだんだん元の日常に戻ってきつつある時に子供が退屈しだしたので家族で須磨の水族園に行った。駐車場には瓦礫がたくさん残っていて、まだまだ復旧しているとは言えないと思った。

水族館の様子は魚が震災でたくさん死んでしまってなんだか寂しい気がした。

7. これから

阪神・淡路大震災を経験して防災を意識するようになり、非常持ち出し袋の準備などを徹底するようになった。しかし、阪神・淡路大震災では食器棚の中身が床に散乱した程度でタンスが倒れてくることはなく寝室に大きなタンスがあるが固定ができていない。しなくてはいけないと思うが行動になかなか移せないのは、まだ油断しているところがあるからだと思う。震災は自分の中でも世の中でも過去のことになりつつある。どうしたら風化させずにすむか。油断せずにすむか。考えていきたい。

震災の時は人が本来もっている優しさや思いやりの心がみられた。非常時こそ人間の良いところが見えてくることが分かった。その優しさや思いやりを日ごろからみんながもつことができていたら殺人事件や戦争など悲しい事件ももっと減るだろうと思う。

だから、とても難しいことだが、普段から人の気持ちや一人一人の個性を大切にしたいと思うし、優しい気持ちを大事にしていきたい。

防災の知識を深めることも必要だが、まずはそういうところをきちんとすることで防災に対する意識も変わってくると思う。

“人を救うのは人”。災害は、悪いことばかりもたらしたのではなく、大切なことを私たちに気づかせてくれた。

私と家族の震災体験

木村 莉沙

震災当時、私達家族は震災の激震地である、長田区の市営住宅に住んでいた。その住宅は結構古く、当時は耐震工事がされていたはずもなく、決して丈夫だとは言えないだろう。その5階に私達は住んでいた。

小学生や中学生の頃は、特に何も思わなかったが、高校に入って、震災当時のことを学ぶ内に、そんな安全とは言えない状況のなか、住宅は倒壊もせず、家族全員が無事でいられたのは、幸運なことなのではないかと思うようになった。幸い、身内も全員無事だった。

私はまだ2歳だったので震災の記憶がないため、母と兄から話を聞いた。兄は当時12歳、小学6年生だった。

1月17日午前5時46分。ぐらっと大きく揺れて、ドーンドーンと縦揺れがした。目が覚めた母は訳もわからず、その縦揺れで突き上げられ、弾んでいた私をただ掴んでいた。

しばらくして揺れが収まり、部屋の中を見渡すと、金魚鉢が割れ、金魚が床ではねていた。ふすまは飛んで倒れ、ぶら下げ式の電気は飛んで、電球が割れて、そこら中がガラスだらけになっていた。それから、母は怖くて、ぶら下げ式の電気はやめた。テレビは台から落ちて、ひっくり返っていた。その下で寝ていたら・・・考えただけで怖くなる。ぐちゃぐちゃの部屋で、家具の下敷きにならなかったことは、本当に良かったと思う。

外へ出ると、火がポンッといくつかあがっているのが見えた。私達が住んでいた住宅の向いの住宅は1階が潰れていた。母は私をおんぶして、兄の手を掴み、近くの公園へ走った。兄は靴がなく、スリッパのままだった。怖くて母が強く兄の手を握ると、兄は「痛い！」と言っていたそう。母はまだ何が起きたか分からなかったと言う。

公園につくと避難してきた人たちがいて、知り合いもいた。みんな毛布をかぶっていた。地面はひび割れ、その地面を兄が友人と走り回っていた。

当時、兄が通っていた千歳小学校が避難所となり、避難したが、長田は火災が多く、火が回ってきたので、避難所から避難することになってしまった。

大正筋商店街で祖母と会った。そこはまだ火が回っていなかった。しかし、信号はついておらず、高速道路はガタガタだった。歩いているとパラパラと上からコンクリートのかげらが降ってきた。

叔父の家を見に行くと燃えていた。燃えている家の前を普通に通った。当時の長田では、特別なことではなかった。

その後、公民館に避難したが、とても混んできて、トイレも使えないような状態だった。そのこともあり、叔父の奥さんの実家がある、明石市の江井ヶ島に行くことにした。2日間そこにいたが、私が熱を出し、病院を探したが、神戸へ援助に行っていて閉まっていた。スーパーも神戸へ食品などを救援物資として持って行ってしまっていて、品がない状態だった。仕方なく神戸へ戻り、九州へ行くことにした。

地震から3日目、母と兄と私と叔母は九州の祖母と祖父の家に行くことになった。兄の転校届を貰おうため市役所へ行くと、届けはいらず、「神戸から来たと言えばいいですよ。」と言われた。そこで、救援物資を他県から配りに来ている人がいて、りんごと生卵を貰ったが、卵は調理することができないので、どうにもならなかった。

明石から山陽電車が運行していたため、そこまで叔父に車で送ってもらった。燃えている

建物の前を通りながら、普段は 30 分程で着くところを、この時は 4 時間もかかった。電車はいつもよりかなりゆっくりと走っていた。余震がいつ起こるかわからないためだった。

姫路の健康ランドの廊下で一泊し、翌日、姫路から新幹線に乗った。上下スウェットで手荷物はほとんどお金だけだった。新幹線にパジャマで乗ったのは初めてだし、今後もないだろうと母は言う。新幹線を待っていると、知らないおじさんに声をかけられた。「神戸の方ですか？」と聞かれ、母は「はい。」と答えた。「頑張って下さい。」と言われ、母は「はい。」と答えた。そう言うしかなかった。何をどう頑張ったらいいいのかわからなかったと母は言う。

地震発生から 1 か月で九州から神戸へ戻って来た。それから、高砂の青年の家が避難所になっていたの、そこへ行った。そこには、長田の被災者が大勢いた。避難所ではインフルエンザが流行しており、避難して 3 日目に、私がかかって、高砂病院に 1 週間入院した。病院は、私が行った時には少し落ち着いていたが、神戸から来た赤ちゃんがたくさん来て、ベッドが足りない状態のときもあったそうだ。

退院して、長田の中学校に行った。当時住んでいた市営住宅は、全・半壊の判定待ちだった。昼間は入ることができたが、夜の 8 時になると出入りができなくなった。そのため、昼間は家に片付けをし、夜は避難所で寝るという生活がしばらく続いた。

J R の新長田駅は崩れて、鷹取駅は燃えてしまった。新長田駅は、臨時駅ができて、しばらくそれで運行していた。

しばらくして、私は 2 回目のインフルエンザにかかり、保健室に熊本から医師が来ていたので、看てもらったそうだ。臨時の保育所があったが、私は体が弱くて入ることができなかったの、東京からきた保育士の人専属で面倒を見てくれたそうだ。その人は湊川のボランティアのキャンプ地から来ていた。公園にテントを張り、毎日徒歩で長田の避難所まで通っていた。道はがたがたで、余震も続いていたので、ボランティアの人達も命がけだった。「本当によくしてくれた。」と母は言っていた。

兄は学校に通い始めた。朝は学校の先生が迎えに来て、集団登下校をした。先生はほとんど喪服を着ていたそうだ。授業はなく、プリント学習だった。

兄の卒業式は、同級生や家族など、亡くなった人が多かったこともあり、お葬式のようなだったそうだ。鷹取地区だけでも 90 人以上の方が亡くなった。

その年の中学校の卒業式は、制服が燃えたりしてない生徒がほとんどだったので、ジーンズの会社が、ジーンズ生地 of 服の上下を作ってくれた。

兄はその春から中学生になった。制服は、繊維会社が生地を寄付してくれたので、生地代がいらなかった。また、デパートなどがつぶれてしまったので、この年に入学の小学生には、ランドセルが寄付された。このように、学用品などの寄付がたくさんあって、当時は本当に助かったという。

進学祝いで、避難所にいる人達が餅つきをして、紅白餅を作ってくれたそうだ。避難所にいる人は、みんな仲がよかった。

教室は避難してきた人が住んでいて使えなかったの、プレハブで授業をした。県外などに避難している人も多く、生徒の数が少なかった。3 クラスで、1 クラスの人数は 20 人ほどだったそうだ。

半年間、避難所で暮らして、8 月に前に住んでいた市営住宅に戻ることができた。戻った

あとも、また地震が来たら・・・という恐怖感から、一つの部屋に家具を全て集め、何も置いてない部屋で、眠った。電気は消すと私が怖がって泣くので、寝るときもつけたままだったそうだ。小学生になっても、豆電球をつけていないと、怖くて眠れなかったのを覚えている。震災の体験が、そうさせたのだろう。記憶はなくても、体は覚えているのだと実感する出来事だ。

家にあった食器はコップ一つ残らず、すべて割れてしまっていた。高砂の避難所でもらった食器を使った。今もその食器を使っている。

震災から1年半以上が経っても、道はがたがたで、仮設住宅が建っていた。私の七五三のビデオに、当時の長田の町の様子が映っている。市営住宅の廊下の接続部は穴が空き、板を置いて補修をして、そこを飛び越えて渡るような状態だった。道路のアスファルトもまだ直しておらず、浮いていた。震災前とは全く違う街並みになっていた。

私が3歳の時に食中毒で入院した西市民病院の医師が言っていた話を少し紹介する。震災の時、神戸の避難所で、食中毒は起こらなかった。それは、避難所での残り物を捨てるなど、きちんとルールが守られていたからである。

激甚的な被害を出した長田区も、今は復興をして、元の活気を取り戻しつつある。町並みは綺麗になり、新たな復興事業も続いている。それも、長田の商店街や地元住民の頑張りがあってこそだと思う。

2年生のときに、長田に街歩きに行き、商店街の人にお話を聞き、地元を復興させたいという気持ちが伝わってきた。大変な苦勞をしながらも、ここまで頑張ってきた。それは、長田だけでなく、他の地域でも同じだと思う。それは神戸が、全国に誇れることなのではないかと私は思う。その教訓を生かし、備えにも力を入れ、もしまた災害が起こったときには、少しでも被害を減らせるようにしていかなければならない。

震災のときには、全国からのボランティアの方々に、大変お世話になった。たくさんのボランティアの方々の支えがあったからこそ、今こうして元気に暮らすことができるのだと思う。私達家族に関しては、ボランティアの医師や保育師の方がいなかったら、もっと大変な思いをしていただろう。その感謝の気持ちを忘れてはいけないと改めて思った。

私には震災の記憶はない。だが、母や兄から聞いた話ならたくさんある。その話を心に留め、これからも防災を広めていきたい。もし、この体験が人の役に立つなら、話そうと思う。記憶がない私が、「語り継ぐ」と言っているのかという思いは正直あるが、自分にできることならそれはするべきだと思う。

いつか、震災の時に全国の人から助けてもらった恩返しをしたい。もちろん、災害が起こらないのが一番いいが、もし起こってしまったら、支援がしたいと思う。今の私にできること、大人になった私にできること、その時の自分にできること考えて、行動していきたい。

いつかは

休場 洋介

1. はじめに

ついにこのことを書く時がやってきた。3年間勉強してきたことや当時のことを知ってもらいこれからの若い世代に語り継ぎ、災害への備えの重要性や自分の夢についてもう一度ゆっくり考えてもらいたい。

僕は神戸の人間でありながらほかの県の人から「震災大変だったでしょう?」「いえ震災のことは知りません」と会話するのがとてもつらかった。毎年1月17日になるとテレビで取り上げられるけど知らないということにイライラしてしまいチャンネルを変えてその日を終わらせるということが多かった。これが環境防災科に入学したいと思った理由の1つである。

僕たちは震災当時2、3歳だったため、ほとんど記憶がない。そして、震災から15年が経った今、両親に震災当時の悲惨な過去を聞いてみた。しかし両親はあまり話したくなかったそうだ。それだけ、苦しい体験だったのだと感じた。話さなかったら、これからのためにならないよと説得すると、両親は重たい口をあけて当時のことを話してくれた。

2. 発生

震災当時、僕たちは今住んでいるところで被災したわけではない。須磨区の某マンションに父・母・兄・僕の4人で住んでいた。その前日に家族は親戚の人と一緒にワイワイ食事をしながら両親たちは浴びるようにお酒を飲みながら過ごしていた。お酒の力のせいか両親は洗い物を片付けずに眠ってしまっていたらしい。母と兄と僕の3人は14畳のリビングに寝て、父は不規則な仕事といびきがうるさいため隣の6畳の部屋で寝ていた。もちろん、震災なんか来るとも知らず、箆笥は棒で固定していたわけでもなければ食器棚の取手はロックしていたわけでもなかったため備えは不十分であった。当時、神戸に震災は来ないと他人事のように思われていた時代でもあったので僕たちの家だけでなく他の家も備えは不十分だったと話す。

そして、5時46分に震度7の地震が僕たちのマンションを襲った。その時間より前から父は仕事上早く起きる習慣があったため起きており、地震の瞬間、マンション全体がゴゴゴゴゴ〜ッと激しい揺れに襲われ、動きたくなくても動かされたのでされるままの状態だった。母もその激しい揺れに目を覚まし、兄と僕の2人にかぶっていた毛布を一心不乱にくるみ守ってくれたそうだ。そんなことに気づくことなく兄と僕は地震の揺れがまるでゆりかごのように感じていたのかスヤスヤと寝ていた。収まった後、父は隣の部屋にいた僕たち3人に「お〜い!!大丈夫か!!」と何度も安否確認をした。しかし、電気がつかないし早朝だったために真っ暗で何も見えなかった。叫ぶ声だけをたよりに父と母は確認しあったそうだ。

3. 発生後

幸いマンションは亀裂とタンクが壊れたただけであった。しかし、部屋の中はひどく箆笥は倒れ食器棚からはお皿が大量に割れて出ていて片付けていなかった食器も飛び出しており、物置部屋の中が特にひどく、クローゼットの中に入っていた服がとび出し、棚と棚が重なり合って倒れていたのだからそこで寝ていたら100%死んでいたと父は話す。

発生から1週間ぐらいで電気、ガスが復旧したが水だけはなかなか出なかった。原因として、マンションの屋上に設置されているタンクがつぶれて使えなくなっていた。そのため風呂には入れず顔も洗えずトイレも使うことができずじまいでイライラしたそうだ。そんな中、

父は仕事に行かなければならないということで出勤したところ、その会社では水が出た。顔を洗ってみると、1月の真冬の寒さの中だったこともあり氷水かと思わせるぐらい冷たかったがシャキッと目が覚めスッキリしたそう。他の会社員もそれに気付き水を使いにくそう。水が出るとわかったことで僕たち3人を会社まで連れて行き顔を洗わせた。その後水をため込むことができる60Lのクーラーボックスやなべなどにため込めるだけ溜めた。

父の兄弟でガソリンスタンドに勤めている人がいたのでポリタンク2缶をいただいて毎朝2個×2往復して水を溜めにいった。ガソリンが付いているタンクだったのでなかにビニール袋をいれて衛生面には気をつけたそう。電気やガスは使えるのでお風呂に入ろうということで水を入れたところポリタンク6缶で入ることができたそう。3日以上風呂に入らなかったものだから浴槽は一瞬で汚くなったが、入った瞬間何もかも忘れ、思わずハア〜としちゃべってしまうぐらい気持ちよかったそう。

震災から10日後にはマンションの1階から水が流れるようになっており、みんな鍋やバケツを持って殺到したそう。長蛇の列だったためなかなか給水させてもらえなかったの。父は会社へまた行ってくんでいたそう。だから、ライフラインは比較的被害が少なかったが復旧までの数日は思い出だけでも吐きそうだったそう。

震災から数日経ってマンションの近くにいる親戚の家を見に行くと見た目は大丈夫だったが反応がなかった。もしかして簞笥に挟まっているかもしれないと思い父と母は必死に電子レンジや簞笥をのけて探してみたがいなかったそう。たまたまそこを通った被災者の方が「ここら一帯の住人は小学校へ避難したよ」といわれ両親は小学校へ直行したそう。避難所では人であふれてサウナのようであった。ふとんが敷き詰められてまともに寝ることができず赤ちゃんはワァ〜ッと泣き、犬や猫を連れてきている家庭もあってとてもじゃないがそこに数日間も過ごすのはストレスがたまりそうだと父は話す。親戚の人を見つけたがやつれていて最初は誰か分らなかったそう。両親とその人は泣きながら無事を確認しあったそう。その後僕たちの家に連れて行き復旧するまで一緒に暮らしていた。

前日の楽しさと一転して何度も来る余震の恐怖と普段の生活に戻れない苦痛の日々が始まってつらかったと話していた。ある程度したら「いつまでもお世話になるわけにはいかない」ということで出ていったら水も出て電気もついて「日ごろの生活はとてありがたいなあ」と親戚の人はかみしめながら話していたそう。

4. 震災を知った時

震災を知ったのは小学校5年生の震災授業である。それまでは、震災って何？ととともに話すら聞かず友達と遊んだりずっと寝ていたり授業を受けていなかったのだが、5年生の時に震災のビデオを見ることがあり、そのビデオを見ていたら道路が崩壊してバスがギリギリ立っている映像や、列車が走る道を人間がひたすら歩いているところ、救援物資を待つ長蛇の列、当時の僕たちと同じ年齢の子がつぶれた家の前でずっと泣いているのを見て、普段ではありえないことが自分の住んでいるこの町で起こったのだと考えたときに怖くて足が震えたことは今でも覚えている。周りの友達もビデオを見てずっと黙ったままでその衝撃に驚いてばかりだった。悲惨な映像だけではなく懸命に働いていた消防士の方々を見た。当時は陸上選手になろうとひそかに思っていたのだがビデオで見た消防士の方々がカッコよくて、将来僕もなってみんなを助けたいと夢を見つけた。

6年生の避難訓練では、消防士の方に来てもらい水の消火器を使った訓練をやらしてもらい、それがとても楽しかったことを今でも覚えている。

5. 消防士を目指した中学時代

中学時代でも毎年震災の1月17日が近づくと防災教育がありしっかり勉強をした。中学でも避難訓練や消火器の訓練があったけれど消防士になりたかったから使い方をもっと

勉強してやっていたら消防士の方に褒めてもらえたことがとてもうれしかったことを覚えている。他にも非常持ち出し袋に何を入れるべきか・避難所の確認など小学校の防災教育より中身の濃い話をすることができた。

そして、2年生の時の防災教育で舞子高校環境防災科を知るようになった。阪神・淡路大震災の教訓をいかしてつくられた学科と聞き、しかもそこから消防士になっている人もたくさんいたのでそこへ行きたいと担任にすぐ相談をした。それから必死に作文や面接の練習をして無事に舞子高校に進学できた。

消防士になるために体力錬成を欠かさず、陸上部に入り体を鍛え、勉強面においても基礎知識の量を増やすために中学の時から勉強をしていた。

6. 舞子高校環境防災科で

舞子高校に入りたかった理由は3つ。消防士になりたかったこと、阪神・淡路大震災をもっと知りたかったこと、これから来るだろうと予想される東海・東南海・南海地震から身を守る方法を知りたいという思いから入学を希望した。希望通り高校では充実した活動を行うことができている。当時の話を消防士や警察、ガス会社の方などたくさんのお話を聞くことができ、当時消防士の人たちは火を消さないのではなく水が出なくて消せなかったことやクラッシュシンドロームで助け出してもすぐ亡くなってしまいなかなか活動できなかったことなど、知らないことがたくさんあり勉強になった。

また、長田のまち歩きでは当時火災で大きな被害を受けた地区の現在を見る行事で、震災から10年以上が経つアーケード街を見たがきれいに戻っていることに助け合いの大切さを知り、感動した。長田の人たちの話を聞くと、火を消すことができずただただ中にいる人が亡くなっていく影や火を見ることしかできずあの光景は今でも忘れることができないと話していた。

小学生と防災マップを作る行事では、小学生の発想力の豊かさに驚きながら僕たちでは見つけることができない危険な部分を見つけあった。その時に「阪神・淡路大震災って聞いたことある？」と問いかけると「知らない、何それ？」と言われガッカリした反面もっと若い世代に伝えていこうと気合を入れた面もありとても充実した行事であった。

そして、2年生の時に消防学校へ行くことになり、消防士の方に話を聞いて参考にしようとする気満々だったのだが、命を守る仕事だけあって厳しい訓練であった。煙中訓練と言い火災を想定した救助訓練やロープを使った登攀訓練・体力錬成いわゆる筋トレの時間で僕は現実を知らされた。こんな僕が消防士になっても人を助けることができず、もしかしたら自分の命も同時に落としてしまうのではないかと不安になり消防士の夢をあきらめた。

その後も震災の勉強は頑張ろうと思い、続けていくうちに2年生のある時に諏訪先生がある言葉をおっしゃってくださった。「直接防災に関わっていく仕事(消防・警察など)に就くのもあるけれど間接的に防災に関わる仕事だってあるはずから探してみなさい」と僕たちにおっしゃってくださったことが、僕の人生の中で大きく変わった、いわゆる人生のターニングポイントだった。消防士をあきらめてから何をしようか悩んでいた時におっしゃった言葉だったので、自分のやりたいことと防災を繋げたいと僕は考えることができた。

数日後に外国の人と交流することがありそこで通訳の人がお仕事をしているのを見てああいう仕事して、日本と外国との懸け橋になってみたいと考えた。しかし、恥ずかしながら英語の成績はイマイチで担任にも「もっと英語がんばれよ」と喝を入れられたこともあるぐらいで通訳の仕事はあきらめてしまった。

その後いつも髪を切ってもらっている人に進路のことについて相談していたら「ためしに理・美容の専門学校に行ってみたら？」とアドバイスをくれた。この一言も僕の人生の中で大きく変わっていったのである。

7. 自分の将来と防災

僕は将来、理・美容師になりたいと考えている。きっかけは、切ってもらっている人に勧められた専門学校の見学でのファッションショーを見たことである。歩いてくる人がとてもきれいでその人だけが光っているように見えて、僕も自分の手で人をきれいにしてみせたいと思い本格的になることを考え始めた。

なりたいと思うにあたってその資格はあるのだろうか悩んだ。ファッションに気を遣っていたわけでもなかったが、その人には「何事もやる気があればできる」といわれ現在も頑張っている。

理・美容師と防災とは全く関係がないのではないかと最初は思っていたけれど3年生でActive 防災Ⅱの「夢と防災」の授業で調べてみると意外と関係があることに気付いた。接客中に会話をすることがあるのでその時に、耐震補強の説明をしたりこれからくると予想される南海・東南海・東海地震に対しての備えを説明したりすることができる。それに1月17日になれば自然と話題の中に入ってくると思うからその時に当時の話を聞いてお互いの知識を共有して防災につなげることができる。

また災害が発生しある程度回復した段階で被災地へ行き無料でカットをしてあげること、心のケアに繋がると思う。

この職業は世界中にいると思う。だから世界へ渡りたくさんの人と交流し友達の輪を広げていきたいと思う。その友達の輪で防災の知識を共有し世界に防災の重要性を伝えていきたいと思う。特に発展途上国とは密接にかかわっていきたいと考えている。その国々は防災の意識が低いからである。この夢を叶えられる日が何年、何十年先かわからないけれども、しわくちやのおじいちゃんになってもこの夢は実現させたいと思う。

語り継ぐ

小谷 潤史

僕は地震で家が壊れたわけでもなく、家族の誰かががけがをしたわけではない。でも被災していないと言えそうでもないような気もする。実際に被災した人に失礼かもしれないが、一応被災者に入るような気もする。事実地震がなければ環境防災科に入っていないどころか、神戸関西に住んでさえいなかったかもしれない。

震災直後

震災当時僕は高砂市の伊保というところに住んでいた。その前は神奈川県座間市に住んでいて、父の転勤で引っ越してきていた。両親と3歳上と7歳上の姉二人、2歳の僕の5人で借アパートで暮らしていた。当時の記憶は全くない。

1月17日、その時間はまだ誰も起きておらず、5人で並んで寝ていた。その時に地震が起きたが、僕を含め兄弟誰ひとり目が覚めることなく寝ていたそう。両親も子供を守ろうにも、ものが飛んでくるわけでもないのとあえず揺れが収まるまでじっとしていたそう。特に母は大学生で下宿していた時に、宮城県沖地震を体験しており大して驚くこともなかったそう。高砂では震度5までいったそうだが、パニックも何も起きなかったそう。

家族誰一人けがはなく、家の被害もステレオが落ちた、食器が割れた程度の軽いものだったが、寝ていた家族のすぐそばにタンスがあり、もっと揺れていたなら、危なかったそう。

1月17日 朝

ライフラインは特に異常はなく電気、水道、電話は正常だった。ガスは止まっていたところもあったそうだが、当時我が家はプロパンガスを使っていたため全く影響はなかったそう。

朝になり全員起きだした。その時点で神戸は壊滅状態でテレビもラジオも大騒ぎになっていたが、我が家は朝テレビを見る習慣がないので、なにも気づかなかった。朝食をとると、姉は小学校に登校したが休校になったので集会だけして帰ってきた。父も出勤したが新幹線が止まっていたため、すぐに戻ってきた。僕も特になにかあったわけでもなく朝食を食べると、いつもと変わらず家でゴソゴソ遊んでいた。

すると前に住んでいた神奈川県の母の友人から大丈夫かという電話が入り、そこでやっと地震の規模の大きさを知ったそう。

地震の大きさを知った母は昔の経験を生かし近くのスーパーに調理しなくても食べられるパンを買いに行ったが、みんな同じことを考えたようで売り切れになっていた。

次に福島の実家に連絡を取ろうとしたが、その時には電話回線がパンクしていて連絡を取るのにかなり時間がかかった。

連日、テレビや新聞では大騒ぎになっていたが、二、三日もするといつもの生活に戻っていた。父も明石の職場に出勤し始め、長女も再開した学校に登校し、僕や次女も家で遊んでいた。

揺れは体験したものの被災者と言えるようなことは体験しなかった。ライフラインにも影響はなく震災前と変わらない生活をしていた。

三月

ところが、日常生活に戻ってしばらくたった3月のある日、その日は土日で家族全員家

にいて、僕は風邪をひいて寝ていたそうだ。そんな我が家にいきなりアパートの大家さんがやってきた。なんでも大家さんの親せきが神戸で被災して家をなくしたらしく、この部屋に引っ越してくるから出で行けといわれた。

もともとあまり気の長くない父はかなり腹が立ったらしく、さらにすぐ越してくるからガスとか水道は止めなくてもいいという言葉に完全に頭にきた。凄まじい剣幕で怒鳴りだしたそうだ。それを見た僕や姉は泣き出して大騒ぎになったそうだ。

結局こっちは部屋を借りている身なのでどうしようもなく家を出ることになった。直接地震で家を奪われたわけではないが、間接的とはいえ地震に家を奪われたわけだ。

神戸へ

いきなり追い出されても実家は熊本と福島で遠く、引っ越そうにも長女は小学校に通っていてできたら同じ校区内がいいということで、近くで家を探し始めた。

しかし3月でちょうど震災の騒ぎも落ち着きだした頃で家を探す人がたくさんいたこともあったようで、なかなかいい部屋が見つからなかった。

途方に暮れていたその時、垂水の社宅に住んでいた家族が出るということを知った。垂水は結構被災していたが、社宅は一部にひびが入った程度で修理も終わっており、止まっていたガスももうすぐ通るということで、必要最低限のもの以外は父方の熊本の実家に送って、荷物を最小限にしてそこの5階に引っ越した。その時にはライフラインにも問題はなく。ガスコンロでご飯を炊いたり、給水車から水をもらったりして、エレベーターが止まっているから社宅の長い階段をタンクもって登るといったことは一切していない。

そのまま社宅に住んでいて、僕が小学3年ぐらいのとき父が転勤で神奈川に戻るようになった。神奈川には以前住んでいたの入谷ハイツというのを一部屋購入していた。神奈川に戻るという選択肢もあったが、母が神戸を気に入ったということもあって、父だけ単身赴任ということで神奈川に帰って行った。

それから社宅に住める期間というものもあったらしく、その近くに家を建てて引っ越しただけで、神戸から出ていない。

震災から現在

当然神戸市立の学校に通い、道德の授業で「しあわせ運べるように」を歌ったりしたが、震災当時神戸に住んでいないことは知っていたので大した興味は持てなかった。なんでもかんでも、道德的な方向に持っていこうとする授業がむしろ苦痛だった。家でも震災の話はまったく出ず、1月17日にテレビで追悼式の報道がされていても、全然見なかった。

そんな僕が環境防災科に入ったのは自分でも不思議だと思う。きっかけはよく覚えてはいない。環境防災科のことを知ったのは中学3年の2学期あたりだった。進路のことは興味がなく、環境防災科のこともなんとも思わなかった。ただ勉強が嫌いだったので、普通科に入って数学とか英語の勉強をするよりも専門学科のほうが楽しそうだなと思った。

その後塾や学校の先生から勧められて、進路決定のぎりぎりまで環境防災科を受験することを決めた。それから少しずつ震災のことを調べるようになって初めて、自分が震災によって家をなくしたということを知った。

震災当時僕は神戸に住んでおらず、被災者とは言えないのかも知れない。でも地震がもとで住んでいた家を取られたという点では被害者と言えるかもしれない。

それに震災が僕の人生を大きく変えたと思う。もし15年前震災がなければ、神戸に来ることはなかったろうし、おそらく父の転勤について行って神奈川に帰っていたと思う。

自分にとっての阪神・淡路大震災

15年前神戸で震災が起きた。その後紆余曲折して今僕は舞子高校の環境防災科に入っている。そう考えると震災と僕は不思議な縁があったのかとも思う。「風が吹けば、桶屋が儲かる」という言葉があるがそれと似ているような気がする。震災が起きて、住んでいたアパートの大家さんの親せきというまったくといっていいほど関係のない人が被災して、関係のない僕たちが家を追い出された。僕の場合はかなりの強風だった訳だが。

震災で亡くなった方は6434人にも上り、命を亡くした人だけでなく家族を失った人、一生引きずる怪我、障害を負った人、家を失った人などたくさんいると思う。でもそれだけでなく僕のように直接震災の影響は受けなかったけれど、回り回って間接的に被害を受けて人生が変わった人もたくさんいると思う。

防災教育やそれに関する報道では震災によって人生が悪い方向に変わってしまったという人はよく取り上げられるが、僕にとっては震災が逆にいい方向に変えたのではないかと思っている。不謹慎かもしれないが、震災がなければ僕は神戸に住んではいなかったし、この環境防災科すら存在していなかった。そうすると今こうやって防災の勉強をすることもなかったと思う。

そう考えると震災は奪うだけでなく、新しい何かを生み出すこともあるのだと思う。

これから

阪神・淡路大震災が起きてから15年、僕が環境防災科に入り防災について勉強をするようになってから2年が経った。その間世界でたくさんの災害が起き、たくさんの人が被害にあった。人間の科学や技術がどんなに進歩しても自然災害を100%防ぐことはできないと思う。だから少しでも被害を減らせるようにしなければいけない。環境防災科に入って強くそう考えるようになった。

僕の将来の夢は警察官になることだ。警察官の仕事は市民の暮らしを守ること。警察官になれば犯罪だけでなく災害からも市民の暮らしを守れることができるように頑張りたいと思う。

東海地震がいつ起きてもおかしくないという。もし起きれば、阪神・淡路大震災以上の死者が出るらしい。東海地震をなくすのは無理だし、死者をまったく出さないというのもおそらく無理だ。だから僕は一人でも命を守り、一人でも悲しむ人を減らしたいと思う。

日本の防災

環境防災科に入るまで、ずっと疑問に思っていたことがある。学校で阪神・淡路大震災について授業をするとき、どうしてすぐに道徳の方向に持って行きたがるのだろうか。

感想文の最後がいつも「かわいそうだと思います。」で終わってしまい、将来の災害につながるものがほとんどといっていい程なかった。

たしかに1995年はボランティア元年と言われ人と人との助け合いというのが被災地で生まれたし、そういった道徳的な話も絶対に必要だと思う。

でも震災と同じ悲劇を繰り返さないようにするには非常持ち出し袋であるとか家具の固定であるとか、そういった知識も必要になると思う。小中学校どちらも、震災に関する悲しい話を読んで感想文を書くという形式の授業ばかりだった。平和学習での太平洋戦争と一緒に道徳にばかりいって、何がいけなかったのか同じ過ちを繰り返さないためにはどうしたらいいのかにはあまり触れられていない。そう遠くない未来に起きるといわれている東海地震で少しでも被害を減らすためには、知識の量を増やさなければいけないと思う。

阪神・淡路大震災以降、災害に関する様々な法律が生まれ、地域での防災訓練なども盛んに行われるようになった。だがそれらの中心になっている人のほとんどが震災を知っている人だ。あと何十年もすれば社会の中心になる人のほとんどは震災を知らない人だ。

このままでは震災も戦争と同じように昔起きて、人がたくさん死んだ悲しい出来事という

だけのものになってしまう。震災のことをまったく知らず、興味も持っていなかった僕が環境防災科に入って防災の勉強をしているように、関係ないと思っている人が震災を知り、それを未来に活かせることができる社会になるようになったらいいと思う。

それが震災で亡くなった人に対する僕たちの義務だと思う。

「かすかな震災体験記」

小林 大斗

1. 記憶

2歳の私は感覚的に何かを感じたのだろうか、1995年1月17日の午前5時46分の地震が起こる5分前に目が覚めた。幼かった私は隣に寝ている母を起こし、トイレに行った。その後また眠ろうと布団に入り、うとうとと眠りに入りかけたその時だった。一瞬にして多くの人々の命を奪った阪神・淡路大震災が例外なく私の家にも襲ったのだ。私は地震の揺れ感じ、わけもわからずいきなり視界が閉ざされた。とっさに母が私と5歳上の兄に布団をかぶせたのだ。揺れは収まり、母は私たち兄弟の服を理由もわからず着替えさせた。そして母はあわてた様子でリビングに向かった。「リビングに来ては行けない」という、母の声を今でもかすかに覚えている。しかし、母の言うことを無視して私はリビングに行った。そこには、割れた食器が無数に散らばっていた。母は割れた食器の片付けをしながら、私に「テレビをつけて」と言った。私は言われるがままテレビを付けたが、電波が入らないのかどの放送局も「ザー」という音が流れるだけで、何も映らなかった。

私はそれでも今がどんな状況なのか全く理解しておらず、兄が寝ている寝室に戻り眠りについた。私が鮮明に覚えている記憶はここまでである。2歳の私にここまで鮮明に記憶を残したのは、感覚的に異常事態だと判断していたからであろう。

2. 1月17日 震災当日

私の記憶を頼りに地震発生時の状況を語ったが、ここからは両親や祖母など、いろんな人たちから聞いたことをもとに話を進めていく。

地震が起こった時からすでに明るかったようだが朝を迎え、母の食器片付けが終わると、隣に住むTさんのお宅に少しの間居させてもらうことになった。これは、私の家が壊れたりしたからではなく、別の理由からである。それは、父の存在が大きく関わっている。私の父は当時、姫路に単身赴任中で家にはおらず、母と幼い子供二人では心配だったため、Tさん宅に居させてもらったのだ。

30分ほど経ち、外の様子が気になり3人で外の様子を見に出た。家は西区だったので目立った被害はそれほどなかった。しかし、普段目にするのことがない光景が目の前にあった。それは、草木に水やりをするための水道に近所の人たちがバケツを持ち、並んでいた。そこでやっと、水道が止まっていることに気付いたのだという。水やり用の水道は、家庭用の水道管とは違うのか、なぜか水は出た。すぐに私の家族も水を汲みに行列に並んだ。順番は、思いのほか早くまわり、水を汲むことができた。

ずっと居ては迷惑となるので、Tさん宅から家に帰った。家に帰り、母は父や祖父に何度の電話をかけたが繋がることはなかった。

そうしているうちに何時間かが経った。家の水道が復旧したころ、父が姫路からバイクで家に帰ってきた。父は「無事でよかった、よかった。」と繰り返しながら私たち3人を抱きしめた。このときのことは、私も鮮明に覚えている。父が帰ってきたことで、私たち3人は安心することができた。また父も本当に心配していたようで、無事を確認して安堵の表情を漏らしていた。

父が帰ってきてからすぐに、父の母と祖母が住む長田区に車で向かった。渋滞で車は少しずつしか進まず、普段なら35分で着く道のを2時間ほどかけて、祖母のいる家にたどり着いた。家の被害はそれほどなかったが、外見では小さな亀裂などはあった。家の中は2

階の壁がはがれ床が砂まみれになっていた。私たちが家に着いたとき、祖母はその砂の掃除をしていた。それを見た父は「こんなときに何しとんねん」と怒鳴った。父は祖母のことも本当に心配をしていたからこそ、出ってしまった言葉だろう。祖母の家には、私の父の兄で私の叔父さんとその、配偶者のおばさんも、祖母の家避難して来ていた。しかしこの家には電気は来てないようで、1階では曾祖母が電気毛布を使えず困っていた。長田は被害が大きい地域で、家も少し被害があることから、みんなで西区の家に行ったほうが安心だろうということで帰ることになった。しかし叔父さんは、会社の状態が心配だということなので、会社に寄ってから、私の家に来ることになった。

祖母の家の隣に住むSさん宅は、家が半壊状態だった。普段から付き合いもあり、父は困っている人を見るとほっておけない人なので、Sさんも家に連れて帰ることになった。西の空には、炎のせいで赤くなり、そこから黒煙が上がっていた。その炎が少しずつ家に近づいていた。車は5人乗りのため、父、母、兄、祖母、曾祖母の5人と、私は、母の膝の上に座り、6人乗るのが精一杯だった。そのため、父はSさんに「おばちゃん、すぐ迎えにくるからな。火が迫ってきたら東に逃げとけよ、絶対行つたからな。」と告げた。渋滞に巻き込まれながらも、車をとばして西区の家に着いた。そこでみんなを車から降ろし、すぐまた長田へと向かった。その時、兄も一緒に車に乗って行った。私も乗りたいと言ったが、母に止められた。

車はまた渋滞の中を通り、長田へと着いた。火は、まだ家にまで来ていなかった。しかし、近づいているようだった。父はすぐに西区の家に戻ろうと、Sさん夫婦を「もたもたせんとはやく」と急がせた。まだ若かったSさん夫婦は、持って行きたい物を取るのに必死だったのだろう。それは、やはり家が焼けることも覚悟していたのかもしれない。兄は「祖母の家もSさん宅、その付近も焼けるとすると、寂しかった」と言っていた。そして、無事西区に着き避難することができた。

夕方ごろのなると、水道、電気、ガス、のすべてのライフラインが復旧した。また、止まる可能性があるため、母はお風呂の水をペットボトルにためた。予想通り、水が止まることも何回かあった。私のトイレの水が流れなかったことを覚えている。

日暮れには、叔父さんも西区の私の家に避難してきた。また1人が増えたため、家族が10人になった。いや、叔母のお腹の中にいる赤ちゃんも合わせたら、11人である。実は、この赤ちゃんは震災で奇跡的に助かったのだ。地震が起こった時、叔母の体の大きな洋服ダンスが倒れてきたのだ。叔母は突然のことで逃げることはできなかったが、その洋服ダンスが観音開きのように開き、叔母のお腹がその隙間にスッポリと入り、母子ともに無傷で済んだのだ。そんな奇跡の赤ちゃんの出産予定日はあと10日ほどだったため叔父さんたちは、不安だっただろう。

夜も近づいたそんな頃、電話がやっと通じて、母親方の祖母・祖父に連絡がついた。祖母・祖父の家は広島県の北部にあり、震度も4で、被害はなかったという。私たちの安全や状況を伝え、祖母・祖父も安心したらしい。また、私たちも広島に被害がなくて、良かったと胸をなで下ろした。

家族が10人になっても遊ぶ訳ではなかったため、女の人は食事を作り、男の人はテレビのニュースをずっと見ていた。そのニュースには阪神高速が倒れている映像や、長田区が火の海になっている映像などがあったらしい。そんな映像を見ながら、小学1年生ながらも心を痛めたと、兄は言う。また、大人たちもとてもショックな映像だったらしい。父も昔は長田区に住んでいたため、長田の町が焼ける様子には、声も出なかったと語る。私もほんのかすかだが、その時の光景を覚えている。2歳という幼さでも、今がどういう時なのかを、感じていたのかもしれない。

3. それからの日々

1月17日を境に、今までの生活とは大きく変わっていった。

兄が通っていた小学校も避難所として使われ、1ヶ月ほど休校となり兄は、ずっと家にいた。震災翌日、買い物のため家の前にあるダイエーに行くと、開店前にもかかわらず普段では考えられないほどの行列だったそうだ。レジも大行列だったが、持てる限りの食材など、大量に買った。あまりに多い量だったのでダンボールに入れ、持ち帰った。家族が10人になった分、必要な量が分からず、とにかくいっぱい買ったのだ。

その日は、ニュースを見たり、話をしたりして過ごした。寝る時には、リビングとその横の8畳間で雑魚寝して寝た。他にも部屋があるのだが、ガスストーブが使えないためリビングのエアコンで暖かくするために、そのような形で寝た。また、余震が怖かったこともあった。

地震から何日かして、祖母とSさんと父と兄は長田の家の様子を見に行った。西の空に黒煙を立ち上らせていた炎は消え、普段通りの空があった。祖母の家は2階の壁がはがれ落ちていたことや、風呂場のタイルが壊れていたことなどの被害しかなかった。

Sさん宅は、ほぼ全壊状態で、2階に上がることは困難だったという。兄はSさん宅に入ったそうだが、今にも壊れそうで怖かったという。

家の状況確認と、大切な物などを取り出したあと、近くにある工務店に向かった。その工務店は父の同級生がやっていて、話をしに行った。話では、ライフラインがまだ完全に復旧しておらず、お風呂に入れないことに困っていたようだ。そのため、父はその家族3人に、西区の家にお風呂を入りに来てもらった。父は「泊まっていけばいい」とすすめたのだが、人数が多かったせいか、遠慮して帰った。それから何日間かは、お風呂を入りに家に来てくれ、いつも「すっきりした！」と言って帰っていったという。

地震から3、4日すると姫路に仕事に行った。単身赴任で姫路に住んでいた父だが、当分の間は毎日家に帰ってきてくれた。また、叔父さんとSさんのおじさんも仕事に出かけるようになったが、毎日西区の家に帰ってきた。3人とも帰りが遅くなることもあったが寄り道せず帰ってきてくれた。余震が続く中、女と子どもだけでは不安だったのだ。

1週間ほど経って、一番早く家を出て行ったのは叔父さんと叔母さんだった。叔母さんは出産予定日が近いということで、早めに須磨区の病院に入院した。それと一緒に叔父さんも家を出たのだ。1月25日、無事元気な女の子を出産することができた。祖母も出産後、赤ちゃんの世話の手伝いをするために長田の家に戻った。この女の子は現在も元気に育っている。

この頃のテレビのニュースは被害状況のニュースから避難所でのニュースが多くなった。長い時間避難所生活をして肉体的にも精神的にも疲れきっている人々が多くいたようだ。他には、ボランティアに関してや自衛隊の活動などがニュースとなっていたようだ。

4. 震災から3ヶ月

震災から3ヶ月経って、曾祖母とSさん夫婦は家を出て行くことになった。曾祖母は長田の家に戻り、Sさん夫婦は家を建て替えるため、長田に戻るのではなく、大阪の親戚の家に移った。家を取り壊す様子を私も見に行った。記憶はほとんどないのだが、ほんのかすかに覚えている。

3ヶ月経って、兄も学校に通うようになり、10人いた家族も元の4人家族に戻った。そして、父は姫路のアパートに戻った。なんとなくだが、人が少なくなったことを感覚的に私も記憶している。

私たち家族は、とりあえずは日常を取り戻したが、世間ではまだ避難所生活を強いられる人も大勢いた。

5. 震災から半年

少しずつニュースや新聞でも、震災の話題が減っていった。この頃、西区に引っ越して来る人が増えていった。そのほとんどが、私の家の近くの公園に大量に建てられた仮設住宅への入居だった。西区は被害が少なかったことから、場所的によかったのだろう。この仮設住宅がなくなったのは、私が小学校2年生くらいの頃だったと思う。

6. 現在

私はこの環境防災科に入って、阪神・淡路大震災のことについて、勉強させてもらった。また、震災当時の話を、いろんな方面で活躍されて方々の話も聞かせていただいた。その方々の話を聞いて、震災時の苦労などを少しだが知ることができた。どんな方々のお話も、当時行った活動は無我夢中で行っており、そんな人たちがいたからこそ、今の私がいるのだと思った。

6,434人の命を奪った、阪神・淡路大震災からは多くの教訓が生まれた。それは、備えの大切さであったり、助け合いの大切さだったり数えきれないほどの教訓を生み出した。現在では、その教訓を活かして防災の活動が確実に広まっている。

震災から15年経ち、震災を知らない世代が増えてきた。ほとんど記憶のない私だが、家族から聞いたことや、環境防災で習ったことを、震災を知らない世代に語り継いでいきたいと思っている。それが、環境防災科の使命だと確信している。

忘れてはいけない記憶...

柴田 重輝

震災時どうだったか

阪神・淡路大震災は1995年1月17日に起こった。このとき私は父と母と3人で暮らしていた。私は当時2歳だったので、阪神・淡路大震災が起こった時は揺れにも気付かず、ずっと寝ていたようだ。私は当時、垂水駅から徒歩10分くらいのところにあるマンションの10階に住んでいた。家が10階だったので地震が来たときは、とても家が揺れたようだ。家がとても揺れたせいで、食器棚が倒れてしまって、食器棚の中に入っているお皿やお酒などが全部割れてしまったようだ。しかし、たまたま自分たち家族が寝ているところに倒れてくるようなものがなかったので、家具とかの下敷きにならずにすんだ。ほかには、揺れがひどすぎて家のベランダの窓が左右にスライドしていたと母が言っていた。震災当時は地震によって、水、ガス、電気などのライフラインが全部ダメになってしまった。水が出なかったのも、このころは、お風呂にも入れなかった。ちょっと日が経つと家の近くに水がもらえる場所があったのでそこに水もらいに行っていたようだ。しかし、地震のせいでマンションのエレベーターが壊れて動かず公園でバケツに水は入るだけいれて、階段で10階まで水を上り下り何往復も運ぶのが大変だったようだ。

私たちの家族は、避難所へは行かず、まだ被害が少なかった、垂水東にあるおばあちゃんの家に移ることにした。おばあちゃんの家に移ってからは、マンションの時にくらべてだいぶ生活が楽になった。おばあちゃんの家にも、食器棚が倒れてしまって食器が割れてしまっていたので、ラップを食器替わりにして使っていたようだ。水がでなかったのも食器が洗えず、ラップにすれば洗わずに捨てるだけですむからラップでしたそうだ。おばあちゃんの家は被害が少なく、水がでていたようだ。しかし、冬だったので毎日お風呂に入らなくても良かったようだ。しかし、水は出ていてもガスはまだ回復していなかったようだ。だから、カセットコンロでご飯を作った。作ったご飯は、カップラーメンはお湯を入れるだけでできるから簡単なのでカップラーメンが多かった。ほかに作ったご飯は、ゆでたまごなど。しかし、ゆでたまごはカセットコンロで作るので火加減が難しかったようだ。

おばあちゃんの家に移ってからちょっとしたところに父の会社の友達の赤ちゃんが亡くなってしまったという連絡が届いた。亡くなった原因は、建物の倒壊による圧死だそうだ。そして、数日後にその亡くなった赤ちゃんの葬式に車で行った。しかし、その葬式をするところが灘だったので車で行くのは、何時間もかかったそうだ。灘に行くまでの車から見える光景は今まで見たことのない光景だったようだ。建物が無残にも壊れていたり、道路がひび割れていたりしていた。そして、葬式が終わりおばあちゃんの家に戻ってきた。

父の会社が西神にあり、そこは水とガスの復旧が早かったのもそこにお風呂に入りに行っていたようだ。数日後には、おばあちゃんの家にもガスが復旧した。復旧した順番は、電気が1番早く、次に水、次にガスだった。そこから1ヶ月ぐらいいは、おばあちゃんの家に住ましてもらっていた。その1ヶ月は風呂にもあまりは入れなかったし、ご飯もカップラーメンとかインスタントの食品が多かったようだ。そして、1ヶ月たつと自分が住んでいたマンションのライフラインの復旧が回復したのでマンションに帰った。

父の仕事の使命

阪神・淡路大震災が起こった午前5時46分前にはもう父は家を出ていて、車で仕事に出勤していた。そして、午前5時46分になり地震が起こる瞬間に、空が光ったと父は言っていた。父は雷が起こったのかなと思ったらしい。そして、雷と思った次の瞬間、多くの被害者を出した阪神・淡路大震災が発生した。車の中では、地震が起こったということは分から

ず、車がガタとなったから車のタイヤがパンクしたと思ったらしい。そして、地震による揺れによって車は反対車線に傾いてしまい、操縦が効かず反対車線に行ってしまったそう。そして、反対車線からこっちに向ってきている1トントラックにぶつかりかけた。もし、1トントラックにぶつかっていたら、おそらく死んでしまっていたであろう。そして、何時間もかけてなんとか西神営業所まで行くことができた。営業所の中を見てみると、いつもの営業所とは似ても似つかぬぐらいにぐちゃぐちゃになっていたそう。営業所の中の次に、営業所の前にある駐車場を見てみると、バスを停めてある車庫が割れていたそう。ほかにも、バスのタイヤを動かないようにタイヤの前と後ろに置いていたストッパーも最初置いていたところとは全く別のところに転がっていた。ここで分かったと思うが、父の仕事は神姫バスの運転手である。この地震のせいで、西神より西は電話がつながり、西神より東は電話がつながらないという状況になっていた。この地震がおきても数日後には、バスの運転手はバスを運行しないといけなかった。しかし、バスは運行するが、信号機がつぶれてしまっていて、お互いの車が譲り合ったりと、なかなかスムーズには運行がしにくかったそう。父は1月17日に営業所に出勤してから、営業所泊まり込みの生活が多かった。泊まり込みで全然家に帰れず家族の顔を見ることができなかったのも、家族のことをとても心配したそう。父も心配していたがずっと泊り込みの日々が続いたので、母や私も父の顔を見ることができないのもとても心配していて私はよく泣いていたので、それをなだめるのが大変だったと母が言っていた。また、家に帰るとしても、道路が壊れたりして、西神から垂水まで帰るのに普通なら車で1時間あれば行けるのにこのときは7時間もかかったそう。

この地震で、JRがとまってしまった。だから、一般市民は交通機関で運行しているバスを利用する人が多かった。このことによって、バスの運行の仕事が増えて、地震後から1週間ぐらいい家に帰ることはできなかった。1週間ぐらいい経ち、ようやく父は家に帰ってくることができた。そのときは、やっと家族の顔を見ることができて、とても、幸せな気持ちになったし、家族が無事で安心したそう。しかし、家に帰ってきて仕事疲れや次の日も仕事に出勤しないといけなかったのも早く寝てしまいあんまり一緒にいらなかったそう。でも、すこしでも父に会えて私は喜んでいと母が言っていた。そして、次の日の朝に私が起きると、父の姿はなくもう仕事に出勤していた。このような日々が1ヶ月間続き、父は、1ヶ月間連続出勤をした。なぜ、そこまで一生懸命するのかを聞くと、バスの運転手は人を安全に運ぶという仕事だし、自分が運転するバスに人を乗せるということは、人の命を預かるということでこれがバスの運転手の使命だと言っていた。そして何より、人の役に立ちたかったからと言っていた。

おばあちゃんからきいた話

阪神・淡路大震災の起こる前に朝目が覚めて、外を見るといつもより真っ暗になっていたそう。そして、地震が起こった瞬間に「ドーン」という音とともに家が揺れたそう。おばあちゃんの家は、垂水区の垂水東にあり2階建の一軒家だった。なぜだかわからないが、おばあちゃんの家は、食器棚が少し倒れて食器が割れたり、1階のストーブの上に置いてあったやかんが飛んだそう。あと2階のテレビが倒れたそう。垂水区内だがあまり被災しなかったのだ。そして、幸いおばあちゃんの家では、当時4人住んでいたが偶然家族全員2階で寝ていた。もし1階で寝ていて、家が倒壊していたら自分たちは、家の下敷きになっていたと思うと言っていた。おばあちゃんが寝ていた部屋のテレビが落ちたがよく自分のところに落ちなかった。これが当たると、確実に怪我もしくは死んでいたかもしれないと言っていた。そして、地震が来てからちょっとしたあと、外を見てみると自分の家の車や周りの家の車とかに、黒いものがついてた。これは何かというと、その頃に起きていた長田での火事による黒いすすだったそう。家に帰りすすを流そうとして水道の蛇口をひねったが水は出なかった。しかし、庭に出てみると隣の家は洗濯をしていた。おばあちゃんは、周りの家も自分の家と同じように水が出ていないと思っていたが周りの家は水道の被害をうけない

で被害をうけたのは自分の家だけということはこの時知ったと言っていた。やはり比較的この地域は震災の被害を受けた家が少なかったんだなと思った。この水が止まってしまったという原因は、水道管の破裂だったそうだ。そして、なぜかこの家の水道管の水は、自分の家の下にある家に流れていると下の家の人が教えてくれたそうだ。水がないと何にも出来ないなので、おじいちゃんは、消防署なら水ぐらい置いてあるだろうと考えて、灯油を入れたりするタンクをもって家から徒歩 30 分弱ぐらいのところにある消防署に水をもらいに歩いて行ったそうだ。そして、消防署で水をもらうことができて、水が満タンに入ったタンクをまた家まで 30 分ぐらいかけて戻るのがしんどかったと言っていた。そして、水を得ることができたので、おばあちゃんの家にいる中で 1 番小さかった私を 1 番最初にお風呂に入れてくれたそうだ。被災後、ライフラインが復旧するまでで大変だったことは、お風呂とトイレだったそうだ。トイレのために水を使わないといけなかったのでお風呂の水を節約していたそうだ。あと、電気もまだ回復していないのでお風呂に行くときは、ろうそくを 1 本もっていきその明かりだけで我慢していたそうだ。

用事のためポートアイランドにある神戸学院大の近くにある病院に行かなくてはならなくなった。まだこの震災の影響で道路が割れたり、建物が壊れたりしていたので、車は使えない、使ってもとても時間がかかると思い、自転車でポートアイランドまで行ったそうだ。そして、ポートアイランドは埋め立て地だから液状化が激しかったそうだ。

親戚の人に聞いた話

震災が起こった前の日に寝るのが遅くて、Hさん宅では 1 月 17 日の 5 時 30 分くらいに旦那さんの目が覚めた。その時にHさんも起きて「朝食を作ろうか?」と言ったが旦那さんに「寝とっていい」と言われ二度寝して深い眠りについてしまった。そのせいで地震の揺れに、はっきりと気づくことが出来なかった。しかし、なにか状況が変だと気づきとっさに隣で寝ていた赤ちゃんをひきつけようと右手をかけた瞬間何かが倒れてきてそのまま圧迫され動けない状態になってしまったそうだ。そして、子供の「ギャッ」という悲鳴が聞こえそれ以降名前を呼んでも応答が無かった。旦那さんの名前を呼んでも応答はなかった。この時旦那さんは、頭を打って気を失っていたそうだ。しばらくすると近所の人が自分の家族の名前を呼び始めた。しかし、やはり他人よりも自分の家族の命を優先するのでなかなか助けてもらえなかった。なにもできないままの状態でも 1 時間ほどたち 7 時くらいまでになると親戚の人が救助しに来てくれて、旦那さんの足が少しだけ見えていたので一番最初に救助された。旦那さんの見つかった位置から考えて次にHさんが救助された。その後にレスキュー隊が来てくれて次に赤ちゃんの救助にあたった。赤ちゃんはレスキュー隊によって救助され、トリアージ（今治療すれば助けるかもしれない人を最優先して治療する考え）の考えから、赤ちゃんは救助されると旦那さんに抱えられた。後で分かったことだがHさんが「大丈夫?」と聞くと旦那さんは「大丈夫だ」と言っていたがすでにこの時には赤ちゃんは息もしていなかった。たぶんここで嘘をついたのは、Hさんに心配をかけたくなかったのであろう。その後すぐに病院に搬送され心臓マッサージを受けたが、赤ちゃんは亡くなってしまった。当時、2 階建ての文化住宅に住んでいて、この地震によって家は 1 階が倒壊してしまった。家で死んでしまったので検死をしないとイケなく体育館に行った。そうすると、体育館は遺体だらけだったそうだ。すると、検死官の人に 164 番という番号札をもらったそうだ。順番を待っていると、検察医の人が倒れてしまいさらに時間がかかったそうだ。結局、検察をしてもらうのに 2 日間かかったそうだ。診断結果は、圧死だった。検察が終わった後、その遺体を焼かないといけなかった。しかし、焼きたいところだがみんなも同じ考えなので、焼く順番が来るのに 5 日かかったそうだ。しかし、遺体を焼くにしても、遺体をそのまま焼くとだめなので体育館で棺桶の数が足りないともめあいになったそうだ。Hさんの赤ちゃんの棺桶は私のおじいちゃんが用意していたのでもめあわなくて済んだ。しかし、隣の家の 20 歳の男性は棺桶がなく毛布でくるんでいたそうだ。検察を待つ時の 2 日間の間に救援物資が体育館に届

いたそう。その届いたものとは、1人おにぎり1個とたくわん1切れだったそう。救援物資が届くと、自分の親族の遺体を検死してもらいに来ているのもかわらず、「われ先に、われ先に」と救援物資を求めていたところを見て「人間の悲しさを感じた」と言っていた。震災後の体験の中で、この体育館の生活が一番しんどかったそう。

住宅が倒壊してしまったので住むところをかえなければいけなくなった。しかし、避難所にはいかず、近くの寺の集会所があいているということでそこに住まわせてもらうことになった。そこには、布団も用意されていたそうだが今までとは全然違い、非現実的な感じがしたと言っていた。ライフラインは、電気はその日の夜についた。電気が使えるようになるまでは、ろうそくの明かりだけで電気の代わりにしていたそう。ほかのライフラインのガスと水はなかなか回復しなかった。しかし、2軒隣にある家には井戸がありそこから水をもらっていたのでトイレなどの水には困ることはなかったそう。しかし、トイレは汚物でてんこもりになっていた。水に困らなかつたといつてもお風呂にはなかなか入ることができず、10日目になってやっと入れたという。震災のあと一番最初に食べた食べ物は、おじやだと言っていた。ほかにもカセットコンロを使ってほかの料理もしたそうだがその料理は全然記憶になくおじやがとても美味しく一番印象に残っているそう。

震災後、寺の集会所からでて自分の家をかまえたのは、3月になってからのことだった。しかし、家は回復できたが、震災で自分の子供をなくしたというショックから立ち直るのは、1年ぐらしかかったそう。最後にこの阪神・淡路大震災によってたくさんの死者、負傷者がでた。「しあわせ運べるように」の“亡くなった方々の分も、毎日を大切に生きてゆこう”という歌詞にもあるように、自分たちも亡くなった人たちの分まで、一日一日大切に生きて命を大切にしてほしいとHさんは言っていた。

感想

この機会に震災について親に聞き、今まで知っているようで知らなかったことをたくさん見つけることができた。実際、私たちの家族はあまり大きな被害が出なかったので、実感を持っていなかったわけではないが、実際に大きな被害を受けた人の話を聞き、よりこの震災の実態をリアルに聞くことができて今までよりいっそう阪神・淡路大震災について実感がわいた。この教訓は、後世に語り継いでいかなければいけないと思ったし、タイトルどおり忘れてはいけない記憶だと思った。

ワタシノ震災体験

高岸 冨佳

私が震災を体験したのは 2 歳の時だったので記憶は全然無く、お母さんやお父さんに体験を聞くことでしか震災の事が分からない。

なので、お母さんとお父さんに聞いた話を書いていくことにした。

母からは地震が起こった後の状況など、父からは、仕事場でのことを分けて書いていく。

母から聞いた話

地震直後

5 時 30 分頃の地震が起こる前に、生まれて生後一ヶ月くらいしかたっていない弟が泣き出した。母が弟のベビーベッドから自分の布団へ移動させて、ミルクを飲ました。寒かったためそのまま母の布団の中に入れて一緒に眠った。

そしてその後地震が発生した、母は下から着き上がるような揺れを感じた。

母は、あわててベビーベッドに駆け寄った。暗くて弟の姿がよく見えなかったため、すぐ焦ったが、弟を自分の布団に移動させていたことを思い出して安心した。

弟を移動させたのはほんの 15 分前だったというのに、それを忘れてしまうほど地震の揺れはすさまじいものだったのだなと思った。

弟は夜、いつもよく寝ていて目を覚まして泣き出す事はなかったのに、今日のこの日に限って目を覚まして泣き出した。もし、泣き出していなかったら、弟は死んでしまっていたかもしれない。

本棚を弟のベッドで押さえていて、その本棚には広辞苑などの分厚い本があり、それがベッドの上に落ちてきていた。

この出来事で、母は生まれて間もない赤ちゃんには動物的な感をもっているのだなと思ったらしい。

動物的な感といえば、時間は地震が起こる前日に戻り、母が、用事でおばあちゃんの家に車で走っていたとき、いつもは鳥がいる池に 1 羽もいなかったらしい。

おかしいなと思っていたら、その次の日に地震がおこったため、母は今でもおばあちゃんの家へ行く時は池を見てしまうそうだ。

3 つの奇跡

地震が起こって父はいつも冷静なので「世も末やな」と言った。

そんな言葉が出てしまうくらいの揺れで、「家はよく壊れなかったね」と母はしみじみ言う。「家が小さかったから潰れずにすんだのかもね」と父が言った。私たちは運が良かったのだ。

家が潰れなかったことで私たちは下敷きにならずにすんだ。そして弟のことにしても運が良かった。そして運が良かったと思うのはそれだけではない。

地震が起こってから、私と兄は母の隣の部屋で寝ていたため、母は無事かどうかの様子を見に行くと、まだ私たちは寝ていたらしい。

私と兄が寝ていた部屋は 4 畳の部屋で、部屋には横に長いタンスが置いてあり、タンスと壁との間に隙間がないため横に対する揺れは問題ないが、縦に揺れると天井とタンスの間には差があるため弱い。そしてタンスの上に 4 つの収納ボックスを置いていた。

そしてその収納ボックスは私の頭の上、顔の横、兄の顔の横、体に平行に落ちてきた。言い換えると私が寝ている隙間以外はタンスの上のものが落ちてきたという事だ。

ある意味奇跡的に私たちはものにあらずにすみ無傷であった。

三つの奇跡が起こったおかげで私たちは今生きる事ができる。母の話を聞いて、もし、弟が泣き出さなかったら、家が潰れてしまっていたら、ひとつでもタンスの物がわずか 2 歳と 3 歳である私と兄に当たっていたら、そう考えると、怖くなった。

ほんとうに運が良かったと思う。

家の状況

母は兄に「さえか（私）とさとし（弟）と 3 人で布団の中に入って守ってあげなさい」と伝えて、布団の中にいれて、収納ボックスは当時の私たちよりも大きかったので、それで私たちが入った布団を囲い、もしまた地震で何かが落ちてきても身を守れるようにしてから、父と一緒に一階に下りた。

台所を見てみると鍋はガラスでできていたため割れてしまっていて、食器棚は戸が開いて中に入っていた食器もみんな前に落ちて割れてしまい、スリッパを履かないと中に入れないようになってしまっていた。

その台所をとりあえず放置して、外を見に行くと、家の外壁と門扉が倒れてしまっていて、外壁が倒れたおかげで、その近くの植物は根っこがむき出しになっていた。

その時空を見上げると東側が真っ赤になっていた、あとで聞くとその時兵庫区が燃えていたらしい。

私の家自体はもともと沼地だったところに建てられていて、さらに建てられているところが坂道の場所だったので、地震が起こる前、前に市営住宅が建てられる関係で、家屋調査がおこなわれたとき、「家が傾いていますよ」と言われた。

そして地震発生したあと「きつともっと傾いてしまっただろうな」と思っていたが、その後の罹災調査が来たときに“一部損壊”となったが、家の傾きは地震のおかげで逆に水平になったことがわかった。そういう意味ではよかったが、家の傾きを戻すほどの力が地震にはあるのだなと思った。

家族の状況

父は明石市役所で働いている公務員で、出勤命令が出たので、バイクで市役所に行った。しかし周りの家族の家の人たちは仕事をやすんで家の片付けをしていたので、「公務員やからしかたないけどすごく悲しくなった」と思った。しかしそれと同時に「子どもたちは私が守らなあかん」と思い気がひきしまったそうだ。

とりあえず家の危ないものはのけて掃除をし、子供たちが下に降りられるようにして 2 階にいる兄たちを呼びに行くと、私たちはまだ布団の中にずっと我慢して入っていたらしい。地震発生が 5 時 46 分、そして呼びに行った時の時間が大体 11 時だったので、約 6 時間子どもたちは布団の中にいたということになる。これは兄が母に「守ってあげなさい」と言われたことで、ずっと私たちを布団から出さないように守っていてくれたからである。

母は「兄はまだ 3 歳だというのに、2 人を守って布団から出なかったのはすごいな」と思ったそうだ。

生活していくために

地震のおかげでガスも電気も水もすべてが止まってしまった。

食料は冷蔵庫にあった食べ物が残っていたからそれですこしはしのげたようだった。洗濯の水にお風呂の水を使用していたため、水がお風呂に溜まっていたので、それをトイレのタンクに移してトイレの水として活用していた。

しかし飲み水はなかったため、近くのマンションの屋上にある水道タンクに水がたまって

いると聞いて、それを分けてもらい子供たちに飲ましていた。ガスは止まっていたので、ガスコンロのプロパンを使ってお湯を沸かした。

その夕方（とはいえ午後 2 時くらい）食料調達のために被災地から少し離れた明石まで行った。いつもなら車で 30 分あれば着けるところが行きは 2 時間、帰りは 3 時間かかった。明石で買えたものはウィンナー、ねりもの、加工食品だった。

食料は何とかなったが問題はミルクだった、弟は生後一か月、まだ母乳で生きており、母は水を十分に得られなかったため（母の分をなるべく子供たちに分けていたため）母乳が出なかった。そこで前に買ってあった粉ミルクと唯一ある水でミルクを作って飲ましていた。

それから 4 日くらいして、前の市営住宅を造っていた工事現場の人が家を訪ねてきてくれて（地震が起こる前からコミュニケーションをとっていたため）、「何か困っていないか？」と聞いてきてくれた。母は「食べ物は分けることができるけれど、水に困っています」と答えた。すると次の日から水と粉ミルクと缶詰を持ってきてくれた。しかも水は毎日新しいものを持ってきてくれたのだ。この工事現場の人は明石に住んでいて、明石は地下水の水だったので、水道が止まることはなかったらしい。

工事現場の人が食糧品を持ってきてくれたおかげで、すごく助かったらしい。前々からコミュニケーションをとっていたからこういうことができたわけで、日頃からのコミュニケーションは大切だなと感じたらしい。

大久保の実家へ

1、2 週間して、毎日そういう暮らしをしていたが、明石の実家に避難ということで帰ることにした。父も明石の仕事場で毎回垂水に帰ることができないので母の実家へ疎開していた。

私たちだけでなく、お父さん側のおばあちゃんやおじいちゃん、親戚も母側の実家に来てお風呂を借りにきていた。

それが理由なのか、ある日おばあちゃんの家のプロパンガスが突然止まった。おそらくいつもおばあちゃんは一人生らしでプロパンも一人で足りるような量をつかっていたが、みんながおばあちゃんの家避難してきたことで、プロパンが足りなくなって止まってしまったのだらうと思う。家族では「プロパン事件」と呼んでいる。

人とのつながり

そしてちょうどそのころ、ネットが復活してきたので、母はインターネットを使って「ミルクとおむつと食料品に困っています」と SOS を書いた。

それを見た友達や、見知らぬ人から家の 6 畳の部屋が埋まるぐらい、たくさんの物を送ってきてくれた。おむつは 30 袋分、一年分の量になるミルク、食料は缶詰、お菓子、乾パン、のりというような保存のきくものを考えて送ってきてくれた。

ただおむつに関してはサイズが S でサイズが小さすぎて使えなかったため「せっかく送っていただきましたが、同じように子供を抱えているお母さんに分けます」と書いた。すると今度はいろんなサイズのおむつを送ってきてくれた。

とくに送ってきてくれた中で S さんは顔も知らず、面識のない人だったのに真っ先に「大丈夫ですか!？」と電話をくれた、電話は輻輳していてなかなかかからないはずなのに、なぜかけることが出来たのかというと、当時携帯電話はあまり浸透していなかったため、携帯電話で電話するとかかると優先的にかかるとのことだった。その時母は携帯のすごさを感じたらしい。

また Y さんは子供たちのお見舞い（食べ物）を送ってきてくれた。今でもいかなごを送ったりしていてもっと関係が深くなって仕事でも協力する仲になっている。

この人たちやほかにも支援してくれた人たちに触れ、人の温かさを感じ、つながりの大切

さを感じた、と母は言っていた。

その後の出来事

母は地震が起こってからのことをまた子供たちに伝えようと思って日記を書いた。

それを大阪のお父さんの友達の家にも保存してもらった。するとその日記をみた友達が、リュックに食器や水、食べ物、米など思いつくものを入れてそれを背負って、大阪から家にやってきました。突然来たので「どうしたん？」という感じではあったが、わざわざ交通も整備されていない中で大阪から来てくれた友達のことをすごいなと思い同時に感謝した。

兄は当時 3 歳で明石の保育所に通っていたのだが、地震の後の保育所には「開けているけれど、来れる人は来てください、保育料はいりません」と言われた。というのも保育所は地震の影響で十分な対応ができなくなっていたらしい。兄は地震の後も保育所に通い、結果的に 1 月～4 月まで保育料は払わずに保育所を終了した。

私の保育料に関しては地震が起こってから幼稚園に通うまで安くなった。

私が通った幼稚園は愛徳幼稚園なのだが、地震が起きた当時の愛徳幼稚園は建物が全部つぶれてしまったらしい。しかし体育館は残っていたので、その時の 4 月に入園した園児は体育館を 4 つの教室に分けて、仕切りのない教室で保育を受けていた。

お父さんから聞いた話

地震直後

地震が起こったとき、家が壊れるのではないかと思った。今でもよく壊れなかったと思う。きっと家が小さかったから壊れなかったのだろう。

下に行くと奇跡的にパソコンは壊れていなかった。結構不安定な置き方をして、きっと壊れているだろうと思っていたから驚いた。

まず仕事現場に電話をかけた。父は下水処理水を川まで運ぶ 1 キロの処理水の放流管を作っていたので、無事か心配になったが、現場のほうは大丈夫だったらしい。その後、市役所にも安否確認で「生きています」と連絡をした。

次にラジオを聞いた、すると「ポートアイランドが沈んでいる」とか「高速道路が倒れる」「火災が起きている」と言っていた。外に出て空を見上げると神戸のほうは白い煙で覆われていた。

ある程度の家片付けをしてから、安否確認の連絡をした時に「(会社)に出てきてください」と言われていたので、バイクに乗って出勤した(父は明石市役所に勤めている)。

市役所に着いたのがだいたい 10 時くらいだったので、倒れた本棚などが大分片付けられていた。明石市役所は神戸市役所ほどの被害はなかった。

現場の点検をしに行き、壊れたところの状況確認をしに行った。

地震後の仕事

まず災害復旧工事設計書の作成をした。これを作るのに 3 月までかかった。

そして災害復旧工事設計書を持ち 4 月からは県に出向し(三宮)尼崎、三宮、芦屋などの阪神間の市の補助申請をしに行った。

補助申請とは、こういう方法で物を復旧します、そのためにはどれだけのお金が必要なので、そのために補助金を使うことを許可してください、ということをするのである。

補助金を使うためには許認可義務があるので、父は作成所を作り、その許認可を県にもらったのである。

ちなみに本来この申請を認めるのは国であるのだが、国もたくさん移動できるわけではな

いので、県が国の代わりに申請を受けている。

なぜわざわざ補助金に許認可が必要なのかというと、各市で復旧する方法がばらばらであると、時間もかかる、効率が悪くなる、補助金に関して不公平が出る（県のお金ではないので不公平にできない）、などいろいろ困ることがあるので、復旧する方法も大体決まっており、まず申請してもらいそのあと、県がこのようにして復旧を行ってくださいと説明する必要があるらしい。

ちなみに災害復旧設計書は普通コンサル（設計書を作る専門の人）がおり、その人に頼むそうなのだが、コンサルはみんな神戸のほうに行って明石のほうにはいなかったもので、父が作ったらしい。父は2年間県へと出向していた。

「忘れてはいけない。」

高瀬 美草

記憶

当時、私はまだ二歳で阪神・淡路大震災のことを何ひとつ覚えていない。これまでの先輩たちのように自身が体験したことを書くことができない。そのため、ここに書かれていることは、すべて母や父の話をまとめたものである。けれど、私はこの「語り継ぐ」を書くにあたって、母から震災の話を聞くにつれ、記憶がなくともあの大きな災害を経験した残りわずかな世代として、震災を経験していない次の世代に責任をもって語り継いでいこうと思うようになった。

1995.1.17 5:46

当時住んでいたマンションの南側の一室に母、兄、私、双子の妹の四人で川の字になって寝ていた。突然、下から「ドンッ」と突き上げる音で母は目を覚ました。「なに?!」ベランダ側の窓を見ると、カーテンが波打つように左右に揺れている…というよりも動いていた。カーテンを見て「えっ…?」と思った矢先、家中のそこら辺のものがガシャガシャと音をたてた。「これはあかん!」隣に寝ていた私たち三人を自分の元に引きよせ、上に覆いかぶさるようにして、母は揺れがおさまるのを待った。

家族と仕事

揺れがおさまった6:00頃、玄関隣の北側の部屋で寝ていた父が何かを叫んでいた。リビングに入る扉の横にある棚が倒れていて、扉を開けることができなかったのだ。母が棚を持ち上げた。父はリビングに入るとすぐさま勤務先である地元のテレビ会社に電話をかけた。会社の方もすごい被害だったらしい。父は電話を切るとすぐに支度をし、私たち家族を置いて会社に飛んでいった。次に父が帰ってきたのは、翌日18日の晩だった。しかし、その晩も母におにぎりを作ってもらおうと、すぐに会社に戻ってしまった。

父の会社があるポートアイランドは人工島だったため、地震によって液状化現象が起こっていた。そのため、一般車両は通行止めとなっていた。父は、報道車両として通らせてもらうことができた。島に入るとそこは、海の中に街があり、車体まで水に浸かるほどひどい被害だった。また、ポートアイランドをつなぐ神戸大橋が二つに割れてしまったため、ひどいところでは30センチ差ぐらいの段差を飛ぶようにして渡っていった。

会社はひどいことになっていた。停電していたため、真っ暗な非常階段を手探りで11階まで登った。ロッカーは倒れ、機材類が落ち、資料やテープが散乱し足の踏み場がなく、また辺り一面が水浸しとなっている。そんな状態でもなんとか通常番組は放送できているようだった。8時15分、地震報道の第一声を伝えることができた。地震発生から既に2時間を経過していたが、この状況下では仕方ないことであった。

後日、父は交通状況が悪いのが原因で自動車では移動が不便になったため、バイクを買って会社に通勤するようになった。バイクで通勤するようになってからは、その日に帰ってくるようになって家族みんな安心することができた。

母の孤独と不安

父が行ったあと、母が真っ暗の中のリビングを歩こうとすると、足元でガシャガシャと音がなった。懐中電灯で見るとグワァーっと食器のガラスの破片が広がっていた。食器棚

の戸は閉まっていたため食器は大丈夫だと思っていた。しかし、本当は揺れがおおきすぎたために、中身がすべて出てしまってから、また戸が閉まった状態になっているだけであった。このため当時の食器は全部割れてしまって現在はもう残っていない。幸い、食器棚が倒れなかったのは、購入時にマンションの梁にぴったり合うものにしていたためだ。

父が不在のため、母と兄が給水車に水をもらいに行っていた。他に並んでいる人を見るとお父さんらしき男の人ばかりで、まるで母子家庭のようだった。こんな状況なのに父が居ないのが心細く不安だった母は、マンションのお隣さんやご近所さんに「避難する時は一緒にさせてください。声をかけてください。」とお願いをした。また、ラジオを聴き、テレビを見るなどして情報を必死に集めようとしていた。

地震が発生した17日は、冷蔵庫はほとんど空っぽで少し寂しい状態だった。前日の16日は、三連休だったため母方の祖母のところへ母と兄妹三人で遊びに行っていたからだ。そのため、パンか何かを買いたいと思い、夕方にマンションの下にあるコンビニに行ったが、なんにも置いておらず空っぽの状態だった。店員に聞いても「次はいつ入荷するかわからない。」と言われただけだった。母は、16日のお昼は三田の美味しい中華料理を食べて、おじに送ってもらって、とても幸せなひとときだったから、まさか翌日にこんなことが起きると思っていたなかったと話していた。祖母は地震が起きた後、「帰らさなければ良かった。」と何度も思ったそうだ。

子供たち

母が片づけている間、私たち兄妹は状況がよくわかっていなかったのか、泣きもせず布団の中で眠っていた。地震直後も「何かあったの？」というような顔をし、起きた時の第一声は「お腹が空いた」となかなかのんきだった。

母の片付けが終わってから、朝食にビスケットを食べた。「お母さん、朝からおやつ食べていいの？」と私たち兄妹はとても嬉しそう食べていたという。また18日のお昼にコンビニに行くと、たまたまお弁当が入荷しており、お弁当をいくつか買って帰り、食卓に出した。それまでお菓子やおにぎりしか食べていなかったからだろう、「わあ！おかずがある！おかず食べていいの？」と私たち兄妹はまた嬉しそうに食べていたらしい。のんびりとしていて良いのか悪いのかはわからないが、母は子供たちがいたから父のいない不安や孤独さを乗り越えられた。

5歳の兄

1月17日の翌日の1月18日は、兄の5歳の誕生日だった。しかし、地震発生の翌日ということもあり、とてもお祝いをしてあげることができる状態ではない。兄はそれに対して、わがままも文句も言わなかった。母や父の姿を見て、何か察したのだろうか。4～5日後、三木に住んでいる友人が、「よしくん誕生日やったのに、なんもできなかったやろ。」と手作りケーキをもってきてくれ、なんとかお誕生日をお祝いしてあげることができた。

兄が通っていた幼稚園は、須磨区にあったため全壊の被害を受けた。1ヵ月後ぐらいには仮設幼稚園が建ち、兄は年中さんの3学期から年長さんの最後・卒園式まで仮設の幼稚園で行うこととなった。翌年、私たち姉妹が体験幼稚園に行ったときもまだ仮設のままだったが、入園するときには新しい校舎が建っていた。

地震発生から何週間か経ち、水がでるようになった。洗濯物が少しずつできる状態になり、母は2～3日同じ服を着ていた兄に「そろそろ、お洋服着替えよか。」と言うと「まだ汚れてへんからいいよ。」と兄は答えた。5歳になったばかりの幼い兄は、ここでも事の重大さを理解していたのだろう。兄は元々、大人しく優しい性格だったため、普段からあまり周りに迷惑をかけない子供であったからか。いや、きっと兄だけでなく当時の子供たちはみんな、小さいながらも両親の姿や周りの環境を見て、この震災で起きた大変さを察していたに違い

ない。

ライフラインと友人

地震直後、マンションは停電していた。しかい、朝だったためあまり気にならなかった。それに電気は、水やガスに比べすぐに復旧した。母は、お湯を沸かすのにコーヒーマーカーを使い、顔を洗うときなどのために洗面所において沸かしていた。

電気とは対象に水とガスの復旧には約1ヶ月はかかった。水道が止まってすぐに給水車はこなかったが、マンションの住人で昔の友達が、バイクに乗って私の家の分もポリタンクに入れてきてくれた。以前マンションに住んでいて、三木に引っ越した友人が、40リットルのポリタンク3〜4杯を三木の自宅から車でわざわざ運んできてくれた。このとき、母の近所づきあいの良さやこのマンションのコミュニティの強さを感じた。

災害から約3週間後の2月の頭に水を運んでくれた三木の友人の家にお風呂に入らせてもらうのと、山のようにあった洗濯物をさせてもらうために家族全員で向かった。

また、ガスも水もなかなか復旧しないため18日に食べたお弁当以来、何週間かまともな「料理」を食べることはできなかった。

しあわせ運べるように…

私は、父が毎年1月17日の5時46分に1.17追悼式の中継を見ながら、黙祷をしていることを小学4年生くらいのときに知った。それから毎年1月17日は5時過ぎには起床し、5時46分にはテレビの前で父と一緒に黙祷をした。46分になる前にテレビを見ながら父が「あの時は大変だった。」と真剣なまなざしで話してくれたことを覚えている。当時、小学生だった自分が、なぜあの日だけは簡単に5時に起きることができたのかわからないけれど、きっと小学生なりにこの日の意味や重要さを理解していたのだろう。

私の通っていた小学校では、「今月の歌」というものがあつた。1月の歌は、私が通った6年間変わることなく「しあわせ運べるように」だった。私はこの歌が今でも大好きだ。小学生の頃でもこの歌にこめられている意味はなんとなく分かっていて、悲しいけれど前向きな曲だなと思っていた。ただ、深読みはせず、気持ちをこめて一生懸命歌おうとしか思っていなかったが、中学生になってからこの歌を聴いたり歌ったりすると、涙がでるようになっていた。きっとこの歌の成り立ちや阪神・淡路大震災について理解できたからだろう。自分のなかで何かが変わったことや成長したことに気づいたときだった。

舞子高校環境防災科

正直、なぜ自分が環境防災科に入学したのかはよくわからない。けれど、今は環境防災科に入学して本当に良かったと思っている。たくさんの外部講師の方の話を聞き、さまざまなボランティア活動に参加して、こんな経験ができるのは環境防災科だけだと思う。私は、環境防災科でボランティア活動を行ったことによって将来自分がやりたいことを見つけることができた。だから、恩返しという形になるが、環境防災科で学んだことを少しでも多くの場所で多くの人に広げていきたいと思う。

1.17 追悼式

高校一年生のとき、初めて追悼式に参加した。今までテレビを通して見ていただけの追悼式・東遊園地の場にまさか自分が立つことになるなんて思ってもいなかった。東遊園地に着くと緊張感に包まれており、とても静かだった。5時46分になる前にみんなでろうそくに火をつける。お互い知らない人でも、ここに来ている＝同じ思いをもっているということな

のだろうか、ボランティアの方や遺族の方など様々な人と会話をさせて頂いた。黙祷をしているとき、亡くなった方々のために、残された私たちには、環境防災科生として学ぶ私たちには、いったい何ができるだろうと考えた。遺族の方の泣いている声が聞こえた。答えは一つではないから、これからも探していく。追悼式に参加して頭だけで考えていたことが、あの静けさや緊張感を肌感じたことによって、自分の考え方に変化が起きた。私はこれからも必ず追悼式に足を運ぼうと思う。

次世代の子供たちへ

阪神・淡路大震災から15年経った今、やはり少しずつであるが震災の記憶が風化されつつある。この風化を防ぐために「語り継ぐ」ということがあると思う。この「語り継ぐ」については、特に今の高校1年生から赤ちゃんまでの子供たちに伝えたい。

自分の両親でも祖父母でも近所の人でも顔見知りの人でも、誰でもいいからその人から直接、震災体験を聞いてほしい。その話を聴いて、どう思ったか、自分たちに何ができるか、なんでもいいから考えてほしい。その考えたことを学校や周りの人に言葉にだして伝えてほしい。そして、最終的には聞いたお話を自分の口から誰かまた別の人に話してほしい。一人でも多くの人が誰かと一緒に災害や震災について考えたり、悩んだりすることが、これからの「防災」につながり、また阪神・淡路大震災で亡くなった方々のために、私たち誰もができることだと私は思うから。

震災の記憶

高田 悠生

私自身

私自身が覚えている震災は、「数十秒間の地震の揺れ」だ。それは、フラッシュではなく映像であるのだが、自分と家族をはたから見ている記憶の部分もあり、どこまでが実際の記憶で、どこからがあとで自分の中で編集された記憶なのか、あやふやなところもある。

その記憶は、当時住んでいた神戸市西区学園都市のマンション6階にある自宅の2階、両親の寝室で始まり、そこで終わる。始まったらすぐに終わってしまう、本当に短い記憶なのだ。(当時住んでいた家はマンションの6階にありながら中で1階と2階に分かれていて、つまりその寝室は事実上7階に位置していた。)

私は両親のベッドの上で毛布にくるまり、当時11歳の姉に抱かれて、理解できない揺れに怯えていた。当時2歳の私の世界に「地震」という言葉はおろか地面が揺れるという現象さえまだ登録されていなかったのも、本当に何が起きているのかわからない、という感じだった。その両親の寝室には母と祖母もいて、みなで固まって揺れが収まるのを待っていたように覚えているが、揺れている間、母と祖母がどうしていたかは、もう思い出せない。昔は覚えていたように思うので、きっと十数年の間に記憶として欠落してしまったのだろう。

部屋は薄暗かった。しばらくすると、揺れが収まり、母が「お皿やテレビは落ちていないか、下(6階)を見てくるね。」と言って階段を降りようとしたときに「いっしょに行く!」といってついていこうとしたのを「お姉ちゃんと待っていなさい」と言われ、母が祖母と一緒に降りて行くのを姉と二人で見っていた。

ここで私の記憶は終わりだ。十数年のあいだに、感情的な記憶は薄れてしまい、状況だけはいかろうじて残っている、という感じがする。しかし、その薄れていく記憶の中で、残っている記憶というのは、幼い私にとってそれほど印象深かった、ということであり、かえって薄れていく中で、その時の自分の感情を再確認できるのかもしれない、とも思うのだ。

たとえば、なぜ私は、その時くるまっていた毛布がパディントンの絵だったとおぼえているのだろう。なぜ私が覚えている唯一のその時の会話が、下の様子を見に行けなかった悔しい思い出のものなのだろう。なぜ、その時その部屋にあった家具は覚えていないのに、ベッドのどのあたりに座っていたのかを覚えているのだろう。

わからない。そして、この記憶は、今後なんらかの防災に貢献できるものなのかどうかも、わからない。でも、私はこの記憶を忘れないでいたい。なぜならそれは、家族や他の大勢の被災者と私が、自分の記憶として共有できる、唯一の記憶だから。

そういえば、私には別の種類の「震災の記憶」がある。直接的な地震の記憶ではないが、まぎれもなく震災の記憶と言えると思う。

私が震災当時に住んでいたのは、冒頭にも書いたが、神戸市西区にある学園都市だった。そこは計画的に開発されたニュータウンで、当時はまだまだ開発途上にあった。加えて、山を切り開き削ってできた場所だったので、地盤もしっかりしている上にたくさん土地がまだあった。

そういうわけで、学園都市にはその後何年間かずっと仮設住宅が立ち並んでいた。「湯」というのれんの下がった仮設の銭湯もあった。私はクリスチャンで小さい頃から伝導をしていたが、もちろん仮設住宅にも行っていた。記憶ではそこに住んでいる人の大半はお年寄りで、一人暮らしの人でも少なくなかった。そこに住むお年寄りの方は、幼い私が来るととても喜んで、孫のように可愛がって下さった。飴や果物を下さったり、おもちゃを買って下さったりもした。私はその時単純にうれしくて「ありがとう」と言っていたが、今になって考え

てみると、やはり一人暮らしのそのおじいさんはさみしかったのではないかと、思う。

小学校に上がる前に引っ越してきた西神中央でも、公園の今はグラウンドになっているところに仮設住宅が立ち並んでいた。西神は計画されてつくられた町なので、スーパーも必ず歩いて行ける場所にあるし、病院も開業医の病院から総合病院まである。交通の便利もいい。けれど、近所同士の付き合いは当時はまだそんなに深くなかった。なにしろ、住民同士がいろいろなところから引っ越してきている人で構成されているのだから。だから、住み慣れた土地を離れ、仲の良い近所さんや友人と離れて仮設で暮らしていた方たちは、さみしかったらと思う。

父

父は、私が環境防災科を受験するときに、自分の1月17日の記憶を文章にして渡してくれた。そこから抜き出して紹介したいと思う。父の記憶であり、私にむけて思い出してわざわざ文章にくれたものなので、父の口調をできるだけそのまま載せたいと思う。

「その日お父さんは、当直で芦屋市の埋め立て地区に位置する、芦屋浜シーサイドタウン内の高浜分署に勤務していました。(当直、というのはつまり前日の16日の午前からの勤務で、何も起こらなければ、父は正午ごろには帰宅していたはずだ。)

午前3時から4時まで受付勤務につき、4時から仮眠についていたのですが、なかなか寝付けず、妙に汗ばみ寝苦しかったのを思い出します。

5時46分。ゴー、という地鳴りとともに、建物全体が揺す振られて飛び起き、非常電源(停電時につく照明)に切り替わっていたので、ぼんやり明るい仮眠室のなか、その日のメンバー5人が立って「地震やな・・・だいぶ大きかったなあ!」とかそのような会話が終わるか終わらないくらいに、第二波の、今でもはっきり思い出せる激しい揺れに襲われました。例えるなら、お父さんたちはフライパンの上のポップコーンのそれでした。

一度目のような余裕はすでになく、「前の建物みてこい! (南に29階、東に24階)」「シャッター開けろ! (電動シャッターで開かなくなっているかもしれない)」など、すぐにしなければならないことを、目まぐるしく行動していたと思います。

そのあと、町全体が、ひっそりとした不気味な感じで包まれ何時間かが過ぎたころ、怪我をした人たちが押し寄せ(言葉わるいね)、廊下全体が血の匂いで充満したのを思い出します。もちろん電話もつながらないので、病院へ搬送してあげることもできず、あるだけのものの応急手当が精いっぱいでした。

活動が少し落ち着き、管内をパトロールに回ったところ、見渡す限りの倒壊した家屋と、それを見て立ち尽くす住民たちが目に入ります。手作業での瓦礫の中からの救出には限界があるため「スコップ・つるはしなど、消防署にあるので取りに来てください! 私たちもすぐに来ますので!」と、あちらこちらの人に伝えたものの、そのうちに道具が無くなり、お父さんたちもその現場には戻れませんでした。昼ごろに、倒壊建物の中で、うつ伏せで救出活動中に強い余震を感じた時の恐ろしさもわすれられません。

この現場の後、お父さんは約二日間、救急車で負傷者を運び続け、その時には安らかな寝顔のまま死んでいる女の子、うめき苦しんで今まさに掘り出された人、そして横倒しになった阪神高速道路のちぎれた橋桁から宙づりになっているバスなどを見ながら走り続け、まるで夢の中にいるのではないかと、錯覚しそうな毎日でした。

見たことすべてが強烈な記憶となっていますが、その中でも特に印象深い出来事を書くね。

ひとつは、思いっきり悲しい光景です。市立芦屋病院、これは山手にあり被害が少なく負傷者を受け入れることができていた病院の一つです。次々と負傷者が運び込まれていた時、戸板に寄せられていた子どもと一緒に若いお父さんが入ってきました。すでに、子供が死んでいるかもしれない、ということをお父さんは分かっているかもしれない、そんな重たい雰

困気のところ、続けてもう一人子供がやはり戸板に乘せられて運び込まれてきました。その子供も若いお父さんの子供なのでしょう。我慢していたお父さんが泣き崩れ、医師、看護師、その周りにいた人たちも涙を流していたところへ、つづけて戸板に乘せられて入ってきたのは、おそらくその人の奥さんだったのでしょう。その若いお父さんは、もう泣くこともできず、ただのどがひきつる音を出し、ロビーにひざまずき、戸板に乘せられた奥さんであろう人に手を伸ばしていました。

四人の家族がそろうまで、時間は短かったはずだけれど、その光景はお父さんの目にはスローモーションのように映りました。

二つ目は、うつぶせのまま家の下敷きになっていたおじいさんを見つけたときで、そのおじいさんの体に守られ、おばあさんが生存していたことです。きっととっさにおばあさんをかばい、覆いかぶさったのだろう、と想像でき、胸が熱くなったけど、そのあとおばあさんが元気になったかどうかはわかりません。」

父は、冒頭でもあったとおり、地震発生の当日に勤務していたので、そのまま救出・救助にあたり、家に帰ってきたのは2週間後だった。家の被害は少なく、家族もけがひとつしてはいなかったものの、寝込んでいた母や、私よりも物心ついていながらまだ幼かった姉は心細く感じていたのだらうな、と想像する。

母

実は母は、地震が起きたすぐあとに、インフルエンザにかかり大変だった。そのせいで、一番大変な時に動けず、もどかしい思いだったという。

しかし、自宅そのものは大きな被害を受けず、ライフラインも比較的すぐに復旧したので、知り合いが毎日のようにお風呂に借りに来ていたそう。お互いへの気遣いとして、脱衣所に貯金箱を置いておき、各自が入れられるだけのお金を入れていたという。

祖母

祖母はその時69歳ごろだったが、まだ現役で三宮まで、地下鉄で通勤していた。

はじめ地下鉄は板宿までの運行で、祖母はそこから、当時多くの人がしていたように歩いて勤務先までいったという。生涯キャリアウーマンで、何よりも働くことが一番大切だと考えてきた祖母らしい経験だ。

叔母

私の母の妹にあたる叔母と叔父は、当時芦屋市にある高層県住の2階に住んでいた。

もともと私たちの一家は芦屋を故郷とする。私の父方の家も父が幼いときに徳島県から芦屋市に引っ越してきているし、母方の家族親戚は根っからの芦屋市民だ。今は祖母も私たちと一緒に神戸に住んでいるので、実家と呼べる帰るところはないのだが、私が生まれるまでは皆ずっと芦屋に住んでいたもので、親しい友人もいて、私は我が家の歴史の芦屋時代には登場していないものの、私にとっても第二の故郷のようなところである。

震災当時には、私の叔父と叔母が、芦屋市に住んでいた。浜に近いところにある高層県住だった。そこは、私の家族にとってなじみ深いところであって、私の祖父母が母、叔母が子供のころにともに住んだ家で、母が結婚して父と最初に住んだ家でもある。叔母と叔父が結婚して住んだ家でもある。つまり、私たち一家が時とともに家族の形を変えていく歴史の大部分の舞台を占めているのだ。

海を自分のもののように眺めることができ、毎年、夏になると花火大会が行われる芦屋では、知り合いがすいかをもって集まり、みんなで花火をみていたという。実は我が家にあるアルバムの中で一番たくさんの写真が残っているのはここ、芦屋の県住で写真なのだ。

そんな、思い出深い家で叔母、叔父は被災した。この県住に引っ越して間もなくだった。そして私のいとこがわずか1歳の時だった。その時、やはり兄弟ということなのか、叔母もインフルエンザにかかって寝込んでいたらしい。母とまったく同じだ。しかし叔母の場合、引っ越してすぐにインフルエンザにかかったらしく、引越しの荷物もほとんど解いていなかったらしい。地震でその部屋にはひびが入ってしまった。結局叔父と叔母は引っ越して間もなく、新居を出ることになってしまった。今は、大阪に住んでいるが、今でもよく家族で「もし地震がなかったなら、いまどこでどう暮らしていたんだろうね。」と話す。

もし地震がなかったなら叔父と叔母といとは、いまどこでどう暮らしていたのだろう。わからない。でも、地震があったことで成り立っているのが我が家の今の歴史なのだ。歴史は、良いとか悪い、で判断できるものではない。いろいろな要素が積み重なって時間に刻まれていく事実であり、記録である。だから15年前に地震が起こった、という事実があるならば、本当は「もし地震がなかったなら」という仮定の歴史は成り立たない。

以前に読んだ本の中である人が言っていた。「将来、とか 未来、という時間はないのかもしれない。それは人間が造り出したものであって、真実にあるのはただ 現在 今日 今という時間だけ。」よく未来に行ってみたい、とか過去に行ってみたい、という言い方をするがそれは不可能なことなのだ。たとえ宇宙へ飛び出してブラックホールに突っ込もうとも、机の引出しに入ってみても。なぜなら、それはもう存在し得ないから。毎秒毎秒1秒前の世界は過ぎ去り消滅する。

こういうと、なんだか夢が消えるような気がするが、本当は反対だ。この事実によって、真実に存在するのは 現在 そして 歴史 この二つであることがわかるから。これは希望となる。だからこそ、私たち今をいきる人間は、今を精いっぱい努力して生き抜けばならない。実在しない過去と、実在しない未来とを心の中に持って。そうやって、歴史という事実を刻んでいく。

防災の根源はここにあると思う。過去は実在しないから変えられない。でも未来は実在しないからこそ変えられる。私たちに与えられた、教訓という名の歴史と、唯一実在する今日という一日を使って。

生活を支えてもらった

竹内 梓

1. 住まい

今住んでいる棟の隣の棟に住んでいた。5階だったため、他の階よりも揺れは強かったと思う。お母さんとお姉ちゃんと私は寝室で、お父さんはリビングで寝ていた。

5時46分地震発生。お父さんは寝室に走ってきて「布団かぶっとけ！」とさけんだ。お母さんは何が起きているのか分からず、お父さんに言われるまま布団をかぶった。33型の大きなテレビは後ろのケーブルがつながったまま宙づりになり、食器棚は倒れなかったものの扉が開いて中の食器がとびだしていた。

昔は家具は大きいほうがいいという考えだったけど引越しの時は大変だし、地震の時も危ないし、今思うと何でも大きかったら不便だからコンパクトなものの方がいいと話す。

外に出た方がいいのか、出ない方がいいのか、少しの間悩んで結局玄関の戸を開けてみた。その時ちょうど隣のおばちゃんも出てきたので、「怖かったですね。うち懐中電灯がどこにあるか分からなくて…」とお母さんが話すと、家の中からおじちゃんが「うちのやつ貸してあげるわ」と言って懐中電灯を貸してくれた。お父さんはそのとき下の階の様子を見に行っていた。しばらくしてやっぱり家にいるのが怖かったので、とりあえず車に避難した。（寝室から玄関への道はふたつあったので、割れた食器を踏んで怪我をすることもなく、またドアがゆがんで開かないということもなかったのだ、すんなり家の外に出られた。）

明石市だし団地だから自分の家が倒壊してがれきの下敷きになったとか、近所の家が倒壊しているという様子はなく、東灘区のような火災も見られなかった。近所の人ほとんどがお年寄りだけど、知っている範囲で亡くなった人はいないと思う。

建物は倒壊しなかったものの、壁には大きいものから小さいものまで、いくつかひびがはいっている。その上が白くぬられているだけで、今でもそのひびは残ったまま。

地震発生後外に出た印象は、とにかく団地の周りがガス臭かったということ。

お母さんは、同じ団地の違う棟に住んでいた私と同年の子どもがいるお母さん友達に電話をしたがからなかった。

その日の夜は家に帰るのが怖かったので、避難所になっていた朝霧小学校の運動場に車ではいって、車の中で過ごした。避難所に行けば食べ物をもらえると聞いてそのときパンか何かが配られていたけど、結局何ももらわなかったそう。水が流れなかったのでやっぱりトイレはものすごいことになっていたらしい。一日避難所にいたけどやっぱり車で寝るのはすごくしんどかったし、エコノミー症候群も心配だったので家に帰ってきた。家に帰ってきてても、余震が何回も起こるのでそれが怖くてしばらくは電気とテレビをつけたままじゃないと寝ることができなかった。本当に余震は何回も起きていたので、揺れる直前は「あっ、来るな」ってわかるようになってきた。（ゴーという地鳴りがきこえるらしい。）

その当時ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんが東灘に住んでいて、家が全壊。おばあちゃんがタンスの下敷きになったのを、おじいちゃんが引っ張り出して救出。外に出て、はだしでうろうろしているところを「よかったら、うちへ入ってください。」と民生の人が助けてくれたそう。そのひいおじいちゃん、おばあちゃんのことを心配したお母さんのいところが、姫路あたりの遠い所から歩いて迎えに来てくれたらしい。

2. 地震後の生活

震災のことは全く覚えていないけど、とても不思議なことにただ一つだけお姉ちゃんと共通の記憶がある。ピンク色の毛布を持って家族4人で車に乗り込んだこと。

地震が起きてから電気はすぐに復旧したけど、ガス、水道はなかなか復旧しなかったのだ

ずっとお風呂に入れなかった。ごはんは、冷たいおにぎりとかばかり。それから水。どのように手に入れたかという、水道管が破裂して水が吹き出ているところに汲みに行っていた。被害がそれほどでもなかったのも、食べ物に困ったということはなく、とにかくお風呂に入れないのがつらかったという。それからやっぱり冬真っ只中だったので、ガストーブが使えなかったのも結構つらかったそう。

3. 九州での生活

そんな生活を何週間か続けていたところに「まともな生活もできんし、仕事もないやろ。ちょっとの間九州におったらいいやん。」とこっちの様子をテレビで見て心配したお母さんのほうのおじいちゃんが電話をかけてきてくれた。

実際、大工だったお父さんには、地震発生から少し経った頃からしばらくの間だけは、いっぱい仕事があった。でもそのあとは全然仕事がなくなってしまったそう。

そんなこともあったので、結局家族 4 人、何日か分の服とか下着とかお金を持って、車で九州まで行った。地震発生後数週間しか経っていないので、道路はガレキだらけで行くのにすごい時間かかったんじゃないかと思っていたけど、意外と姫路のほうとかは被害がひどくなかったらしくすんなり九州に到着。九州ではおじいちゃんがうちのお父さんに仕事をまわしてくれたし、食費とかも出してくれてすごく助かったそう。そうやって九州では何か月間か生活させてもらっていた。

そんなある日、お母さんは食事中ものをつかめないくらい手が震えるし、台所でも足が震えたので地震の恐怖からかなあ（PTSD）と思っていたそうだが、ちょうどそのころ甲状腺の病気が始めていてその影響だったとあとから気がついたらしい。その病気には地元に戻ってきてからお父さんの兄に「なんか目が腫れとうぞ」と言われて病院に行ったのがきっかけ。その前からも友達に「なんか痩せた？」と言われていたけど、自分ではスポーツジムでエアロビクスしているからだろうと思っていた全然気がつかなかったという。

災害への思いと、これから

田中 裕士

忘れてはいけない災害の教訓は、風化させてはいけない。体験を共有して多くの人にどんなことがあったかを伝えるべきだから、今から震災体験を書くから多くの人に見て感じて欲しい。

父の記憶

1、異変な空

震災の前日に父は、家の近くの森でタヌキを見たいらしい。初めて見たそうで、その森からにげていくようだったそうで、なんで逃げているのか不思議だったらしかった。次の日にその真相がわかった。

地震の日の朝、5:30 ごろに父はトイレをしようと2階の寝室から1階のトイレに降りてきたて、ふとトイレの窓から外を見たときに空がオレンジ色に見えていて夕焼け色とは違いとても気色が悪かったそうで、いつものように階段を上り仕事部屋に入った瞬間下から「ドン」と音がしながら突き上げられて、最初はトラックが家にぶつかったと思ったらしいが、寝室に戻った時に横揺れが始まったので大きな声で「地震だー!」と叫んで僕の上にかぶさっていて、2~3分揺れているようだったそう。

揺れが収まったらまずTVをつけようとしたけどつかなくて、いつもラジオを聞いていたので手元にラジオがあったからつけてみたけど、まだ、放送していたのが東京の番組だったので、情報が入らなかった。その時に旅行中の母方の祖母が電話をしてきて「TVで大阪、京都で地震あったけど大丈夫?」と電話がかかってきて、母は、「大丈夫」と返した。そして、母方の実家は尼崎にあって、実家のことも話して、そこで「祖父が軽く頭を打っただけで大丈夫」と祖母を伝えて安否確認をした。

6時になりラジオが毎日放送に変わったので今の地震の情報が初めて流れてきた。そのラジオのMCの人が神戸に住んでいたので、被災地中継をしていた時に、「今、西宮で火柱がたっている」といっていた時に垂水にも余震が来た。

冬の6時だったのでそこから明るくなるのを待った。その時間がとても長くて、早く朝になって欲しかったらしい。そして明るくなって地震の爪あとがわかった。

2、地域協力

明るくなるとその被害が見えてきて、台所が皿やタンズでグチャグチャになっていたし、冷蔵庫のドアが開いていて中のものが散乱していた。家が無事だったので家の中で過ごそうと考えていて、壊れた食器を片づけている時に、家の周りから、近所の人達が声をかけてくれていたので、父と母は外に出て行った。

そしたら、近所の人「大丈夫?」と聞かれて近所で安否を確認しあった。僕たちの家の地域は誰一人亡くならなかった。僕の家は、ご飯も出来ていたし、洗濯も出来ていたし、風呂の水も残っていた。そして次に、朝飯の確認をした。近所の人「パンを買いに行ってくれたが1個しか買えなかったのでおにぎりを作って分けて食べた。」

そこからライフラインの問題が生じた。例えば、トイレの水は流れなかったが、たまたま家に貯水があったから1日は水には困らなかった。芦屋が仕事場で、仕事場に電話したが繋がらずに、昼過ぎに仕事場から安否確認の電話があった。2日目になり水の確保が大切になったので水道管が破裂しているところに連れて行ってもらって、水を確保した。そして、近所の人「分ももらいにいった。」

親戚の人が安否確認と食料を持ってきてくれた。このころ家は電気の復旧をした。そして、父が父方の祖父は被害の少なかった明石の親戚の家に避難した。

僕たちの地域では死者が一人もでていなくてこれも一人一人の頑張り地域協力にあると思う。

3、父が見た被害

父は仕事のためいつもは電車を使うのに芦屋までの交通機関がなくなってしまったので自転車で行くことにした。

そして、垂水から須磨のあたりに差し掛かったところで人が焦げたようなにおいがしたらしい。とても怖かったらしい。

そこから進んでいき、途中の西灘あたりでは道路が寸断されていたので自転車を担いで通り抜けていき倒壊の建物が多いと思ったらしい。

西の宮に近づいたところでとても煙が立ち込めていた。そして、近くで火柱が立っていて西宮は火事だと思ったらしい。

父の仕事が教師だったので小学校も避難所として運営していて、学校と地域と一緒に活動していた。父もボランティア活動に参加した。2泊して帰ってきてまた学校に行く生活を1週間送った。

学校が休校になってその間は、学校が、避難所になっていたので公務以外の仕事をした。例えば、救急物資の受け取り、救援物資はいつ来るかわからないから、職員室で仮眠をしていた。トイレ掃除は、水道が止まっていたので小学校のプールや井戸水を使用して水洗トイレのタンクの中に、水を補充する。炊き出しの補助や、救援物資の配布の手伝い、時には、賞味期限の切れそうな弁当などの余ったものを近くの避難所に配りに行った。その間にいろんな人とコミュニケーションが取れた。

僕の記憶

1、微かな記憶

もしかしたらこの記憶は震災の記憶ではないかもしれないけど、震災の話を聞くと浮かんでくる画像がある。その記憶は、とても静かで、いつもなら鳥とか、人の声がある朝だったのに、この日の部屋のように、風の日のように締め切っているようなのに風の音はなく、その暗闇のあとから雨でなく、太陽の光が差し込んでくる感じのイメージの画像だ。そのあとの記憶が全然ないが、それは小さかった僕でも覚えるぐらいの衝撃だったのかもしれない。

この後の記憶は、仮設住宅ができていくところで白い家がいっぱい並んでいる写真だ。なぜかという、父が仮設住宅のところに道があってよく通っていたからだと思う。

幼稚園にかよっていたときに、一つの本に出会った。それは「あしたもあそぼ」という本である。そのお話は、犬のコロがいつもより吠えていて、主人公が変に思ったその次の日に地震が発生して、家が崩れて、避難所に避難して、仮設住宅に引っ越すけど、余震が怖いけど家族で乗り越えるというお話だ。これを読んでいたのも、小さいころから阪神・淡路大震災の接点はあったが、小さいころはこの本が怖かった。

僕は地域の人にとっても助けられた。それは、お風呂に入れてもらったり、遊んでもらったりと本当に多くの人に助けてもらった。「本当に災害の時には地域で助け合っていたんだなあ」と思う。

母の記憶

1、気付かなかった

母は、震災の前日は普通に生活していて、父がいつもの世界でなく違った世界に見えていたのが分からなかったそうだ。母は、いつもの日常が来ると思っていたけど、父の異変の感覚は、本当にあってしまった。

母は僕と父と三人で寝ていて、そのときもぐっすり寝ていて最初にいったい何が起こったんだかわからなかったらしかったけど、大きな揺れで家の中がぐちゃぐちゃになっていた時に初めて地震だなと気付いたらしい。

揺れが始まって最初に突き上げてくる揺れはとても怖くて、その後の横揺れは、本当のところ17秒の揺れなのに、2〜3分も揺れた感覚で本当に怖い感覚が襲ってきた。

その後は、父の時に話した時と一緒にである。

地域で集めた食材でおにぎりや味噌汁をつくって、配っていたらしい。

そこから僕たちの家族は、避難生活が始まった。震災から3日目に家族で、学園都市の友達の家で避難した。そこは、ライフラインは整っていて最近建てられたから全然建物が壊れていなかった。今思うと、新しく作られた都市は強いと思いった。

この避難生活は1ヶ月くらい続いた。その友だちの人にはとてもお世話になったし一杯迷惑をかけていて、すまない気持ちと、ありがたい気持ちでいっぱいだ。このように僕たちは震災の日々を過ごした。

2、環境防災科に入ったわけ

僕の家族は父も兄も防災関係の仕事についていて、父は、阪神・淡路大震災についての役員をしていて、小さいころから阪神・淡路大震災についてのことをいろいろやってきているんな資料も見ていた。

中学生になって、進路の選択の時に父から「舞子高校に環境防災科ができるらしいで」といっていてその時少し興味を持った。そして僕は環境防災科で勉強したいなと思った。学校の先生も環境とか阪神・淡路大震災の被災者で1月17日になればいろんな体験を話したから、自分の周りで多くの地震の被災者がいて、前に話したように震災の絵本とかを読んでいて、震災に多く触れていたからだと思う。

3、学んだこと

環境防災科にはいって、いろんな人に出会った。それは、講師の先生だったり、外国の人だったり、小学生であったり、災害の被災者であったりといろんな人に会う機会があった。その繋がりの中で思ったことは、「環境や防災のことをいろいろやっていくなかでやっぱり一番大切なのは語り継ぎじゃないかなあ」ということだ。

なぜなら、災害はその地域でしか体験できない。ボランティアとして現地に入ったとしてもそれは、よそ者であって被災者でない。

じゃあ「どうすれば被災者の気持ちがわかるのか？」それは、被災者に体験を聴いたり、話してもらったりすることだと思う。これは語り継ぎだと思う。その人の体験や経験が凝縮されて、その時にどんな気持ちだったかとか、このときはどう困ったかなど、その災害の怖さや対処法などがわかるので、語り継いでいくことが一番大事だと思う。

この震災体験を日本だけの話にするんじゃなくて、海外の多くの国と共有するべきだと思う。それはもう、あの地震での惨劇を繰り返さないためにもだ。

中国での大地震がありその多くは、建物の下敷きで亡くなっている。これは全然阪神・淡路大震災の教訓が生きていない。これではまた同じことの繰り返しだから僕たちにできる語り継ぎでいろんな国に伝えられたらいいと思う。

4、震災から学んだこと

この震災で6434名の人の命が亡くなった。しかしこの震災は多くのものも残して行った。それは、絆やボランティアや自然災害に対する考え方を考えさせられたこと。近年防災研究が進んでいて、耐震、免震とかがあるが、その考えができるのもこの震災のおかげだし、被災者の生活を助ける法律などいろんなことを学んだからその体験を語ることが大切だと思う。

僕たちは、6434人の人の上に立っていて、僕たちはその人たちの分まで生きて、防災や減災についてひとつでも多くの人に広げていかないといけないし風化させてはいけないと思う。風化させたら僕たちはまた同じ被害を起こしてしまうだろう。

だから僕たちの学んでいる勉強は人に伝えられてやっと勉強だと思う。震災の教訓を風化させないためにも、これからの災害に対しても。

5、最後に

僕たちはこの災害を忘れてはいけないと思う。それは多くの人の上にたっている命だから。この災害で自然災害の脅威を知れたと思う。この災害がもしなかったら今人々は防災・減災という言葉を知らないと思う。震災で多くの命が奪われたが、それと同時に多くのつながりや絆、新しい物が誕生した。

だから、この災害は大切だったと思うがしかし一方で、多くの人亡くなり、悲しい思いをした人がいるので一番いい方法は、防災の教訓を伝えていくことであり、広めていくことであると思う。

僕たちは、環境防災科で勉強していてとてもよかった。それは、多くの人と出会えたからだ。ネパールにいった交流もできたし、被災地での雰囲気は本当に重たくて何か重りを持っているような中で復旧作業して、被災地の人はとてもすごいと思った。

たぶん、阪神・淡路大震災のときもそんな空気だったと思うが、今後には東海・東南海・南海地震がまっている。この災害は津波の災害だがたぶん日本でそれを知っている人は少ないだろう。だからまた僕たちは同じ被害を起こしてしまうだろうから僕たちはそれを止めるためにいろんな所でこの話や、阪神・淡路大震災の教訓を伝えていく必要がある。

私と震災

戸田 明花

1. 震災の記憶

あの阪神・淡路大震災から今年で15年が経った。15年前、私はまだ2歳で記憶は全くと言ってない。神戸市内に住んでいたものの被災程度は軽いもので、私自身が辛い思いをしなかったことも記憶がないことに関わっているのだろう。身内が亡くなったわけでも家が倒壊して避難所生活で辛い思いをしたわけでも大切なものを失ったわけでもない。被災地にいたものの被災者、とは呼べないかもしれない。だが、今までこの環境防災科で学んできて自分は本当に恵まれていたことが理解できた。あれだけの震災で、少しの被害しか出なかったことは本当に幸運だったとしか言えないだろう。少し震源がずれたり、断層や地盤の加減しだいで、もしかしたら私の住んでいた地域が長田のようになっていたのかもしれないのだから。確かに経験としては少ないかもしれないし、実際に家や大切な人やものをなくして辛い思いをされた方の気持ちを本当の意味で理解できることはないのかもしれない。だが私は私のやり方で、将来的には聞いたものでも次の世代に語り継ぎができれば良いと思う。

2. あの日

これは私の、というより親の記憶になるが、私達5人家族は15年前のあの日、湯村温泉から帰宅する予定だった。湯村温泉でも震度3程だったと思う。目を覚すほどのかなりの揺れだったことを、母は今も覚えているらしい。家族の中で私と2歳上の兄だけは何事も無かった様に眠り続けていた。車内で神戸市内の自宅へ戻る途中付けていたラジオでどんどん死傷者が増えていくのを聞いてとても怖かったようだ。

3. 我が家の被害

幸い我が家の被害はあまりなく、揺れで壁紙の一部が破れ、花器や食器の数枚が割れただけで済んだ。まだ新築3か月程度だったので少しショックだったそうだが、今振り返ってみるとあの地震でこの被害だけで済んだのは本当に恵まれていたと思う。一家で出かけていて全員の無事は確認済みだったことも安心できる一因となった。

ライフラインも17日のうちに復旧した。水の出が極端に悪かったが普通に生活出来る程度だったらしい。同じ町内でも水が完全に出なくなった所もあったようなので、本当に恵まれていたとしか言いようがない。

3か月前までは隣町にあるマンション暮らしでしかも9階だったので、エレベーターも止まり水も出ず、大変な生活になっていたと思う。

4. 震災の日から数日

保育所もしばらく登校禁止になったがそれすら私は覚えていない。伯母が垂水区在住で水が止まっていたのでお風呂と洗濯に何度か我が家に来たそうだ。

父は伊川谷で当時も今も理髪店を営んでいるが、震災直後はガスと水道が使えず、水が出るようになってからプロパンガスを使用して店を再開したそうだ。また、父は仕事の合間を縫って避難所になっている小学校を訪れ、避難している人の髪を切るボランティアも行っていたと聞いた。

母は、大きな揺れの体験が無いので余震がきても騒がず怖がらずに生活することができたと言っていた。

5. 伯母の体験

私の伯母は垂水区に住んでいて、震災当時は小東山で被災したそう。発災直後はライフラインが全て止まってしまい、近くの小東山小学校に水を汲みに行ったこともあったそう。

看護師として兵庫区東山町のクリニックに勤めていて、病院自体はシャッターが壊れて室内の器具が移動したぐらいの被害に止まったが、通院していた患者さんが4人亡くなったらしい。1週間後には病院を再開し、震災で怪我をした人も来たそう。水と電気は使えたがガスはしばらく出なかったと言っていたが、その当時「寒い」と感じた記憶がないらしい。その話を聞いて、真冬の暖房がない中で寒くないわけないのに、そんなことを感じないほど大変な状況だったのだなと感じた。

伯母は家から地下鉄を利用して通勤していたが、発災後しばらくは止まっていた区間があり、板宿駅から湊川公園駅まで毎日片道1時間ほどかけて歩いて病院まで行っていたらしい。長田などの焼け跡の中を歩いていたので体力的にはもちろんだが、精神的にもとても辛かったらしい。時が経つにつれて上沢などの焼け跡では土地開発が進み、綺麗になっていったそう。病院近くに住む人は皆家が倒壊してしまい他地域に避難している人が多かったので、片道1時間以上かかる伯母が行くことになったらしい。

6. 小学校の頃

小学校にあがると、毎年1月17日が近付くと「しあわせはこぼう」という冊子を使って阪神・淡路大震災について学習する時間があつた。思えば、これが私が初めて震災に触れる機会だっただろう。保育所に通っていた頃は震災があつたなんて考えもしなかったし、まずそれがどのようなものなのか理解さえしていなかったと思う。小学校の頃は当時の映像や語り部の話を聞くことも少なく、大方冊子の写真と先生の話で進んでいった。現実味のない話で、当時の私は戦争と同じような昔の話。自分にはおおよそ関係のないものだろう、と思っていた。現実には本当にそんなことがあつたのか信じられなかったし、想像できなかったからだ。今の小学生は震災のあとに生まれた子供で、震災をドラマか作り話のように思っている子もいるらしい。

小・中学校のときにも年に数回避難訓練があつたが、真面目にやっていた子は少なかったように思う。実際私も授業中に外に出られるのが楽しかったし、本当に地震や火事が起こるとは思っていなかったからとりあえず怒られない程度にはしゃいで終わらせていた。今思えばあれは本当に意味があるのか、と疑問に思う時がある。「もし本当に起こったら怖い。」とは思ったが、まさか自分が被害にあうとは想像もしていなかったし、幼かったので危機感が募ることもなく、私の頭には「地震がきたら机の下にもぐる」とインプットされたただけだった。小さい子に「防災」と言っても難しく伝わらないことも多々あると思うが、実験とか楽しい授業にしたらしは興味を持つ子も増える、と高校の授業で近くの小学校に出前授業で行ったときに感じたので、もっと避難訓練、防災訓練の方法を考えていかなければならないと思う。

7. 環境防災科に入るきっかけ

私が中学生のときは新潟中越沖地震、パキスタン北部地震などの地震災害ばかりでなく、アメリカのハリケーン“カトリーナ”台風災害や東南アジアでのデング熱の流行など、様々な種類の災害が多発した。その中で、自分もそのような災害の被害を受けるかもしれない、と思い、もしそのような状況になったら自分には何ができるか、また家族や大切な人を守るのか、と考えるようになった。その時に舞子高校環境防災科を見つけ、入学したいと思うようになった。

8. 環境防災科に入って

私は震災の記憶もないし、災害について詳しく知っているわけでもなかったのですが、環境防災科に入ってもやっていけるか不安だった。被災者の気持ちが分からないから実際にボランティアなどで被災地に行っても、何もできないのではないかと思っていた。

勉強は3分の1が専門教科で普通科とは多少の普通教科の差は出てくるが、勉強内容でこの科に入ったことを後悔したことはない。専門教科は初めて知る事ばかりで新鮮だった。外部講師の話を聞いたり普通科では体験できないこと通して、将来の夢をじっくり考えることもできた。

小中学生の頃は正直、「ボランティアなんて面倒だ」と思っていたのだが、今では楽しさを知ることができた。この科に入って、他の学校に行っていたら絶対自分にはできなかったことをたくさん経験できた。

初めて阪神・淡路大震災の追悼式に参加したのは高校1年の1月だった。何をするのかも、どんな雰囲気なのかも分からないまままだ準備の始まっていない東遊園地に着くと、まだ人も少ないのにかすかな緊張感を感じ、一気に不安になったのを覚えている。被災の大きかった地域に住んでいたわけでも、身近な人を亡くしたわけでも、ましてや記憶もないのに来ても良いんだろうか、と自分が少し場違いな気がした。

『5時46分』。時報を告げる声とアナウンスの「黙祷」の合図とともに、東遊園地にいた多くの人が一斉に静まり返った。会場に流れるのは静寂と時報の音ばかりで本当に静かだった。重たげな空気、だがろうそくの温かい光が灯る中で黙祷しているときは毎年「十数年前のこの瞬間にたくさんの人が亡くなられたんだな」と考える。自分は実際に見ていないが、テレビや資料で見た家が潰れている光景や寝間着のまま瓦礫を退かそうとしている人が脳裏に浮かぶのだ。初めて参加したときは意味もなく涙が出そうになった。

初めは自分が場違いな気がしていたが、私は私なりにこの追悼式に参加して震災と向き合っていけば良いのではないかと、思うようになった。小さなことかもしれないが、震災が風化していかないように私も精一杯のことはしていきたい。追悼式には毎年参加していきたいと思う。この追悼式のボランティアは、竹筒の中に水やろうそくを入れる作業なのだが、本当に寒い上に水が冷たくて足や手の末端の感覚がなくなるほどで普段のボランティアより幾分かきついことなのだ。だが、なぜか「また参加したい。」と思ってしまう。普段のボランティアでもあるがこの追悼式では特に、名前も知らない人と「寒いですね」と少し言葉を交わすだけでもあたたかい気持ちになれて、多くの人の優しさに触れられると思う。人によってはなんでもないように思うかもしれないが、私はそういうちょっとしたことがボランティアに参加する喜びなのだ。

9. 私と震災

特に大きな被害を受けていなくても記憶がなくても、神戸に住んでいる限り震災を思い出し、こない1月は来ないと思うし、私自身忘れようとも思わない。あの日あの時起こったことは聞いたことでしか知らないが、その教訓は次の世代にも伝えていきたいと思う。私の語れることはまだまだ少ないかもしれない。だが将来どんな職業に就いても、ボランティアや災害に関わることは続けていきたいと思う。追悼式も毎年参加したい。

私のできる限りで、人を助けることをしたいと思う。

今、震災の風化が懸念されている。被災者の高齢化や他県への移動が原因だそう。これは日本全国で少子高齢社会がすすんでいると言われているのだから仕方がないのかもしれない。だが、「仕方がない」の一言で終わらせてしまうとあの震災で亡くなった6434人の命が、多くの人が今まで災害に取り組んできたことが無駄になってしまうような気がする。そのようなことは絶対にあってはならない。東海・東南海・南海地震発生が懸念される今、今まで

の災害の教訓を活用して、より被害を最小に止める努力をしなければならないのではないか。確かに普段から地震の多い関東では阪神・淡路大震災が起こった近畿地方よりも地震への対策は断然成されていると思うが、自然災害と社会仕組みは切っても切れない関係にある。昔の反省を生かして対策をしたからといっても「絶対に大丈夫」はあり得ない。帰宅難民はどうするのか？非常食を確実に全避難者に配給することができるのか？心のケア対策は？機械化された医療やデータはどうするのか？前回東海地震が起こった江戸時代にも見本になる部分もあるだろうが、現代とは違うことが多すぎる。最近の都市災害を学び、もしものときのシミュレーションをしていくことが重要ではないか。その意味でも、阪神・淡路大震災の風化は絶対にあってはならないのだ。

あの震災で失ったものは確かに多い。だが新しく得たものもあるはずだ。私は阪神・淡路大震災がきっかけでできたこの環境防災科に入り、素晴らしい先生方とよい友人に恵まれた。ボランティアで知った楽しさや出会った人々もその一つだ。

今友達と防災チームを作り、お祭りや避難訓練で地域の子供たちに防災を教えている。子供と言えども、まず教えるためにはまず自分がよく理解していないといけない。分かりやすく、楽しく、と考えると難しい。「防災」と言っても子供たちは進んで来ないし、毎回来てくれる子が飽きないように毎回工夫するのも大変だ。だが、少しでも子供たちが防災に興味を持ってきて、それが家庭で、地域で広まってくれたら嬉しい。これからもできる限り活動は続けていきたいと思っている。

10. 将来の夢

今私にできることはまだまだ少ないが、神戸に生まれ、阪神・淡路大震災を経験したからには伝えていく義務があると思う。そのためにもっと震災のことを知りたいと思うし、環境防災科を卒業した後も災害や防災に関わっていきたいと思う。

私は将来看護師になりたいと思っている。自分の手で人を救えるようになりたいし、国や文化や言語の違う人たちと協力し、高めあえる仕事はとても素晴らしいと思う。できれば医療機関や福祉施設だけでなく、被災地に入って災害医療を行ったり、外国に行ってよりよい医療を広めたり勉強したいと思っている。私はこれからも防災に関わり、より多くの人の助けになって生きていこうと思う。

1. 17の悲劇

中谷 貴文

1、悲劇の始まり

1月17日朝方、いつものように眠っているときに、母屋の屋根瓦が崩れる騒音と同時に身体が上下左右に激しく揺すられた。布団の中で、外の世界が今までに経験したことのない異常な状況にあることを知らされる。

2、異常

家族四人で並んで寝ているときだった。自分は母と一緒に、その隣に父が。姉は一人、ふすまを隔てた隣の部屋で寝ていた。父が揺れに気がついた時には、家具などが倒れるのがわかったようだ。父は、あわてて身体を自分と母が寝ている布団の上にかぶせ、守ろうとした。しかし、あまりにも揺れが大きすぎて、思うようにならなかったようだ。ベビーダンスが倒れてきて、幸いにも下敷きは免れたが、父は手に軽い怪我を負った。しばらく揺れた後、落ち着いてまわりを見渡した。

中身を合わせて100kgはあろうかと思われる冷蔵庫が50cmは移動し倒れていた。止め金をつけて固定していた食器棚は45°以上傾き、開き戸の扉から全ての食器が飛び出てコナゴナになっていた。そののち後かたづけをした際に陶器の食器どうしがぶつかり合い、粉末になっているのを見つけた。32インチのTVがサイドボードから飛び出し、部屋の真ん中に落ちていた。

少し片づけをした後、父はラジオをつけた。「震源は淡路島の北部、震度は5。」とのことだった。四人で余震に驚きながら一階の居間で夜明けを待った。少しずつ青く色がついてきた空にまわりの姿が見えてきた。屋根の崩れている家もあったが倒れている家は、見あたらなかった。

母屋のほうも、台所を主に家財道具が飛散していた。足の踏み場もない状況で、祖母は「ガラスの破片があるから、子ども来たらあかんで。」と、さっそく片付けを始めていた。自分と姉は、いったい何が起こったのかという風な感じで、大人の行動を観察していた。

父は、しばらくして外の様子を見に出かけた。信じられないことだが、営業しているパチンコ店があり、なかで遊んでいる人もいたようだ。

3、ライフライン Stop

電気、ガス、水道のライフラインはストップ。自分も含め、こんな生活は初めて経験する。大人でもどうなるのか想像もつかなかったという。近所の人から、「コープが開いているらしいよ。」と教えてもらった。

その時家には買い置きがなかった。母は早速自転車で、急いで買い物に出かけた。お店の配慮で全食品が無造作に出されていたようだ。母も含め、みんなが眼の色を変えてカゴに商品を入れていく。「とにかく買わなければ」と、かなり切迫した状態だったようだ。

だいたい商品も売り切れ、カップラーメンしかなかったが、買って帰ってきた。

電気はかなり早く復旧したようだ。家族でテレビを囲み、ニュースを見る。神戸の悲惨な姿が、放送されていた。余震でどうにかなってしまったのか、その後突然テレビはつかなくなった。心細いうえにテレビもつかず、これでもっと心細くなった。仕方なく、ラジオを聞くことにした。

水が出ない。トイレが一番困った。近所の家の庭の水道からは、低圧ではあったが水がちょろちょろでいた。水を分けてもらい、とても助かった。

電気に続き、ガスも復旧した。かなり早いほうだったそうだ。水道も最後にはなったが、早いうちに復旧した。

給水車が、公園に来るといいう情報が入ってきた。母が水をもらってくると言って、家にあった一番大きな鍋を自転車につんで出かけた。給水車に並ぶ列はすごく長かったようだ。それでも、母が持って帰ってきた水は鍋いっぱい。「おばちゃんそれに入れるの??」と、若いお兄ちゃんに笑われたそうだ。

その当時、家にはタンクがなかった。給水車がきた公園は家から少し遠かった。水はすごく重たく、タンクがあっても自転車で運ぶのはかなり難しかっただろう。

遠くにいた親戚から「今、水を買って車でそっちに向かっていたけど、渋滞がひどい。バイクで出直してくる。」との電話があった。母は、「危ないから、とにかく家に帰って。」と頼んだ。「また大きな地震がきて、巻き込まれでもしたら。」と心配したらしい。次の日、大きなリュックサックに、たくさんのペットボトルの水を担いでバイクで来てくれた。とてもうれしかったそうだ。こんな時に車は大渋滞で、役に立たない。バイクや自転車が活躍するそうだ。

災害の場合、遠くの親戚より近くの他人といったように、ご近所や友達に頼るしかない。そのために、というわけではないが、日頃から人と関わることを負担に思わないほうが良い。

夜になると、暗いこともあってか不安で眠れなかったそうだ。余震がくる。怖い。と、しばらく恐怖感があり、あまり眠れなかった。

4、日が経って。

日が経つにつれて、死亡者数や家屋の倒壊数などの被害の全貌が明らかになってきた。近所では、家がつぶれたとか亡くなってしまった人がある、なんてことは聞かなかった。テレビで見た悲惨な情景は、その地域が特別ひどいもので、そのほかの被害は近所とあまり変わらないだろうと思っていた。でも、テレビやラジオで被害情報が伝えられてくるうちに、その考えが間違っていたことがわかる。近所ではでなかった死者は6000人越え。改めてよく考えると、ぞっとするような数だ。自宅には多少ひびが入っただけで済んだし、家族で死者もでなかったことが奇跡のように思える。

ライフラインもすぐ復旧し、家も少し修理すれば問題はなく、飛び散っていた食器なんかもすぐに片づけていたので、家庭内ではすぐに普通の生活に戻れた。

5、体験談を聞いて感じたこと

2歳の頃だったから震災のことは全く覚えていなくて、親、祖父母、近所の人の体験談はとても新鮮に聞こえた。今回のことも含め、環境防災科に入って、地震のことを勉強して、自分で調べて。記憶がなく興味が持てないために、震災と自分とは関係がないといった意識は変わり、とても貴重な体験をしたんだと思えるようになってきた。

自分は地元のソフトボールのチームに入っていて、近所の大人と交流が多く、いろんな人の体験談を聞くことができた。同じような話がほとんどだったが、みんな決まって「あんな経験は二度としたくない」と、言っていた。被害が少なかったとはいえかなり大きな地震で、今までに感じたことのない恐怖を感じたそうだ。

環境防災科にはいって、震災のことを後の世代の人たちに語り継ぐ大切さを知った。体験談を聞いて、自分にも体験した記憶や、その時の恐怖感が残っていれば、自信を持って語り継ぐことができるだろうなと感じた。

震災発生から長い月日が経ち、神戸の街はとてもきれいになった。なにも知らない人が見れば、震災があったなんてわからないほどだと思う。

街はきれいになっていても、復旧が終わったとは思わない。今回体験談を話してくれた方々も含め、家族や友達を失った人、家がつぶれたり生活に困った人、いろんな体験をした

人がいて、そんな人たちはいまだに地震に対する恐怖が残っていると思う。1月17日が近づけば、体調が悪くなったり、体が当時の恐怖を忘れられないという人がいることも知った。そんな人たちが本当に幸せに暮らせるようになるまで、心のケアが必要だと思うし、震災のことで悲しむ人がいなくなってはじめて、復旧が終わったとなることだと思う。

でもやっぱり、震災のことを忘れない限り、恐怖を無くしたり体調の問題を無くしたりするのは無理だと思う。後の世代の人たちに語り継ぐには震災のことを忘れてはいけないし、亡くなった人たちのためにも震災の出来事を忘れてほしくない。自分が何かの問題にぶつかったとき、「時間が解決してくれる。」なんて軽い考えをたまにしようとするが、震災のことに限ってはそうはいかない。いろんなことを考え、やっぱり完璧な復旧は不可能なのかなと思った。

一年生の時の授業で、いろんな外部講師の方が来てくださって、近所づきあいが大切だと学んだ。今回体験談を聞いた中に、「親戚が遠くから水を持ってきてくれた」とか「近所の人に水を分けてもらった」ということをきいた。遠くの人が水を持ってきてくれるというのは、震災時は道路もガタガタだしとても危なかっただろうなと思った。近所の人が水を分けてくれたというのは、まさに今まで習ってきた「近所づきあい」だったと思った。震災時の交通面のこともふまえて、遠くの親戚より近所の他人、地域の交流を大切にしようと思う。

今回の震災体験もそうだが、環境防災科に入って勉強して震災のことに興味を持てた。3年間で学んできたことが、震災を語り継ぐうえで必要なことのすべてだとは思わない。それでも日本に地震がなくなる日はこないから、教訓を活かしてこれからの地震で少しでも被害を減らせるように、体験談を発信できればと思う。大きな団体に入って活躍してやろうとか、大きな夢はないが、地道に自分なりに環境防災科で学んできたことを、活かしていきたい。

二人の震災体験談

中山 一実

0. 震災と私

私と私の家族は震災当時神奈川県横浜市に住んでいたので震災経験も被災もしていない。そのため、今から書く震災体験は私の家族の震災体験ではなく、知人の震災体験である。また、2人の人から教えて頂くことが出来たので2人分の震災体験談を書こうと思う。

1-1. いつもと違う夕餉

1月17日はいつも通りに仕事をしていた。仕事が終わりと、知人と遅くまで食事を楽しんでいた。いつもなら夜が明けるまでお酒を飲むのだが、なぜか4時前に帰る事になった。今思えば、それはこれから起きる大災害について虫の知らせだったのかもしれない。

この時帰宅して本当によかったと思う。もし、あのまま飲んでいれば今こうやって生きていないかもしれないだろうし妻や息子に会えずに一生を終えていたのかと思うとゾッとする。

1-2. 未曾有の揺れ

ベッドに入り眠りに入った所で、まず妻が初めの揺れを感じた。私は、気が付かず「地震だから！！」と妻に叩き起こされた。その直後、2回目の大きな揺れが来た。

当時、息子は元気な男の子三兄弟だった。1才になっていない三男に覆いかぶさり、四つん這いになっていた。

立ってられないぐらいの激しい揺れだったことを今でも覚えている。

後から知ったのだが、私の住む東灘周辺も激震地とされていたそう。

1-3. 家からの脱出～見たことのない家・町の姿～

揺れがおさまった時、何が起きたのかもわからなかったので子供と妻と母の安否を確認して、ベランダに出た。

マンションの6階に住んでいたのだが幸いにベランダは割れていなかった。そこから、町の状態を見ようと試みたのだが不可能だった。かろうじて見えた風景は、今までに見たことのない町の姿…。薄暗かったが微かにコンクリートが崩れ、空には靄がかかっている状態。遠くの景色は全く見えなかった。

住居は2LDKのマンションだった。家の中は、箆箆や食器棚が倒れていて散らかっていた。とりあえず着る物を捜し、みんなの履物を玄関まで手探りで取りに行き、全員に用意させて玄関まで行ったものの、ドアが開かずに苦労した。余震が心配だったので、早く家を出ようとドアを何度も足で蹴った。その足が、あとで痛かったのを覚えている。

非常階段で下に降りてみると、マンション前にとめていた車が幸い無事だった。

必要な物を持って、とりあえず、近所の小学校に家族全員で車に乗り避難した。青年団に入っていたので一旦家族を降ろして、マンションに戻った。マンションに住む住民の安否を確認するためだ。やっとの思いで辿り着き、マンションを改めて見上げると各階の柱部分に×の亀裂が入っていて恐怖を感じた。

「キャ～！！」と叫び声をあげた女の人の声は今でも忘れられない。

その後、知人の安否を確認しようといろいろな所へ車を走らせた。その中で一番印象に残っている光景だけを話そうと思う。

とりあえず神戸の中心地でもある三宮まで行くと、そごうの2～3階部分が拉げていて、古いマンションは1～3階部分が崩れていた。知人が経営する食堂を見に行くと、知人は起きていたのだが、避難途中に玄関間際で家が崩れてきて、腕だけが外に放り出されて出ていた。

その知人は倒壊した家の下敷きになり、助からなかった。私は何も言えなかった。その光景を見て唾然したというより絶句した。悔し涙を流したのかも覚えていない。その後自分が知人に声をかけたのかもわからない。唯一覚えているのは知人の放り出された腕だけだ。

三宮センター街も悲惨で、切れた電線は垂れ下がりパチパチ火花が出ていた。

港はどうなっているのかと思い港の方に車を走らせた。港の方は地面やコンクリートが盛り上がっていた。そのせいで、コンクリートに穴が開き、海水が道路まで流れ込んでいた。

魚崎の高速は横倒しになっていて、今となってはテレビでよく見る光景だが、生で見た時は漫画の怪獣でも出てきて暴れた様な感じで、当時の私には衝撃的すぎた。何か悪い夢を見ているかと思うほどの哀れな街の姿。

15年経った今でも思い出したくない光景だ。

1－4. その後…苦悩の日々

マンションの他の階は悲惨な状況で、他府県に少しの間マンションを借りに行った。今は、定職に就いているが、その当時は仕事を探しに行っても中々仕事がなくとても大変な思いをした。

1－5. 今、思うこと

思い出すとつらい過去だ。

知人が亡くなったことはとても悔しいことだが、「自分じゃなくて良かった」と安心した自分も居たかもしれない。あの時の虫の知らせには本当に驚いたが、帰宅して本当によかった。今こうやって自分が元気に生きていることは奇跡だと思う。6434人の方の冥福を祈る。今でも、あの震災で死ななくて本当に良かったと思う。家族と幸せに暮らせている今を大事にしていきたい。

2－1. これは地震？

ドーンッ！！という大きな音がしてそれまで経験したことのないような揺れで目がさめ一瞬何が起こったかわからなかった。本能的に“地震だ！！”と感じ5カ月になったばかりの長男の上に覆いかぶさり、夫に「地震、メッチャ大きいで一！！」と言いながら地震に揺られていた。しかし夫は今までに経験したことのない揺れだったため、“今起きているのは地震だ！”と理解するのに時間を要したみたいだ。

2－2. 逆の安否確認

しばらくすると徐々に揺れは収まっていった。すぐさま京都にいる夫の両親と私の両親の家へすぐ電話をかけた。なぜなら、以前「京都は都だったけど大きい地震に何度かあっている」と聞いたことがあったので震源は京都かもと思い電話をしたのだ。

「地震、大丈夫でしたか？」と安否確認をした。

でもそれが両親にとってはこちらの安否確認になったそう。なぜなら、地震直後の数分間は電話がつながったようなのだが、何分か後につながらなくなった。「あの時電話が通じて本当によかった」そう思う。

2-3. 被害

私の住んでいた所は上階の人の家ではテレビが飛んだり食器が壊れたりしていたそうだが、程度の軽い被害で特に建物の倒壊などの被害はなかった。私の家の中の状況は、震源地から少し距離があったので大きな被害は出なかった。しかし、停電だった為に家の中は真っ暗で、身動きが取りにくかった。

集合住宅に住んでいたのも、上階の人たちは皆降りてきて駐車場に止めておいた車に乗って待機している人も多かった。

2-4. 二種類の涙と溢れる想い

こんなことが起きた時のために用心でラジオに電池を入れていた。今、他の地域はどうなっているのだろうか？と思いラジオを聞いていた記憶がある。しかし、朝の7時あたりまでどんな放送をされていたか記憶が全く無い。

幸い電気は9時くらいに復旧し暖房をつけることが出来た。そして、テレビをつけてみると流れるのは悲惨な激震地・神戸の映像。この映像を見たときは恐ろしくて「これが今の神戸？」と思うと同時に涙が溢れた。

地盤の関係で、家々が倒壊しているのに道一本隔てただけで潰れない地域もあった。

ライフラインは次々と復旧していった。一番遅かったのは水道の復旧だ。しかし、一番遅かったといっても発災から1週間くらいで復旧した。わずかな期間だったが、他府県ナンバーの給水車が来てくれた。あの光景を見た時は嬉しくて思わず涙したと同時に感謝の気持ちで胸がいっぱいだった。

2-5. 震災を経て…

直接の知り合いは被害も少なく済んだ。夫の仕事関係では長田の火災で亡くなられた方が居た。

見慣れた街の風景画がすっかり変わっていたのはとてもショックを受けた。発災から長い間、長田の街は、ドラマや写真で見る戦後の焼け野原そのものだった。しばらくは、長田の街に行くことがとても怖かった。

被害の少ない私でさえ、いつまでも続く余震が恐ろしくて、その後3年くらいは上の階に住む人の足音や生活音を地震の音や揺れと勘違いし、怯えることがよくあった。倒壊を経験されたり身近な方が亡くなったりした方はもっと大変だと思った。そういったことを考えると、非常識な発言かもしれないが、私と私の家族は被災程度も軽く、命にも別状がなく、本当によかったと思ってしまう。

私たちはあの震災で死なずに生き残った。身内に不幸も無かった。しかし、亡くなった方々の冥福を祈ることを忘れてはいけない。毎年1.17が近づくにつれ、あの日のことを思い出す。

2-6. 今思うこと

今となっては恐怖感も減ってきていて普通に生活を送っている。しかし、まだ恐怖感を持

って生活している人が居ると聞いたことがある。ただの地震で収まらずに震災となる地震が最近是多発しているように思う。私たちが学んだことはしっかり伝えてこんな辛い経験を
する人が居なくなるよう備えていくべきではないかと思う。

震災から遅かれ早かれ 15 年経つ。震災をしらない世代も増えてきている。だからこそ震
災を伝える場をもっとたくさん設けて、伝えていくべきだと思う。

多くの犠牲を払って学んだことなのでしっかりと未来へ活かすべきではないだろうか。

震災と記憶

西森 沙織里

1、私の記憶

震災が起きた日、私は2階で姉と二人で寝ていた。私は、まだ2歳だった。地震が発生しても、ずっと寝ていたらしく、覚えているはずもなく当然、私自身も全く記憶にない。どこまで大きな地震があったのかも覚えていなくて、その時に家族がどんな行動をとっていたのかも覚えていない。だから、余計に、私はどんな行動を取っていたのか、家族がどんな生活をしていたのか、家の被害は無かったのかなど、すごく気になることがたくさんあった。

震災当時私は、逆に支えられていて守られていたから、覚えていないのかもしれない。

2、震災の日

母は、父のお弁当作りの為、台所で調理をしていた。父も、仕事に行く前で2階のトイレに入っていた。私と姉は、2階の子供部屋でまだ寝ていた。

1995年、1月17日、午前5時46分。

地震が起きた瞬間、母は最初、(西区に住んでいたのも)西神工業団地の工場が爆発したのだと思った。

しかし、すぐに地震だと分かり、2階でまだ寝ている私たちの安否確認の為に、手すりを持ち、壁を支えにしながら2階へ上って行き、声をかけてくれた。自分が危険と感ずることよりも、本棚のすぐ側で寝ていた私たちの身の危険を優先してくれた。

その間、父は大きな揺れに驚いてトイレから出てきた。

姉は揺れを感じてからすぐに起きたそうだ。しかし、まだその当時8歳だった姉は、地震というものを経験したことが無かったらしく、何が起きているのか把握しきれていなかった。とにかく、何かしらの危険を感じ、隣にいた私の顔に毛布をかけ、自分も頭までかぶったそうだ。その姉もその後、地震が収まるまでの記憶がないという。

もちろん、その日、姉が通っていた小学校は休校になり、父も仕事場に行く為の交通手段が断たれていたため、会社を休んだ。

結局、父、姉ともに1週間程度出勤、登校ができず、家にいた。

3、家の被害

幸い、住んでいる地域が良かったのか、家の耐震補強がしっかり施されていたのか、家の倒壊や家具の転倒などといった目立った被害は無かった。玄関に置いていた花瓶が少し割れただけだと言う。

でも、やはりライフラインの被害はでてしまった。

ガス、電気は一時止まったが、1時間以内に復旧した。問題は水だった。水は、地震が収まってからしばらくは出ていたが午後になると、水は完全に止まってしまった。

近所の家でも、外面的な大きな被害は無かったという。でも、何人かの人は、家の中で食器棚の中身がでて、そこらじゅうに破片が飛び散ったというような、被害もでたという。

4、その後の行動

母は、まだ水が出ているうちに、水が出なくなるかもしれないと予想して、お風呂の浴槽いっぱいには水を貯めておいたそう。その水がその後の生活に大いに役立った。

また、私たちが住んでいた近くの小学校は、水が出ていたので、そこに家族で協力し、生活水を汲みに行った。結局、水が完全に復旧したのは、地震後1週間後のことだった。

5、その後の家族

震度7の地震が起きた後も、余震は続いていた。姉はその余震がくる度に恐怖で、怯えて震えていた。それと、同時に姉はおたふく風邪にもかかかっていて、よくないことの連続だった。姉は、おたふく風邪が治っても学校に行けない寂しさがあり、つまらなかったと言う。

母も同様に、余震を怖がっていて、電気を消して寝ることができなかったそう。みんな、あの時の揺れはいまだに忘れられないと言っている。

地震後、元の生活に戻ったと感じられたのは、それから2週間以上も経ってのことだった。

もう一つ、私の家の震災時の大きな出来事と言えば、私の家が一時的に避難所になったことだ。避難所といっても、近所に住んでいる人たちが避難しにきたというわけではなく、祖父母、親戚家族が避難しにきたのだった。

祖父母、親戚家族共に当時、垂水区に住んでおり、ライフライン全てが断たれてしまったそう。その為、まだライフラインが正常な私たちの家に避難をしにきた。

祖父母、親戚家族はしばらく私たちの家に滞在していたが、2週間ほど経ってもとの家に戻っていった。

親戚の中だけでなく、近所の人何人かが食器が割れて使えないという人がいる、ということを知り、使えそうな食器類をあげたそう。その時にもすごく感謝されたという。

6、震災を振り返って・・・

母は、地震当時の時のことを、特に県外の人々の温かさを感じられたと言った。いろんな地域の人々がボランティア活動を実施してくれていたこと、被災地の中での温かさを感じられたと言う。

当時の新聞の中で見つけた記事だが、こんなことが書かれていたそう。

「私の家に、無料で泊まってもいい。」

これは、多分家を地震によって無くしてしまった人への言葉だと思うが、そんなことは簡単に言えることではない。見ず知らずの、しかも、県外の人を泊めるということは、絶対、普段出来ないようなことだ。

だが、被災地の人にとったら、当時すごく心の励みになったと思う。

7、備え

この地震を経験して、いつ地震が来ても困らないように備えが必要だと、強く思ったと言う。

例えば、

- ・飲み水を非常用として確保しないといけないと思った。
- ・サランラップがお皿にひく用に使えることが分かり、重要性が高まった。
- ・乾燥物系を用意しておく必要があると思った。
- ・寝室にはあまり物を置かないほうが良いと思った。
- ・地震が発生している割合が多いか少ないか、どの地域で今、地震発生率が高いか(こまめに災害情報をチェックする等)。
- ・家具の固定をする。
- ・高さの高い家具は、低い家具に変える。

様々な備えや地震が来たときのことを想定し、準備をする必要があることが分かった。なので、これから地震が起きても100%大丈夫というわけではないが、地震による被害を少しでも少なくすることはできるだろう。でも、良いと思った備えを考えることも大事なことだけど、それを実行に移すのは、なかなか難しいと改めて実感した。何故かと言うと、備えが必要だと思ったことは感じたのだろうけど、このことは、今になってもほとんどが実行に移せていないからだ。たぶん、このことは、震災当時、地震の揺れは恐怖に感じたのだろうが、自分自身の家が、被害が軽かったため、備えを実行に移そうと思えないのじゃないかと思った。

震災当時は、私の家は建てたばかりの家で、という好条件だったが、今は建ってから数年は建っているという状況だ。もし今の状態で、阪神・淡路大震災のような大規模な地震が起これば、前のように助かる可能性は少なくなってしまうかもしれない。だからこそ、家の外面的なことだけではなく、内面的なこと、家の中を備える工夫をしないといけない。

8、感想

私は、阪神・淡路大震災の時のことは、全くといっていいほど記憶に残っていなかったため、家族に聞きまわりながら、震災当時のことを振り返ってもらった。地震の時のことを聞くのは、今回が初めてではないが、聞く人の幅を増やすことによって、今まで知らなかったことも初めて知ることができたし、前回よりも詳しく聞く機会ができて、良かったと思うことがたくさんあった。その話を聞いて、被害を受けた人にとって悪いかもしれないけど、少し嬉しい気持ちになった。

私の家は比較的、被害が少なかった。おかげで、避難所生活も強いられなかった。でも、地震が起きた時の怖さは、誰も忘れることのできないものだろうと、聞き取りをしながら思った。

話を聞いていて、恐怖を感じたのは、私が寝ている時だった。私と姉が寝ていた子供部屋には天井から10 cm程度しか隙間がない、本がぎっしり詰まった本棚が私が寝ている所のちょうどま上にあったのだ。その上、家具の固定などということも実行していなかった。もし、

本棚が倒れていて、姉がかぶせてくれた毛布が無かったら・・・と考えると、けがどころじゃ済まなかったかもしれない。とすごく怖くなった。

家族が守ってくれたこと、家が新築だったこと、住んでいた地域が良かったこと、こういったことが重なっていたから、助かったと私は思った。

備えの点で私が思ったことは、備えが必要だと思うだけでなく、それをどうしたら実行に移せるか、どういうふうに伝えたら、家族がその気になるのかということ。また、そのことについて考えてみた。それは、伝えられることを伝えることだと思った。震災を経験したわりには、気を付けなさすぎだと思った。私一人でも、備えに取り組んだら、影響されるものも大きいと思う。

今回、私が聞いたことも、私たちの後の世代に伝えることもできるのじゃないかと思った。自分に震災の記憶がないからということで、伝えない、じゃなくて、震災を身近に体験した人の話を、被害が大きい、小さいに関わらず、人伝えに伝えていけることも分かった。

家族に聞いた話を聞いていても、今までに震災の体験談を聞いていても、人の支援、ボランティアの支援はすごく重要な存在となっているということを改めて実感した。支援に関して聞き取りをしている時に、思わずびっくりしてしまったのが、「6、震災を振り返って・・・」でも述べたように、見ず知らずの県外の人が、自宅が倒壊し、避難所生活を強いられている被災者に無料で家に泊めるという支援で、募金や手紙を送るなどといった支援とはまた違って、普段あまり発想できないような支援を思いつくことがすごいことだと思った。ここでもまた、支援の在り方を覚えることができた。

震災は、どんな被害を受けた人でもずっと忘れることができないものだと思う。そのためにも、最低でも家族内で災害を知り備えておき、決して忘れることのないようにしたい。

震災体験記

仁田 敦至

1. はじめに

ここでは、自分自身の被災した時の記憶を振り返ってみたいと思う。ほとんどの方がご存じのとおり、1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災は起こった。

当時2歳の私の記憶は、日に日に色を失っていき思い出せないものとなりつつある。2年前の防災情報の授業のときでさえ振り返るのに時間がかかり必要となった。防災情報の授業で作った新聞をベースに記憶をたどりながら書いていきたいと思う。なので、時系列が重なって同じ内容が重なる場合があること、内容がとぎれとぎれなところが多いことを初めに告げておきたい。

2. 自身の記憶

発災当時、私は2歳で須磨区の妙法寺に住んでいた。地震の揺れの最中は完全に夢の中だった。普段7時に起きるような子供は意外と起きないもので、目が覚めた理由というのは、父親が私の上に覆いかぶさっていてとてつもなく重かったからというものだ。今から考えると、枕もとには大きなクローゼット(引越し屋さんが嫌がるような重さ)が並んでおり、父親は私にけがをさせまいと思い上に覆いかぶさっていてくれたのだろう。記憶が飛び、両親がカーテンを開け、外を見ているシルエット、暗い空の街を見つめた両親の目には何が映っていたのかは全くわからない。

また記憶がかなり飛ぶ(おそらく2~3日以上)。船着き場にいる風景。船に乗り込む時の海の色が一番印象的で最近まではっきりと覚えていた。普段見るきれいな透き通った海ではなく、嵐が去ったあとのように暗く重い海だった。まるで引き込まれそうだった。きっと最後まで覚えていたのは怖かったからだろう。話が前後するが、船着き場にいるのは、交通手段がなくなったために疎開できない人に大阪(天保山)まで船で連れて行ってくれるということが行われていた。船に乗ると、船の中のものがほとんど取り払われ人を大勢乗せられるようにしてあった。うちの家族(自分と母親と父親の母)も隅のほうで座っていた。なぜか手には小袋の“おととつ”を持っている。

しばらく記憶が飛んで、疎開先である奈良の親せきの家での記憶が少し続いて記憶が終わる。これが私の覚えているあの日の記憶。

3. 母の記憶

母親は父親に、地震だ、と叩き起こされた。電気のかさが揺れる様子を見て、ジェットコースターのように言い怒られた(下手をすれば命にかかわる事態であるのに不謹慎である)。キッチン近くであまり被害がなかった。たまたま、小さい子が勝手に食器棚を開けられないようにする留金が付いていたからだ。しかし、書斎は大変なことになっていた。ガラスの扉に同じく留金をしていたためにそこを本が突き抜けてあたりがめちゃくちゃになった。当時エンゼルフィッシュを飼っていて我が家の玄関には水槽があった。地震の揺れで水槽が落ち、玄関はガラスの破片だらけになった。

外に出てみると玄関がゆがみ、外に出られなくなってしまっている家もあった。当時住んでいたマンションはコの字型で中庭が駐車場になっていた。そこで近所の人が声を掛け合い無事かどうか確認した。玄関が開かなくなった家はみんなでこじ開けた。家から姿を現した人たちは重症ではないにしろあちこちに怪我をしている人が多かった。

あの日はとても寒く雪が降っていた。灰色に染まった雪が遠くで起きている火災のすごさ

を物語る。ライフラインのほとんどが寸断されていた地域が多い中、ものの一時間でテレビが映った。ニュースでは自分の住んでいる地域が一部損壊地域で危険だと知った。

(私の)父親は自分の母親(私からすると祖母)と連絡がつかず原付で実家(中央区)の避難所を回った。車では被災して壊れてしまった町の中を走れない。父親は、原付で自分の母親(私から見ての父方の母親)と二人乗りをして帰ってきた。

それから車の中で三日ほど過ごした。父親は、見張りのようなことをしてほとんど寝ていなかった。もしかしたら、ただ眠るのが怖かったのかもしれない。車での生活はつらかった。いつまでも落ち着けなかった。近所の避難所はいっぱいで、しかもプライバシーはなかった。奈良の親せきの家へ疎開することを決意した。父親は公務員で兵庫からは動けない。そして陸路である道路も鉄道も走っているかどうかわからなかった。どうやって行けばいいのか困った。ある時、ハーバーランドから天保山まで船が出ていると知った。

大阪に着くと息をのんだ。これほどまでに違うのかと。決してきれいな服とは言えない格好と大きな荷物を背負った、いわゆる被災者ルックで大阪に着いてみれば被害は皆無に近い。そんな中、小さかった私の手を引き駅まで歩いた。周囲の目線が痛かった。そして奈良まで行き疎開生活が一週間ほどつづく。いくら身内とはいえ気を使った。

これが母親の語ったある程度の記憶。あんまり話したくないのか、途中からうやむやにされてしまった。

3. 小学校教諭 N の話

この先生は、震災当時北区の小学校に勤めておられた。住んでいたのは須磨区だった。そろそろ起きる時間だと起きようとしたそのとき、地鳴りと突き上げるような揺れが起こった。しかもマンションがみしみしと軋んでいる。マンションから出ないとまずいと思ったが、実際動けずに待機していた。余震が続く中、ラジオをつけると阪神高速が倒れたことを聞いた。すぐに職場である北区の学校に電話をかけた。いっこうにつながらず、同僚と一緒に確認のため現地へ。さいわいなことに北区の被害は軽く、小学校の生徒は軽傷を負ったぐらいで心配はなかった。その小学校では三宮からくる避難者の受け入れも始めた。

しばらくして、被害の少ない地域の先生が兵庫区の避難所になった学校の手伝いに行くことに。行った先でトイレ掃除や水運びといった肉体労働を専門的に行っていた。特にトイレ掃除はやりたがる人も少なく衛生上の問題も起こる。なにより被災した人たちに気持ちよく使ってほしくて必死に頑張った。

ある日、自分の友人が亡くなったという事を聞いた。葬儀屋へ行くと体育館ぐらいの広さの敷地に、ずらっと棺桶が並ぶ。葬儀屋に友人の場所を聞くと、奥から何番目の右からいくつ目です、と言われそこへと向かった。そこに行くまでに十人近い子供の棺桶があった。なぜこんなに小さい子どもたちが死ななければならないのかと憤りを感じた。友人の死と同じぐらいに辛かった。

これが小学校六年の時の担任 N 先生から聞いた話である。

4. 小学校教諭 T の話

当時西区に住んでいたこの先生は、たまたま産休で家にいた。明け方マンションの下からゴーンという音。それが響いてきたかと思うとドーンという音がした。とたんに揺れ始め実際は二十秒ぐらいの揺れが五分にも六分にも感じられた。旦那は前日から仕事で家にはおらず余震が起こるたびに子供と二人で怖かったそう。これが小学校五年時の担任 T 先生の話である。

4.5. 小学校教諭が思うこと

君たちの二つ年下の子たちは記憶が全くないにしろ被災はしていた子がなかにはいる。しかし今では全く記憶がないだけではなく、全く被災の経験がない子たちが大半を占めている。あの震災の記憶を絶対に語り継がなければならない、と遠くを見つめながら語られた。

もう一人の先生は、君たちの時よりも震災学習はだいぶ変わってきている、と。震災の経験がある子たちにあんまり震災に絡んだ衝撃的な映像はトラウマがあってはいけないので使えなかった。オブラートに包んで行うことが多かった。しかし最近の子たちは経験がない分しっかりと教えないといけないことが増えたとはいえ、震災のことをストレートに深く伝えることができるようになったと語られた。

5. たまたま聞いた話

当時近所に住んでいた新聞配達をしている人がこんな話をしてくれた。

あの日、あの時、その人は新聞を配達していた。いきなり地面が光ったような気がした。そして原付に乗っているとはいえ、やたらと回りが揺れて見える。疲れているせいだと思った。帰宅してみると家の中はめちゃくちゃになっていた。そこで初めてさっきのゆれが、地震であったことを知ったと笑いながら話していた。

中学校の理科の先生がこんな話をしていた。

家で寝ていると、すごい音がしていきなり揺れだした。家族は無事、家の中もさしては被害を受けなかった。普通にお風呂にはいり頭を洗い始めた。水が止まったのは頭を洗って間もないころだ。全身泡だらけでしかも頭はもっとひどい泡の量。とりあえずタオルで泡をふきとった。しかしその先生はある日ふと気がつく。昔、熱帯魚を飼っていた時のヒーターが使えるのではないのかと。しかし一本やそこらじゃ無理だろう。近所のお店へ行き大量のヒーターを購入した。それを浴槽に入れ、二時間かけてお風呂を沸かした。ぬるかった。しかし、数日ぶりのお風呂は気持ちよかったと。

祖母(母方の)の住んでいる所がどんなことになっていたかある時間聞いた。

祖母の家は明石市の中でも割と垂水区と密接している地域の団地に住んでいる。地震直後団地の上に設置された給水塔が落下した。必然的に水が出なくなった。当時、祖母は50代そして祖父は60代。一階に住んでいたが水を運ぶのは年齢的にかなりしんどかった。当時の我が家は奇跡的に電気もガスも水道もすぐに復旧していたため、祖母がよく我が家にお風呂をかりにきていたらしい。

中学校の先生がこんな話をしてくれた。

この学校は震災の時に校舎が割れた。校舎の中に鉄板が敷いてあるところは校舎が割れた所を修理したあとなのだと。隣に立っている小学校のプールも巻き込んでグラウンドが割れた。だから中学校と小学校がプールで繋がっている。小学校のプールがやけに新しいのはそのときに新しくしたからだ。そう言われてみれば小学校二年生の時に水泳の授業のない時期に引っ越してきてあんまり気にしていなかったが、確かにグラウンドの片隅で工事をしていたことを思い出した。しかし小学校二年目でこちらにきた私が工事していたのを見た記憶があるのは不思議だ。修理するに至るまでに時間がかかりすぎている。しかし、兵庫県も財政的なものがあつたのだろう。

6. 長田のまち歩きで聞いたこと

まち歩きでいった服屋さんのおじさんは涙を流しながら話してくれた。震災の日孫と子供夫婦が泊まりに来ていた。突然襲ってきた地震に驚き外に出た。火が迫ってくる。貴重品を取りに戻ろうとするが子供に止められる。消防隊は来ない。すべてを失うさまを見ているしかなかった。避難所へ避難。避難所ですき焼きを食べている人がいた。孫が食べたいと泣く。しかし用意してやることはできるわけもなくつらかった。みんなに平等にいきわたらないものをこんなところで食べるなんて非常識にも程がある。ある日、物資として古着が届く。未

だにその時にもらったシャツを持っている。ある日ボランティアにやってきた青年が話しかけてきた。時間がわからないと不便でしょう。そう言うのと彼がはめていた時計をそっと私に手渡した。断ろうとしたが彼は頑なにひかない。受け取った。その時計はいまでも時を刻んでいる。商店街のメンバーは震災でバラバラに。連絡がついた人は一握りだった。商店街を再び。そう思い土地を安く貸してもらいテントを張ってメンバーに声をかけた。徐々に増えていくメンバー。違う商店街の方も参加していた。人は欲が出る。店を広くしたいともめ始めた。土地はこれ以上借りられない。なだめるしかなかった。ある日芸能人が慰問に来ていることを知る。五木ひろしさんのファンだった。来てもらえないかと何度も交渉に。五木さんは来てくださった。そこから数年間来てくださった。みんなも仲良くなった。しかしお客さんは戻ってこない。顔なじみはほとんど引っ越してしまいさみしいと。

通称長田のおっちゃんである味萬の主人はこう語る。商売人は大変だった。仕入れたものの支払いの大半は月末払い。スタートはゼロからではなく借金というマイナスからだった。何とか残った商品を露店で売った。子供たちにも手伝ってもらった。十年以上かけて借金を返し店も立て直した。君たちはいま何ができるか今災害が起きた時にどう対応するかを日常から考えてほしい。普段しないことはいきなりできないと。

7. 編集後記

改めて震災の記憶を書き出していくにあたって、母親に震災の時のことをいろいろ聞いてみた。聞いていくと記憶が戻る部分もあったが、あんまり気は進まなかった。最近になって震災の日が近づくと母親はやたらと涙もろくなっている。記念日症候群のような感じになっている人間に辛く、怖かっただろう記憶を掘り返して話をしてくれと言いだすに苦しかった。とりあえず今回、聞けば話をしてくれるが話の表面的な部分が多く突っ込んで聞くことも多かった。途中でうやむやにしはじめた母親にはそれ以上聞けなかった。

小学校の先生方にしっかりともう一度話をうかがいに行ったところ、お二方とも転任されずすでにおられなかった。

途中で書くことがなくなり、最終的に拾い聞きの部分を多く使うものが入ってしまうのと同時に、書いた日の気分によって文体も視点もバラバラでやや読みにくいという仕上がりになってしまう直そうにも手をつけられない状態に・・・。

親と震災の話を始めた時に、今住んでいる団地はまだ耐震工事してないから、大きい地震が来たら即潰れると思うとかいう物騒な話になっていた。耐震工事の予定はいまだ上がっていない。高齢者の多い団地はなぜか後回しにされているのか、うちの自治会にお金がないだけなのかはわからないが不安でならない。

語り継ぐ

羽白 奏里

震災が起こったとき

私の家は父、母、私の3人家族だ。しかし、阪神・淡路大震災が起こった1995年1月17日午前5時46分、私と母は母方の祖父母の家、父は自宅にいた。家族は離ればなれだった。

前日から父がインフルエンザを発症し、当時2歳になったばかりだった私にうつるといけないので、そのころ住んでいた木造の古いアパートの自宅から徒歩20分くらいのところにある母方の祖父母が住む10階建ての市営住宅に避難していた。

記憶は曖昧だが、地震の揺れが始まったとき私はまだ寝ていて、揺れがおさまったあとに隣で寝ていた母に起こされてやっと起きたと思う。私が寝ていたところのすぐ横に大型のテレビがあり、幸いにも落ちては来なかったが、もし落ちてきていたらただでは済まなかっただろう。また、母は揺れが始まった瞬間、私に覆いかぶさりかばってくれたらしい。祖母は机の上やタンスの上、テレビの上などちょっとでもスペースがあれば、きれいな花を生けた花瓶を置きたがる人だったので、私が起きた時周りを見渡せば割れた花瓶の破片が散乱していた。中身を合わせて100kgはあろうかと思われる冷蔵庫が50cmは移動し揺れのすさまじさを物語っていた。また、止め金をつけて固定していた食器棚は45度以上傾き、開き戸の扉から全ての食器が飛び出てコナゴナになっていた。しかし、私、母、祖父母にはかすり傷一つなかった。

はっきりした記憶はなく、寝室から玄関までどのように逃げたかは覚えていない。母に聞くと、とりあえず足を怪我しないようにスリッパをはいて外に出たらしい。玄関から外に出た時もう一度家の中を振り返って見てみると、薄暗く、花瓶や食器がいっぱい割れていてとても不気味だった気がする。でも、玄関を出てすぐの所に当時大好きだったカラフルな三輪車が止めてあり、それに気をとられた私は、母に「これ乗っていくー。」と言うと「危ないから、あかん。」と怒られた。2歳になったばかりの私には、阪神・淡路大震災がどんなに大きな被害を与えたか、ましてや地震がどういうものかなんて分かるはずもなく、その時にはすでに不気味さも忘れていつもとは違う状況にワクワクしていた。いつもと違う状況に恐怖は全く無く、楽しいことが待ち受けている気がした。しかしまだ早朝で、いつもはまだ寝ている時間だったのですぐに眠気が襲ってきた。それからのことは何も覚えていない。震災から15年経った今、祖父母の家に行くと花瓶は机の上に小さなものがひとつしか置かれていない。

それから、(祖父母の家は8階だったので)階段で避難した。ガラスなどでケガをするといけないので、私は毛布にくるまれ運ばれたらしい。無事に下にたどりつくと、祖父が車を出してくれて父の安否を確かめに自宅に戻った。地震が起こったあとすぐだったので、道はすいていて、また道路もそんなに壊れていなかったためスムーズに自宅に戻ることができた。家に着いて確かめると幸い、父は怪我ひとつなく無事だった。しかも、無事であるどころかインフルエンザであったにも関わらず、地震が起こったあとすぐにろうそくを持って近所の人たちの安否を確かめにいった。突然の、今まで経験したことのないような、大きな地震に高熱も吹き飛んだらしい。本棚から落ちてきた大量の本に埋まっていた人がいたくらいで、近所の人たちはほとんどケガもなく無事だった。遠くの身内より近くの他人と言うように、災害の場合は友達やご近所に頼るしかないため、そのために・・・という事では無く、日頃から人と関わることを負担に思わないようにした方がいい。私の家族は普段からそれができていたために協力しあうことができた。また古いアパートであったにも関わらず建物自体にもほとんど被害はなかった。そして自宅の被害も、食器棚が引き戸で開き戸のように中身が

飛び出すこともなかったので、ガラスのコップが一つ割れただけだった。引っ越しをした今でもまだ、その食器棚を使っている。祖父母の家では大量に花瓶や食器が割れたのと、母がお祭りの金魚すくいできてきて10年くらい大事に育てていた大きな金魚が死んでしまった。

ライフラインは地震によって完全に機能していない状態だったが、しばらく時間が経つと最初に電気が復旧した。いつ来るかわからない余震にみんなが怯えていた。そんな状況の中で様子を知りたくて、テレビをつけてニュースを見た。まだあの神戸の悲惨な状態は放送されていなかった。その後テレビは突然つかなくなった。地震の揺れでどうにかなってしまったのだろう。

電話が使えるようになり、連絡がきて長田に住んでいる祖母の姉が亡くなったことがわかった。地震が起こったとき、寝ていた布団の上に大きな洋タンスが落ちてきたらしい。即死だったそうだ。祖母の姉は、1週間に何度も長田から祖母の家に訪れ、私にもとても優しく接してくれた。いつも笑顔で、とても明るい人だった。その分、みんなの悲しみは深かった。（私はそのとき「死」がどういうものかなんて全くわからなかったし、「おばちゃん」が死んでしまったことが理解できなかった。だから、震災後祖父母の家に行くと、いつものようにいたおばちゃんがいなくて「おばちゃんおらんのか〜？」とよく言っていたらしい。）

父と母は知らせを聞くとすぐに、長田に向かった。私を祖父母に預けて、車に飛び乗った。エンジンをかけて、すぐラジオのスイッチをいれると「震源は淡路島の北部、震度は5。」とのこと。また、信じられないことだが、被害がそんなになかったところには営業しているパチンコ店があり、なかで遊んでいる人もいた。都市の災害とはこんなものなのかと2人はあきれ果てた。しばらくして塩屋のあたりまで行くとフロントガラスに黒い煤のようなものが降り始め、こんなときに火なんかおこして、のんきな人もいるなあと、父は思ったらしいがのんきなのは父だったことが後にわかる。道路のアスファルトはいたるところで割れ都市ガスのたまらない臭いがたちこめていた。また途中で見たマンションは1階が駐車場で、柱に支えられているマンションは、柱が曲がったり折れたりしていた。1階駐車場が潰れ、車の上にマンションが乗っていた。普通の一軒家（古い木造建築？）でも2階建ての場合は1階が潰れ、2階が1階になっていた。普段の神戸なら目にすることのない、ありえない、非現実的な光景が2人の目の前に広がっていた。

西神戸有料道路しか長田にいける道がなかったため、兵庫までは車でいって、そこから父と母は原付に二人乗りをして（このとき大量の灰が長田の方から風によって流れてきたために、父の着ていた白いダウンジャケットが灰色になったそうだ。）おばちゃんの遺体が運び込まれた村野工業高校に向かって、そこで変わり果てた姿のおばちゃんに会った。母は涙が止まらなかった。周りにも泣いている人や、呆然としている人がたくさんいて、これからの生活はどうなっていくのかと考えるとまた涙があふれた。

もし、あのとき神戸市民全員が家具の固定をしていたら、どれだけ被害が少なくて済んだだろうか。当時ほとんどの人が地震に対して無知だった。自分が住んでいるところ（神戸）には地震が来ないと甘く思っている人ばかりだった。この地震で犠牲となった大好きなおばちゃんもそのうちの一人だったと思う。しかし幸運なことに、他の親戚は（ほとんどが淡路島や神戸市内に住んでいたが）大きなケガもなく無事だった。あえて言うなら、母の友人は倒れてきたタンスで頭にけがをして急いで病院に行った。けれどけが人が多すぎて頭が切れたくらいでは大けがとも言えず見て貰えなかったらしい。普段は”大けが”に分類されるようなけがでも、このときは“この程度のけがなら大丈夫”といった意識だったらしい。非常事態の時はできる限り自分達で対応しなくてはならないなと感じた。

ライフライン

電気は復旧したが、数日経ってもガスや水道などのライフラインはなかなか復旧しなくて、お風呂に入れなかった。そこで、比較的被害が小さいところに住んでいて、ライフラインが復旧していた母の専門学生時代の友達の家（新築の一軒家）に行き、お風呂に入らせてもらった。迷惑がらずに快く私たち家族を受け入れてくれた。

母の他の友人がたくさん住んでいた被害の多かった地域でも、新しいマンションに住んでいた人はマンション自体は大丈夫だったが、ライフラインはなかなか復旧せず、マンションの5階以上に住んでいるとエレベーターは動かないし、それでも食料や重たい水（水道復旧最長90日）を運ばなければならず、生活が難しい状況が長く続いた。ライフラインの早い復旧は大事だと感じた。

父の会社の友人がいたある地域では市の体育館や仮設テントに住み、そこから出勤、通学する人にとっての悩みは盗難だったそうで、家から折角持ち出した物、支給された衣類、品物などが仕事を終えて避難所に帰ると、無くなっていた。そんな環境の中、体育館で3ヵ月暮らした友人は、「まるでドロボーと一緒に暮らすようなものだった。」と感想を述べていたらしく、父は私たちの家が大きな被害を受けなかったことを改めて感謝したそうだ。被災者同士が盗難に注意しなければならなかったのは悲しいことだと思う。

また父の他の友人は震災が起こったとき東京に出張に行っていて、神戸の映像を見て神戸に残してきた家族が心配になり急いで新幹線に飛び乗ったが、新幹線は名古屋までしか走っていなかったため名古屋から電車に乗り換え、大阪まで行って、大阪の親戚の家に泊めてもらった。そこで長田の火事の映像を見て、大阪との被害の差に愕然としたらしい。借りた自転車に乗って神戸に帰る途中に見たのは普段あるべき姿ではない神戸。ガタガタの道、倒れた家を見てペダルを必死でこぎながら涙を流した。

15年後

阪神・淡路大震災が起こってから13年が経った2008年4月、私は7期生として兵庫県立舞子高校の環境防災科に入学した。小学校や中学校で、阪神・淡路大震災について学ぶ機会があったが、震災についての知識は人並みで、防災についてはほとんど無知に近かった。また、大好きだったおばちゃんのことほとんど忘れかけているような状態だった。

1年時の環境防災科の授業では、消防士、自衛隊、警察官などの震災のとき救助にあたった方々や、電気、ガス、水道などライフライン関係の会社の方々、建築に携わる方々や、大学教授などが外部講師としてきてくださった。外部講師の方々の授業では冒頭で、必ずといっていいほど阪神・淡路大震災の被害の映像を見せていただいた。映像は目をそらしたくなるようなものばかりだったけれど、おばちゃんのためにも目をそらしてはいけないと思い、しっかりと見た。おばちゃんのことを考えることが多くなった。

いろいろな授業の中で防災について学ぶ毎日。次にくる東南海地震に備えていろいろな対策を考えたりもした。防災に関する授業を受ける中で必ず思うことがある。今、わたしたちが学んでいることを「あのとき神戸の人々が知っていたら。」

家具の固定や家を耐震補強することは、防災において基本中の基本だと思う。阪神・淡路大震災で亡くなった方々の8割がダンスなどに押しつぶされての圧死といわれている。もしあのとき、みんなが家具を固定していたら8割とはいわずとも、たくさんの命が助かってい

たと思う。あのとき神戸の人々は「神戸には地震は来ない」と思い込んでいた。地震はどこにでも起こりうるということを知らなかった。当然、「起こるはずのない」地震のために莫大な費用をかけて耐震補強をする人なんていないし、家具の固定をする人もそんなにいなかったと思う。もしあのとき、神戸のみんなが今私たちが学んでいることを知っていたらと考えたと残念で仕方ないし、同じことを繰り返さないようにすることが生き残った者の使命だと思う。

震災から15年。節目の年を迎えて、17歳になって初めて1.17震災メモリアルに出席した。黙祷を捧げると、周りからはすすり泣く声が聞こえ、悲しみは癒えることはないのだなと感じた。おばちゃん的笑顔がふと頭に浮かんだ。

今回このレポートかくにあたって父、母、祖父母に話を聞いたのだが、みんな話しながらなかった。悲しくて辛い思い出。しかし、阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐことは、次にくる地震に備えるために大切なことだと思う。話しながらない人は多いけれど、私は環境防災科の生徒として「語り継ぐ使命」を担っている。記憶はほとんどないので説得力はないかもしれないけれど、環境防災科で学んだことも含めて、後世に語り継いでいきたいと思う。それは私が唯一おばちゃんのためにできることだと思った。

阪神・淡路大震災で

濱本 大

自分の過ごし方

僕は地震の難を逃れた後、家族で避難所に行った。しかし僕はそこで、「お腹が空いた。」とわめき、泣き、ぐずっていた。弟も泣いていたらしく、僕たち兄弟は父がパンを持って帰ってくるまで泣いたり泣きやんだりを繰り返していたという。

それは環境が変わっても同じでお腹がすいては泣き、母が少し離れては泣きを繰り返していたらしい。また、寝ているときに突然泣き出したりすることもあったという。今思えば一種のトラウマだったのかもしれない。

阪神・淡路大震災時、僕は何かあったら泣き、特に何もなくても泣きと泣くことを繰り返していた。父や母も疲れている中、僕の面倒を見るのは大変だったに違いないのに最後まで面倒を見てくれていた。何とも情けなく両親の記憶から僕が泣いていた事を消し去りたいと思うこともある。

どのように守られたか

地震は、僕が寝ていた時に突然襲ってきた。父はつかまれと叫んだあととっさに僕をつかみ寄せて地震がおさまるまで僕を抱きかかえてくれた。父が抱きかかえてくれていなかったら僕は地震の揺れであちらこちらに動かされて下手に頭を撃って死んでしまっていたかもしれない。

これはあとで母に聞いた話だが、父は僕を抱きかかえている際に何個か打撲ができたらしい。これはおそらく僕を守るために我が身を盾にしたからだと思う。父に聞いてはみるが、「さあ？覚えてないなあ。お母さんの勘違いやと思うで？」といって真面目に答えてはくれない。しかし僕は自分の身を呈してまで僕を守ってくれた父に今も変わらず感謝している。

家族の体験

父・・・僕の父は2階の寝室で寝ていた。隣には僕、母、そして少し離れた所に弟という配置だ。5時46分、突如大きな揺れが起こった。父は飛び起き、叫ぶ「大、将太、起きろ！地震や、大きいぞ！お父さんにつかまれ！」わずか数秒の揺れであった・・・その数秒の揺れで僕の当時住んでいた家の1階部分が全壊した。僕が当時住んでいた家は木造住宅だったので耐震性はほぼなかった。

父は余震が来たら2階部分が潰れてしまうと思ったのだろうか急いで僕たちを外に出した。が、時間はまだ6時近く。日は出ておらず、何も見えない状況。父は家に戻り懐中電灯を取り出し、僕と弟を連れて学校へと向かった。しかし学校までの道は瓦礫で溢れていて思うようには進めなかった。普段は20分もあればつく学校も僕と弟を抱えたまま進むと1時間近くかかったという（僕が当時住んでいたのは長田区だったため特に被害が大きかった）。

学校に着いたとき、そこで見たのは人、人、人・・・あふれ返る人ごみの中で聞こえてくるのは赤ちゃんや子供の泣き声。冬の風に打たれながら校庭に立ち尽くす人、体育館でうつむいたままジッと動かない人々、悲しみか怒りかずっと泣いている人たちもいた。

父はその中、母と共に僕と泣いている弟のことを見ていた。時間が過ぎ、日がさんさんと照りだした頃・・・父はおもむろに口を開いた。「けど・・・まあ不幸中の幸いやな。家も潰れはしたけど燃えてないし・・・なにより誰も怪我なく済んだし。良かった 良かった。」父なりに気遣ってくれたのだろうと母は言っていた。

さらに時間がたち、日ももう落ちようとしている頃か、父が立ち上がった。「どこへ行くの？」という母の問いかけに父は「もうそろそろ大がお腹すいて泣く頃やし、ちょっと家に行って食べ物とってくるわ。日が落ちてからやったら周りが見えんで危ないし・・・」父はそう言って出かけて行った。冷蔵庫とパン入れ(僕の家ではパンは冷蔵庫の横に置いている)を2階に置いていたのも不幸中の幸いだったのだろう。

そして大体2時間後、父が少量の水とパン、そして梅干しを持って帰ってきた。僕はその時、お腹がすいてぐずり気味だったというのだから何とも情けない。父はそんな僕を見て「大、お腹空いたか？今食べ物持ってきたで。お父さんはお母さんに言うことがあるから、大はパン食べとって。」父はそう言う、外に出た時に、落ち着きつつ今の状況を見て、得た(とは言ってもこの状況下で本当に落ち着いていたわけではないだろうが)情報を母に話していた。

「今少しまわりも見渡しながら来たけどひどい状況やったわ。俺のなじみのある商店街は地震で起きた火事でもう原型がなかったわ・・・近くまで行くと子供の頃よくしてもらったおばちゃんに会って、おばちゃん・・・笑いながら言うてん。『正ちゃん(父のこと)、無事やったの？良かったなあ。おばちゃんの店は、ほら・・・火に包まれてもてん。私はタンスとタンスが引っ掛かって何とか出て来ることはできたけど主人はまだ出てきてないから、もう・・・。おばちゃんの全部、無くなっちゃった。これからどうしよか。』この話を聴いて、俺がやれることは何もなく・・・。」父はそう言い、肩を落とした。母は何も言わず父の言葉を聴いていた。

夜・・・完全に日も落ちたころ、父は言った。「みちこ(父の妹)のところに明日行ってみるわ。」叔母の家は当時僕達が住んでいた家から徒歩で50分程度のところにあった。学校の延長線上にあるので学校からは30分もあればつく。父がこう言ったのは叔母が住んでいるのがマンションゆえのことだろう。壊れていないと踏んだのだ。父は「壊れてなかったら少しの間泊めてもらおう。みちこには悪いけどな。」と言い、笑った。母もつられて笑う。少しだけだが、我が家に笑顔が戻った。

午後8時・・・避難所にある声が聞こえてきた。「食料の配給に来ました。取りに来てください。食料の配給に来ました。取りに来てください。」刹那、動き出す人が数人。配給者に駆け寄り我先にと食糧をもらおうとする。その数人を見ていた父がつぶやいた。「あいつら、何であんなに急いでとりに行く必要があるのか?」。それもそのはず、その数人には子供がいなかったのだ(数人がいた場所を見ても子供はいなかった)。

子供のために分け与えるでもなく、自分のためだけに食料を取りに行く。「どこまでも自分」、この考えは被災した父の中では心の奥底にしまっていた。それは被災したことによる疲れ、なんとも言えぬ虚脱感という要素もあったかもしれない。しかし本質的には被災したことによって「みんなの心が一つになっている気がした。」との言葉通り他人を思いやる気持ちが前面に出ていたからだと思っていた。その考えは大多数の被災者に当てはまっていたのだろう。

だからこそ配給者が来てもほとんどの人はゆっくりと動き出そうとしていた。しかしその考えはあくまで大多数の考えだとその数人に思い知らされたと言う。自分本位で動く姿を見て父がぼうぜんと立ち尽くす傍ら、当の数人は食料にありつけて満足そうな顔をしていた・・・。

この日、僕たちは体育館で寝ることになった。この学校に避難していた人の大半は町がボロボロの状態でもなお数分で家に帰れる人がほとんどだった。そのためポツポツだが布団を持ってくるために家に帰る人が出てきていた。しかし父は1度家に帰った時には布団のことも考えもしていなかったようで、「あぁっ!しまった、忘れとった!!!」と嘆いていた。

そんな父を見て学校の先生は、「あの・・・保健室の布団でいいなら何枚かあるので持ってきてみましょうか?」と助けてくれた。こうして布団がないという状況の中寝ることは避けることができた。が、真冬の体育館の中はそれでも寒く、ガタガタと震えながら寝た。こうして1日目は終わった。

避難生活 2 日目・・・僕の父は朝早くに叔母の家へと向かった。叔母の家が無事なら少しの間泊めてもらおうと思ってのことだ。そして父が出て行ってからだいたい 1、5 時間が過ぎたころ・・・父は帰ってきた。そして、「みちこの家は壊れてなかったで、泊めてくれるってさ。」と言って笑った。やっと落ち着けるという安堵感からか、それとも叔母たちが無事だったという安心感からか、その時の父の顔は腫れ物が落ちたかのような感じだったと母は言う。父と母は避難所の管理人に礼を言うと僕と弟を連れてすぐに避難所を後にし、叔母の家へと向かった。

叔母の家に向かう途中、母は絶句した。そこで母が見たものは全壊した家々、そして全壊した家の前にポツポツと建てられている木の板だった。その木の板には家族の避難場所と連絡先が書いてあった。おそらく自分を訪ねてくるものに心当たりがある人が書いたのだろう。これらすべてが、平常時には決して見ることもない光景。家、煙、見えるもの全てが母から言葉を奪っていった。

そんな母に、父は言う。「そうか、お母さんはしっかりと街を見るのは初めてやったな。避難所に行く際はまだ暗かったし、周りを見て動けるほど余裕もなかったからな。すごいよな？おれは長田区で生まれて、それからずっと長田区で暮らしてきた。けど町がこんな風になるなんて予想もしたことなかったわ。でも、大丈夫。長田区の人には皆これ位じゃへこたれへん。すぐに町の再興に取り掛かるわ。子供のころからみんなの事を知っている俺が保証する。だから・・・な、心配せんでもいいから・・・。」

父の言葉を聞いた母は涙ぐんだ顔をあげ、「ありがとう。もう大丈夫やから。」とだけ言った。

叔母の家に着いたのは昼少し前だった。ドアをノックすると叔母が出てきて、「いらっしやい。家の都合がつくまでは家におりな。」と言ってくれた。それに対して父は、「ありがとう、じゃ遠慮なく。」と言い家の中へと入って行った。そして、叔母の家での生活が始まった。

叔母の家に入ると父は、「昨日(会社の)社長と電話したけど、今日から会社に来るようにと言われたから今から行くわ。大と将太も送り届けたことやしな。後は頼むで。」そう言うので父は出て行った。

時間は 3 時、おやつの時間・・・父が会社から帰ってきた。時間にして大体 4 時間がたったころだった。父によるとあす以降の予定について話し合う＋全員の状態の確認だけだったらしい。

夕方・・・父と母は水の配給を受け取りに行った。というのも叔母の家は家こそ無事だったものの電気、水道、ガスといったライフラインは止まっていたのだ。しかし家の中で寝ることができる、というのはかなりの安心になったようだった。その証拠に母と父には陰うつな表情がなかった。

夜になり、父と母、そして叔母の家族と一緒に風呂に入りに行った。叔母の旦那さんには弟がいて、板宿の少し上のほうに住んでいるのだが、幸いにも被害は少なく風呂が沸かせるとのことだった。そこで僕たちは入りに行くことになったのだが家へ向かうまでの道のりは想像と違ってほとんど被害がなかった。時間にして片道 30 分、往復 1 時間といった具合で平常時に歩いて到着する時間とほぼ大差なかった。これも幸運だったといえるだろう。弟さんは僕たちが到着すると優しく迎え入れてくれて、僕たちは 1 日ぶりのお風呂に入ることができた。避難所にいてまだお風呂に入ることもしない人がたくさんいることを思っただけで父は、「なんか・・・俺たちだけお風呂に入って悪い気がするなあ。」と呟っていた。

この日の僕たちは、これも 1 日ぶりの温かい毛布と家の中で眠った。「今までは当たり前やと思っとったけど家があるという幸せを改めてやけど実感するな。」と父と母は話していた。

避難生活 3 日目～7 日目・・・早朝から父は会社へと向かった。母は水の配給を受け取りに行ったため、僕と弟の面倒は叔母が見てくれた。叔母にも 1 歳の子供がいたため、僕はその子と遊んでいたそう。

叔母の家で過ごし始めてから 4 日、父の友人が食べ物と水を持ってきてくれた。父は、「こんな時に本当にありがたい。」と涙ながらに言っていたそう。

叔母の家で暮らし始めて 6 日目に加古川のおばあちゃんの家に行くことが決まった。父と母は叔母に礼を言うと叔母は「困った時はお互い様。また何かあったらいつでも来てな。」と言って笑って見送ってくれた。

加古川のおばあちゃんの家に着いた。おばあちゃんの家は被害がほぼゼロで震災前と変わらない生活が送れた。ただ父は、「会社までが遠い・・・。」とぼやいていたそうだが・・・。

おばあちゃんの家に住んで早半年、垂水のマンションに住むめどが立った。家賃は少し高かったが自分の場所を持てるということで親は喜んでいて、こうして両親の被災生活は終わった。

話をきいての感想

僕は今まで阪神・淡路大震災の時にどんなふうに生活したかを親に聞いたことはなかった。その時の辛い記憶、体験を掘り返すのが嫌だったという気持ちもあったがそれよりも僕が体験を聞くのが怖かったという点もあったように思う。聞くとすれば良かったこと、辛かったこと、全てをひっくるめて聞かなければならない。僕は他の人が話すのを聞いたことはあったが自分の身近な人が話すのを聞くのは初めてだったのでそれが何とも言えず怖かったのだ。身近な人に聞く話は妙にリアルで、生々しくて、聞くのがつらかった。話すほうも辛かったと思う。しかし話を聞いて良かったと今では思う。僕の記憶がしっかりと形成される前の話を聞くことで親がどれだけ大切にしてくれたかがわかって嬉しかったからだ。

また、父は母の、母は父の言葉を今でも曖昧ながら覚えていて、非常時に言われたこと、体験したことは心に強く残ることが分かり、それが未だ心に傷を負った人がいることの要因かとも思った。

僕はこの話を語り継いで震災の記憶を、教訓を、後世へと途切れさせないようにしようと心に誓った。

震災体験

春尾 勲平

僕が2歳の時に阪神・淡路大震災が起こり、その時自分は どうしていたのかなど全く覚えていない。今後震災を体験していない子供たちが増えてくるので、震災のことを学び語り継ぎ風化させないようにしたいと思った。

<祖母の体験>

僕の祖母は阪神・淡路大震災が起こった時一階で寝ていて、突然地響きや激しい揺れや食器が割れる音で目を覚ました。起こった直後は地震とわかってはいたけれど訳が分からなくなり、とりあえず二階で寝ている祖父のところに向かいいったそう。停電していて真っ暗の中を手さぐりで二階に行くと、普段寝ているとこにいないく何度も呼んでも返事がなかった。2回目行った時にタンスの下敷きになっている祖父が助けをよんでいて急いでタンスをどけ助けた。一階に待機していると何度も何度も余震が起こり怖くなり外に逃げようと思ったがドアが開かず二階の窓から隣の家の屋根につたって行き、路地を通り外にでたそう。

祖父と祖母はコンビニをしていて自動ドアを割りなかに入った。すると酒、ビールなど酒種関係類が店の通路に割れて転がっていたのですぐに片付けたそう。

夜が明けると割れた自動ドアの間からお客さんがどんどん入ってきてびっくりし、家族は着替える間もなくパジャマのまま商売をしていた。その時のお客さんは気が落ち着かない状態なのに規律に従い外に並んでいたそう。何しろお客さんは水を欲しがっていて酒種関係以外の飲料水や食料、電池やガスボンベを買いにきて、たった一日で店にあるほとんどの商品が売れてしまい普段より売上がとてもよかったが、次の入荷がいつになるのかわからなく困ったそう。自分たちは幸いにも家が壊れず避難所に行かずにすんだし、店をしていて食料や飲み物にも困ることがなく家で生活をしていたし、お風呂に入りたかったけどまだ仮設風呂もなく困っていた時に、配達に行っていた川崎重工の寮長がお風呂を使わせてくれお風呂の心配もなくなったそう。

自分のところは被害が大きくなって余裕もあったので、おなかを空かしている知らない人にでもご飯を分け、道に猫がたまっていたのでその猫も家に持ち帰って世話をしたそう。

電気が一番早く復旧したが、水がなかなか復旧せずトイレに行っても水が出なく流れないことが困って、トイレに行かないために水分補給などを我慢していたそう。寝る時も何度も余震が起こっていたので気になってなかなか寝むれず一日中起きていた時、家が壊れないことだけを祈っていたそう。

近所の仲のいい人たちは、ほとんど家が壊れていて多くの人が他府県に引っ越してしまっただけそう。

祖母は最後に阪神・淡路大震災でよかったことは、家族がみんな無事で家が壊れなかったことだと言った。

<親の体験>

当時は垂水の団地に住んでいて、地震が起こったとき底からつつかれるような感じとものすごく大きな地鳴りで母はまだ赤ちゃんだった兄と僕をタンスや飾っていたものが倒れてきても大丈夫なように毛布で包み覆うようにして守っていたそう。このような揺れの次に前後左右の揺れが何度も起こり、立つことも、動くこともできなかったのもその場に座り揺れが止まるのを待っていたそう。

揺れがおさまると部屋のなかにはタンスが倒れ、窓ガラスやガラスの扉がくずれ辺りに散乱していた。そして外からは、人の悲鳴や窓が割られる音やサイレンの音など何が起こってい

るのかわらなくこわかったそう。テレビをつけたが映らずラジオで地震だとわかったが、ほかの地域の情報など全く言っていなく訳がわからなくなったそう。

近くに住んでいる祖父と祖母の安否を確認するために電話をしたが停電していて繋がらず、不安になった母は兄と僕を連れて急いで祖父と祖母が住んでいるところに行ったそう。

まず玄関をでると団地の人が慌てて逃げる姿をみて母と3人ともついて行くように団地から逃げて、途中で道が陥没していて家が崩れていたそう。外はとても寒かったのにみんな気が動転していてパジャマで行ったそう。祖父母は生きていて店の片づけをしていたのを見て安心したが、自動ドアのガラスを叩き割りそこから強引に入って商品を盗もうとする人がいて大変だったそう。

幸いにも家が壊れずに家族も全員集まり食べ物もあったので避難所に行かず、地震が起きて少しの間は祖父母の家に家族みんなでいた。当時たまたまガスコンロを買っていてガスが復旧するまでガスコンロで調理して食べ物を作っていた。また店に売っている生モノに火を通して困っている人たちに分けたそう。飲み水には困ることがなかったけれど、トイレに使う水がなくトイレに行くことを我慢し、我慢するためにできるだけ飲み物を飲まないようにしていたそう。

そして、母の友達がお風呂を貸してくれ、水の配給を運んできてくれたのでそういった水を使って生活をして、その時水の大切さを改めて思い知ったそう。

まだ幼かった兄と僕を祖父母の手伝いをしながらみていて大変だったうえに、オムツがなくなり買いに行ったりして大変だった。特に僕は2歳ながらちょろちょろしてずっと面倒をみとかなければいけなく、震災で生活スタイルがくずれなかなか寝ない僕を寝かせるのが一番大変だったそう。

母は、寝ている時に何度も何度も余震がして揺れるたびに目を覚まして恐怖と不安で精神的に追いつめられ、なかなか眠れない日が続き体に限界がきていたが、そのたび兄と僕を布団で包み守り寝かしていたそう。

復旧期間の時、何度も嫌になったけれど長田や兵庫に比べると被害が小さく自分たちよりもっと大変な人がたくさんいるから「がんばろ」と自分で自分を励ましていたそう。

そして多くの人々が犠牲になっている中で奇跡的に家族みんな生き残のこったことが一番良かったことだし、今回の地震で自分たちが住んでいた団地も祖父母の家も壊れなく住めていたのでよかった。

<どう守られ・どう生きてきたのか>

地震が起こったとき僕と兄はまだ寝ていて、母は起きていて台所で朝ごはんを作っていたときにいきなり激しい揺れがきて母は地震かわからなかったけど、とりあえず寝ている僕と兄をタンスなどが倒れても大丈夫なように、布団で包んで抱きかかえていたそう。

数秒の間に家の中がぐちゃぐちゃになって、タンスや本棚やパソコンが倒れてきて外では何が起きているのかわからず布団からでるのがこわかったそう。

揺れがおさまってから僕と兄を部屋の安全ところに連れて行って、かすり傷があったのでバンドエイドをはったりしていた。タンスや本棚が倒れてきたのかすり傷ですんでよかったそう。今思うとタンスや本棚が倒れてきて骨折などせずすり傷だけですんで本当によかった。実は地震が起こる三日前に部屋の模様替えのためタンスや本棚の整理や位置を変えていたそう。

そして、外から悲鳴が聞こえてきたり、「火事だ!」という声なども聞こえてきて、不安になった母は近くに住んでいる祖父母が心配になり電話をしたけれど、停電で電話が使えなく祖父母の安否確認ができなく歩いていくことになって僕と兄と母で歩いて行ったが、まだ幼さなかった僕はなかなか歩かなかったし、道にひびがいていたりして危なかったのも母がおんぶしながら時間をかけていったそう。その時母はいつもなら5分ぐらいで着くのにあの時は15分かかり早く祖父母の安否を確認したく焦る気持ちでイライラしていたそう。

だ。その時の景色はまるで別世界にいるような感じで、昨日までと全く違っていてびっくりしたそうだ。

祖父母の家に着くと、祖父も祖母も安否を確認することができ店をしていたので母も店を手伝っていて、僕と兄は祖父母の部屋にいて祖父が仕事をしながらずっとそばにいて面倒を見ていたそうだ。

普段なら寝ているのに震災のときはなかなか昼寝もしなくうろちろうちろうちとして普段と行動が違って、店もしないといけなし、家の中の掃除もしないといけなかったので面倒みるのが大変だったそうだ。そんな大変だったときでも僕や兄がストレスをためないように祖父は店の周りを散歩し、オムツがなかったので買に行ってくれ僕は不自由なく生活をしていたそうだ。

僕は二歳だというのに手のかかる子でよく泣いたり、走り回ったりしていたので、もし避難所でそんなことをしていたら多くの避難者に迷惑をかけていたと思うので、幸いにも家がつぶれず避難所に行かなくてよかったと思ったそうだ。

そしてもっと困ったことは食事で、僕は二歳でまだそんなに食べることができなかったのに自宅の冷蔵庫の中の食料も少なく、赤ちゃん用のインスタントの食べ物もなく本当に困ったそうだ。そのときはガス・電気・水といったライフラインがまだ復旧していなくガスコンロでしか調理することができずおかゆをしたり、細かくしたりして最低限の食事はとることができたそうだ。そのときはまだ好き嫌いがなく何でも食べてくれて本当によかったそうだ。

そして震災が起こって一週間後ぐらいに僕は熱を出して母は心配していたけど、家族みんな店をしていて大変だったので病院に入院させた方がいいと思っていたけど祖父が、「もっと重い病気や怪我をしている人は多くおる」と言って、ずっと僕の隣で仕事をしながら一緒にいてくれていて、夜中僕が起きると祖父は寝る間を削ってまでまた寝るまで本を読んでくれ、祖父も震災で普段と違う生活で体力的にも、精神的にも疲れていたのに四六時中面倒を見てくれていたそうだ。薬は震災前に熱を出したときの薬が残っていたのでそれを飲んで、そんな日が三日ほど続いて少し熱が下がり家族が安心したそうだ。普段なら僕より兄のほうがよく熱を出したりするのに震災のときは僕のほうが体調がなんかおかしかったそうだ。

復旧期には、お風呂に入りたかったけどなかなか近場になく、明石や姫路に探しに行ったけど結局知り合いの人のお風呂を借りて祖父と一緒には何をするにも祖父がよく面倒をみていたそうだ。洗濯物がたまって洗うために、近場では何もできない状態だったので遠くのコインランドリーに行ったりする時、暇にならないように僕と一緒に連れて行ってくれたそうだ。

そして電気が一番早く復旧したので、僕は寝るときに震災の怖さで暗い所が無理だったそうでなかなか寝なかったけれど電気をつけて寝るとすぐに寝るようになり、家族は僕が寝るまで起きていて寝たことを確認して電気を消して寝たそうだ。

垂水は被害がそんなに小さくなくむしろ小さかったのも、日が経つと僕と同じくらいの年齢の子供連れの母親たちが集まって世間話をしているとき外で遊ばなくストレスがたまっていると思って遊ばせていて、最低でも一日 3 回は外に連れて行きストレスをためないようにしていたそうだ。その時どの母親たちも子供たちのことについて「無事でよかった」など震災のことについて話し合っていたそうだ。近所の仲のいい人たちはみんな無事だったそうだ。しかし僕が一番仲のよかった子供の家が倒壊してしまい、その家族は県外に引っ越ししてしまって、幼かった僕はまだ別れについて知らなく母はごまかしていたそうだ。

そして、だんだんと町が元に戻ってきて祖父母の家から自分たちの団地に戻り団地は被害が小さく建て直す必要もなく普段通りの生活をしていたが、部屋が狭く暗かったので僕はなかなか寝なく震災前のように生活するのに慣れるまでに時間がかかったそうだ。そのとき母は祖父母の家に行ったりして環境に慣らす努力をしていたそうだ。

<感想>

今回話を聞いて、震災の時は 2 歳で何もできない状態で多くの人に迷惑をかけたし、家

族みんなが守ってくれたことを改めて感謝しないといけないと思った。詳しく震災について初めて聞いて本当に家族に迷惑をかけたし、多くの死者がいる中で生き残ることができたので、この生かされた命を大切にしてこれから生きていきたい。

震災が気づかせてくれたこと

久谷 篤史

～地震以前～

僕の家族は地震が起こる前年の1994年の10月に引っ越しをした。その際、家族で寝る部屋には一切の家具を置かなかった。布団を敷いて幼い僕を真ん中にして両親が寝ていた。タンスは別の部屋にまとめて置いた。その時はまさかあのような大地震が起こるなんて考えもしなかったが、寝室には何も置いていなかったのだから怪我をすることなく無事だったのだ。

でも、タンスをまとめて置いたのは地震対策ではなく、まとめて置いた方が服の出し入れがしやすいからという考えからだった……。母は地震時、タンスが倒れた部屋を見てぞっとした。悲惨な光景が広がっていた。

～震災直後の様子（自宅）～

地震の起こる新年早々、父は病気で入院した。だからあの日は母と幼い僕の二人で迎えたのである。母はどんなに心細かっただろうか……。

「グラググラググラ」、母は寝ているところに揺れを感じ、すぐに僕の上に覆いかぶさった。直後、今までに感じたことのない強い揺れに襲われた。体が宙に浮いたようだ。身動き一つ取れなかった。物が倒れたり、壊れたりする音が辺り一面に響きわたった。中でも一番怖かったのが地鳴りの音だったようだ。地面がうなり声をあげて吠えていたようだったと母は言った。それは今でも耳に残って離れないと言う。日常生活では決して聞くことがない音だったから余計だろう。僕自身も覚えてはいないが、身体のどこかにこの音が残っていると思う。

揺れがおさまって、とにかく外へ出なければと母は僕を抱えマンションの廊下に飛び出した。各家々からも人々が出てきてみんな何が起こったのかすぐに理解出来ず、パニックになったようだ。

夜が明けて家の中の様子を見て、あまりにも悲惨な状況に言葉を失ったようだ。何もかもがめちゃめちゃで、まるで人の侵入を拒むかのような状況だった。

何度も繰り返される余震とともに部屋は部屋ではなく、ただのガラクタの山となってしまった。一月の真冬にパジャマのみで飛び出したので、服を着替えるために母は僕を隣の人に預けて一人で家に戻った。僕はお隣さんに抱えられた時、よく知っているにもかかわらず泣き出したようだ。幼いながらも恐怖を感じていたのか、母から離れた不安からか、泣き叫んだようだ。母はとにかく急いで二人の服とキッチンから菓子パンを持って帰ってきた。着替えた後、お腹を空かせた僕は菓子パンをほおばった。しかし、飲み物が全てこぼれてないので母はとても困ったそうだが、そんな時お隣さんがペットボトルのお茶をくれたそうだ。その他の人もお菓子やカイロをくれたそうだ。避難所では僕が一番幼かったのだから、みんな気をつけてくれたのだ。

～地震直後の様子（まち）～

たった数十秒の揺れであんなにもメチャクチャになることを誰が想像しただろうか……。

死者は6434人にも及んだ。まちのあちこちで火災が見られたそうだ。消防車や警察官が全力で救援・救助に励んだが追いつかなかった。ただただ茫然と立ち尽くすしかない場面が何度もあったそうだ。

市民の「助けてえ！！」などの悲鳴声が飛び交っていた。まちはパニックに陥っていたの

だ。神戸市はもともと地震が少ない地域だったので、市民の防災に対する意識が低かったのかもしれない。ハザードが社会の防災力を大きく上回ってしまったのでこんなにも被害が大きくなってしまったのだろう。一人一人の意識が減災に繋がることを僕は改めて感じた。

～ライフラインが止まった～

あまりにもひどい光景が目に入り、母は体の震えが止まらなかったそう。しかし、他の階の住人から 1 階部分に大きい亀裂が入っていることを聞いたそう。それを聞いた母は恐怖と不安で押しつぶされそうになったと言う。

地震直後しばらく出ていた水が出なくなり、手を洗うことさえ出来なくなった。もちろん、電気・ガス・電話は直後から使えない。いつも当たり前のように使っていたそれら全てが止まってしまった不便さは、今まで経験したことがないのでかなり困ったようだ。いつでも手を洗うことが出来ること（水道）、寒さや暑さから身を守り、エアコンをつけて快適に過ごせること（電気）、お腹が空けばいつでも料理を作れること（ガス）、離れて暮らす祖父母の声がいつでも聞けること（電話）、それら全てはどんなにありがたいか痛感したと母は言っている。同時に、当たり前のことに自分はいかに感謝していなかったかと反省もしたそう。

～父の安否～

その後しばらくして母は夫であり僕の父の心配でいたたまれなくなったそう。当然、電話はつながらない。当時は携帯を持っているのが珍しい時代だ。連絡は容易には取れなかった。前日まで点滴で横たわっていた父を心配して二人は病院へ迎えに行くことにした。

しかし、普段なら三十分くらいの道が何時間もかかったと言うのだ。渋滞とガレキで道が塞がれ通れないのだ。その上、南へ向かうほど被害が大きくなっている。住んでいたマンションの周りは建物が壊れている所もなく、一見して外はあまり変わっていないのに病院のある長田区は家々が倒れ、道が塞がれていた。カーラジオは「神戸は壊滅状態」とか「死者・行方不明者数百人」と叫んでいた。明らかに自宅周辺と違う様子を事の重大さと、怖さと不安が押し寄せてきた。

やっとの思いで着いた病院は真っ暗で、飛び去った薬品の臭いなのか、異様な臭気が広がっていた。病室に駆け込むと僕達は抱き合って泣いた。

その後、父は病院を退院させざるをえなかった。病院が機能を失っていたからである。退院の用意をして帰りかけた時、僕は「ジュース買って」と叫んだそう。毎日、お見舞いの帰りに病院内の自販機でジュースを買ってもらうのが楽しみだったからだ。でも、電気も止まっている中で買えるわけがない。母はただいつもの習慣で買ってと言っただけでなく、本当に喉が渴いていたのだろうと言う。朝からまともに食事などしていなくて空腹に耐えかねたのだろうと言った。母は自販機まで行って「壊れているから今日は買えないね」と納得させた。

その時、すぐ横に白い布がかけられたいくつものストレッチャーが目にとまった。わずかに開いた窓からの風によって白い布が一部めくれ、母は立ちつくした。煤だらけになっている幼い子供の遺体だった。当時の僕と同じくらいの年齢だったそう。その状況を前にして母は涙が止まらなくなった。手を合わせてその場を離れたそうだが、その光景は今でも脳裏に焼き付いていると言う。僕達は震災のことを絶対に忘れてはいけない。多くの命が奪われたなかで僕達は奇跡的に生きているのだから。

～父の入院先の病院の様子～（父からの聞き取り）

父は地震の起こる 2 日前ほどから、ようやく起き上がれるようになり、トイレも行けるようになった。しかし、点滴はしたままで不自由していたそう。

地震の日、父は激しい揺れで目を覚ました。やはりものすごい音で、揺れよりむしろ音で恐怖を感じたと父は言う。その恐怖の音の原因の一つに地面の陥没があった。入院先の近くの地面が何メートルにもわたってメチャクチャに陥没していたのだ。片側だけでも3、4車線もある大きな道路だった。この陥没が出来る際に恐怖の音が鳴り響いたのだろう。

父は自分以上に病気やケガがひどい人は大丈夫だろうか心配したそう。看護師さんが「大丈夫ですか？」と何度か聞いてくれたが「大丈夫です・・・」と言わざるをえなかったそう。

病院の中はかなり悲惨だったらしい。看護師さんに、食事が提供出来る見込みはないとか、患者にあった薬が渡せないなどと言われたそう。揺れによって薬は棚から飛び出していて、どれがどの患者のものか把握出来ない状態だった。

そして、父はこのまま病院に居てもいつ復旧するか分からないので退院を勧められたそうである。そのことは同室に居た4人全員に勧められた。悩んだ結果、父は退院することを決意した。看護師さんの言う通り、このまま病院に残っても仕方がないと思ったからである。いろいろな思いが交錯したであろう。父の判断は正しかったと僕は思う。

～避難所暮らし、そして再び病院へ～

父が退院した後、家族は近くの中学校に避難した。父はかなり回復していたとはいえ、病み上がりの避難所生活は大変だっただろう。病気で倒れた際、頭を壁にぶつけてしまい数針縫ったのだが抜糸する間もなく退院させられたので、避難所に来た医師に抜糸してもらった。水もない中の治療はとても困難だったと思う。数名の医師と看護師が何百人という人々の治療に当たっていた。医師や看護師自身もケガをしているのにもかかわらず、治療を一日中こなしていた。

中学校には一週間ほど避難していた。わずかなスペースに肩を寄せ合い、不安と恐怖を抱えながらの生活だった。食べ物は毎日配られたが、おにぎりやパンばかりでそのうち「温かいものが食べたい」と悲しむお年寄りや、「お菓子を食べたい」と泣く子供達が増えていった。水も止まっていたので、手を洗うことも出来ず、母は衛生面が悪いことをとても心配していたそう。

そのことは幼い僕の体調に影響が出た。避難生活が一週間近く経ったとき、僕は熱を出し同時に下痢を起こしたのである。中学校に滞在している医師に診てもらうと、すぐに入院した方がいいと言われ近くの国立病院に入院した。また、同時に父の体調も悪化し同じ病院に入院した。二人が同時に入院となり、母は相当大変だったにちがいない。母は幼い僕に付き添いながら、父の看病もしていたのだから。

母は退院になっても、もう避難所に帰らない方がいいと考え、メチャクチャになった家を一人で片付け始めた。どこから手をつければいいのか分からず途方に暮れたそう。それに、一人でいるとまた地震が起こるのでは、という不安と恐怖でたまらなかったそう。ある時は壊れたものを片づけながら、たくさんの思い出が詰まったものを見て涙したようだ。母は「一人で片付けているときは不安で悪いことばかり考えてしまった」という。しかし、「父が入院していた病院で目にした幼い子供の遺体のことを考えては、私も父も子供も生きているのだからなんとかなる！」と懸命に自分を励ましたそう。毎日病院と自宅を行き来し、お見舞いや自宅の片付けをしていた母はどんなに大変だったろうか。一人でやってのけた母は本当に偉いと思う。

そして、僕は一か月、父は一か月半の入院生活を経て自宅に戻った。僕は記憶にないが、部屋は綺麗だったにちがいない。母は「大変だったけれど、二人が元気になって戻って来たら大変だったこともいっぺんに忘れた。」と言った。僕は改めて母に感謝の気持ちでいっぱいになった。

～差しのべられたたくさんの手～

避難所生活が約一週間、僕の入院生活が約一か月で、地震発生から一か月以上が経って僕は自宅に戻った。その間も母は一日に数時間、家に戻った。片づけや掃除をするためである。その時に母は玄関の前のダンボールと手紙に気づいた。市外や県外の親戚や友人が何時間もかけて救援物資を届けていたのだ。中には食料はもちろん、生活用品や薬、衣料品などがたくさん入っていたそうだ。現金が入っていたこともあったそうだ。母は「どんなに心強く、どんなに励まされたことか……。感謝してもしきれないくらい」と言っている。

その後も遠くの県外の親戚や友人からも宅配便で定期的にたくさんの救援物資が届いた。そして、それらに添えられている手紙を何度も読み返したそうだ。自分達のことを心から心配してくれている人がこんなにもたくさんいたことに胸が熱くなった。一日も早く元気になって、みんなに会いに行こう！と思うと力が湧いてきて、前向きになったそうだ。不安ばかりがつのった毎日が、前向きに物事を考えられるようになり、元気になったことをみんなに報告することが目標となったそうだ。また、「生きているのだから何とかなる。」と良い意味で開き直ることもできたそうだ。

この震災で人々の意識に変化が現れただろうか？いやっ現れていてほしい。被害を受けた人、受けなかった人がいるだろう。被害の大きさもそうだ。だが、被害の大きさは関係ない。たとえ小さな被害でも深い心の傷を負った人はたくさんいるのだ。大事なはその傷と向き合いながら自分の置かれた状況を真摯に受けとめることだ。それは簡単なことではない。とても長い時間がかかるはずだ。でも決して諦めてはいけない。なぜなら、奇跡的に助かった命があるからだ。たくさんの命が失われたなかで僕達は生きている。それは奇跡だ。その命を無駄にしてはいけない。たとえどんなに辛くても……。

生と死が紙一重だった震災の中で、僕達は生き残れたことに感謝し、命を大切に、人生を送ろうと、僕は強く心に誓った。

昔・今・これから

平木 達也

今、私に震災体験を話せと言われても、それは難しい。震災当時の年齢が1歳だったことにより、記憶がないからだ。多くの人たちにも、「1歳なら、震災当時の記憶なんてないよね」といわれる。確かにそうなのだが、だからといって、そのままで終わらせたくなかった。私はこの神戸で生まれ、神戸で育ってきたのだから。

私は私なりの語り継ぎをしていきたい。親や周りの人たちから語り継いでもらい、次は私たちが語り継ぐ。震災を知らない人のために。記録として残しておくために。

-震災前の日常-

当時、私たちの家族は神戸市内にある団地で暮らしていた。両親と私の3人家族で、父は飲食店の仕事をしており、家に帰ってくるのはいつも遅い時間帯だった。家の周りは緑が多く、安らかな気分になれる場所だった。

家の近くには祖父母の家がある。私は祖父母が大好きで、よく家へ泊まりに行っていた。少しでも時間があると祖父母の家に行き、そこにいる2匹の猫と一緒に遊び、ご飯を食べて帰るという日が多かった。夜は寝つきが悪く、母と祖母と私の3人で車に乗り、深夜の暗闇の中、ほぼ毎日ドライブをしていたそうだ。車が止まるとぐずりだし、動くとき泣きやむ。今思えばどれだけ手のかかる子供だったのだろうか、とても大変だったに違いない。この話は今でもよくされ、このドライブがあったからこそ、祖母のことが大好きになったのだと思う。この時は、まさか私たちが祖父母の家に避難するとは思ってもしなかった。

幼いころ、私はよく病気にかかっていた。すぐに風邪をひいたり、高熱で入院したり。夜泣きをして、病弱な私は親に大きな苦勞をかけていたと思う。震災の前日も風邪をひいており、寝たきりでいた。大好きな保育園にも行けず、家に居た私のそばには常に、親がいた。

-私と阪神・淡路大震災-

明け方、大きな地鳴りとともに、地震がやってきた。兵庫県南部地震だ。

1995年1月17日 午前5時46分、兵庫県南部地震が発生した。後に、この地震は阪神・淡路大震災と呼ばれるようになる。この震災は大きな被害をもたらし、死者数が6434人にも上った。

私は風薬を飲んでいたのでずっと寝ていたままの状態だったらしい。大きな地鳴りの音、激しい揺れにも関わらず私は寝ていた。なぜそんな激しい状況の中で眠れていたのか、見当もつかない。私のそばには母が付き添っていた。母は揺れで目が覚めると、すぐに私の上に覆いかぶさった。私たちが寝ていた部屋はタンスが多く、とても危険な場所だったと後になってから聞いた。幸いにもタンスは倒れてこなかったが、その代わりに本や食器などの物がすべて床に落ちていた。

地震がおさまると、まずはケガをしていないか確認しあった。家族全員ケガもなく、ほっとした時間が訪れた。だが、母がリビングに行くと、そこには悲惨な光景が広がっていた。床一面にきらきとした食器の破片のじゅうたんができており、めちゃくちゃになった食器は母の心を大きく揺さぶらせた。今まで普通に使っていたものが一気に日常から消え去っていったのだから。

少し時間をおいてから部屋の片づけを始めた。はだしのままでは怪我をするので玄関にスリッパを取りに行く。きらきらのじゅうたんをきれいに片づけ、本なども元の所へ戻していくと、そこはいつもの見慣れた光景になった。ただ、何か違うのは『ほとんど食器が入っていない食器棚』と『家の外から聞こえてくる人々の声』だった。父が窓から外を眺めた。

「これが…これがあの、神戸なんか？」

そう父が言った。緑豊かな木々は倒れ、倒壊した家まで見える。死者は出なかったらしいが、それでも十分な被害にあった。

私たちの家はライフラインが寸断され、どうしようもできなかったのもので、祖父母の家へと移動した。祖父母の家は地盤が固かったため被害が少なく、食器なども割れておらず、物が少し落ちていただけだった。ガス以外のライフラインもすべて通っており、何とか安心できる暮らしができた。

テレビをつけると、神戸の街の光景が映し出された。だが、その映像はいつもの神戸とはまるっきり違う。ぺしゃんこになっている家、泣き叫ぶ人々…そして、航空からの撮影によって、昼間なのに町全体が黒く染まっていたことが分かった。外で鳴り響くサイレンの音。その音は一日中鳴り響き、これが母の一番印象に残っていることだという。

一日目の夜は余震がひどく、余震による被害が心配だったため、近くの中学校へと避難した。そこでは、私たちと同じように夜を恐れてやってきた人や、ライフラインの寸断によりやってきた人たちがいた。冬場の体育館は予想していた以上に冷たく、持っていったものが毛布とラジオだけだった。鳴り響くサイレンやなれない空間での共同生活は大変なもので、なかなか寝付けなかった。

二日目からは祖父母の家で生活するようになっていた。その頃には風邪も治り、毎日が祖父母の家ということで私はとてもうれしがっていた。ただ、保育園は休んでいた。私は大好きな保育園に行けないわけがわからなかった。しばらくたったある日、保育園から連絡が入った。家に電話してもつながらず、いろんなところに連絡を取って私を探してくれていたのだった。それからしばらくは祖父母の家にお世話になり、保育園には2月から行った。

-防災教育-

震災から数年がたち、私は小学生になった。自分自身、震災についての記憶が全くなかったので、あの震災についてはそれほど興味がなかった。ただ、母はよく震災についての話をしてくれた。それは、今の私たちがしようとしている『語り継ぐ』へのはじめの一步となった。

私の通っていた小学校・中学校では震災当時、避難所として利用されていた。そのため、私の小学校ではよく防災教育を行っていた。そのひとつに『しあわせはこぼう』という本を使った授業があった。この本はモノクロの写真やグラフ、文がたくさんある本という感じでしかなかった。1月17日が近付くと、この本を道德の授業で読むようになった。そこには震災を体験した小学生たちの文が載っていた。家を失った人、避難所生活を送った人、大切な人を亡くした人。多くの小学生たちがそれぞれの思いを書いていた。なぜこのようなことになったのか、今の私たちにできることは何なのか、このようなことを発表しあった。だが、私は意見を言えなかった。知っていることが少なすぎ、どうすればよいのか全くわからなかったからだ。この時から、阪神・淡路大震災についてもっと調べたい。そして、『自分にできることは何なのだろうか?』と考えるようになった。結局、小学生の間にその答えを見つけることは出来なかった。

中学生になっても防災教育はあった。ある授業で、外部講師として消防の方をお招きし、震災当時についてのお話を聞いた。当時は消防＝ヒーローという感覚でしかなく、その時のお話も「消防ってカッコいい!!」という印象で終わった。この頃から、消防士になりたい気持ちが出てきた。

さらに、もう1つ話題があった。その内容とは、もし地震が起こったら、自分たちは短い時間の中でどのような対応ができるのか、といったものだった。この話のときに、地震は初期微動と主要動の2つの波があることを知った。その初期微動から主要動の間にどうするか。これを考えさせられた。私たちは、幼いころから習ってきた机の下へ潜る。という答えを出した。しかし、消防の方から、「その間は約5秒程度しかない」と言われた。実際に5

秒を測ってみると、とても短いことに気付いた。はたして、この5秒間で冷静に動けるのか。揺れている場所でうまく行動するのは難しい。では、どうすればよいのか…小学校のときと同じく、まともや知りたいことが増えた。

進路を決める時期になり、どうしようかと迷っているとき、担任の先生が環境防災科を教えてくれた。私の中学からは環境防災科へと進学した人がいなかったため、どのような学科かわからなかった。私は説明会に参加し、その学科が防災に関すること、阪神・淡路大震災がきっかけでできたこと、そして、消防関係の行事が多くあることを知った。私は、消防についてもっと知りたいといった気持ちだけで、その学科を受けることを決めたのだった。

-環境防災科-

私は消防について知りたく、この学科に入った。それだけのためだった。だから、いま私が深く防災について勉強していることや、ボランティア活動をしているのが不思議に思えてしまう。消防士になりたいという気持ちは変わらずとも、その気持ちがさらに変化し、自分の夢へとつながったのだから。

この学科では普通科では学べない、たくさんの授業がある。地震の発生メカニズムの勉強や災害時における対応や心のケアなど、どれも興味のあるものばかりだった。さらに、外部講師の方をお招きして講義を受ける授業もあり、講義は自衛隊や警察、大阪ガスなどがあり、その中には消防の方もいた。

講義の中では、消防士たちがどのようにして、阪神・淡路大震災に対応していったのかというお話をしていただいた。多くのお話の中で、「消防は震災の前に無力だった」という言葉が、一番印象に残っている。自分のヒーローの消防士が震災に負けるなんて…という気持ちでいっぱいだった。この講義では、大きな災害力が相手では、消防力が負けることもあり、その経験を踏まえて、今の消防は進化し続けているということを学んだ。

このころには「消防士になりたい!!」という気持ちが固まっており、環境防災科ならではの行事、消防学校体験入校では、消防の訓練を受けるとともに、震災当時のお話も聞いた。目の前に要救助者がいるのに助けられない…どうすることもできなかったというお話を聞き、改めて災害の威力の大きさを知った。

-行事を通じて学んだもの-

環境防災科では、特色のある行事がたくさんあった。防災訓練や防災についての発表、地域との交流などだ。私は時間の許す限り、多くの行事に参加してきた。そこでは毎回新たな発見がある。

環境防災科の行事の1つとして、地元の小学校へと出向き、防災授業を行うというものがあった。阪神・淡路大震災について授業をしていると、小学生たちからは多くの質問が飛び出してくる。「なんで地震って起こるん?」「地震が起こったらどうしたらいいん?」自分が勉強してきた防災について質問してきてくれることがうれしく、もっといろんなことを教えてあげたいと思った。いつの間にか、防災を広めるということが楽しいと思えると同時に、これが今の私にできることなのだと分かった。小学生のときに考えていた『自分にできることは何なのだろうか?』の答えがここにきてわかったのだ。

すると、私の夢にも変化が出た。『防災を広める』はもちろんしたい。だが、昔からの夢、『消防士になりたい』という気持ちもある。そこで、『消防士になり、地域と深くかわりながら防災教育をする』という新しい夢ができた。防災教育を受けていない人たちなら、救助活動をして多くの人々を救いたいといった理由で消防士になりたい人が多いと思う。もちろん、それはとても素晴らしいことで大切なのだが、私が考えたのが、『災害を未然に防ぎ、消防と地域を身近なものにし、住民の防災意識の向上を目指す』というものだ。地域の防災訓練では消防の協力もあって成り立っている。消火器の使用訓練や消防署の見学などを行い、

住民の防災意識を高めている。このように、消防と地域をより密接にして、小学校などでの授業で防災について教えていけたらと思う。このような考えができたのは、私が環境防災科で防災について勉強したからだろう。そして、環境防災科の設立の原因、阪神・淡路大震災が起こっていなければ、ありえなかった話だ。

「阪神・淡路大震災は、私たちから多くの尊い命を奪っていった。しかし、私たちに多くの新たな出会いを与えてくれた。」

この言葉は、私の尊敬する消防の方をはじめ、多くの方々がおっしゃっていた言葉で、一番印象に残っている言葉でもある。そして、一生忘れることのできない言葉になるだろう。同じ志を持った仲間たち、防災のスペシャリスト、これらの出会いがあったからこそ、今の私の夢があるのだ。一つ一つの出会いを大切に。それが、わたしが環境防災科で学んだことだ。

-自分にしかできないこと-

今、私に震災体験を話せと言われても、それは難しい。だからといって、ひとつも語れないというわけではない。今の私は昔の私とは違い、多くのことを学んできた。それは単に防災という勉強だけではなく、『人と人とのつながり』を通じて学ぶものが多かった。今までは聞いた話をそのまま別の人に伝えることしかできなかった。自分の視点から震災を見ようとしていなかったのだ。だが、それだとすべての人たちが同じ視点からの話しか聞いていないことになる。お互いに知っている話どうしだと、「その話は聞いたからもういい」と、つながりがなくなってしまう。そうならないために、自分が考える震災を相手に伝えることが重要だと思う。

私は多くの防災を学んできた。しかし、その多くは他人からの話によるもので、自分で震災について調べようとはあまり思わなかった。『伝える気持ち』が優先しすぎて自分で学ぶことをおろそかにしていた。この震災体験を書いているときに、今までで一番、阪神・淡路大震災を考えた時だと思う。震災を改めて見つめ直し、見つけられなかったことを見つける。『自分自身で学ぶ』ことができた。人から話を聞いているだけではなく、伝えるために私自身がもっと学ばなければと感じた。環境防災科に入ったからこそできることをする。他の人にはできないこと、『自分にしかできないこと』をこれからの生活と絡め、将来の夢、消防士となって防災を広めるということを実現させていきたい。

語り継ぐということ

福元 裕貴子

当時2歳だった私に震災の記憶は残ってない。しかし神戸市民の1人であり、環境防災科で震災について学んだかぎりには記憶にはなくても当時のことを語り継いでいくべきだと思うから、両親から聞いた話を元を書いていきたいと思う。

震災当時

当時も今と同じ、神戸市須磨区の団地に住んでいた。父、母、私の3人暮らし。地震が発生した5時46分は3人とも川の字になって寝ていた。両親は地震の揺れで目が覚めたそう。とにかく揺れている時間が長かったらしい。父はその揺れている間、母と私を覆ってくれていたと言う。幸い、私たちのところに物が落ちてきたりすることはなかったため怪我も無く無事だったのだが、少し離れた所ではテレビが落ちたり、一番ひどかったのは台所で、食器棚が倒れてたくさんの食器が割れ、ガラスの破片が飛び散ったそう。まだ未明で外は暗く、停電していたため電気はつかないし、下手に動くと落ちているガラスの破片で怪我をすると判断した両親はとりあえず明るくなるまで寝ていたそう。

明るくなってきて起きたらまず、祖父母の安否を確認するため電話をかけたらしい。うちの親戚はほとんど神戸市内に住んでいる。北区に住んでいる祖父母と、兵庫区に住んでいる祖父と、長田区に住んでいる祖母には連絡がついたのだが、もう一人長田区に住んでいる祖父には連絡がつかなかった。むしろいつもなら、あちらから心配して電話をかけてくるような祖父だったらしいのだが、電話もないし、繋がらない。心配になって私たち家族は車で長田区の祖父の家に向かった。

私の家から祖父の家へ向かうまでの道のりで、地下鉄板宿駅から南へ行く道はボコボコ、長田区にある菅原市場は家事で道が通れない状態、兵庫区の大開通りは道が陥没していたなど、いつもなら普通に通れるはずの道が通りにくかったり通れなかったりで、時間をかけて道を探しながら祖父の家に向かった。車から見える光景は悲惨なもので、いろんなところから火や煙が出たり、家がぐちゃぐちゃになっていたり、空は鉛色で気味が悪かったと母は言う。家事の近くを通る時は車の中までも熱くなってきたらしい。このような状態を見ていると、祖父もきっともうダメだろうな、と思い始めたらしい。

祖父の家に近づき、ある程度近くまでは車で行き、あとは歩いて祖父の家に向かった(私が小さかったため母と私は車に残り、父だけで)。その道のりで父が印象に残っているエピソードがある。大きな道は家事や家が崩れていて通れないため、裏にある路地のような道を通って祖父の家に向かおうとしていた。その道も家が崩れ落ちていて、ぐちゃぐちゃになっていたのだが、そこを乗り越えて通ろうとした時、その家の人だと思われる人に「通るな！その下にはまだ人が埋まっとんや」とすごい勢いで怒鳴られたらしい。

結局別の道を探してやっとのことで祖父の家に着いた。目の前にはほぼ全壊した祖父の家が残っていた。だが祖父はもうすでに外に出ていて全壊になった自分の家の横に立っていたそう。そして、近所で生き埋めになっている人を救助するのを手伝っていたらしい。頭のところに屋根の瓦が落ちてきたらしいが運良く生きており、いたって元気だった。

だが家が全壊だったため、祖父は近所の小学校で避難所生活を始めた。その避難所の小学校のグラウンドでは自衛隊の人たちによる炊き出しがあったそう。避難所暮らしの祖父に気を遣い、父は会社が近くにあったというのもあって、仕事の合間に何度か顔を出しに行っていたらしい。またもう一人、長田区に住んでいる祖母の様子もよく見に行っていた。

その祖母は店舗住宅に住んでおり、1階ではお好み焼き屋を営んでいて2階で寝泊まりしていた。ちょうど地震が起こるちょっと前に店を改装していて、その改装に合わせて柱の補強工事もしていた。そのおかげで祖母の店にも家にも大きな被害が出ることはなかった。

震災から少しの間は、ガスも水も出ないから商売は当分することができなかったみたいだ。特に長田区は水道、ガスの復旧が遅かったようで、長田区に住んでいる親戚がうちのお風呂に入りに来たこともあったそうだ。

しかし今思えば、柱の補強工事をしていて本当によかったなと思う。もしも補強工事をしていなかったら、祖母は2階で寝ていただろうから無事だったかもしれないが、1階の店は潰れていただろうから、今と同じように店を続けていなかったかもしれない。

このように私の身の回りではただ物が壊れたり、家が壊れたり、ライフラインが停止してその後の生活に影響が出るというような被害が出た人もいるが、幸運にも犠牲者や、大きな怪我を負った人はいない。

家が全壊して避難所暮らしをしていた祖父も義援金をもらうことができ、西神の仮設住宅へ移った後、元々住んでいた長田区の隣の兵庫区で家を借りることができるようになった。

うちの家では、父は地震が起きた日の17日から仕事はあって、母は専業主婦だったので多分ほとんど私と一緒に家にいたのだろう。

近所のスーパーは被害がなかったので普通に営業していたらしく、母を含めてたくさんの人々が食糧を確保しようと買い物にきていて、すごい行列ができていたそうだ。

父は仕事柄いろんな所を回っていたらしいが、とにかくホコリがすごくてマスクは必需品だったそうだ。

外を回るときは主に原付バイクを使っていたらしい。車ではなかなか通れない道が多かったようだ。

またこれは本当なのかは分からないのだが、震災直後はリュックを背負っていた人が多かったらしい。父もリュックを背負っていたらしいのだが、仕事で大阪に行った時、自分だけがリュックを背負っていてすごく周りから浮いていたと話す。でも神戸に戻ってくると、周りほとんどリュックを背負っていたらしい。

ただたまに、父の周りがリュックを背負っていただけかもしれないが、リュックは両手が空くので、被災地では便利なのかなと思う。

震災から今

生まれてから17年間、震災から13年間、私はずっと神戸に住んでいる。

幼稚園でも小学校でも中学校でも、何らかの形で震災に関する行事があった。幼稚園の時から「しあわせ運べるように」を歌っていた記憶がある。実際に、この「しあわせ運べるように」を作詞作曲した臼井先生が一度、私の通っていた幼稚園に来て下さって一緒に歌ったのは今でもよく覚えている。

でも幼稚園の頃は、この歌の意味を考えることもなく歌っていただろう。ただただ楽しく歌っていた。

小学校では、ある生徒の保護者の方が当時の話を涙を流しながら話して下さった記憶がある。残念ながら内容は全然覚えていないのだが、涙ながらに話をして下さっている表情はすごく印象的で、今も忘れることができない。

中学校では1月17日のお昼はPTAの方が豚汁を作って下さっていた。また震災メモリアル行事のようなものもあった。

このように幼稚園から中学まで、何かと震災について学ぶ機会があった。でも正直、興味を持つことはなかったし、深く考えたことはなかった。

そんな私がこの環境防災科に入って阪神・淡路大震災のことについてより詳しく学び、今こうして語り継ごうとしている。

環境防災科では阪神・淡路大震災について、いろいろな人の、いろいろな視点から見た震災体験を聞き、その時の状況を知ることができた。

私は環境防災科に入って当時のことを学んだことがきっかけとなって、震災について知り、今では興味を持つことができるようになったのだが、神戸市民の1人として、別に環境防災

科で特別に学ばなくても、震災に対して興味を持つ事は当たり前でなければいけないと感じさせられた。

特にこれからは震災を知らない人々が増えてくる時代になる。一応被災者である私も当時の記憶はない。私が「語り継ぐ」と言っても人から聞いた話を伝えることしかできない。自分が体験したことを伝えるならまだしも、人から聞いた話を伝えていくというのは意外に難しいと私は思う。

そんな時にみんなが興味を持って聞く耳を持ち、また自分も後の世代に語り継いでいこう、という前向きな姿勢が大切になってくると思う。

震災から今年で15年、両親は毎年1月17日には午前5時46分に起きてテレビの前で黙祷を捧げている。

私は高校に入るまではその年によって午前5時46分に起きたり起きなかったり、多分起きなかった方が多かった。

高校に入ってから1月17日の午前5時46分は、三宮にある東遊園地へ行って黙祷を捧げるようになった。

東遊園地にはたくさんの人々が集まる。被害に遭った人、自分の身の回りの人を亡くした人、マスメディア、ボランティアの人などがいる。

そこに集う人々はきっとみんな「もう二度とこんなことが起こらないように」という願いと祈りを込めて黙祷を捧げているのではないかと思う。

実際私はそのような気持ちにさせられた。

午前5時46分になる少し前からカウントダウンが始まる。このカウントダウンの音を聞いていたら徐々に緊張感が高まってくる。

そして5時46分。ああ、15年前の今この瞬間に、たくさんの尊い命が一瞬にして奪われたんだな、と考えると、今こうして自分が生きているということが奇跡のようにすごいことのように感じられた。

実際に地震が起こる時もカウントダウンがあればいいのに、と強く思う。

阪神・淡路大震災は、誰も予想していなくて突如発生した災害だったから、余計に被害が大きかったのだろう。

しかし、今は震災前と比べると、人々の防災意識は高まっていると言えるのではないだろうか。勿論みんなが毎日災害を意識して生きているわけではないし、それは難しいと思う。

災害があったという事実を忘れないこと、教訓を忘れないことが次の災害に繋がっていくことだと思う。

そのために私たちは「語り継ぐ」必要がある。

だが「語り継ぐ」ということの難しさを、今これを書きながら実感している。

記憶がないとしても、震災の時に生まれていた私が、語り継ぐということにこれだけ苦戦しているのに、震災を体験していないこれからの世代の人々が、また次の世代へとどんどん語り継いでいくということはもっと難しくなっていくのだろう。

そうしてだんだん震災の教訓は風化していつてしまうのではないかと思う。

だから今、自分ができるだけことは一生懸命していきたいと思う。

とは言っても、私ができることなんてほとんどないと思う。他の人に影響を与えることができるような人間でもないし、そんな力もない。

だからまずは自分自身が、災害や防災を意識しながら生きていこうと思う。それは例えば地震にも負けない強い心を持つことであったり、亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていることであったり。

これは「しあわせ運べるように」の歌詞から引用したものだが、いつか自分も本当にしあわせを運べるような人になりたいと思う。

もう二度と、同じような悲劇が起こって心に傷を負う人が出るようなことがないように、1人でも多くの人が「しあわせ」を感じることができるような社会になることを心から願っている。

震災体験

藤原 麗生

●1995年1月17日 午前5時46分…阪神・淡路大震災発生

震度7の直下型地震が神戸を襲った。

死者6434名・行方不明者2名という大都市では史上最悪の人的被害を出した。

全壊家屋104906棟

半壊家屋144274棟

火災被害 全焼6148棟

被害総額 約10兆円規模

10秒間という一瞬で、多くの命や大切な人の命を奪った阪神・淡路大震災。

しかし、失ったものは大きいけど、そこには人の温かさが感じられることもあった。

またこの地震で、多くの教訓が生まれた。

●14歳（中学校2年生）と8歳（小学校2年生）だったあの頃…

1992年1月17日震度7の地震が発生!!!

朝、母に蹴られ起床。最初ドドーンと音がすごく上下に揺れが激しく、立てない状況で、布団の上でよつんばいになっていた。母は、タンスを必死に押さえていた。揺れが一瞬おさまった同時に、裸足で外へ避難した。

しかし、外に避難してもまた余震が続き、外で家族みんな地震がおさまるまで固まっていた。外へ避難する時、ほかの人はもう避難していて、みんなは何が起きたのかも分からず、少しパニック状態だった。だから、あちこちでギャーギャーいっていたので、違う意味でにぎやかだった。また、外に出た時アスファルトに一直線にひびがいてすごかった。

だいぶ経ってから揺れがおさまり、それと同時に家に帰って必要なものだけを取りに帰った。

当時、住んでいたアパートはボロいアパートだったため、地震で潰れるかと思った。幸い、2階に住んでいた人が地震の前に引っ越ししていたため、潰されることはなかったそうだ。もし、2階に人が住んでいたら、潰れていたと言っていた。

みんな、暗闇の中歩きながら、星陵高校の体育館に避難したそうだ。体育館では、先生かだれかわからないけど、「誰々さんはここです。」と言いながら誘導していたそうだ。みんなその指示に従って決められた場所に、布団とかを敷いて一晩過ごしたそうだ。

その日の晩は、パンとコーヒー牛乳を食べただけだったそうだ。自分が知っているかぎり、近くで亡くなった人はいなかった。怪我が多く、骨折や打撲、擦り傷などが多かった。重症患者は、すぐに救急車で運ばれていたそうだ。

●先輩の家

自分たちは、まったく怖いという気持ちがなく何しても遊び感覚だった。冒険感覚で、近くの先輩の家に行った。先輩の家は、崖の上にある家を見たとき声もでなかった。その家は、崖の斜面の部分がごっそり抜けていて床も半分以上がいっしょに持っていかれていたそうだ。

家も少し傾いていて今にも倒れそうな感じだった。でも、その中でも家の中に入って必要なものを取り出していた。家の中に入ってみると、ごちゃごちゃしていてガラスも床に散らばっていた。風呂場にも行ってみると、風呂場の浴槽がなく下が丸見えだったそうだ。浴槽とトイレも崖と一緒に落ちて行った。

外では、車の上には瓦が数十枚落ちていて、ぼこぼこだった。最終的に、家の段階で言えば全壊だった。その家の家族は奇跡的に助かったそうだ。

そこで思ったことは、見ただけでもすごく怖かった。見たときは、少し横に揺れていたみ

たいでいつ全部壊れるのか見ているだけでもひやひやしていた。少し経ってから、崩れたそう
うだ。

●避難所生活

一日目の夜は、すごく寒く着れる服は全部着て家族丸まって寝た。次の日は、午前中は一旦必要なものを取りに家に帰った。午後は、友達と一緒に冒険しに遊びに行った。近くをうろろしていたけど、道路もあちこちひびがいて建物も大きなひびがいていた。また、家の片づけをしていた人を見たり、家が傾いているのを見たりした。

当時、気持ち的には、怖いというよりもおもしろいという感覚だったそう。しかし、大人になってから考えると長田方面のほうはもっとひどかったということがわかったとき、自分は垂水に住んでいてよかった分少し、罪悪感があった。

当時、子供だったから“あそび”という感覚が大きかったけど、大人になっていく内に震災で苦労をした人がたくさんいることを知って、当時自分は何もできなかったことにすごく後悔した。

避難所では、人々はずっとラジオを聞いていてなかなか離れなかった。人々は、情報収集に必至やった。

ほかの避難所では一番困ったのはトイレだが、星陵高校の避難所ではあんまり困らなかったそう。1日目～3日目は困ったけど、なんとか自分の家のトイレが使えたので自分の家でトイレをしていた。でも、水が出なかったの近くにある川の水を汲んできて、流したそう。しかし、その間もたびたび余震がおき人々は、そのときになると怖がってみんな固まっていた。3日目ぐらいしてから、公衆トイレがきたそう。

初めはトイレに列ができて待つ時間がもれそうでやばかったそう。でも、その列もだんだんと無くなってきたのでスムーズになってきた。トイレは流せないの、前に入った人のおいとかが残っていたりして、なかなか入りたくなかったそう。

トイレの掃除はいつの間にか誰かがしてくれていてその誰かが地元の高校生や中学生などのボランティアということを知って、びっくりした。自らボランティアをして、なおかつ誰もが嫌がる仕事をするのは自分でもできないと言っていました。あの時は、感謝しなかったけど今は感謝の気持ちでいっぱいだそう。

初めのほうは、食糧など十分ではなくみんなで自宅にあるものなどを持ってきて、みんなで分け合って食べた。

その時、大人たちは子供、お年寄り、妊婦などの災害要援護者を優先に配っていたそうで、その時、大人がすごく優しいことに気付いたそう。当分、乾パンの日が続く固くてまずいので嫌だった。初めのほうは、それがいやで食べなかったそう。しかし、母に「いやでも食べ。あんただけがこないやな思いをしとるんちゃうで」と怒られたそう。そのせいでもあって、いやでも食べた。

避難していたほかの子供たちも遊んでいた。

星陵高校の避難所には、遺体安置所がなかった。だから、長田方面のような悲惨な光景をあんまり見なかった。もし、星陵高校に遺体安置所があればもっと状況は変わっていたと思うと言っていた。やっぱり、あったら遊ぶという感覚がなかったし、逆に暗いイメージがあったと思うと言っていた。

2日目か3日目には夜中に、お風呂がきたそう。お風呂には、長い行列でまた時間制限があった。並んでいる人の中には、早く入れるようにTシャツ一枚で寒い中待っている人もいたそう。

5日目ぐらいには、子供たちはテレビを見せていた。当時流行っていたセーラームーンやちびまるこちゃんなどを見ていたそう。自分たちは、テレビよりもゲームにハマっていたそう。

消灯の時間になると、人のこそこそ話が聞こえた。いろんな人が「大丈夫?」「寒くない?」「トイレ大丈夫?」「怖くない?」「しんどくない?」などと声を掛け合っていたそう。人々

は、みんな安心できるように声を掛け合っていた。

その時、“人は生きること必至なんや”と感じたという。自分もその声の安心感に包まれながら寝たそう。しかし、昼間は暖房（石油ストーブ）で温かいのに、夜になると火事を防ぐために全部消すそう。そのため、布団を何枚かぶっても寒くてなかなか眠れなかった。

寝る時も余震は、その後もたびたび起こっていたそうで、みんな地震に敏感になっていた。地震が来るとき遠くのほうから、“ゴォォー”という音とともにやってきた。地震が起きた時は、みんなが震えていた。たびたび泣いている人もいた。でも、泣いている人は、周りにいる人が優しく“大丈夫だよ”“そばにいてあげるから”など声をかけていた。

9・10日目になると、周りの人達の中には帰る人が出てきた。でも、ほとんどの人がまだ避難所生活をしていた。

自分の家は、ボロアパートだったため家には帰らずまだ避難所にいた。そこでは、兄は外に遊びに行っていたため、一日中ゲームをしていた。

昼ごろは、菓子パンを食べた。菓子パンの中でもチョコクリームパンが大好きだった。その理由は、チョコクリームパンをストーブで温めチョコがトロツツとしていて、すごくおいしかったからだ。自分のなかでは、ちょっとした贅沢だった。

夕方になると、弁当が届いて食べた。当時の弁当はめちゃくちゃ冷たく味もまずかった。それでも、生きるためにみんな我慢して食べていたそうです。お年寄りも、あんまり自ら食べなかったそうです。

周りの人が心配して、「食べないと生きられんで」「少しでも食べ」って声をかけても、あんまり食べなかった。食べたとしても、ほんの少しとかしか食べなかった。そこで思ったのは、素直に「何で食べへんのやろ??」ということだった。

でも、今考えるとおばあちゃんは辛かったし、おばあちゃんなりに大変な思いをしていたんだろうなと思ったそう。

今でも、ふと思い出すそう。当時は、そんな繰り返しの毎日だった。

●最近知ったこと

阪神・淡路大震災の当時知らなかったことで最近になって知ったことがあるそうです。

それは、当時レイプや犯罪・強盗などが多数あったそうです。

それを知ってすごいショックを受けたそうです。

人間は愚かだと思ったそうです。

やっぱり社会には表と裏があって、マスコミや報道関係は表のいいところばかりテレビに出すけどそれは、ほんの一部にすぎないと思ったそうです。

裏を見れば、本間に人間がどれだけちっぽけなのかが分かったそうです。

やっぱり表面の部分だけを見るのではなく、裏面も見ることが大事だと思ったそうです。

●これから…

今震災から15年が経ち周りも良くなって震災当時の面影は全くないけど、でも、あの時の記憶は何があっても絶対忘れないし、忘れてはいけないと言っていた。

今は、震災を知らない若い世代が増えてきているけどその人たちに、“語り継”いでいくことは大事だと言っていた。自分は、当時小学校2年生で詳しく覚えていないけど、それでも若い人に知ってもらうために、自分が体験したことを機会があれば話して行きたいと言っていた。また、将来自分が結婚して子供ができたとき、子供が大きくなって学校で、阪神・淡路大震災について勉強などで知ったときに、子供でも本当の真実や体験を話したいと言っていた。

今、世界でいろいろな災害が起こってたくさんの被害を受けている地域をテレビで見ると、阪神・淡路大震災を思い出すそう。その当時は、何もできなかったけど今は大人になって、

たくさんの人に支えてもらったという恩返しで自分ができることをしたいと言っていた。例えば、街頭で募金活動をしていたら積極的にお金を入れたり、地元で防災訓練があったら参加したいと言っていた。

また、毎年1月17日に東遊園地で行われる追悼式にも行けるときは行っているそう。行けないときは、5時30分に起きてテレビをつけて追悼式が行われると同時に46分になると黙祷をするそう。

また、もう二度とあんな災害が起きてほしくないと二人とも言っていた。もし、いつか地震などの災害が起きたとき、自分にもできること（例えば掃除・誘導の手伝い・配布の手伝い・お年寄りの補助 etc）したいと言っていた。

備えとして、持ち出し袋の用意や食糧の確保ぐらいはしているそう。

最後に、防災に関わることは自分の命を守ることと言っていた。

多くの人が、もっと防災に関わることでこれからの災害の被害を減らせるのではないかと言っていた。

4つの命

松岡 毅

1) 街が破壊された日

1995年1月17日(火)午前5時46分、まだ人があまり活動しない時間にその出来事が起きた。震度7の阪神・淡路大震災だ。当時は父、母、そして3歳の私の3人で東灘の深江町の築20年以上経っている4階建の賃貸マンションに住んでいた。母はその時、妊娠中で4ヶ月とかなりお腹も大きかったらしい。

ゴゴゴォ…と低い地響きが鳴り、その直後に地震が起きた。父も母も何が起こったのか、何か大きな車がマンションに激突したか、すぐにあの地震だとは思わなかったらしい。

もう一度揺れた時に父は、母と私に「コタツの天板」を頭の上に被るよう指示して身を守った。何回か揺れが続いたが、今、街が、マンションが、部屋が、どのようになっているか全くつかめていない状況の中、「大丈夫だ」と両親は声を掛け合いながら部屋から動くことができなかったらしい。

大きな揺れが治まった後、停電で周りが真っ暗で何か照らすものが必要だった。近くに懐中電灯がなかったので、当時、私が持っていたおもちゃ(光る新幹線)を懐中電灯の代わりとして家の中を照らした。その時に自分たちの部屋がどのような状態なのかを目の当たりにした。

地震が起きている間、食器が割れる音やテレビ、タンスなどが倒れる音が聞こえていたらしいが、色々な物の音が大きすぎてその時は何がどうなっているのか分からなく、改めてここまでぐちゃぐちゃになるものなのかと衝撃を受けたらしい。

まず、窓から外の状況を確認しようと窓を開けようとするので普段ならスムーズに開く窓も1/3程度しか開かず、また少しマンションが傾いていることに気付いたらしい。窓から見た景色はまだ暗く近くのところしか見る事が出来なく、遠くの方で赤い火がかるうじて見えたらしい。

隣接して建っていた木造の文化住宅は、跡形もなく全壊していた。屋外に出るよりも屋内の方が安全と考え、少しの間は部屋にいたらしいが、もう一度大きな余震が発生したら自分たちのマンションも倒壊するのは時間の問題だと考えた。

父はまだ冬の季節で体が冷えるので母の体気遣い、着込める服は着こみ、靴下と靴を履かせて玄関から屋外へ避難した。外に出てみるとガスのにおいと人々の叫び声がはっきりと聞こえたらしい。

自分は地震が起きている間はずっと寝ておりちょうど外に出たところあたりで母に起こされ寝ている状態から目を覚ました。

その時は全く知らなかったが市や県が建てた団地は全く壊れていなかったと言う事を後になって知ったらしい。

少し離れた神社に停めていた車を父が取って来るまで、自分たちのマンションの上の階に住んでいた知り合いの人が母の体を気遣い車に私と母と一緒に避難しようと声をかけて頂いた。その時も何回か余震が起きた。しかし、車の中は暖房が使えるので母はすごく助かったと言っていた。

父を待っていると日が出てきてやっと街が見えると思うと至る所で起きている火事の黒煙の影響であまり明るくならなかった。

しかし、少しずつ明るくなりそのお陰でいつも見ていた街を見る事が出来た。近くにあった銭湯の煙突が真ん中から折れていたらしい。

道路に無造作に倒れている画や、家と言う跡形も無く全壊している家の画や半壊している倉庫やビルの画など、まるでCGを駆使した映画のワンシーンを見ているようだったらしい。

2) 咄嗟の判断

そのころ父は車を取るために、山の方にある森神社まで歩いていたら、その神社が倒壊しているのではないかと。そして車がその下敷きになっているのではないかと。不安であったかが幸いに木造であったにもかかわらず神社は倒壊せず、すぐに車の上に落ちた神社の瓦を取り除く作業に移った。車を走らせ既に発生していた渋滞にのまれながらおよそ20分で私と母と再び会った。

再び会う少し前、隣接していた木造住宅で救助活動をしようとしていた近所の方が「ジャッキを持っていないか?」と声を掛けられ車にあるジャッキを渡したそうだ。父も家などの下敷きになっている人を助けなければいけないと言う気持ちになったらしいが、母と私そして母のお腹にいる妹を守ることが何よりも優先であると考え、まずは私達のもとに急いだらしい。

母と私が乗り込みとにかく被害の少ない所に避難しようと言う話になった。

その前に自分たちが安全である事を母親側の両親と父親側の両親に公衆電話を利用し連絡をした(当時、両親は携帯電話を持っていなかった)。

父親側の両親は西神ニュータウンに住んでおり心配だったが被害をあまり受けていなく家も壊れていない事が分かった為、祖父の家に避難しようと言うことに決まった。

父は、東灘区から西神ニュータウンまでの海沿いの道は必ず渋滞にしているだろうと予想し、少し山寄りの道を通して西神ニュータウンに向かった。山寄りの道は地すべり等の発生するリスクがあったがその道を選んだ事が正解であると言うことを信じ出発した。

東灘を出たのは、およそ午前10～11時だった。

まず避難する場所を確保できたが、運悪く車のガソリンがほぼ無い状態であった。

そんな状態で出発し無事に祖父の家に着くことが出来るのだろうかという不安があったらしい。途中、やはりどの道も渋滞で、エンジンが止まれば歩きという交通手段をとらなければならないし、再び橋を越える際に道路との大きな段差に何度も遭遇しタイヤがパンクする恐れがあったため気を抜くことが出来ず大変だったらしい。

何とか祖父の家に着いたのは出発してから約5時間後の夕方4時であった。

母の体調は、緊張からあまりすぐれず、少しお腹が張って赤ちゃんに影響あるのかどうかを心配していたそうだ。自分は、地震についてあまり理解をしていなかったため祖父の家で遊べるという感覚で喜んでいたらしい。

3) それからの道

それからの日々としては、祖父の家に避難しているため幸いにも食事、水に困ることもなく生活に不便を感じる事は一つ無かった。

しかし、地震による恐怖は消えず度々聞こえる地鳴りなどにはしばらくの間とても敏感に反応したらしい。また、祖父の家でもまだ完全には安心をしておらず自分が睡眠をとる為の寝室には何か置いてあると寝ることができない状態だった。そのため周りに何も置いていない部屋を用意してもらい家族で生活をしていたらしい。

朝、夜関係なくテレビ局等のヘリコプターが来ていた。そのとき父は自分たちのようなちゃんとした避難場がある被災者たちは別に良いが避難場所が確保できていない被災者の方々にヘリコプター等の移動手段を使い被災者を安全な場所へ移動させるということを何故しなかったのか?と思ったらしい。

祖父の家では生活の中心であるライフラインを使うことが出来た結果、自分たちに振りかかった出来事を詳しく知ることができた。TVニュースで何度も報道された阪神高速道路の倒壊現場は自分たちが住んでいた近所で起こっていたことを知り、こちらの家に向かう時に山寄りの道を通して正解だったと改めて思ったらしい。

震災から約1週間後、父は生活の為の服を取りに行くのと「自分たちのマンションの部屋

の状態がどうなっているのか？」を確かめるべくマンションに向かった。マンションに向かう途中、道路には地割れなどがあり、移動するのが本当に危険だった。

自分たちのマンションは全壊に指定されていた為、マンションの周りには立ち入り禁止のテープが貼られていたが父は生活必需品を取り出すために傾いているマンションの中に入った。いつ壊れてもおかしくない状態であったが素早くかつ安全に運び出す事を自分に何度も言い聞かせながら慎重にその作業に取り組んだ。

これは、一日では到底やり遂げられる作業では無かった為、その作業に何度も行ったらしい。

震災後一番大変だったのが、父の通勤である。交通網はほとんどストップしており、普段ならば会社まで2時間弱で行けるものを神戸港から船や遠回りで電車を乗り継ぎ、朝5時に家を出て昼12時前に会社に着く。通勤に7時間も毎日かけていた。

震災当時の4歳から小学5年生までは兵庫県で暮らし、それから四年間は名古屋で暮らしまたここに戻ってきて「神戸」で生活を送っている。

4) エピローグ

約3ヶ月間祖父の家での避難生活後、西神南ニュータウンに購入していたマンションが被災する事が無かったので、すぐに引っ越しすることができた。

家財道具はほとんどなかったが新しい生活をスタートすることが出来て、私達家族は本当に幸運だった。

それから約3か月後の7月の暑い日に僕の妹が誕生した。

両親は妹に「ゆめ」という名前を付けた。これから生きていく上で常に夢を持ち続けて生きていってほしいという想いと夢をあきらめないでほしいという想いが込められて名付けられた。

震災で母親が、もしケガなどをしていたら妹の命も危険であった。しかしそんな中で家族という集団が助け合ったことで健康に生れることができた。

不幸な事が起きた後に幸せな出来事が続いた。

父は大きな被害を受けた後には幸せがあったということを知り、そして生きていることの素晴らしさを改めて実感したらしい。

一度神戸を離れて、父の仕事の都合上名古屋に転勤することになった時は「東海地震」が起きると言われている地域に住むことになるので初めは緊張して生活をおくっていた。

名古屋で生活している時に、地震が起きると言われている地域が地震に対してこんなにも意識が低いのか・・・と感じた。

しばらく時間がたった時に「東海地震」の事を忘れる事があって油断すると言う事が再び災難を引き起こすきっかけとなることをある日気がついた。それに気がついたその日から地震が起きないという奇跡を信じるのではなく「日本は必ず地震が起きる」という心構えについてしっかりと待たなければならないと思った。

再び、神戸に戻ってきたと同時に舞子高校環境防災科に入学した。

入学した理由として名古屋で出来た友達やご近所の方々へもし「東海地震」が起きた時に何らかの形で支援をしたいと言う考えを持って今こうして環境防災科で勉強をしている。

環境防災科で勉強していく中で自分は阪神・淡路大震災の記憶はないが被災者であったということは事実である。その事実を受け止め名古屋での生活でもっと情報を共有し、地域の方々と「防災」について話しておけばよかったと神戸に戻ってきてから後悔をした。

また、環境防災科で勉強したことは自分たちが生活していく上で非常に役に立っている。

例えば幸せを維持するために今、地震等の災害のために非常用のタンクに水をためたり、突っ張り棒で家具を支えている。

5) あの頃から

あの頃の自分から体も大きくなり今も成長をし続けている。その成長していく裏側ではいろんな人の支えがあり、もちろん家族の存在が大きいかかわって今の自分に至ると思う。今回震災体験の話を聞いて、守られる側と守る側の2つの視点から色々な出来事を考えさせられるきっかけとなった。

守られる側の自分と母親、守る側の父親。守られる自分がいかに無力であるか、また守る父親に頼りっきりであったことを改めて感じた。

そして現在の自分はどちらなのか？あの頃の自分から何か変わったのか？自分に問いかけると何か行動をしなければならないと思った。災害だけを考えず普段の生活の中でできる些細な人助けが自分を変える大きな一歩になると思う。

成長するのは体だけでなく頭も成長させなければならない。環境防災科で学習する中で何度も阪神・淡路大震災について学んできた。学んできたのと同じくらい自分のいろんなモノに対する考え方も変わってきた。形あるものは壊れていくが人の気持ちは決して壊れないということ。人には個々のニーズに合った対応の仕方があること。

経験したことは絶対に消えることはない。だからこそ何度も振り返って災害等に対して万全な状態にすることが大切だと思う。これから生活の中で起こる出来事一つ一つを大事にしようと思った。

最後に私は、幸せである。

今こうして何も不便がない生活をする事が出来る事が本当に幸せである。

そして、このような日々をいつまでも守り続けたいと思っている。

震災体験

三木 陽奈

1) 地震発生の前に

地震が起こる前、母、兄、私は父親側の両親の家に遊びに行っていた。その帰り道、いつも通るユニバー競技場の前の道を通る時、母が工場から排出される煙のような不気味な雲を見つけた。母は車を止め、眠っていた私を起こさないように車の外に出て、兄と2人、しばらくその雲を見ていたそうだ。母は今でもそれを「あれは地震雲だったのではないか。」と言っている。

数日たって、母は近所の人と「最近鳥がいない」、「不気味な雲を見る」といった話をよくするようになったそうだ。もしかしたらそれは地震が起こることを意味するサインだったのではないか。と、私はその話を聞いて思った。

2) 突然の地震

私は震災当時2才だったので、当時の記憶は全く無い。2つ年上の兄もほとんど何も覚えていないようだ。

母から聞いた話によると、1月17日はいつも通り父、兄、私、母という順に川の字のような状態で眠っていた。その部屋には大きな洋服箆笥が一つあり、その上には二つの衣装ケースが乗っていた。

その時突然”ゴゴゴゴ”という音と同時に家が揺れ、父は兄の上に、母は私の上にとっさに覆いかぶさった。私は揺れている間も気持ちよさそうに寝息をたてながら眠っていた。兄も一瞬は目を覚ましたものの、父に抱えられ目の前にある父の顔を見て安心したせいか、またすぐに眠ってしまった。

父によると、その揺れは15秒ほどのものに感じられたそうだ。

揺れがおさまると父が「すごい揺れやったな！！大丈夫か！？」と母に声をかけた。母も無事だと答え、お互いの安否確認をした。この時大きな箆笥は固定されており、それが倒れる事は無く、上に乗っていた衣装ケースが落下することは無く、無事だった。

この揺れが起こる直前、父は馬の大群が走ってくる夢を見ていたそうだ。その直後、“ゴゴゴゴ”という音と同時に大きな揺れがやってきたのだ。と父は言う。

少しして、家族4人は外に出た。兄は寝ぼけていたせいか、そのままどこかへ歩き出していったそうだ。しばらく周りを見回って周りの安全を確認すると、もう一度家の中へ。

夜が明け、揺れが無くなったあと、母はいつもよりも起きる時間が早かったせいか、とても眠かったらしくもう一度、2階に上がり眠ろうとした。しかし、1階で一服していた父が母を呼んだので兄と私を連れ、「眠たいのに～」と、ぶつぶつと文句を言いながら1階に降りていった。

下に降りると、目立った地震の形跡は無かったが食器棚から落下した数枚のお皿が落下し床に散らばっていて、床が食器でいっぱいだった。大きな揺れはあったものの、私の家に大きな被害はなくこのほかの被害と言えば、壁に少しだけ線が入ったのと、当時私と兄が使っていた部屋の扉が少し歪んでしまったことぐらいだった。この部屋の扉は今も当時のままで、少し隙間があいている。

父と母はそれを踏まないようによけながらそれを無視してテレビの前へ。その時電話が鳴った。

3) 変わり果てた街

電話の相手は父親側の祖父からだった。父親側の祖父母は当時、兵庫区の荒田町に住んでいたが、たいしたケガもなく、父と祖父母は、お互いの安否を確認した。父は、両方とも怪我もなく無事だということが分かってとても安心した。

そのあとすぐに、父の会社の先輩からの電話がかかってきた。その先輩の話によると、「垂水のマンションが倒れた。」とのことだった。その話を聞き、父と母は自分の家が大丈夫だったのでそんなはずはないだろうとその話を少し疑った。しかし、テレビの中の映像で、その事実を目の当たりにすることになる。母が私に「陽奈！見てみ！」と言ったが私は理解できるわけもなく何も分からなかった。そこには、たくさんのつぶれた家やビル、燃え広がる真っ赤な炎、もくもくとあがっていく灰色の煙。父は口をおさえたまま動くことができなかった。

しばらくテレビにくぎづけになった後、父が動き出し、母が尋ねると父は「会社に行く」と言い出した。当時、父は銀行員で、長田区方面の銀行に勤めていた。

母は「そんなん危ないからやめて！！」と言って止めたが父はその反対を押し切って家を出た。

「こんな大事な時に家族置いて・・・」と母はすごく不安になりながらも、床に散らばった食器の片付けを始める。2歳と4歳ですごく好奇心旺盛だった兄と私。兄はお皿を触ろうとし、私は、はいはいでそこに近づこうとしていた。母は「危ないから触ったらあかん！！」と言って食器から遠ざけると私たちを叱った。当時、食欲旺盛で食べることが大好きだった兄は、自分が使っていたお茶碗が割れているのを見てショックを受けた。

夕方になって父が疲労を抱えて帰ってきた。交通機関がすべて使えなくなっていたので、近くに住んでいる人と一緒に車で会社まで行ったそう。道はすごく混雑しており、会社に行くまでにかなり時間がかかったようだった。

父は須磨の道を使って須磨区を通って行こうとしたのだが、当時は古い家が多く、目を疑ったという。長田区に近づくにつれ町並みはだんだんとひどくなっていった。

まず初めに父の会社に寄った。会社に着くともうすでに誰かが会社に来ていたらしく、入口の所に「自宅待機」という紙が貼られていたそう。そのあとに一緒に行っていた人の会社に行った。そこはとてもガス臭く、建物も大変なことになっていた。その人は父に、会社に残るから先に車で帰っていてくれと言い残し会社の中へ入って行ってしまった。

言われた通りに父は車を走らせた。しかし渋滞に巻き込まれて車が動けなくなってしまうそう。その原因は信号機が故障してしまったことによりたくさんの車がパニック状態になってしまい、なかなか前へ進むことができなかったのだ。

やっとのことで渋滞を切り抜け長い時間をかけて昼の一時過ぎに自宅へ帰ってきた。

4) その時自宅は…

家に入り父はまず手を洗おうと洗面所に行った。手を濡らそうと蛇口をひねるものの、水が一滴も出ない。その時一緒に洗面所にいた兄が母に、水が出ない！！と叫ぶと、やっぱりなあ…という残念そうな母の回答。兄は水が出ないことにすごく疑問を持っていたので母にずっと「なんで？」聞き返していたが、4歳児の兄にその答えを話しても意味が理解できないと思ったので質問を無視し、お風呂の浴槽の水で兄の手を洗った。

それから一か月以上水の出ない生活が続いた。当然お風呂にも入れないので風呂は知人の家のお風呂を借りていた。その頃は水だけではなくガスも止まってしまっていた。不幸中の幸いで、電気だけは回復したので電気ポットでお湯を沸かし4人でカップラーメンを食べた。

5) 一晚経って

前日の大きな揺れがあったにもかかわらず、私達4人はぐっすりと眠っていた。そして朝

になり、いつもの時間に目が覚めた。家の中はいつもと変わらない朝だったが、母が立ち上がりカーテンを開けると、父の会社がある長田方面の空だけが真っ赤に染まっていた。兄は怖がっていたが、母は啞然としていた。昼になっても夕方になっても夜になってもその空の色だけはずっと変わらず、赤いままだった。

私はこの時の光景を全く覚えていないが、父や母の話を聞いていると今の年になって、もしその光景を目にしても絶対に恐怖を感じるだろう。と私は思った。

その日から父は毎日家にいた。そしライフラインも電気以外は使えなかったのも、カップラーメンやインスタント食品を食べる日々が続いていた。

数日たってもライフラインは回復せず、あいかわらず毎日インスタント食品を食べ、給水車に行き、水をもらいに行く日々が続いていた。

この時、当時荒田町に住んでいた父親側の祖父母の家に火災の火の気が近づいていると言う連絡を受けた。連絡を受けてすぐに母は祖父母の家に車を走らせた。この時もまだ道は混雑したままで、普段なら30分もあれば着く道を数時間もかけ、家に着いた。

父は会社に行っていたので私達3人で祖父母を迎えに行った。祖母はこの状況にすごく怯えていたせいか、車の中で落ち着きがなかったのだと言う。

この日から祖父母を加えた6人での生活が始まり、この生活は1カ月以上続いた。私も兄も祖父母のことが大好きだったので、不自由な生活の中でも毎日が楽しかった。

6) 久しぶりのお風呂

それから約1カ月が過ぎたころ、久しぶりに家に水が帰ってきた。

家族全員、この日を待ち望んでいた。父も母も“早く湯船につかりたい”と心待ちにしていた。その日の夜、兄は父と、私は母と、久しぶりに浴槽にいっぱい溜まったお湯に入った。父はあれだけ楽しみにしていたのにも関わらず、いざ入ってみると桶で少しずつ少しずつお湯をすくった後にそお一つと湯船につかったそうだ。

それからすぐに祖父母も無事に家に帰ることができ、家が火災に巻き込まれるかとはなく、私たち家族はまた、いつもと変わらない生活を手に入れた。

7) 語り継ぐ

この震災体験を父や母から聞いている中で、私は自分が全く覚えていない事だらけだったので、ひとつひとつ、その場面を頭の中でイメージして書いていくことにした。

揺れが起きた時、もしも家具が固定されていなかったら……。母が私を守ってくれていなかったら……。家が大きな火災に巻き込まれてしまったら……。と考えるとすごく怖くなり、もしかしたら今自分はこうして生きてないかもしれない、と強く思った。

でも、こうした体験を直接誰かに聞くことは、すごく大切なことだと思うし、知っておくべき事だと実感することができた。

私はこの大きな地震で“命”というものの尊さと、“家族”という集団の大切さを考えるようになった。6000人以上もの人が亡くなったこの地震。誰もが、“自分は助かるだろう”と思って生活している中で起こったこの阪神・淡路大震災は、私たちの日々の防災の力、備えることの大切さを、ある意味では教えてくれたのかもしれない。

これから私たちはこの“防災”や“備え”をたくさんの人に伝える必要があると思う。特に、これから大きくなっていく子供たちに。この災害を知らない子供たちに。

この地震を絶対に風化させないために、一人でも多くの子供たちに、命の大切さ、助け合うことの大切さ、自分の命を守ること、災害に向けて備えること……。など、私がこの環境防災科で得た知識を一つでも多く伝えたい。

この地震は本当にたくさんの物を奪い、たくさんの人たちを苦しませ、そして今もたくさ

んの人が苦しんでいる。その人たち心の傷が完全に癒えることは無いだろう。

しかし、この地震があり、気づけたこともたくさんあると私は思っている。

今の生活で当たり前のように使っている電気やガス、水。これらは私たちが生活する中で必要不可欠だ。しかし震災当時はこれらが使えなくなった。

有って当たり前のものが、当たり前でなくなると言う事に、私たちは普段の生活の中で気づくことができない。当時のような極限状態にならないと、その有難みがわからない。

そういったことは、この震災がなければ体験することができなかつたはずなので、震災は奪っていったものばかりではないと思う。

そしてもうひとつ、いつも居て当たり前の存在の家族。いつも身近にいるのが当たり前の存在だけど、震災が起き、その大切さに改めて気づくことができた。

家族で支えあって助けあわないと、この震災を乗り越えていくのは無理だったのではないか、と思う。これらはすべて、地震が私たちに教えてくれたことだ。

だから私は、地震は物を奪っていただけでなく、普段忘れがちになることを教えてくれるのではないかと思う。

この“語り継ぐ”が一人でも多くの人に読まれ、一人でも多くの方が防災について興味を持ち、その興味を持った人が自分の周りにそれを広げていく。こういったことが実際にできれば、私たちは自分が住んでいる街を自分たちの手で“もっと住みやすい街”、“もっと安全な街”に変えることができると思う。

ひとりひとりの知識が集まれば、それがとても大きなものになり、災害に強い街を作れるとも思う。

私自身も積極的に防災について知っている知識を普段の生活で話し、何気なくしている会話にも防災の話題が出るように生活していきたいと思っている。

感謝の気持ち忘れずに

三好 萌

「語り継ぐ」。この言葉を聞いて、阪神・淡路大震災を2歳で経験した私にできるのだろうかと不安があった。記憶も全くなく、小学校で「しあわせはこぼろ」という本を使って、勉強したくらいだった。しかし、高校生になって環境防災科に入学し、授業では外部講師の方が毎週来てくださったり、消防学校体験入校などの貴重な体験をさせていただいたりした。環境防災科で学んだこと、自分の両親やたくさんの方の体験を混せて書いていこうと思う。

地震が起こった1月17日は、家族5人で同じ場所に寝ていた。4歳の兄、2歳の私、0歳の弟はぐっすり寝ていたという。家が西神中央だったこともあり、被害は食器が何枚か割られただけだった。家族にケガもなく安心したといていた。午前中には、水と電気が使えた。名谷に住んでいる父の友達の家は、水がでなかったため私の家にお風呂を使いに来た。その時、父は地域によって復旧するのにこんなにも差があることに驚いたそうだ。ここまでの1月17日の出来事だ。

私の父は、車の整備の仕事をしている。当時も同じだ。父は1月18日に長田にある会社の様子を見に行った。その行く道先で見たことを詳しく話してくれた。

地下鉄の西神中央から新長田まで地震の翌日には使えた。父は電車を使い、自分の会社までいった。新長田につき、目の前の光景に驚いた。電柱は倒れて、電線が切れ火花がでていた。道もひび割れしていて、通れるような状態ではなかったという。今の丸よりも南側の家はほとんどが倒壊し、煙があがっていたそうだ。アスタの商店街が広がっているあたりでは、火災もあり、国道2号線には横転している車もたくさんあった。そんな光景を目にしながら、長田の会社付近でも高速道路のつなぎ目がずれていたりもしていた。火災もあり、ガス臭もすごかったそうだ。会社の中は、2段重ねのロッカーが倒れていた。比較的軽い建物だったので、鉄骨にひびが入るくらいの被害で済んだ。長田市役所で自衛隊や市職員がお弁当・お茶を配っていたが、数が足りず喧嘩もあったそうだ。仕事の関係で、三宮にも行ったという。三宮では窃盗も多かった。センター街のアーケードが崩れ落ち、大きなビルも今にも道を塞ぎそうな感じだった。両親の体験は以上だ。

今私が住んでいる地域の方々にも震災体験を話してもらった。4人の方がお話ししてくださいました。

地震が起こる前の日、1月16日夕方の出来事だ。児童館の門が開いていると連絡があり、見に行ったそうだ。「泥棒かもしれない」と思い、警察の方と一緒にいった。静まり返った部屋で「ガタガタ」といった。人影はなかった。次の日この地震の余震だったのかと警察の方と喋った。誰も気づかないような小さな音だったそうだ。

1月17日5時46分、「マンモスの大群が走ってきた」と思ったそうだ。地鳴りがすごかった。そんな地鳴りで、夫と息子は地震に気づかなかったそうだ。寝ているところにクローゼットが置いてあった。その上に木造のキャンプテーブルをおいていたそうだ。それが夫の頭の上に落ちそうだった。西神中央で唯一、死亡者を出すところだったと話していた。

食器棚は開きのものだった。スローモーションのようにお皿が何枚も落ちていくのを見たそうだ。地震の後、食器棚は開きのものはやめた。この地震で大事なものを無くすことがなかったから、笑って話せると教えてくれた。この地震で耐震や小さな備えは大事ということがわかったそうだ。

当時保健所で働いていた方のお話だ。住んでいたところは私と同じ西神中央だったので、被害はあまりなかった。生まれは栃木県だったので1か月に3～4回は震度3くらいの地震

がきていた。17日の地震もそのような地震だと始めは思った。ライフラインが機能せず、ラジオをつけた。ラジオ関西で、「息子が埋まっている」「家がつぶれた」などのなまなましい情報がたくさんはいつてきたそうだ。テレビがつかないこともあり、ラジオをつけるまでは、自分のところの被害と同じくらいだろうと思っていたそうだ。電気が復旧し、テレビをつければびっくりした。電柱や家など、普通は倒れないものが倒れていた。

夫は動物園の仕事をしていた。17日に出勤した。動物園のホールは、人の遺体安置所になっていた。交通手段がないため、3日に1回家に帰ってくる程度だった。奥さんは余震があるたび心細かったそうだ。

当時、妊娠4か月だったそうで、17日の仕事は午後からの出勤にしていた。西神中央の病院に健診に行くと、ケガ人はきていたが少なかったそうだ。とても静かだった。2月の頭に健診に行ったときは、病院の方々はへろへろだった。

仕事にいったのは、地震から1週間後だ。灘と長田に応援にいったそうだ。避難所のトイレの衛生状態を見にいったりした。そのほかにも、獣医の資格を持っていたので、動物管理センターのお手伝いもした。仮設住宅にいくため、飼うことができなくなった犬などの里親を探したりする仕事だ。この時、「動物よりも人のことは大丈夫なのか?」と思ったそうだ。

地震がくることなど考えていなかった。今は小さい揺れでも、あの地震の時のように大きくなっていくのではないかと怖くなる。20秒ほどの揺れで6434名が亡くなった。住んでいた地域と比べると同じ神戸とは思えないと話してくれた。地震があった後からは、自分の枕元に靴を置いている。

3人目の方も当時、西神中央に住んでいた。「ドーン」という音がすごかったと始めにお話してくれた。地震が起こった日、東須磨のいとこの家を見に行った。その臭いがすごかったと教えてくれた。ゴム・人間・家の焼ける臭いが混ざったような臭いだった。お年寄りや子供、合わせて5家族を自分の家に避難させた。全員で23人になり、毎晩宴会状態だったそうだ。1か月くらいその状態が続いた。

今の村野工業高校の体育館は遺体安置所だった。遺族は、棺桶の上でご飯を食べたりしなければいけないくらい人があふれかえっていた。遺族は「いつになったら焼いてくれるのか」と職員をせめた。職員の中にはトラウマになった人もいたそうだ。

今は家がたくさん建っている西神中央だが、当時は仮設住宅がたくさんあった。仮設住宅から学校に通う子もいたらしく、学校がはじまった当初、その子に対してのいじめがひどかった。

当時小学校の先生だった方から、避難所のことや子供の力について教えていただいた。「人々を助けたのは人の心」。お話して下さった中にあった言葉だ。地震がないとわからないことがたくさんあった。

避難してきた外国人に対して差別がひどかった。小学生が一番差別を受けている方に声をかけるなど、差別を無くそうとしていた。声をかけることが差別を無くすと知った。ボランティアとして、たくさんの高校生にきてもらった。5才の女の子もボランティアとしてできることをしてくれた。このとき、ボランティアが心に栄養をくれたことを知った。一人では何もできないが、みんなが集まればいろんな人を助けることができる。震災はこわいものばかりではなく、「優しさ・思いやり」を残してくれた。言葉で支えることができなくても、側にいる。これだけで人は安心することを教えてもらったそうだ。先生はそうにお話してくれた。

この地震の時は思いやりがあった。電車の席も譲り合った。そんな思いやりが消えた今、また同じような地震があれば、被害は変わらないだろうと話していた。

アスタで働く方のお話を書こうと思う。学校の授業で長田のまち歩きをしたときに聞いた。今の長田のまちは、15年前を思い出すような光景は一切なく、復興にどれだけ時間をかけ

たかが想像できる。今では鉄人 28 号もでき、まちは活気にあふれている。そんなまちのアスタの中にあるお店の方々にお話を聞いた。

1 つ目のお店は、ヤマモトヤというお店の方のお話だ。ヤマモトヤは金具屋さんだ。おじさんはジョギングをしていた。走っていると後ろからゴーっという音がしたかと思うと車道が波打っているみたいに揺れた。本当は短い揺れだったが、10 分くらい揺れているような感覚があったそうだ。揺れがおさまり、家に帰ってみると一階部分が完全につぶれた。2 階で寝ていなかったらと思うとぞっとしたとおっしゃっていた。1 階がお店で 2 階が家だったこともあり、1 階部分が弱かった。店のものは 8 割が使えない状態になった。家族は全員無事でそれだけが嬉しかった。家は解体することになり、自分たちでプレハブを建てて商品の販売を始めた。3 年後やっと家を建てることができ、生活できるようになった。

2 つ目のお店は、富士屋というお店の方のお話だ。富士屋は着物屋だ。このお店は昭和 40 年に火事により一回建てかえている。建てかえたこともあり、建物は残ったが半壊した。スプリンクラーが誤作動したため、着物は売れるような状態ではなかった。震災があつてから少しすると、家の中を隠すような布を買いにくる人が多かったそうだ。他にも軍手や足袋、スモックがよく売れた。

3 つ目のお店は、お茶の味萬。お店のおじさんにお話を聞いた。当時長田は、地震で家がつぶれるか火事で燃えたという。地震で助かった家は火事で助からないということがあった。水は出るわけもなく、次から次へ火が燃え移った。

この地震でおじさんは、気付いたことがあった。「自分にはなにができるのか」ということだ。背伸びをしかつてよく見せるのではなく、自分の持っている力を災害時どれだけ使えるかを教えてもらったという。私たちにおじさんが何度も言った言葉がある。それは「夢」だ。諦めず夢を追い続けろとおっしゃってくれた。努力して頑張ったらいつか手に入る。100 個の種をまいて、1 個 2 個の芽が出れば成功だと言っていた。どれだけ被害が大きくてもくじけず、がんばっていたおじさんの姿が想像できた。おじさんの夢は、「みんなが住みたいと思うような長田のまちをつくる」ことだそうだ。

おじさんが「夢」を何度も言ったように、次は私の夢を書いていこうと思う。私が夢を持ったきっかけと環境防災科でやってきたことと一緒に書いていく。

中学生の頃、私がなりたいと思っているものが 3 つあった。保育士と消防士と警察官の 3 つだ。もともと子供が好きで歌を歌うことも好きだった。消防士になりたいと思ったのは、テレビで女性消防士の方がでていてとてもかっこよかったからだ。警察官は小学生のころに交通安全教室で来てくれたおばさんが面白く、楽しかったからだ。なりたい職業がこんなにばらばらで理由もはっきりしないまま、進路を決める時に環境防災科の存在を知った。私はここしかないと思い必死になって勉強した。環境防災科に入ることができ、この 2 年半普通の高校生ではできないような授業を受けたり、校外学習、ボランティア活動をしたりしてきた。

授業では、外部講師の方に来ていただき、阪神・淡路大震災の当時の行政の活動のこと、ボランティアをしてきた人のお話を聞くことができた。他にも大学の先生にも話を聞くことができた。そこで、一番印象に残っているお話はひまわりおじさんという方が来たときのお話だ。ボランティアのお話をしてくれた。私がボランティアをもっとしたいと思ったきっかけにもなった。「ありがとう＝給料」この言葉が一番心に残っている。ただの「ありがとう」と思う方もいるかと思うが、私はひまわりおじさんのお話を聞いて、魔法の言葉だと思った。私が今生きていることは奇跡と言っても良いことだと思う。だからこそ、今生きている時間を大切に「ありがとう」を心から言える人になりたい。

校外学習では、淡路島の野島断層保存館にいったことが印象に残っている。この断層は世界でもめずらしく地表に断層がでていいる。実際に阪神・淡路大震災で動いた断層を見て、自

然の恐ろしさを改めて知った。ここでは、語り部の方のお話を聞くことができた。阪神・淡路大震災のとき、淡路島では「この家には何人住んでいて誰がどこに寝ている」という情報を知っていたため、救出・救助がスムーズだったと聞いた。このような地域のニーズがしっかりわかっているならば、被害も最小限で抑えられるかもしれない。そういう地域をつくれる社会にしたいと思う。

ボランティア活動もたくさん参加してきた。募金活動や地域の防災訓練、発表、防災教育、災害復旧ボランティアなど幅広く参加した。ここでは、私がやってきた 2 つのボランティアを紹介したいと思う。

まず 1 つ目は、佐用町の水害ボランティアだ。2009 年 8 月 9 日に起こったこの水害で、18 名の方が犠牲、2 人が行方不明となった。子供たちと一緒に遊んだり、家の中の泥かきなどのお手伝いをした。地元の方は毎日毎日泥かきをしているにも関わらず、私たちのような「よそもの」を笑顔で受け入れてくれた。差し入れもたくさんくださり、逆に私が元氣をもらった。

2 つ目は地域の防災訓練だ。学校のまわりには 4 つの防災福祉コミュニティがある。今回はそこでの防災訓練を取り上げるのではなく、私の地元で行った防災キャンプについて書く。

夏休みに地元でボランティアをする機会があった。正直、自分の地域が防災キャンプをするほど、防災について興味をもっているというのは知らなかった。参加して、大人の方に「防災ジュニアチームをつくってみないか」とお声をかけていただいた。このことが私の夢につながった理由でもある。今はお祭り等で防災のブースをもらって、子供たちに地震のことや液状化現象を実験で教えることが主になっている。高校生では、お金がないので自分たちだけでは何もできない。私はたくさんの方に支えられてここまでこられた。このことを忘れてはいけないと思う。

この 2 年半環境防災科で学んできたこと、防災ジュニアチームで活動したことで、私の夢はガラッと変わった。私がしたいと思っていることは「地域に関わる仕事」だ。警察や消防でも地域と関わるができるが、地域に密着して防災訓練の企画から、ゴミの分別など、その地域の特有の問題解決などをしたいと思っている。環境防災科に入っていなかったら、私は保育士になっていたと思う。環境防災科で学んだことを広げていくことが、お世話になった方々への恩返しにつながると考えている。災害を無くすことは無理だが、被害を減らすことはできる。

私にとって「語り継ぐ」ことは、人から聞いたお話を違う人に伝えていくことだと思っている。私にできることは少ないが、これからも阪神・淡路大震災や防災について広げていきたいと思う。

最後になったが、環境防災科に入って出会った方々、たくさんの震災体験を教えていただいた地域の方々に感謝したい。

震災体験

森西 杏菜

友人のお母様からお話をいただきました。
 当時住んでおられた場所は高丸七丁目です。
 当時は二歳五か月でした。
 ここでは本人のことを「友人」と表しています。

1、家族にどのようにまもられたか

普段から夜中によく泣いていて、起きてはあやして寝かせていた。

地震当日の夜中もいつものように泣いていて、何回もふとんから飛び出してはお母さんが直していた。しかし、その日に限ってはいつもの場所ではなく、お母さんのふとんで一緒に寝た。

両親の三人で寝る寝室には三段重ねのタンスがあった。

・地震発生

突然の地震で三段重ねのタンスの一番上の人形などが入っている箱が、いつも友人が寝ているふとんの上に飛んできた。もし、あやしたあとにそこで寝かしていれば、友人の命はまじなかつたという。

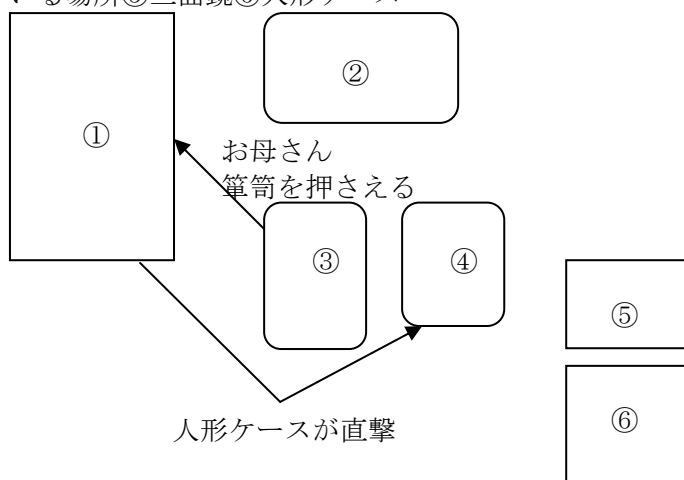
寝室の三段重ねのタンスが娘に落ちてこないように必死で押さえていたので、タンスの一段が飛んでいったことに気付かなかつたらしい。

当時は、まさか神戸に地震がくるなんて思ってもいながつたので、タンスを固定するための器具は何もつけていながつた。(現在はつけている)

当時の寝室の三段重ねのタンスには、上から順に重いものばかりが入れられていた。友人の布団の上に飛んできた人形が入った箱が一番重かつた。タンスの一番上には備中焼きの花瓶も置いてあつた。

タンスの他にも、三面鏡と人形ケースが床に置いてあつた。三面鏡は壊れながつたが、人形ケースは地震で壊れてしまった。

下の図(寝室の様子) ①三段重ねのタンス ②お父さん ③お母さんと友人 ④友人が普段寝ている場所 ⑤三面鏡 ⑥人形ケース



2、家族はどのような体験をしたか

・ライフラインの被害

断水 一週間

ガス 一カ月で復旧

電気 その日の十 12 時までに復旧

水道はマンション屋上のタンクの水を使用。断水していることに夕方まで気づかなかった。夕方からは、タンクの水も尽き、使えなくなった。風呂の残り湯をトイレに使用した。

ごはんは、炊飯器のタイマーを設定していたので 5 時 46 分には炊けていた。炊けたごはんは、おにぎりにして食べた。その後は電気も止まってしまった。ごはんの調理には、カセットコンロ、電子調理器が活躍した。

どの家もそうだったのか、電池がよく売れていた。近所のお店は潰れてしまっていたので、三木、加古川まで買いに行った。

・補助金

マンションは半壊したが、避難所には行かなかった。

マンションのスロープなどに亀裂がはいっていたが、大きな被害は見当たらなかった。

補助金申請ができたのだが、大きな被害もなかったので申請はしなかった。

だが、壁にあった亀裂が何回かの余震によりだんだんと大きくなり、トイレの水道管から亀裂により水漏れして、下の階まで浸みてしまった。

その後でトイレの水道管を直すための補助金を受け取ってれば、と思ったようだ。

・怖いもの

余震がおきるたびに、屋上のタンクがコロコロと揺れていて怖かった。

タンスが一つ飛んだこともあり、怖くて寝室では眠ることができず、リビングの真ん中に家族全員で固まって寝た。

・一時避難

水道もガスも使えないから、洗濯もできないので、子どもたちは姫路の祖父母の家へと避難させた。

避難所へ行った人や、実家に帰る人が多かった。

(その週の)日曜日くらいに、子どもたちを連れて帰ってきた時には水も出ていたが山陽電車が明石で止まってしまっていたので、歩いて高丸まで帰ってきた。大変だった。

《お母さんの体験》

三段重ねのタンスの一番上にのせていた備中焼きの花瓶が、地震直後タンスを抑えていたお母さんの頭を直撃。

病院にいけと言われたが、混んでいるだろうからバンドエイドを貼っただけにした。子どもは四人いるし、ごはんも作らなければならなかったので病院に行くどころではなかった。

・守りたい

家族を守ることに必死だった。明石市に住んでいる子どもにテレビが落ちてきて、亡くなったというのをニュースで見て、人事ではないと思い、守りたいという思いが一層大きくなった。

《お父さんの体験》

・仕事

仕事先は三宮のとある事務所。閉められていた事務所の入り口のドアが地震で折れ曲がり、事務所のパソコンも使い物にならないほど壊れていた。入り口が折れ曲がっていたため、中に入ることができなかった。一週間仕事を休んだ。

復帰したあとは、ドアから無理やり入って事務所の片づけをしていた。本格的に仕事が始まったのはずっとあと。電車も止まっているし、ガスもでない、いつも車で通る道也大渋滞で、三宮まで遠回りして、何時間もかけて仕事場に行った。

《家族の地震への反応》

・父母

余震は怖かった。余震が起これると体がすぐに反応してしまい、シャンデリア風の電気がゆらゆら揺れるだけで怖かった

・兄弟

地震が怖い。余震が怖い。

リビングにたくさんガラスが散らばっていたので、ガラスを踏ませないようにじっとさせていた。

・友人

余震は怖がっていた。

3、地震直後の私、その後

富山では（母から聞いたら）震度1だったそうだ。

小さな揺れを感じた母が、起きてカーテンを開けていたことを覚えている（私は感じたかさえ覚えていないが母が起きたので私もつられて起きた）。

富山から、父の転勤で神戸の東灘区に小学校に上がる前に越してきた（現在は垂水区）。引っ越し先のマンションはヒビが入っていて、それは阪神・淡路大震災の時についたものと言う。地震を耐えたことに驚いた。今は色が塗り替えられてしまっていて見えない。

東灘の小学校に入って、震災の勉強をした時に、初めて阪神・淡路大震災を知った。当時、「ここになくてよかった」と何度も思った。同時に、学校が避難所になったこと、生徒が亡くなったこと、東灘は他区に比べて被害・死者が多かったこと、歌「しあわせ運べるように」を知った。震災時に東灘にいたら、私や私の家族も大変な思いをしていただろう。

小学六年生の時、冬休みに「阪神・淡路大震災について」の宿題がでた。それをきっかけに「阪神・淡路大震災」について興味が湧き、新聞記事があれば切りとるようになった。神戸に越してきて毎年ルミナリエに行っていたが、ただ単に行って「きれいだな」だけでなく、「悲しさ、鎮魂の意味、被災者の気持ち、命の尊さ」を考えるようになった。決定的だったのが、ある年のルミナリエの時に、モニュメントで見た孫から祖母への、封筒のない手紙と花束だった（文が丸見えの状態）。読まれることはないだろう手紙を見て、身近に大切な人を失った人がいることを改めて実感した瞬間だった。その手紙には、現在住んでいる場所、孫への思い、現在の自分のことが書かれていた。涙がでた。

震災に関係する「何か」に関わりたくなった。神戸に来なかったら、地震のことも、ルミナリエのことも知ることはなかっただろう。しかし今、神戸にいるということで、他人事であった阪神・淡路大震災も身近なことのように思える。「地震を体験していないから」ではなく、自分が地震とどう向き合うかだと思う。「関係ないから」で済ませるのか、それとも地震についてもっと知りたいのか・・・とらえかたでだいぶ変わると思う。

他人の私に、貴重なお話をしてくださった友人と家族の方にとっても感謝している。テレビでは報道されていない困ったこと、不安だったこともたくさん聞かせて下さった。自らの震災体験を、人に話せるような人はすごい人だと思う。また、震災体験という大きな「もの」を持っている人に対して羨ましいと、話を聴いていて感じた。神戸に住んでいなくてよかったと思う反面で、私にもこういった経験があれば、と思った。

経験していない人は、どうしても他人事のように感じてしまう。また、自分の住んでいる地域で地震が起こるわけがないと感じる人がいるということも当たり前のことだ。しかし、地震を体験して、そのあとどう変えていくかが重要だと思う。例えば、国がすることならば新しい法律を作る、地域ならば防災訓練を行う、私たち個人ならば、友人の家族のように、タンスが倒れてこないように、器具をつける、非常持ち出し袋を用意する・・・など、やろうと思えばできることはたくさんあると思う。

私がこの話を聴いてすべきことを考えると、この貴重な話を語り継いでいくことだと思う。私だけで止めるのではなく、多くの人に聴いてもらうこと。

この話を聴いて、少しでも考えや見方が変われば・・・と思った。

震災の記憶

山田 詩織

1. 震災当時の私の記憶

阪神・淡路大震災が起こったとき、私は2歳だった。

私は当時のことを覚えている。

朝いつも通り起きてお気に入りのおもちゃを片手にリビングに行くと、食器棚のお皿が全部落ちて割れていて両親が必至に片付けているところだった。

母に「さっき大きい地震が来てんよ。わからなかった？」と言われ「うん」とだけ返事をした。

この記憶は忘れずにずっと覚えてはいたけど、環境防災科に入って震災について学んでいる内にこの記憶が阪神・淡路大震災のときの記憶なのだと分かった。

すごく一瞬のことだけど、とてもインパクトのあることだから覚えているのだと思うし、お皿が全部割れるなんて震度7の地震だからなので、この記憶だけで阪神・淡路大震災の揺れがどんなに凄いのだったか知ることが出来る。

2. 家族の記憶

ゴォーという音が聞こえた。

ハッと目を覚ましたその瞬間、午前5時46分、ドン！という大きな音と共に地震がきた。母は初め床が抜けたのかと思ったそうだ。

それが地震だと分かったのは、ベランダに出てみるとマンション中の人々がベランダに出ていて「今の地震じゃない？」と騒いでいたからだという。

でも私の家は須磨区の山側にあるので、幸いなことにたいした被害を受けることはなかった。そのため地震が起きたことは知っていたけど震度7という巨大地震だということは分からなかった。

だから父はいつも通り出勤する用意をし、家を出て会社に行こうとしたし、兄の幼稚園の準備もさせて母が手を引いて幼稚園まで連れて行こうとしたそうだ。

しかしその途中に同じ幼稚園の友達のお母さんに会い、朝の地震がすごい被害を出したと、電車は動いていないし高速道路も倒れ、もちろん幼稚園も休園になっていることを知った。そのあとに家に戻ってラジオをつけると、どこを回しても地震の情報が流れていて詳しい情報を知ることができたそうだ。

また夜になると被害が大きかった長田の町の火災や状況が家のベランダからよく見えたという。

家の中では最初に書いた通りたいした被害はなく、お茶碗が割れ、家具が数センチ動くぐらいだった。

もちろん10日ぐらいはガス、電気、水道は止まったが、母と兄で小学校のプールに行って列に並んで水を汲んだり、近所のアパートから出る水をいただいたりすることが出来た為それでトイレを流した。

水道やガスが使えない間は全く被害のなかった学園都市に住むいとこの家や三木に住む父の友人の家に泊めてもらえたので、あまり困ることはなかったという。

家に戻るとお風呂に入れないのは気持ちが悪かったが、少しの間だったので我慢できたそうだ。それよりも母が1番ショックだったことは、新婚当時から使っていた食器が全部割れてしまったことだと言う。

そして父は大阪の会社に通勤するにも交通手段がないため約1か月の間会社が借りたマンションで一人で過ごした。

もちろん私たちはその間父とは一緒にいれなかったが、父がいなくても少しの間水やガスが使えないこと以外は困ることがなかったので母は平気だったし特に困ったことも無かったそうだ。

でも会社の取引先に新長田など被害の大きかった場所に住んでおられた方々の中には、生き埋めになって亡くなったり、家が倒壊した方もおり、父はお香典を持ってお悔みに行くことはあったそうだ。

またこれが1回ではなく3、4回はあったらしく、自分の家には大きな被害はなかったもので、ここで地震の怖さ、深刻さをひしひしと実感することができたという。

父自体は大阪で暮らすにあたって何の影響も被害もなかったそうだが、離れている家族にまた危険が降りかからないかはとても心配していたらしい。

そして兄は当時5歳だった。

兄は少し記憶があるらしく、幼稚園が1週間〜2週間ほど休園になった事、プールに水を汲みに行ったこと、唯一近所のコープだけは営業をしており牛乳などの買い物ができたこと、三田で泊まらせてもらったこと、食器が全部割れていて父に「こっち来んなよ!」と言われたことは覚えているそうだ。

しかし当時の状況がすごく大変なことだということはもちろん理解できていなかったし、幼稚園が休みになり家にいることもラッキー程度で、嫌だったり困ったりした思いはしていないと言う。

3. 地域での助け合い、ボランティア

2でも書いた通り、私の家や周辺地域にはたいした被害がなかった。

でも生活のサイクルがいつもと違うし、父は家にいない、兄は幼稚園がないので一日中家にいる、もちろん私の世話もしないといけない母は、泊まりにいていない間は兄と私を連れて小学校にボランティアに行ったそうだ。

避難所で生活しなければならないほどの被害を受けた家はなかったため小学校自体は避難所にはなっていなかった。

そのためそこでボランティアをしていることは知らなかったけど、行ってみたらたまたまやっていたので参加したと言う。

ボランティアの内容はおにぎりを作ること、たくさんのおにぎりを握ったそうだ。

もちろん困っていない人も暇つぶしがてらに来るのだけれど、そこでみんなが集まれるのにぎやかで楽しかったそうだ。

それに母は、自分がしていることは当たり前のこととボランティアだとは思わなかったという。あとで考えれば当時の行いはボランティアだったが、手伝えて楽しかったし気軽に参加できたり感謝してもらえたり、たくさんの繋がりもできる。そういうところがボランティアの魅力なのだと気付けたそうだ。

また兄や私もみんながいる場所に行けば年配の方や中学生、高校生のお姉さんに世話をしてもらえたので、とても楽しそうにしていたそうだ。

4. メディアが伝えること

テレビや新聞、ラジオでは連日災害の様子が伝えられた。

だいたい阪神高速が倒れている映像や長田の火災が繰り返し報道されていたそうだ。

ベランダから見える長田の町の火災から被害の大きさを自分の目で見ることは出来るが、三宮の商店街、センター街の崩壊、高速道路が倒れていたり人が生き埋めになっていたりとと言うことはメディアと通して知った。

しかしこんなことが身近で起こっていることが信じられなくて実感が湧かなかったと言う。でも母がテレビを見ていると、他府県のメディアが神戸にやってきて悲惨な状況ばっか

りを流し、どうしてあげるなどという具体的なことをいうわけでもなく興味本位なところが目立つこともあり腹が立つこともあったそうだ。

しかし今考えるとそれを見てボランティアに来てくれた方もたくさんいたそうだし、全てが無駄だということとはなかったのだとも思うという。

5. 振り返って感じたこと

この震災は神戸に多くの被害をもたらした。

たくさんの人が自然災害という憎むことのできないものを相手に悲しみ、苦しみ、涙した。しかしこれをきっかけに神戸の街は復興してきれいになり市民は強さを手に入れた。

前を向いて毎日を楽しく生きていくことの大切さや素晴らしさを阪神・淡路大震災から学んだ人も多いのではないだろうか。

むしろ大きな被害を受けた人こそ、平凡に生きられる毎日を幸せに感じる事が出来ると思う。

またこの地震で「ボランティア」の存在も浸透した。

たくさんの教訓を残しそれを伝えていくことの重要さや、震災をきっかけに繋がった出会いもたくさんあるだろう。

実際に私も環境防災科に入っていなかったら、防災を学ぶことも阪神・淡路大震災を振り返ることもなかっただろうし、そもそも震災がなければ環境防災科が設置されることもなかった。

授業では多方面で活躍されている外部講師の方々が来てお話をしてくださる。

しかし自分自身が当時の事をほとんど覚えていないので、災害の悲惨さは伝わるが本当に大変な思いをした方々の当時の心境や辛さ、悲しさを心から理解できることはなかった。しかしこの機会に家族という自分にとって一番身近な存在の人たちから当時の話を聞くことになって、その話一つ一つがとても心に響いた。

私が今住んでいる家にも多少ではあるが被害はあり、お皿は全部割れたため今使っている食器はすべて買いなおしたものだとか、覚えていないだけで自分にも被害があったんだということが少し不思議な感じもする。

これを機に、家族や友達、災害が起きても生き残ることの出来た私たちの命を大切にしてください。これからも一生懸命生きていかなければならないと改めて感じる事ができた。

教訓を活かし備えることが大切だということ、防災・減災という言葉や意味をもっと広げていくために積極的に活動していくべきだと心から思う事ができたし、私のほんのささいな少しの記憶でも、震災を知らない世代に伝えていくことがこれから起こりうる災害の被害を抑えることにとても大切なんだとも思う。

残りの環境防災科での学習に精一杯取り組んでいきたい。

それぞれの被災体験

山田 夕貴

語り手：母

一震災直後

次男(0歳)にミルクを与えた後、寝かしつけてから自分もようやく寝ようと横になりかけたとき、地響きのような「ゴォッ」という音が聞こえた。

「あれ、何やる？トラックかな？」と思った瞬間、下からズドンと突き上げられ、その後体を激しく左右に揺さぶられた。おそらく時間にすると数十秒だったのだろうが、私には数分くらいに長く感じられた。家がおもちゃのように歪んで揺れているのが見えた。

激しい揺れの中、次男(0)のことが気になり次男の元へ行こうと思ったのだが、まったくその場を動くことができなかった。次男と私の距離は2m程と、それほど離れていなかった。それなのに次男の元へ行くことができず、とてももどかしい思いをしたのを覚えている。

ようやく揺れがおさまった。私はすぐに子供たちの元へ行った。

まず次男を抱き上げてリビングへ移動させた。次に、寝ている長男(5)と長女(2)を起こし、父と私と子供たち、家族全員でひとつの部屋に集まった。

しかし、まだ日は昇っておらず、辺りは暗かった。家の中の様子はまったく分からなかった。

暗さと寒さと静けさとまだぬぐえぬ揺れの余韻により、心が締め付けられるような思いがした。

父と子供たちをリビングに残して、私は外の様子を見に行った。

近所の人たちも皆出てきていて、皆が無事だったことを喜び合った。そして「怖かったねえ〜！」と話し合った。

このとき、私は妙な喜びと安心感を抱いていた。これはきっと、皆が同じ恐怖感を味わったのだという共有感からのものだったと思う。

近所の人の中の子供がラジオを聞いていたのか、(記憶は定かでない)震源地が淡路であることを知った。「えー！すぐそこやん！」って感じだった。すごく近いから、ここ(垂水)の被害が一番酷いものだとそのときは思っていた。

しばらく近所の人たちと談話をしたあと家に戻った。

午前8時頃一家の中は割れた食器などの破片が飛び散っていてとても危険な状態だった。子供たちが触ると危ないので、家の片付けは父が引き受けた。父が片付けをしている間、私と子供たちは車の中で待機していた。

午前9時頃一家の中がある程度片付いたというので家に戻った。すでに電気が復旧していて、テレビがついていた。

私はニュースを見て愕然とした。そこには阪神高速が横倒しになっている映像が映し出されていた。目を疑った。現実をすぐに受け入れることは困難だった。

「これ、ホンマなん？」って感じ。夢ではないかと思ったくらい。

また、長田が燃えていることもニュースで知った。車の中で待っているときに降っていた灰は長田からのものだったということが、このときはじめて分かった。

垂水の被害が一番酷いものだと思っていたのに、ここよりも東の街の方が大きいことに非常に驚いた。

このときガスと水道はまだ止まったままだった。

午前10時頃—ニュースを見てからしばらく啞然としていた。

「何か行動を起こさなければ！」と思ったのは10時頃になってからだった。

まず、はじめに私は近くのスーパーに水やカップ麺を買いに行った。そして帰ってから米

を炊いた。できたご飯はおにぎりにして家族で食べた。

次に、友人や親戚の安否を確認しようと考えた。

しかし、今の時代のように携帯電話は持っておらず、なかなか連絡がとれなかった。

夕方になってから、ようやく連絡がとれるようになった。長田に住むおばあちゃんは無事だということだった。

しかし、西宮に住む父の友人がタンスの下敷きになり亡くなっていた。

私はまたもや夢の中にいるような感覚に襲われた。

しかし、今回は現実をすぐに受け止められた。泣くしかなかった。その夜は余震もあり、恐怖と悲しみで一睡もできなかった。

翌日、給水車が家の近くにきていたので私と長男で水をもらいに行った。重たい水をやったことで家まで運んだ。その水をポットで沸かし、次男をお風呂へ入れた。

その他にもいろんな用途で使わせていただいた。

水は重たく、運ぶのが困難な老人の方などもいた。そのような運べる力がない老人のために、学生がボランティアでその人の家まで水を運んであげていた。

その姿を見て、「寒いし重たいのに、えらいわ。」と感心した。沈み込んだ心の中で、ポツと心が温まる瞬間だった。

—その後

水道が復旧したのは1月の終わり頃で、ガスはそのまた一週間後くらいだった。

この震災で一番辛かったことといえば、ガスが復旧するまで風呂に入れなかったことだ。“水のいらないシャンプー”などを利用して見たが、やはり不快感は残る。なので、5日に1回程、須磨のおじいちゃんのところへお風呂に入らせてもらいに行っていた。

風呂に入っている間だけは何とも言えないくらいの爽やかな気持ちになれた。（このときだけはね。）風呂を上がるとまたすぐに現実に戻った。

また、蛇口から水が出ないことの不便さはただならぬものだった。

それを一番よく痛感したのは食器洗いのときだった。食器を洗う水と食器をゆすぐ水を分ける面倒な作業。また、水には限りがあるので大切に使うなくてはならなかった。

普段、蛇口から水が出ることが当たり前のこととなっていたけれど、そうでなくなるとはじめて蛇口から水の出ることのありがたさを知った。

ちょっとずつ、生活が安定してくるにつれ沈んでいた気持ちも明るくなってきた。その内に長男の幼稚園も始まった。

父は地震発生から一週間程度まで、舞子から須磨までは自転車、須磨から灘までは電車、灘から六甲道にある会社までは徒歩という形で会社へ通っていた。

仕事から帰ってきてはいつも「ケツが痛い」とぼやいていた。

自転車で道を通るにも、瓦礫によりふさがれていたり、ガタガタだったりして無駄に多く走ったり、無駄に多く体力を消耗してしまったりして大変だったという話を私(母)は当時父からよく聞いていた。

—現在

今でもたまに小さな地震があると、震災のことを思い出して恐怖がよみがえる。地震の揺れにはかなり敏感で、少しトラウマ化している部分もあると思う。

震災の後、ちょっと生活が落ち着いてきた頃に非常用持ち出し袋を作ったのだが、結局その存在は忘れられ、今となっては家のどこにあるのかさえ分らない。

今、私は特に何も防災に努めていない。（何かしなければならぬとは分かっているのだけれど…）

語り手：長田のおばあちゃん

私は長田区丸山町の自宅で被災した。丸山は地盤が堅く、私の家に目立った外傷は見られなかった。長田だからと言って、一概に被害が大きかったと言えるものではない。（よく皆さん勘違いされますが…。）

被害と言えば、家の外壁に少々のひびが入った。震災後すぐに直す暇はなく、補修工事を行ったのはその年の3月になってからだった。

ひびが入ったから、もうこの家はダメ！すぐに直さなければならない！という程の被害ではなかったものの、やはり「家にひびが入った」という思いだけで不安な思いをしたのを覚えている。

その他の被害は、食器が棚から飛び出して割れてしまったこと、仏壇の中がめっちゃめっちゃになってしまったこと、くらいだろうか。

私は生まれも育ちも長田区である。だから、多くの友人が長田区に住んでいた。

友人の中には火災で亡くなったり、倒壊した家に生き埋めになって亡くなったという人も何人かいる。私はとても恵まれている方だった。

震災を経験して初めて「生きていることに感謝せなあかんなあ。」と思ったのだ。この歳（当時60歳）になると、病気やらで亡くなる友人も出てくるので、友人の死には慣れている、と言ったらおかしいのだが、人の死は割とすぐに受け入れられるようになっていた。

しかし、このような不慮の災害で亡くなった友人に関しては、いつまでも無念さが残り、いつまでも「もしあの時こうだったら生きていたのに…」という思いが残ってしまう。

震災当時は、亡くなった友人のこと、多くの犠牲者のこと、自分は比較的被害が少なかったこと、などへの罪悪感・申し訳なさなどで、毎日辛い日々を送っていた。

また、生まれた時から慣れ親しんできた街がめちゃくちゃになってしまったことも、私を暗くさせる原因の一つだった。

今でも震災の日が近づくと、亡くなった友人のことが思い出されて辛い。

こんなとき、いつも落ち込んだ気持ちを治してくれる心の支えになるのは、やはり孫、友人の存在なのということに、いつも気づかされる。

今、友人と私との間で震災の話はタブーになっている。近年では、誰にも震災の話をすることはない。（それに、あのときのことはあまり話したくはないし…苦笑。）

でも今日、孫が意欲的に興味を持って震災の話私に聞いてくれたのは嬉しかった。

私はあなたに今まで震災の話をしたことがなかったけれど、本当は心のどこかであなたに伝えなければならないことなのだと思っていたのかもしれない。

語り手：父

揺れの最中は身動きが取れなかった。子供たちの元へ行こうとしたが、自分の意思で動くことは不可能だった。

揺れがおさまってから、まずは次男の元へ駆け寄った。

生後1ヶ月の次男のすぐ頭の上に、プラスチック製の救急箱が落ちていた。

「もう少しずれていたら、頭を直撃していたかもしれない。」そう考えて、私はゾッとした。

次男はすやすやと眠り続けていた。

私の住んでいる地域（垂水区舞子台）は、比較的被害が小さかった。

六甲道にある仕事場へ向かうとき、嫌でも瓦礫の街が目に入る。無情にも私にはそれらをどうすることも出来なかった。瓦礫の街を横目に仕事場へ向かった。

「あのとき何もできなくて悔しかった。」という感情を消し去ることはできない。今でも悔いが残る。当時は「申し訳なさ」が常に頭の中にあっただと思う。

私は震災後しばらく徒歩と自転車と電車を利用して通勤していた。会社から支給された自転車は、数日利用しただけですぐに壊れてしまった。めちゃくちゃになった道路や、瓦礫の尖った破片などにより、パンクしてしまったのだ。

新品の自転車が、いとも簡単に壊れてしまうものなのだなあ…とそのとき思った。

自転車以外にも、会社からは食糧や水の生活物資が支給された。

ニュースでは、神戸市民すべてが同じ被災者としてみなされていた。

しかし、神戸市内でも被害の格差は大きくあり、“神戸市民＝被災者”というひとくくりにされることに罪悪感があった。ここでも「申し訳なさ」を感じていた。

仕事の関係で、震災を体験しない人と接する機会がある。そういった人たちから、「あのときは大変でしたね。どんな状況だったのですか？」と聞かれるときがある。

そういったとき、私は返答に困る。「被害の少なかった私が、果たして当時のことを語る資格はあるのか？」と。

こんなところでも「申し訳なさ」を感じる。

震災で学んだことと言えば、やはり普段の生活がどれだけ便利でありがたいものなのかということだ。私たちは今の生活に感謝しなければならないのだと思う。しかし、どれだけ「今の生活って素晴らしいですよ」と口で言っても、いざ不便な生活を体験してみないと分らない部分も多くあるだろう。

また、会社の同僚たちもいつも以上に協力し合って助け合っていた。窮地に立たされたとき、人間は人と手を取り合って生きていくものなのだという事も思い知った。

「人間も捨てたもんじゃないなあ〜」って感じだ。

<補足>

父は第一声に「あんまり話したくないなあ〜。それに、記憶も薄れてきているし…」と言った。

やはり、辛い記憶をよみがえらせて体験を話すということは、けっこう体力を消費することのようだ。

きっと父には、震災時にやりきれなかった感や心残りがあり、大切なものを失うという辛い体験をしたのではないかと思う。

確かに、もし自分が「負けた試合を振り返って話しをしてくれ」と言われると、「なんで？」という感情を持つと思う。勝った試合のことは喜んで話すだろうが、自分に都合の悪いことを話すのは、あまり好ましくないことである。それと似たような感覚なのではないかと思った。

しかし、負けた試合をじっくり振り返ることによって、弱点やいけなかったこと、良かったことなどが見えてくる。そして、次にはこうしよう！という発想が生まれる。

『振り返る』ということは自分自身のためにもなるし、語り手にもいい教えとなる。そして、次に同じ失敗を繰り返さないためにも役立つものでもあると思う。

1. 17

吉田 莉那

震災発生

母から震災のことを聞いた。

朝、突然の揺れで飛び起きたという。縦に突き上げられるほどの震動で揺れが続いていたから身動きがとれない状態で床にへばりついていて、何が起こったのか理解できない。実際は十数秒のことだったけれど、とても長く感じ、理解するのに時間がかかった。

その時は団地の5階に住んでいた。揺れがおさまり呆然とした体で寝室のすぐ隣にあったリビングに入ると36インチのテレビが前に倒れていた。食器棚の食器は棚のふたが開いていて、上の皿も下の皿も全部飛び出していた。すこし割れてアルミサッシの窓ガラスにはクモの巣を張ったようなヒビが全面に入り、また、ところどころ割れて、ガラスが部屋の中にも落ちていた。その窓を開けてベランダから外を見ると向かい側の棟からとても大きくたくさん、沸いてくるような人のざわつき声が耳に届いた。人の姿は目に入らなかったが、その声がやけに大きく響いているように感じられた。目に入る家々の壁にはヒビが入っていた。ただごとではない。よくある地震の規模ではなく、とてつもなく大きな規模の地震が起こったということがようやく分かった。

自転車でも町内をぐるりと一周してみた。道路には亀裂が入り大きな穴の開いている所もあった。ところどころ道路が盛り上がり、そういう場所では自転車を下りて押して行かなければならなかった。電信柱はほとんどが倒れていた。古い家の中には完全に倒壊してしまったものもあった。それは一軒や二軒ではない。そういう家はもはや住む場所ではなく、ただの瓦礫だった。この家に住んでいた人はこれからどうやって生きていくのか、そんなことがとても気になった。瓦礫の下に埋もれた人を救助している人達もいた。手伝わなくてはいけない。そう思って自転車をから下りたが、「危ないからどいとして」と逆に注意を受けた。人は十分に足りていた。近所の人が助け合って命を救おうとする姿は美しかった。「どうやって生きていくのか」は他人事ではない。

ライフラインは完全に止まっていてテレビがつかない。何も情報が入ってこなくて地震の大きさや神戸の街全体の様子が全く分からない。トイレに入って用を足した。水が出ない。タンクの水を使い切ってしまったら、トイレの水さえ流せない。生きていくためには水は必要不可欠である。何よりも飲むための水を手に入れなければならなかった。近くの小学校に水をくみに行った。入れる容器がなくて酒の一升瓶を3つ持って行った。小学校の水は断水していなかった。何度も何度も往復した。しんどいとか辛いとか重たいとかいう感情よりも、水を確保しなければならぬという気持ちで運んでいた。無我夢中だったから周りの家の壊れている様子や電信柱が壊れている様子や地面が割れている様子などはまったく目に入らなかった。発生してすぐのことだったので、水をもらいにきた人はすくなくった。

昼になって車で買出しに行ったけれど、街は食料を求めて大渋滞で車はなかなか動かない。しかも欲しい物が手に入らない。どこの店も閉まっていて、幸い米屋だけが開いていて米を買うことができた。その時家にあった材料でカレーをまとめて作った。毎日毎食がカレーであったが、とても疲れた中で食べたカレーはとてもおいしく、食料のありがたみを感じた。

団地は一部損壊で被害は少なかった。しかしながら余震がずっと続いていた。「ひょっとしたら団地が倒壊するのではないか」という不安の中、夜は家族4人で車の中で寝泊りをしていた。体育館に避難はしていなかった。車の中に家族4人で寝るとするのは狭くて体も痛く、寝苦しく、疲れも取れなかった。けれど余震が続き不安の中、家族と一緒にいるということだけで安心した。家に被害は出たけれど家族が無事で本当によかったと心から思った。

ライフラインの復旧で一番早かったのは電気だった。お風呂には入れなかったけれど、一

日ほどで復旧した電子レンジを使い濡れタオルを温め、体を拭いていた。普段はお風呂があるのでタオルを温めて体を拭くというのはきれいになった気分にはならない。しかし、この時は体を拭いただけでとてもきれいになった気持ちになった。普段は使えて当たり前の電気のありがたさというのを、身をもって初めて体験した。

私は当時のことは何も覚えていない。母の話によると、自分はチャイルドシートに座らされていたという。

母が私の体を気にしてくれて足を触った瞬間凍ったようにとても冷たかった。

地震に気をとられ過ぎて寒ささえも忘れていたのだ。保育所は閉まっていて私と兄は母と父に世話をしてもらっていた。

車と電車の交通を使い熊本の祖母のところへ連れていかれた。そしてそこで震災のざわつきが少しおさまる一か月から二か月ほどの間預けられた。

燃え上っている長田の街の様子が映し出された。高速道路は倒れている光景だったり、学校に人が水や食料を求めて、あるいは避難するために殺到している様子だったり、神戸の街がおかしくなって、パニック状態に陥っている映像ばかりが報道されていた。だが、その情報のおかげで「現在」を知ることができた。何が起こっていたのか、そして今、神戸の各地ではどのような状態になっているのか。また、どこに行けばおにぎりが手に入り、水が手に入り、救護施設はどこにあるのか。それぞれの地区の避難所はどこで、私達はどう行動するべきであるのか。それらをテレビの情報が教えてくれた。手探りの状態から解放され、歩いていくべき方向性が示されたような気がした。ただ死者の名前が読み上げられる時には胸がしめつけられるように苦しかった。しかも、その名前が日に日に増えていった。

母の職業

母の職業は、看護師だ。

点滴を行ったり、血をとったり、お年寄りの体をふいたり、お風呂に入れてあげたり、医者の指示を聞いて動いたり、夜勤で病院の見回りをしたり、患者に呼び出されたらすぐに駆けつけたり、患者と世間話をしたりと人とかかわることの多い仕事だ。

母は私と同じ年頃の時、姉が看護師だった。その姿に憧れて看護師になることを熱望していた。

家を離れて寮に住み、昼間は病院に行って研修扱いで働き、夜間の学校に行き一人前の看護師になるために勉強をしていた。大変だった。だけど友達と一緒に努力して血管の上に注射を打つことや手術に立ち会うなど、できない事が、ひとつずつできるようになったり、競い合ったり、励まし合うなどをした。そのような苦勞をして熱望し続けていた看護師になった。

震災の時、病院からは、家族の安否を確認出来たら出勤という指示があった。病院は多くのケガ人であふれていた。病院も震災により電気が止まった。人口呼吸器が止まって、病院の自家発電の電気が変わるまで、看護師達で手動式の人口呼吸を行っていた。病院には多くのケガ人を救うために救援物資が運ばれてきた。医者は急いで処置をしなければならない人が何十人とやって来て、看護師は医者のサポートを行ったり、人口呼吸を行っていたり、治療を行ったりなどということをやっていた。いつもよりも人数が少なかったし、怪我人が殺到した。このようなパニックになった病院で本当に人の命が救えるのだろうか、自分の力が今役立つだろうかと不安を感じていた。

震災とは生と死と常となり合わせである。

C Tが落ちて下敷きになり病院で共に働いていた母の親友が亡くなった。C Tとは、何千

万とする高価な機械で、重さが何トンもするとても高価な機械。コンピュータ断層撮影をする。放射線を利用して人の体を輪切りにして断面図を観る時に用いる機械である。

親友の死を聞いた瞬間、耳を疑った。頭が真っ白になった。涙も出なかった。何度も嘘だと思い聞き直し受け入れることができなかった。

その話を聞いてがく然として無気力になった。なぜ自分ではなくて親友が死んだのだろう。自分が死ねば良かったのだと何度も思いつめた。自分がずっと憧れて熱望していた仕事がやりたくなかった。悲しくて胸が潰れそうになり何も手につかなくなった。急に涙が出たり、急に立ち直ってみたり、怒ってみたり情緒不安定な日々が続いた。震災後の家の片づけも病院の仕事も何に対しても気が入らなくなった。昨日までずっと一緒にいて一緒に話をし一緒にご飯を食べていた人が急にいなくなるのだから死を受け入れるまでに時間がかかった。周りの友人も同じ心境だった。

立ち直るのには、時間が解決するしかなかった。でも、親友の死を今でも忘れることはできない。支えになったのは、父と兄と私の存在だった。家族がいなければどうしていいか分からなくなっていた。親友を思い出すのは1年に1度だけで1月17日に思い出すということと、親友の分まで、仕事を頑張るのだということを心に誓っている。また、父、兄、私の家族という存在をもっともっと大切にしようとも感じた。

母の親友という身近な人が亡くなったことを聞いて、災害の恐ろしさを実感することができた。阪神・淡路大震災で、母のような体験をした人が何千人といるのだろうと思うと胸が苦しくなった。

震災とは

昭和12年関東大震災のように大きな地震は関西に絶対に来ないだろうと言われ続けてきた。それでも震度1や2や3のような小さな地震は何度もあったはずだ。そんな時に「もしこれが震度7の地震だったら」という想像力を働かせることができていたならば、どうだっただろうか。もっと被害は小さくすんだのではないだろうか。大きな地震に対する備えは、それがまだ起こっていない時から考えていかなければならないとつくづく思う。

「天災は忘れたころにやってくる。」阪神・淡路大震災は本当にこの言葉の通りである。

来てしまってからでは遅いのだ。家が倒壊しないかどうか、前持って考えておかなければならない。家庭においても「もしもこの本棚が倒れたら」「もしもこのテレビが倒れたら」「もしもこの食器が落ちてきたら」「もしも電灯が落ちてきたら」と、そういうことを常に頭に置いておく必要がある。

そして、母の職場である病院でも「もしも大地震が起こった時、このCTはどのように動くから、動かないように処置をしておこう」という考えがあったとしたら母の親友は死ななかった。

地震発生直後は防災意識が高く、非常持ち出し袋には地震発生後に一升瓶を抱え何度も往復して運んだので水や、まとめてつくったカレーしか食べていなかったのも缶詰めやカップラーメンといった食料や、電機が復旧するまで情報が得られなかったのもラジオや、食器が割れていて使うことができなかったし洗うことができなかったのも紙皿、ラップなどの洗わなくても大丈夫なお皿や、冬の寒い時期に起こったのでカイロ、膝かけや、電機が付かなく月の明かりで夜を過ごしていたから懐中電気やローソクや、地震発生直後は部屋にガラスが散らばって歩けなかったのもコンパクトに収納できるスリッパや軽い怪我をした人を救うために救急セットや、一枚あれば役に立つ手拭いなどと持ちながら移動ができる必要最低限のものを用意した。阪神・淡路大震災の教訓を生かした。備えをしておかなければいけない。

しかし、辛い体験ははっきりと覚えていても、震災は頻繁に起こるものではないから、意

識は薄れていき防災意識や持ち出し袋の備えは半年ほどしか続かなかった。

私は経験していない。けれど、阪神・淡路大震災などの大きな規模の地震を体験しない限りは意識が薄いまま。地域で震災の時にどのようなことに困ったかのようなことが役に立ったのかというのを話し合うことが大切だ。阪神・淡路大震災はみんなが寝ている時間に起こったし私と兄は幼かったので学校には通っていなかった。早朝ということもあって、たまたま家族全員の安否はすぐに確認できた。次に起こったら家族みんなが最終的に集合する場所が必要になる。その場所をよく話あっておく必要もある。小さな備えが減災に繋がる。

震災を忘れることは絶対にできない。多くの人が亡くなった。だからこの死を無駄にしないように私達が対策を立てていかななくてはいけない。

もしも、大きな地震が起こったら、どんなことが起こるかを想定しておくことが大切だ。その時火を使っていれば火事になるかもしれないし、もしも避難場所を知らなければその火事に巻き込まれて命を落とすことがあるかも知れない。もしもその時、本棚を固定していなければ、それが倒れてきて大怪我をするかも知れない。場合によっては頭を打って命を落とすかも知れない。もしもその時、非常持ち出し袋を用意していなければ、ライフラインが止まって水や食べ物が必要な時に空腹を抱えなければならないかも知れない。もしもその時、この地域のコミュニティで助け合う活動ができていなければ、多くの犠牲者が出るかも知れない。もしも大震災時に、家族との連絡方法を決めていなければ、父や母や兄と連絡が取れず、心配で心配でたまらなくなるかも知れない。

そして、もしも病院のCTが固定されていなければまた、母の親友のような死があるかも知れない。もしも・・・もしも・・・いつもそんな風に「もしも」を考え続け、対策を立て続け、有効な対処法を見つけ続けることが、防災の第一歩である。そして、母の親友のような悲劇を二度と繰り返してはならない。その死を無駄にしないように私達に何ができるのかを、「もしも」を通して常に考え続けなければならない。神戸に生まれながらにして阪神・淡路大震災の被害を知らない次の世代に私達が語り継いでいかなければならない。そうする事で、母の親友の死も同じように亡くなった方々の死も無駄にはならない。